

2011年度 授業要覧 講義内容

社会情報学部
履修ガイド



青山学院大学

教育方針・理念

青山学院教育方針

青山学院の教育は
キリスト教信仰にもとづく教育をめざし、
神の前に真実に生き
真理を謙虚に追求し
愛と奉仕の精神をもって
すべての人と社会とに対する責任を
進んで果たす人間の形成を目的とする。

青山学院大学の理念

青山学院大学は、「青山学院教育方針」に立脚した、
神と人にとり仕え社会に貢献する
「地の塩、世の光」としての教育研究共同体である。
本学は、地球規模の視野にもとづく正しい認識をもって
自ら問題を発見し解決する知恵と力を持つ人材を育成する。
それは、人類への奉仕をめざす自由で幅広い学問研究を通してなされる。
本学のすべての教員、職員、学生は、
相互の人格を尊重し、建学以来の伝統を重んじつつ、
おのおのの立場において、時代の要請に応えうる大学の創出に努める。

《総目次》

【授業要覧】

I. 学事暦等	2
(2011年度年間スケジュール/キリスト教学事暦/教会暦・行事/キリスト教活動プログラム/個人情報の取扱いについて)	
II. 大学での学習活動について	7
1. 大学での学習とは (カリキュラム/履修)	
2. 単位 (単位制/単位とは/単位数/既修得単位の認定/協定校・認定校留学による単位認定)	
3. 授業科目の種類と配置 (授業科目の種類/履修年次/履修順序)	
III. 履修について	10
1. 履修計画 (履修計画の立案/履修計画上の注意)	
2. 履修登録 (履修登録の方法/履修登録の確認と修正/履修登録について/履修取消制度について/履修取消申請方法)	
IV. 学部履修要項	
2009年度以降入学者	17
2008年度入学者	51
V. 授業について	91
1. 授業 (授業時間/授業教室/休講/補講/授業の欠席について)	
2. 大学からの伝達	
3. 緊急時の「授業の取り扱い」および「伝達手段」について	
VI. 試験・レポートについて	94
1. 試験の種別 (定期試験/平常試験/レポート/追試験)	
2. 定期試験の受験 (定期試験時間/受験上の注意/不正行為)	
3. 追試験 (申請資格/申請方法/追試験時間・採点)	
VII. 成績評価について (成績評価/G.P.A./成績通知/成績調査)	98
VIII. 進級および卒業について (進級/卒業/9月卒業/卒業延期制度)	100
IX. 学籍について	101
(修業年限/在学年限/休学/復学/退学/再入学/二重学籍/除籍/転部・転学部・転学科)	
X. 教職課程 (教員免許状・各種資格) について	103
XI. 大学院について	120
XII. 大学組織概要	131
(大学役職員/教育・研究組織/教員組織)	

【講義内容】

社会情報学部開講科目講義内容	(1)
巻末 学務担当窓口について	

I. 学事曆等

2011年度 年間スケジュール

		前 期							
4 月	日	月	火	水	木	金	土		
	3						1		2
10		4	5	6	7	8	9		
17		11	12	13	14	15	16	4月18日(月)青山キャンパス第一部所属学生履修登録最終日 4月19日(火)相模原キャンパス、青山キャンパス第二部所属学生履修登録最終日	
24		18	19	20	21	22	23	4月29日(金)昭和の日は授業実施日	
		25	26	27	28	29	30		
5 月	1	2	3	4	5	6	7		
	8	9	10	11	12	13	14		
	15	16	17	18	19	20	21		
	22	23	24	25	26	27	28		
	29	30	31						
6 月	5			1	2	3	4		
	12	6	7	8	9	10	11	6月18日(土)アドバイザー・グループ・デー	
	19	13	14	15	16	17	18		
	26	20	21	22	23	24	25		
		27	28	29	30				
7 月	3					1	2		
	10	4	5	6	7	8	9		
	17	11	12	13	14	15	16		
	24	18	19	20	21	22	23	7月22日(金)・23日(土)補講日(第一、二部とも) 7月25日(月)～28日(木)補講日(第二部のみ) 7月25日(月)～8月6日(土)前期定期試験期間	
	31	25	26	27	28	29	30		
8 月	7							8月8日(月)～9月20日(火)夏期休業期間	
	14	1	2	3	4	5	6		
	21	7	8	9	10	11	12		
	28	14	15	16	17	18	19	20	
		21	22	23	24	25	26	27	
9 月	4					1	2	3	
	11	4	5	6	7	8	9	10	
	18	11	12	13	14	15	16	17	
	25	18	19	20	21	22	23	24	9月21日(水)後期授業開始 9月24日(土)9月学部・大学院学位授与式
		25	26	27	28	29	30		

○囲み表示日は休日授業実施日
□囲み表示日は学事上の休講日
ゴシック表示日は休・祝日
補講日（通常授業は休講）◇第一部・第二部とも
△第二部のみ

		後 期							
	日	月	火	水	木	金	土		
10 月							1		
	2	3	4	5	6	7	8	10月8日(土)～9日(日)相模原祭期間 (8日(土)は相模原キャンパスのみ休講)	
	9	⑩	11	12	13	14	15	10月10日(月)体育の日は授業実施日	
	16	17	18	19	20	21	22		
	23	24	25	26	27	28	29	10月28日(金)～10月30日(日)青山祭期間	
	30	31							
11 月				1	2	3	4	5	
	6	7	8	9	10	11	12		
	13	14	15	⑩	17	18	19	11月16日(水)創立記念日は授業実施日	
	20	21	22	23	24	25	26		
	27	28	29	30					
12 月					1	2	3		
	4	5	6	7	8	9	10		
	11	12	13	14	15	16	17		
	18	19	20	21	22	23	24	12月24日(土)～1月5日(木)冬期休業期間	
	25	26	27	28	29	30	31		
1 月	1	2	3	4	5	6	7	1月6日(金)後期授業再開	
	8	9	10	11	12	13	14	1月13日(金)センター試験準備日(実施キャンパスのみ休講)	
	15	16	◇	◇	◇	◇	◇	1月14日(土)・15日(日)センター試験(14日は実施キャンパスのみ休講)	
	22	△	△	△	26	27	28	1月17日(火)～19日(木)補講日(第一、二部とも)	
	29	30	31					1月21日(土)～25日(水)補講日(第二部のみ)	
								1月21日(土)～2月3日(金)後期定期試験期間	
2 月				1	2	3	4		
	5	6	7	8	9	10	11		
	12	13	14	15	16	17	18		
	19	20	21	22	23	24	25		
	26	27	28	29					
3 月					1	2	3		
	4	5	6	7	8	9	10		
	11	12	13	14	15	16	17		
	18	19	20	21	22	23	24	3月24日(土)学部・大学院学位授与式	
	25	26	27	28	29	30	31		

キリスト教学事暦

新入生歓迎礼拝（相模原）	4月11日（月）～16日（土）
イースター礼拝（相模原・青山）	4月25日（月）
イースター礼拝（第二部）	4月26日（火）
チャペル・ウィーク（前期）	5月23日（月）～28日（土）
ジョン・ウェスレー回心記念日礼拝（相模原・青山）	5月24日（火）
ペンテコステ礼拝（相模原・青山）	6月13日（月）
ペンテコステ礼拝（第二部）	6月14日（火）
清里サマー・カレッジ	8月8日（月）～10日（水）
チャペル・ウィーク（後期）	10月17日（月）～22日（土）
創立記念礼拝（第二部）	11月15日（火）
創立記念礼拝（相模原・青山）	11月16日（水）
クリスマス・ツリー点火祭	11月25日（金）
クリスマス礼拝（青山・第二部）	12月13日（火）
クリスマス礼拝（相模原）	12月15日（木）
卒業礼拝	3月24日（土）

教会暦・行事

棕櫚の主日（Palm Sunday）	4月17日（日）
受難週	4月17日（日）～4月23日（土）
聖（洗足）木曜日（Maundy Thursday）	4月21日（木）
受難日（Good Friday）	4月22日（金）
復活日（Easter）	4月24日（日）
母の日	5月8日（日）
ジョン・ウェスレー回心記念日	5月24日（火）
聖霊降臨日（Pentecost）	6月12日（日）
子どもの日（花の日）	6月12日（日）
平和聖日	8月7日（日）
世界聖餐日、世界宣教の日	10月2日（日）
伝道献身者奨励日	10月9日（日）
宗教改革記念日	10月31日（月）
収穫感謝日、謝恩日	11月20日（日）
待降節（Advent）	11月27日（日）～12月24日（土）
降誕日（Christmas）	12月25日（日）
降誕節	12月25日（日）～2012年1月5日（木）
主顕現節（Epiphany）	1月6日（金）～2月21日（火）
信教の自由を守る日	2月11日（土）
灰の水曜日（Ash Wednesday）	2月22日（水）
四旬節（Lent）	2月22日（水）～4月7日（土）

キリスト教活動プログラム

キリスト教の精神のもとに建てられている青山学院大学は、その「教育方針」にも明記されているように「キリスト教信仰にもとづく教育をめざし、神の前に真実に生き 真理を謙虚に追求し 愛と奉仕の精神をもって すべての人と社会とに対する責任を 進んで果たす人間の形成を目的とする」特別な大学です。したがって、本学では、キリスト教活動プログラムを非常に重視しています。

本学における教育の特徴が他の国公立や私立の大学と異なる最もユニークな点は、このキリスト教による教育方針にあるといえます。

この教育目的を達成するために、本学には次の3つの基本的プログラムがあります。

- (1) 大学礼拝 (2) キリスト教概論 (3) 宗教センター活動

(1) 大学礼拝

大学では、キリスト教活動の中心に礼拝を位置づけており、時間を定めて礼拝を行っています（礼拝時間：青山・月～金 10時30分～11時 および 火 19時30分～20時、相模原・月～土 10時30分～11時）。大学礼拝は、キリスト教の信仰を土台とする学院の精神を最も具体的に示す場であるとともに、みなさんにキリスト教による人格教育を行う教育の場でもあります。また大学礼拝は教会における礼拝とは異なり、キリスト教信者だけの礼拝ではありません。礼拝出席は自由ですが、青山学院大学の独特な“スピリット”は礼拝においてよく表わされているので、礼拝を体験することなしに本学の教育を受けたとは言えないのです。

(2) キリスト教概論

大学の必修科目の一つとして、「キリスト教概論」があります。この講義は、本学建学の精神であるキリスト教の信仰の内容を学問的に研究し、聖書を通してキリスト教の教義、歴史、神学、実践などの問題を理解するとともに、キリスト教の意義を学ぶことを目的としています。大学礼拝とキリスト教概論とは密接な関係があり、そのため礼拝レポートがキリスト教概論の中に取り入れられています。

(3) 宗教センター活動

青山学院は、プロテスタント・キリスト教信仰の上に創立された学園であり、宗教センターは、特に、メソジスト教会の創始者、ジョンおよびチャールズ・ウェスレー兄弟の信仰的伝統を重んじ、キリスト教活動を行っています。青山キャンパスは間島記念館1階に、相模原キャンパスはC棟(チャペル)1階にそれぞれ宗教センターがあり、学生キリスト教活動の中心になっています。

各宗教センターでは、みなさんのために聖書研究会、フォーカス・グループ、青山キリスト教学生会(A.C.F.)、聖歌隊、ハンドベル・クワイア、キリスト教図書の閲覧などの活動が行われており、学生生活に色彩とバランスをあたえるために重要な役割を果たしています。さらに、各宗教センターには専任の宗教主任がおり、事務職員と協力して毎日みなさんのために宗教上の指導、アドバイス、教会紹介、カウンセリングなどの責任を負っています。この宗教センター活動は他大学とは異なる本学独特のシステムであり、みなさんの利用を待っています。

学校法人青山学院の園児・児童・生徒・学生、保護者・保証人の方々にかかわる個人情報の取扱い

1. 学校法人青山学院（以下「本法人」といいます。）の園児・児童・生徒・学生等（以下「生徒等」といいます。）の主な個人情報は、次のとおりです。

- ① 生徒等本人の氏名・住所・電話番号・生年月日・出身校等
- ② 保護者または保証人（以下「保護者等」といいます。）の氏名・住所・電話番号（自宅および緊急連絡先）・職業・本人との続柄・学費振替口座等
- ③ 生徒等の学籍・成績・健康診断・在学中の活動履歴情報等

2. 上記1. の情報は、「学校法人青山学院個人情報保護に関する規則」に基づき、本法人が設置する学校（以下「設置学校」といいます。）及び設置学校の部局等において、生徒等の在籍管理、教育、生徒指導・支援等の業務ならびに当該業務に付随する生徒等・保護者等への連絡・通知など、教育に必要な範囲でのみ利用いたします。なお、利用する具体的な業務は次のとおりです。

- ① 入学時の学籍作成
- ② 学籍および教務管理
- ③ 課外活動、福利厚生、経済援助等、学生生活全般の支援
- ④ 進路・就職活動の支援
- ⑤ 学費の収納管理
- ⑥ 学内施設設備利用管理
- ⑦ 寄付金等の募集案内
- ⑧ 生徒等および保護者等への事務連絡通知
- ⑨ その他各設置学校独自の利用目的

なお、本法人が入手した個人情報の一部は、各設置学校の後援会と共同で利用いたします。詳細については、別途お知らせいたします。

3. 上記2. の業務を行う際には、本法人が入手した個人情報の漏洩、流出、不正使用等が生じないように必要な措置を講じます。また、個人情報を取り扱う業務を学外に委託するときは、委託先業者との間で契約を交わし、委託先に必要かつ適切な管理を義務付けます。

4. 各設置学校卒業者の個人情報は、青山学院校友会に対し、当該組織の活動に必要な範囲で提供します。また、青山学院が100%出資しております株式会社アイビー・シー・エス（株式会社青学サービスより名称変更）に、各種ご案内発送等のため必要な情報を提供することがあります。

5. 本法人は、上記2～4のほかには、特にご承諾いただいた場合を除いて個人情報を利用しまたは第三者に提供しません。ただし、「個人情報の保護に関する法律」により第三者提供が認められている場合は、この限りではありません。

6. 青山学院大学および青山学院女子短期大学は学生への教育・指導をより適切に行うために、保証人の皆様にご理解とご協力をお願いしております。したがって、教育的配慮の必要性から保証人に対して学業成績等の開示や修業、履修状況等について相談を行っています。特別な事情により保証人に学業成績等の開示等を行うことに不都合がある場合は、大学青山キャンパス学務部教務課または相模原キャンパス学務グループ、女子短期大学事務部教務課にご連絡ください。

※青山学院における個人情報保護への取り組みについては青山学院ホームページ

http://www.aoyamagakuin.jp/info_protection/index.html を参照ください。

Ⅱ．大学での学習活動について

1．大学での学習とは

カリキュラム

大学の授業科目、単位数、履修年次（どの学年で履修するか）を体系的に編成したものを「カリキュラム（教育課程）」といいます。所属する学部・学科のカリキュラムにそって学習を進め、最終的に、定められたカリキュラムの授業内容を修得することが、大学での学習の目的です。

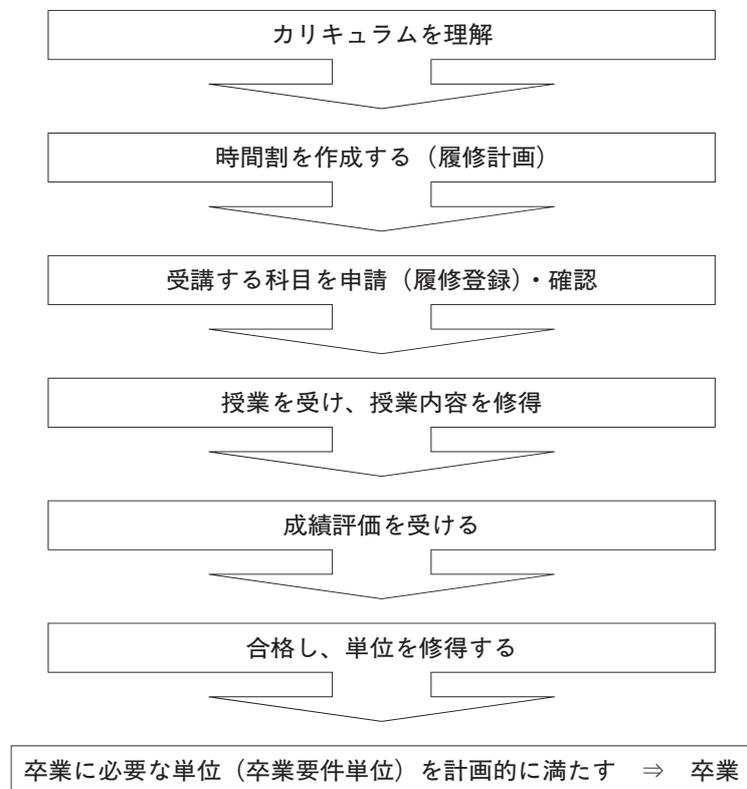
カリキュラムは入学年度別に定められており、卒業まで変更はありません。

各学部・学科のカリキュラムについては、「Ⅳ．学部履修要項」を参照してください。

履 修

各学部・学科のカリキュラムにそって配置された授業科目の受講を大学に申請することを「履修登録」、授業を受け、試験に合格して単位を得ることを「単位を修得する」といいます。この「履修登録」から「単位修得」までの一連の流れを「履修」といいます。

図式化すると以下ようになります。



大学では、カリキュラムで定められた範囲で履修する科目を選択することができますが、卒業に至るまでの過程は自己責任であるということを常に念頭に置いてください。

2. 単 位

単位制

単位制とは、卒業するために、在学年限内に所定の単位を修得しなければならない制度です。これは極めて厳格なもので、たとえ1単位であっても不足すると卒業できません。卒業に必要な単位数は、学部・学科ごとに定められています。詳しくは、「IV. 学部履修要項」の「卒業要件」を参照してください。

単位とは

単位とは、学習の成果を量的に表したものです。授業科目を履修し、出席回数、平常試験・定期試験またはレポート、その他担当教員が必要と認める学習作業の結果などによって、その授業科目に合格したと担当教員が判断したとき、所定の単位が与えられます。

単位数

単位数は、それぞれの授業科目ごとに定められており、授業形態によって算定方法が異なります。

大学設置基準による規定	1単位の標準＝“45時間の学修が必要な内容”
-------------	------------------------

本学での単位算定方法

講義・演習の科目では…	1単位＝授業15～30時間分
実験・実習・実技（スポーツなど）の科目・集中科目では…	1単位＝授業30～45時間分

15時間の講義科目（1単位）を例にとると、“45時間の学修を必要とする内容”で1単位、と規定されており、授業時間外に30時間の自習が前提となっています。

なお、ここでいう“1時間”とは、授業時間45分を表します。本学での1時限の授業は90分で行われているので、単位計算上は、1時限＝“2時間分の授業”となります。

半期の講義科目では、

15週×2時間＝30時間分＝2単位

となります。

実際の単位数

半期科目 (前期のみ、または後期のみの科目)	15週で完結 ・講義科目なら2単位 ・演習科目なら2単位または1単位 ・実験・実習・実技科目なら1単位
通年科目 (一年を通して行われる科目)	30週で完結 ・講義科目なら4単位 ・演習科目なら4単位または2単位 ・実験・実習・実技科目なら2単位

既修得単位の認定

新たに入学した1年生で、本学入学以前に他大学・短期大学ですでに修得した単位があり、修得済み単位として認定を受けたい学生は、指定された期間(入学式翌日～前期授業開始日)に書類を相模原キャンパス学務グループに提出し申請してください。30単位を超えない範囲で各学部・学科の基準に従って単位が認定されます(大学学則第42条参照)。この申請は、入学した年度に限って可能であり、次年度以降に申請することはできません。

編入・転部または転学部・転学科した学生の場合は、それまで修得した単位のうち、各学部・学科が適当と認める科目の単位が認定されますので、指定された期間(入学手続時配付書類に記載)に書類を青山キャンパス学務部教務課に提出し申請してください。

協定校・認定校留学による 単位認定

協定校留学・認定校留学の制度によって留学した場合は、帰国後所定の手続きをふむことにより、留学先で修得した単位が30単位を超えない範囲で各学部・学科の基準に従って認定されます。

3. 授業科目の種類と配置

授業科目の種類

各授業科目は、卒業要件として必ず履修・修得しなければならないか否かによって、以下の3つに区分されます。

授業科目の種類

必修科目	必ず履修し、単位を修得しなければならない科目
選択必修科目	指定されたいくつかの科目の中から選択履修し、各学部・学科所定の単位数を必ず修得しなければならない科目
選択科目	自由に選択履修し、必要単位数を修得する科目

上記の内容でわかるとおり、履修の際には、「必修科目」を優先して卒業要件単位を満たしてゆく必要があります。

また、授業の開講期間によって、1年を通じて実施する「通年科目」、前期あるいは後期で完結する「半期科目」、夏期・冬期休業期間などを利用して実施する「集中講義科目」に分かれます。

履修年次

「履修年次」とは、それぞれの授業科目を履修するのが望ましい学年のことです。履修年次は、4年間の学習を系統的に行えるよう、カリキュラムに基づいて定められています。

履修年次は「IV. 学部履修要項」部分の科目配置表に記載されていますので、それに従って科目を履修してください。

原則として、現在の学年より上級の年次に配置されている授業科目を履修することはできませんが、現在の学年より下級の年次に配置されている授業科目であれば履修することができます。ただし、例外もありますので、「IV. 学部履修要項」で確認してください。

履修順序

各学部・学科には、段階的に学習を進めるために「履修順序」が設けられた授業科目があります。これは、ある授業科目の単位を修得しなければ、その上級科目として設けられている授業科目を履修することができない、というものです。

上級に設けられた授業科目は、初級の授業科目の内容をすでに修得していることを前提とし、その次の段階から授業を始めます。したがって、初級の授業科目と上級の授業科目を同時に履修することはできません。ただし、4年次留年生は、学部・学科によっては履修順序に関係なく履修できる場合もあります。

各学部・学科の履修順序については、「IV. 学部履修要項」に記載されています。ただし『講義内容』に記載されている場合もありますので注意してください。

Ⅲ. 履修について

1. 履修計画

履修計画の立案

大学においては、各学生がカリキュラムにそって履修計画を立て、受講したい科目を選択します。

授業科目には、あらかじめ登録されている「事前登録科目」（必修科目等）があり、学生はそれ以外の時限について履修計画を立てることになります。

履修計画を立てるに当たっては、カリキュラムについてよく理解し、所属学部・学科で定められた必修科目の修得と、進級や卒業に必要な履修規定上の必要条件（進級条件・卒業要件）を満たすことを優先させます。

第一部では、1年間で履修申請できる単位数が決められています。下記の(1)～(4)にそって、履修計画を立ててください。

- (1) 年度初めのオリエンテーション期間中に行われる所属学部・学科のガイダンスに出席する。

ガイダンスでは、履修上の注意や授業科目の説明が行われますので、必ず出席して最新の情報を得てください。

- (2) カリキュラムの内容、特徴、意義について知る。

「IV. 学部履修要項」の卒業要件単位表・科目配置表で、各授業科目がどのような分野に属しているかを確認してください。履修順序についても、ここで確認してください。

- (3) 各授業科目の講義内容を知る。

冊子『講義内容』（学部によっては授業要覧巻末の「講義内容」）および Web 版『講義内容』（「学生ポータル」の「講義内容検索」よりアクセス可能）には、各授業の詳しい授業計画などが記載されています。履修しようと思う科目の内容をよく確認してください。具体的な授業内容を知りたい場合は、履修登録期間中に受講してみる、受講時に担当者に確認するなどの方法でも講義内容を確認できます。（履修登録期間終了後は、履修登録をしていない科目を受講することはできません。）

「IV. 学部履修要項」の「履修年次」は履修が望ましい年次を表しています。また、『講義内容』の「履修年次」は履修可能な年次を表示しています。履修順序などで履修が制限されることがありますので、「IV. 学部履修要項」で必ず確認し、なるべく望ましい年次での履修を心がけてください。

- (4) 卒業に必要な科目と単位数、資格に必要な科目と単位数を知る。

卒業要件単位とは、卒業に必要な最低限の単位です。教員免許状および各種資格を取得するためには、これに加えてそれぞれに必要な所定の単位を修得しなければなりません。「IV. 学部履修要項」、「X. 教職課程（教員免許状・各種資格）について」および冊子『教職課程履修の手引』を参照し、各自の目標に合った計画を立ててください。

履修計画上の注意

履修計画に際しては、以下のことに注意してください。

- (1) 同一時限に、2科目以上の授業科目を重複して履修登録することはできません。（特に許可された科目を除きます。）

- (2) 第一部では各学部・学科で1年間の履修登録単位数の限度（最高履修制限単位）が定められており、その単位数を超えて履修することはできません。

教職課程関連科目および教職課程科目については「IV. 学部履修要項」および冊子『教職課程履修の手引』を参照してください。

- (3) 既に単位を修得した科目を、再度履修登録することはできません。（特に許可された科目を除きます。）

- (4) 他キャンパスの授業科目を履修する場合、90分間の移動時間が必要です。この移動時

間の実施されている授業科目の履修はできません。

- (5) 他学部科目の履修を希望する場合、「IV. 学部履修要項」の「他学部科目一覧表」を参照してください。
- (6) 第一部の学生が第二部開講科目を履修することはできません。また、第二部の学生が第一部開講科目を履修することはできません。
- (7) 履修登録締め切り後、登録に不備や間違いがあったときは、当該科目の登録が無効となります。
- (8) 受講者数が著しく多い科目については、教室の収容人数、教育効果などを考慮して、クラスの分割・抽選などの措置を取ることがあります。

2. 履修登録

履修登録の方法

「履修登録」は、年度初頭に、その年度に履修を希望する授業科目を大学に登録する、大変重要な手続きです。(集中講義科目、後期に開講される科目も年度初頭に履修登録を行います。)

本学の履修登録は、基本的には Web 上のシステム「Web 履修登録システム」(パソコンまたは学内情報端末を使用)で行います。詳細については、冊子『履修登録システム利用案内』を参照してください。

履修登録方法は次のとおりです。それぞれについてよく読み、理解しておいてください。

【登録番号と履修登録方法】

『授業時間割表』の登録番号表示	履修登録方法
数字 5 桁で表示されている	Web 履修登録システムを利用して、自分で登録できます。履修登録期間内であれば、自分で削除することもできます。
+++++	Web で抽選または選考を行う科目です。Web 履修登録システムの「制限科目申請」から応募してください。抽選・選考の結果、履修登録された科目は、削除することはできません。曜日時限等に間違いのないよう、注意して応募してください。また、受付期間が科目によって異なりますので、注意してください。 注) 青山スタンダード教養コア科目(人間理解関連科目、社会理解関連科目、自然理解関連科目、歴史理解関連科目)は、学生ポータルに登録・申請メニューにある「青山スタンダード教養コア科目応募登録」から応募してください。
*****	Web 以外で抽選または選考を行う科目です。所定の日時・場所(オリエンテーション期間中や初回授業等)で申請してください。申請方法については、『学年初頭行事』や『講義内容』、学部・学科等の指示に従ってください。抽選・選考の結果、履修登録された科目は、削除することはできません。
#####	事前に登録済または履修登録期間中に大学側で登録を行う科目です。自分で履修登録する必要はありません。
-----	受講が許可された学生のみ登録できます。学部学科等の指示に従ってください。

【ペア科目】

ペア科目とは、同一授業科目で、週 2 回以上授業を行う科目です。『授業時間割表』には「ペア」と記載されています。『授業時間割表』に記載されている登録番号で登録してください。対応するほかの曜日・時限も自動的に登録されます。

履修登録の確認と修正

【「健康・スポーツ演習」・「スポーツ運動実習」】

『学年初頭行事』を参照のうえ、これらの科目に関するガイダンスに出席してください。

履修登録の手続きは重要なものであり、一科目でも登録もれや登録間違いがあってはなりません。『履修登録システム利用案内』をよく読み、各自の責任において、履修登録期間内に履修登録を完了してください。

履修が確定したら、各自履修登録リストを印刷し、誤りがないか必ず確認してください。
印刷した履修登録リストは、年度末まで保管してください。確認を怠ったために生じた問題について、大学側は一切責任を負いません。

履修登録を行ったつもりで登録されていなかった科目や、誤って登録してしまった科目については、間違えたまま授業に出席し試験を受けても単位を修得することができないばかりでなく、登録していない科目の試験を受けることは不正行為とみなされ、処分の対象となります（『試験における不正行為者処分規則施行細則』第2条参照）ので注意してください。

期日までに履修登録をしない場合は、修学の意志がないものとして、大学学則第34条に基づき除籍処分となります。

なお、履修登録の期間は年度初頭のみに限られていますが、後期に履修変更期間を設けています。前期科目の成績を確認したうえで再度履修を見直し、必要がある場合は Web 履修登録システムを使用して、各自で履修の変更を行ってください。

履修登録、後期履修変更に関する詳細は、次項「履修登録について」を参照してください。

履修登録について

1. 履修登録

履修登録期間

所 属	受 付 期 間
青山キャンパス：第一部	4月2日(土) 9：30～4月18日(月) 16：00
相模原キャンパス：第一部	4月2日(土) 9：30～4月19日(火) 16：00

制限科目の応募締切日時は、個々の科目により異なりますので、注意してください。

後期開講の制限科目も年度初頭に応募・登録を行います。登録した履修内容は必ず「学生ポータル」で確認してください。

履修登録・修正時の注意点（後期履修変更時と同様）

履修登録最終日は、アクセスが多く、登録に時間がかかります。「混みあってアクセスできなかった」という理由は認められませんので、余裕をもって履修登録が完了するようにしてください。

エラーが表示されたら、適切な対処をおこなってください。自分で解決できない場合は、各キャンパス窓口で相談してください。

登録や修正をおこなった後は、必ず「履修登録画面」で履修登録リストを印刷して確認してください。

2. 後期履修変更

後期に下記のとおり履修変更期間を設けます。前期科目の成績を確認したうえで再度履修を見直し、必要がある場合は Web 履修登録システムを使用して各自で履修の変更を行ってください。履修変更期間以降の修正は、一切認めません。

後期履修変更期間

9月29日(木) 9：30～10月3日(月) 16：00

後期の履修変更の際は、次の5点に注意してください。

- (1) 履修制限単位内で、後期科目のみの修正を行うことができます。
- (2) 受講者を制限する科目（抽選・制限カード・受講許可等）に関わる変更はできません。
- (3) 通年科目を削除しなければならない変更はできません。
- (4) 前期に修得できなかった科目と同一名称科目の再履修はできません。
- (5) (2)～(4)の制限にかかわらず、学部学科等から特に指定があった場合は、それに従ってください。

後期履修変更を行った学生は、前期の履修登録と同様、変更の操作を行ったあと、履修変更期間内に履修登録リストを印刷し、修正に誤りがないか各自で確認してください。確認を怠ったために生じた問題について、大学側は一切責任を負いません。

後期履修変更期間中に追加できる単位数は次のとおりです。（第一部学生のみ）

$$\text{後期履修変更期間に追加できる単位数} = \text{当該年度の最高履修制限単位} - \left[\begin{array}{l} \text{前期修得単位数} \\ + \\ \text{前期に修得できなかった単位数} \\ + \\ \text{履修取消科目の単位数} \\ + \\ \text{通年科目の単位数} \end{array} \right] \quad (\text{後期科目のみ})$$

履修取消制度について

授業の内容が勉強したいものと異なっていた場合、履修登録（または後期履修変更）期間終了後の一定期間内であれば履修を取りやめることができます。

詳細は以下のとおりです。

- 1) 対象者：全学部生
 - 2) 対象科目：下記①、②を除く全科目
 - ① 事前登録科目（履修登録期間中に大学側が登録する科目を含む）
 - ② 制限科目
- ※ この他に学部・学科で対象外としている科目がある場合は「IV. 学部履修要項」に記載されていますので、参照してください。
- 3) 履修取消科目の扱い：本制度を利用して取り消した前期科目と同一名称の科目を後期に履修することはできません。
 - 4) 履修取消科目の単位の扱い：本制度を利用して取り消した科目の単位数は、当該年度の申請単位数に含まれます。
 - 5) 履修取消科目の成績評価の表示：
 - ① 成績通知書：「W」
 - ② 成績証明書：記載しない。

履修取消申請方法

履修取消の申請は、以下の期間内に所属キャンパスの学務窓口でのみ受け付けます。申請の取り下げは一切認められません。

	履修取消申請受付期間
前期科目および通年科目	5月10日(火)～16日(月)
後期科目	10月21日(金)～27日(木)

Ⅳ．社会情報学部履修要項

A．2009年度以降入学者	17
【1】 社会情報学部履修について	18
学位について／卒業要件／最高履修制限単位／進級条件／修得単位僅少者／ 外国人留学生の外国語科目の履修について	
【2】 青山スタンダード科目履修方法および配置表	21
【3】 外国語科目履修方法および配置表	39
【4】 専門科目履修方法および配置表	41
【5】 自由選択科目履修方法	46
【6】 履修ガイドライン	47
B．2008年度入学者	51
【1】 社会情報学部履修について	52
学位について／卒業要件／最高履修制限単位／進級条件／修得単位僅少者	
【2】 青山スタンダード科目履修方法および配置表	54
【3】 外国語科目履修方法および配置表	63
【4】 専門科目履修方法および配置表	65
【5】 自由選択科目履修方法	70
【6】 履修ガイドライン	71
C．他学部科目一覧表	75

社会情報学部
A. 2009年度以降入学者

A. 社会情報学部履修要項

【1】社会情報学部履修について

1. 学位について

社会情報学部に4年以上（ただし8年を限度とします）在学し、卒業に必要な134単位以上を修得した者には、学位記を与え「学士（学術）」の学位を授与します。

2. 卒業要件

本学部を卒業するためには、以下に示す卒業要件単位表にある区分ごとに、それぞれ必要な単位を修得しなければなりません。

規定以上に修得した選択必修科目の単位は自由選択科目の選択の単位として扱います。

卒業要件単位表

科目の種類		必選の別	必要単位
青山スタンダード科目		必修 選択必修	26
外国語科目	英語基礎科目	必修	4
	英語融合系科目	必修	2
	英語基礎科目、英語融合系科目	選択必修	6
専門科目	基礎科目	必修	12
	共通演習科目(卒業研究含む)	必修	10
	専門基礎科目、共通演習科目 専門基盤科目、専門展開科目	選択必修	60
自由選択科目	青山スタンダード科目、自学部専門科目、外国語科目、他学部科目の中より履修する。	選択	14
総計			134

3. 最高履修制限単位

最高履修制限単位とは、各年度で履修申請できる最高限度の単位数です。

社会情報学部における最高履修制限単位は次のとおりです。各年次でこの表に示す単位数を超えて履修することはできません。なお、各年次においては、1科目以上の履修をしなければなりません。

学 年	最高履修制限単位	合計
1～4年次	各 54 単位	216 単位

(注意) 教育職員免許状の申請を希望する学生の教職課程科目の単位は、最高履修制限単位に含まれません。

4. 進級条件

3年次生から4年次生に進級するためには、卒業見込者でなければなりません。
また、卒業要件単位を満たすことのできない4年次生は、次の年度も4年次生となります。

卒業見込者

卒業見込者とは、在学3年次終了時の修得した単位により卒業見込みの判定をおこない、「卒業研究」を履修が可能な場合、卒業見込者とします。

卒業見込証明書は、4年次年度初頭に卒業要件を満たす履修登録をおこなったことが確認された後、発行可能となります。4年次前期の単位履修の結果により年度末に卒業する見込みがなくなった場合は、卒業見込証明書は発行されなくなります。

卒業研究の履修条件

卒業研究の履修条件は、以下のとおりです。

- I) 3年以上在学していること。
- II) 1年次の専門科目および外国語科目の必修科目18単位と青山スタンダード科目の1年次の必修科目10単位を修得済みであること。
- III) 卒業要件単位のうち、100単位以上修得していること。

5. 修得単位僅少者

入学後の2年間（休学期間を除く）で修得単位が32単位に満たない学生は、成業の見込みのない学生として除籍されることがありますので、該当しないよう特に注意してください。

6. 外国人留学生の外国語科目の履修について

外国語科目（第一外国語・第二外国語）は、入学手続き時に申請した科目を必ず履修してください。

A. 第一外国語の履修方法

第一外国語の必要単位

必修（6単位）

授業科目	単位	履修年次
日本語初級A	2	1
日本語初級B	2	1
日本語中級B	2	3

注1) 必修6単位を超えて修得した場合は、自由選択科目として卒業に必要な単位に算入されます。

注2) 各授業科目間の履修順序はつけません。ただし、各授業科目の履修年次に従って履修しなければなりません。

注3) 原則として第一外国語は日本語ですが、特に英語を第一外国語として履修するよう指定を受けた者は一般学生と同じ科目を6単位修得してください。（この場合には、履修順序があります。）

選択必修（6単位）

【3】 外国語科目履修方法および配置表（P.39）参照

2～4年次の間に、英語基礎科目・英語融合系科目のうち、必修科目を除いた科目から6単位を選択必修。ただし、英語を母国語とする場合は、英語実践演習Ⅰ～Ⅳ以外の科目を以て履修してください。

なお、選択必修6単位を超えて修得した場合は、自由選択科目として卒業に必要な単位に算入されます。

B. 第二外国語の履修方法

言葉の技能〔領域F〕（第二外国語）の必要単位

必修4単位

フランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語、韓国語、英語のうちから1ヵ国

語を履修すること。ただし、母国語（第一言語）は第二外国語として履修できません。

注1）入学手続き時に申請した科目のⅡ、Ⅲ、会話およびインテンシブの単位を修得した場合は、テーマ別科目として卒業に必要な単位に算入されます。

注2）英語を第一外国語として履修するように指定を受けた者は、日本語を外国語Ⅱとすることができます。この場合、英語は第二外国語とはなりません。

本学入学前に、高等学校あるいは海外などですでに学習したことのある学生が、その学力をⅠ修了者に準ずると認定された場合、Ⅱの科目で卒業に必要な単位に充当することができます。詳細は、相模原キャンパス「学年初頭行事」を参照してください。

【2】 青山スタンダード科目履修方法および配置表

1. 全学部に通ずる教養教育の理念・目標

青山学院の教育方針は、キリスト教信仰にもとづく教育を基盤として、幅広く深い知識を授けることにより、主体的な学習能力、着実な思考力、問題解決能力および総合的な判断力を培い、愛と奉仕の精神をもってすべての人と社会とに対する責任を進んで果たす、人間性豊かで国際性に富む人材を育成することです。

本学の全学部に通ずる教養教育は、この理念をうけて、「およそ青山学院大学の卒業生であれば、どの学部・学科を卒業したかに関わりなく、一定の水準の技能・能力と一定の範囲の知識・教養をそなえているという社会的評価を受けることを到達目標とする」として、青山スタンダード科目を開講しています。

2. 履修方法

科目の種類			必選の別	必要単位
青山スタンダード科目	1) 教養コア	キリスト教理解関連科目	必修	2
	2) 技能コア	言葉の技能	英語	※1
			第二外国語 ※2 ※3	必修
		身体の技能	必修※4	2
		情報の技能	必修	2
	3) テーマ別	キリスト教理解関連科目	必修	2
	4) 教養コア	人間理解関連科目 社会理解関連科目 自然理解関連科目 歴史理解関連科目	左記4領域のうち2領域から「教養コア科目」を選択	選択必修
5) 領域指定	人間理解関連科目 社会理解関連科目 自然理解関連科目 歴史理解関連科目	左記領域より4)で選択しなかった2領域から各1科目(2単位)ずつ選択。(「教養コア科目」あるいは「テーマ別科目」いずれも可)	選択必修	4
	フレッシュアップ・セミナー、ウェルカム・レクチャー、キャリアデザイン・セミナー、教養コア科目、技能コア科目(教育・経済・経営・総合文化政策・社会情報以外)、テーマ別科目から選択。 (1)~5)で修得した科目は除く)		選択	6

※1 言葉の技能・英語は、所属する学部(学科)が開講する科目を履修します。詳しくは、所属する学部(学科)の外国語科目履修方法および配置表に関するページを参照してください。(英語スキルI-1、I-2を除く)

※2 第二外国語科目の中から1外国語を選択します(入学手続き時に申請されています)。

※3 第二外国語科目には、履修順序があります。

・「(第二外国語)I(A)」「(第二外国語)I(B)」について、それぞれ前期の単位が修得できた者のみが後期の履修を認められます(日本語は除く)。

・「インテンシブ・(第二外国語)」「(第二外国語)II」あるいは「(第二外国語)会話(I)」は、「(第二外国語)I」の必要単位をすべて修得した者のみが履修を認められます。

・「(第二外国語)III」は、「インテンシブ・(第二外国語)」あるいは「(第二外国語)II」の単位を修得した者のみが履修を認められます。

・「(第二外国語)会話(II)」は、「(第二外国語)II」あるいは「(第二外国語)会話(I)」の単位を修得した者のみが履修を認められます。

※4 教育人間科学部教育・経済・経営・総合文化政策・社会情報のみ必修です。

○必要単位以上修得した場合は、卒業要件の中の自由選択科目に算入されます。

○第二外国語として修得した外国語以外の第二外国語科目を修得した単位は、卒業要件の中の自由選択科目に算入されます(国際政治経済学部除く)。

○受講者数の著しく多い科目については、教室の収容人数、教育効果等を考慮して、クラスの分割・抽選などの措置をとることがあります。

3. 授業科目配置表

(太字は必修科目)

○履修年次が1年次の科目の開講キャンパスは、2011年度に開講するキャンパスを表示しています。

○テーマ別科目の開講キャンパスは、2012年度に開講されるキャンパス(予定)を表示しています。

		授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	開 講 キャンパス	備 考	
		フレッシュャーズ・セミナー	2	1	相	1年生のみ	
		ウェルカム・レクチャー	2	1	相	1年生のみ	
		キャリアデザイン・セミナー	2	1	相	2011年度入学者1年生のみ	
教養コア科目		(キリスト教理解関連科目) キリスト教概論Ⅰ	2	1	相		
		(人間理解関連科目) 自 己 理 解 (総合科目) 自 己 理 解 (個別科目)	2 2	1 1	相 相	(総合科目): 複数の教員による担当 (個別科目): 一人の教員による担当	
		(社会理解関連科目) 現代社会の諸問題(総合科目) 現代社会の諸問題(個別科目)	2 2	1 1	相 相	(総合科目): 複数の教員による担当 (個別科目): 一人の教員による担当	
		(自然理解関連科目) 科学・技術の視点(総合科目) 科学・技術の視点(個別科目)	2 2	1 1	相 相	(総合科目): 複数の教員による担当 (個別科目): 一人の教員による担当	
		(歴史理解関連科目) 歴 史 と 人 間 (総合科目) 歴 史 と 人 間 (個別科目)	2 2	1 1	相 相	(総合科目): 複数の教員による担当 (個別科目): 一人の教員による担当	
	技能コア科目	英語	英 語 ス キ ル I - 1	1	1	相	2007年度以降入学者1年生のみ
			英 語 ス キ ル I - 2	1	1	相	2007年度以降入学者1年生のみ
		第二外国語	(第二外国語)Ⅰ(A)-1	1	1	相	(第二外国語)はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語、韓国語を指します。
			(第二外国語)Ⅰ(A)-2	1	1	相	
			(第二外国語)Ⅰ(B)-1	1	1	相	
(第二外国語)Ⅰ(B)-2			1	1	相		
英 語 (I A)-1			1	1	相	外国人留学生のみ	
英 語 (I A)-2			1	1	相	外国人留学生のみ	
英 語 (I B)-1			1	1	相	外国人留学生のみ	
英 語 (I B)-2			1	1	相	外国人留学生のみ	
日 本 語 I(A)	2	1	相	外国人留学生のみ			
日 本 語 I(B)	2	1	相	外国人留学生のみ			
身体能力の	健 康 ・ ス ポ ー ツ 演 習	2	1	相	教育人間科学部教育・経済・経営・総合文化政策・社会情報のみ必修		
情報能力の	情 報 ス キ ル I	2	1	相			
テーマ別科目	キリスト教理解関連科目(領域A)	キリスト教概論Ⅱ	2	2・3	相・青	理工学部・社会情報学部は2年次他は3年次配置	
		旧 約 聖 書 と 人 間	2	2・3・4	青		
		新 約 聖 書 と 人 間	2	2・3・4	青		
		キリスト教生命倫理	2	2・3・4	青		
		キリスト教政治倫理	2	2・3・4	青		
		キリスト教と自然科学	2	2・3・4	相・青	両キャンパス隔年開講	
		キリスト教環境倫理	2	2・3・4	相・青	両キャンパス隔年開講	
		キリスト教音楽	2	2・3・4	青		

キリスト教理解関連科目(領域A)	キリスト教美術	2	2・3・4	青		
	メソジスト教会史	2	2・3・4	青		
	世界の諸宗教	2	2・3・4	相・青	両キャンパス隔年開講	
	聖書の中の女性たち(旧約)	2	2・3・4	相・青	両キャンパス隔年開講	
	聖書の中の女性たち(新約)	2	2・3・4	相・青	両キャンパス隔年開講	
	サービス・ラーニング I	2	2・3・4	青		
	サービス・ラーニング II	2	2・3・4	青		
	人間理解関連科目(領域B)	哲学 A	2	2・3・4	相・青	
		哲学 B	2	2・3・4	相・青	
		哲学の諸問題 A	2	2・3・4	青	
		哲学の諸問題 B	2	2・3・4	青	
		哲学の諸問題 C	2	2・3・4	青	
		哲学の諸問題 D	2	2・3・4	青	
		論理学 A	2	2・3・4	相	
		論理学 B	2	2・3・4	相	
		論理学の諸問題 A	2	2・3・4	青	
		論理学の諸問題 B	2	2・3・4	青	
		倫理学 A	2	2・3・4	相・青	
		倫理学 B	2	2・3・4	相	
		倫理学の諸問題 A	2	2・3・4	青	
		倫理学の諸問題 B	2	2・3・4	青	
		西洋倫理思想史 A	2	2・3・4	青	
		西洋倫理思想史 B	2	2・3・4	青	
		言語学 A	2	2・3・4	青	
		言語学 B	2	2・3・4	青	
		日本語学 A	2	2・3・4	青	
		日本語学 B	2	2・3・4	青	
文学 A		2	2・3・4	相・青		
文学 B		2	2・3・4	相・青		
文学史 A		2	2・3・4	青		
文学史 B		2	2・3・4	青		
美術 A		2	2・3・4	相・青		
美術 B		2	2・3・4	青		
美術史 A		2	2・3・4	青		
美術史 B		2	2・3・4	青		
音楽 A		2	2・3・4	相・青		
音楽 B		2	2・3・4	青		
音楽史 A	2	2・3・4	青			
音楽史 B	2	2・3・4	青			
文化人類学 A	2	2・3・4	相・青			
文化人類学 B	2	2・3・4	相・青			
比較文化 A	2	2・3・4	青			

人間理解関連科目 (領域B)	比較文化 B	2	2・3・4	青	
	比較文化の諸問題 A	2	2・3・4	青	
	比較文化の諸問題 B	2	2・3・4	青	
	心理学 A	2	2・3・4	相・青	心理学除く
	心理学 B	2	2・3・4	相・青	心理学除く
	教育学 A	2	2・3・4	相	
	教育学 B	2	2・3・4	青	
	平和を考える A	2	2・3・4	青	
	平和を考える B	2	2・3・4	青	
	人間関係とコミュニケーション A	2	2・3・4	青	
	人間関係とコミュニケーション B	2	2・3・4	青	
	文化とコミュニケーション A	2	2・3・4	青	国際政治経済学部除く
	文化とコミュニケーション B	2	2・3・4	青	国際政治経済学部除く
	テーマ別科目 社会理解関連科目 (領域C)	法学(日本国憲法を含む)	4	2・3・4	相・青
日本の法と社会 A		2	2・3・4	青	
日本の法と社会 B		2	2・3・4	青	
国際政治経済学 A		2	2・3・4	青	
国際政治経済学 B		2	2・3・4	青	
国際関係概論 A		2	2・3・4	青	
国際関係概論 B		2	2・3・4	青	
社会学 A		2	2・3・4	相・青	
社会学 B		2	2・3・4	相・青	
現代社会と教育人間学 A		2	2・3・4	青	
現代社会と教育人間学 B		2	2・3・4	青	
経済学 A		2	2・3・4	相・青	経済学部除く
経済学 B		2	2・3・4	相・青	経済学部除く
情報社会科学 A		2	2・3・4	相・青	
情報社会科学 B		2	2・3・4	相・青	
情報社会論		2	2・3・4	青	
社会情報論		2	2・3・4	青	
人口問題 A		2	2・3・4	青	
人口問題 B		2	2・3・4	青	
フェミニズム A		2	2・3・4	青	
フェミニズム B		2	2・3・4	青	
民族問題 A		2	2・3・4	青	
民族問題 B		2	2・3・4	青	
マスメディアと社会		2	2・3・4	青	
データサイエンス		2	2・3・4	青	
福祉と人間 A		2	2・3・4	青	
福祉と人間 B		2	2・3・4	青	
グローバリゼーションとWTO		2	2・3・4	青	

テ ー マ 別 科 目	自然理解関連科目(領域D)	日本農業とWTO	2	2・3・4	青	
		環境問題と社会	2	2・3・4	青	NPO 環境平和持続の会寄附講座
	技術史 A	2	2・3・4	相・青		
	技術史 B	2	2・3・4	相・青		
	日常生活の数理	2	2・3・4	相・青		
	数理科学入門 I	2	2・3・4	青	理工学部・社会情報学部除く 本年度休講	
	数理科学入門 II	2	2・3・4	青	理工学部・社会情報学部除く 本年度休講	
	数理科学の視点	2	2・3・4	相・青		
	数理モデル	2	2・3・4	相	本年度休講	
	自然科学概論 A	2	2・3・4	相	本年度休講	
	自然科学概論 B	2	2・3・4	相	本年度休講	
	文化としての科学・技術A	2	2・3・4	青		
	文化としての科学・技術B	2	2・3・4	青		
	現代物理	2	2・3・4	青		
	ライフサイエンス	2	2・3・4	相		
	ゲノム	2	2・3・4	青		
	生物と地球環境	2	2・3・4	青		
	地球環境保全	2	2・3・4	青		
	バイオテクノロジーと生命倫理	2	2・3・4	青		
	地球観(自然と人の倫理)	2	2・3・4	相	本年度休講	
	生命と地球の歴史	2	2・3・4	相	本年度休講	
	宇宙科学	2	2・3・4	相・青		
	野鳥の生態	2	2・3・4	相		
	鳥類と生物多様性	2	2・3・4	青		
	植物生態学	2	2・3・4	相	2012年度休講予定	
	先端エレクトロニクス	2	2・3・4	相		
	環境科学 A	2	2・3・4	相・青	両キャンパス隔年開講	
	環境科学 B	2	2・3・4	相・青	両キャンパス隔年開講	
	自然地理学 A	2	2・3・4	相	本年度休講	
	自然地理学 B	2	2・3・4	相	本年度休講	
	科学史	2	2・3・4	相・青		
	生命と生態系(環境と生物)	2	2・3・4	青		
	生命の連続(遺伝)	2	2・3・4	青		
	私たちの科学	2	2・3・4	青		
	自然史	2	2・3・4	青		
	自然観の変遷	2	2・3・4	青		
	歴史理解関連科目(領域E)	青山学院大学の歴史	2	2・3・4	相・青	
		日本社会史 A	2	2・3・4	相	
		日本社会史 B	2	2・3・4	青	
		日本社会史 C	2	2・3・4	青	
		中国史 A	2	2・3・4	相	

テーマ別科目	歴史理解関連科目(領域E)	中国史 B	2	2・3・4	青	
		ヨーロッパ史 A	2	2・3・4	相	
		ヨーロッパ史 B	2	2・3・4	青	
		ヨーロッパ史 C	2	2・3・4	青	
		現代史 A	2	2・3・4	相・青	
		現代史 B	2	2・3・4	青	
		現代史 C	2	2・3・4	青	
		現代史 D	2	2・3・4	青	
		考古学 A	2	2・3・4	青	
		考古学 B	2	2・3・4	青	
		科学思想史 A	2	2・3・4	相・青	
	言葉の技能(領域F)	インテンシブ・(第二外国語) (A)	2	2・3・4	青	(第二外国語)はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語、韓国語を指します。
		インテンシブ・(第二外国語) (B)	2	2・3・4	青	
		インテンシブ・(第二外国語) (C)	2	2・3・4	青	
		インテンシブ・(第二外国語) (D)	2	2・3・4	青	
		(第二外国語) II(A)	2	2・3・4	相・青	(第二外国語)はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、スペイン語、中国語を指します。
		(第二外国語) II(B)	2	2・3・4	相・青	
		(第二外国語) II(C)	2	2・3・4	相・青	
		(第二外国語) II(D)	2	2・3・4	相・青	
		(第二外国語) II(E)	2	2・3・4	相・青	(第二外国語)はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、中国語を指します。
		中国語 II (F)	2	2・3・4	相・青	
		(第二外国語) II	2	2・3・4	青	(第二外国語)はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語、韓国語を指します。
		英語 (II A)	2	2・3・4	相・青	外国人留学生のみ
		英語 (II B)	2	2・3・4	相・青	外国人留学生のみ
		日本語 II	2	2・3・4	相・青	外国人留学生のみ
		(第二外国語) III	2	3・4	青	(第二外国語)はドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語、韓国語を指します。
フランス語 III (A)	2	3・4	青	フランス文学科除く		
フランス語 III (B)	2	3・4	青	フランス文学科除く		
英語 III	2	3・4	青	フランス文学科のみ		
英語 (III)	2	3・4	相・青	外国人留学生のみ		
日本語 III	2	3・4	青	外国人留学生のみ		
(第二外国語) 会話 (I)	2	2・3・4	青	(第二外国語)はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語、韓国語、英語(フランス文学科のみ)を指します。		

テ ー マ 別 科 目	言葉の技能 (領域F)	(第二外国語) 会話 (II)	2	3・4	青	(第二外国語) はフランス語 (フランス文学科除く)、ドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語を指します。
		日 本 語 (I) A	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (I) B	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (I) C	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (I) D	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (II) A	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (II) B	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (II) C	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (II) D	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (III) A	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (III) B	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (III) C	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (III) D	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (IV) A	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (IV) B	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (IV) C	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (IV) D	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (V) A	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (V) B	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (V) C	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (V) D	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (VI) A	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (VI) B	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (VI) C	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (VI) D	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 事 情 (I)	2	3	青	交換留学生のみ
		日 本 事 情 (II)	2	3	青	交換留学生のみ
		日 本 事 情 (III)	2	3	青	交換留学生のみ
		日 本 事 情 (IV)	2	3	青	交換留学生のみ
		日 本 事 情 (V)	2	3	青	交換留学生のみ
		日 本 事 情 (VI)	2	3	青	交換留学生のみ
		アメリカ合衆国の社会と文化A	2	2・3・4	相	
		アメリカ合衆国の社会と文化B	2	2・3・4	青	
英語圏の社会と文化A	2	2・3・4	青	国際政治経済学部除く		
英語圏の社会と文化B	2	2・3・4	青			
フランス語圏の社会と文化A	2	2・3・4	相			
フランス語圏の社会と文化B	2	2・3・4	青			
フランス語圏の社会と文化C	2	2・3・4	青			
ドイツ語圏の社会と文化A	2	2・3・4	相			
ドイツ語圏の社会と文化B	2	2・3・4	青			

言葉の技能 (領域F)	ドイツ語圏の社会と文化C	2	2・3・4	青		
	スペイン語圏の社会と文化A	2	2・3・4	相		
	スペイン語圏の社会と文化B	2	2・3・4	青		
	スペイン語圏の社会と文化C	2	2・3・4	青		
	中国語圏の社会と文化A	2	2・3・4	相		
	中国語圏の社会と文化B	2	2・3・4	青		
	中国語圏の社会と文化C	2	2・3・4	青		
	ロシア語圏の社会と文化A	2	2・3・4	相		
	ロシア語圏の社会と文化B	2	2・3・4	青		
	韓国・朝鮮の社会と文化A	2	2・3・4	相		
	韓国・朝鮮の社会と文化B	2	2・3・4	青		
	イスラム圏の社会と文化A	2	2・3・4	相		
	イスラム圏の社会と文化B	2	2・3・4	青		
	日 本 学 A	2	2・3・4	青	交換留学生・外国人留学生のみ	
	日 本 学 B	2	2・3・4	青	交換留学生・外国人留学生のみ	
	English Studies A	2	2・3・4	相・青		
	English Studies B	2	2・3・4	相・青		
	English Studies C	2	2・3・4	青		
	English Studies D	2	2・3・4	青	本年度休講	
	English Studies E	2	2・3・4	青	本年度休講	
	ことばの研究 A	2	2・3・4	相		
	ことばの研究 B	2	2・3・4	青		
	少数民族の社会と文化A	2	2・3・4	青	本年度休講	
	少数民族の社会と文化B	2	2・3・4	青	本年度休講	
	民族文化論 A	2	2・3・4	青		
	民族文化論 B	2	2・3・4	青		
	身体の技能 (領域G)	健康医学	2	2・3・4	相・青	
		身体の仕組みと病気A	2	2・3・4	青	
		身体の仕組みと病気B	2	2・3・4	青	
スポーツ生理学		2	2・3・4	相		
スポーツバイオメカニクス		2	2・3・4	相・青		
スポーツ心理学		2	2・3・4	青		
動きの人間学		2	2・3・4	青		
医療社会学		2	2・3・4	青		
スポーツ運動実習		1	2・3・4	相・青	4回まで重複履修を認めます。 教員免許状取得申請者は、1年次から履修できます。	
アドバンストスポーツ実習		2	2・3・4	相		
情報の技能 (領域H)	プログラミング基礎 I	2	2・3・4	相・青		
	プログラミング基礎 II	2	2・3・4	相・青		
	情報スキル II	2	2・3・4	相	本年度休講	
	eラーニング入門	2	2・3・4	相・青		
	インストラクショナルデザイン入門	2	2・3・4	相・青		

テ ー マ 別 科 目	キャリアの技能 (領域Ⅰ)	教育システムのためのIT入門	2	2・3・4	相・青	両キャンパス相互に隔年開講
		eラーニングの法的課題入門	2	2・3・4	相・青	
		キャリアデザイン基礎	2	2・3・4	相・青	
		キャリアデザイン応用	2	3・4	青	
		仕事力基礎論	2	3・4	青	
		日本語文章作成演習	2	2・3・4	相・青	
		国際ビジネス入門A	2	2・3・4	相・青	
		国際ビジネス入門B	2	2・3・4	相・青	
		感性ビジネスA ーファッション産業のフロンティアー	2	2・3・4	青	
		感性ビジネスB ーファッション産業のフロンティアー	2	2・3・4	青	
		感性ビジネスC ーファッション・ビジネス戦略論ー	2	2・3・4	青	(助)ファッション産業人材育成機構 (IFI) 寄附講座
		感性ビジネスD ーファッション・ビジネス戦略論ー	2	2・3・4	青	(助)ファッション産業人材育成機構 (IFI) 寄附講座
		パーソナル・マネー・マネジメント入門	2	2・3・4	青	三井生命寄附講座
		企業のモノづくりと人づくりのリテラシー	2	2・3・4	青	
		国際ビジネスと海外事情A	2	2・3・4	青	
		国際ビジネスと海外事情B	2	2・3・4	青	
		現代金融の諸問題	2	2・3・4	青	金融青山会寄附講座
		ファイナンシャルプランニング入門	2	2・3・4	相・青	(株)近代セールス社寄附講座

【2】 青山スタンダード科目履修方法および配置表

1. 全学部に共通する教養教育の理念・目標

青山学院の教育方針は、キリスト教信仰にもとづく教育を基盤として、幅広く深い知識を授けることにより、主体的な学習能力、着実な思考力、問題解決能力および総合的な判断力を培い、愛と奉仕の精神をもってすべての人と社会とに対する責任を進んで果たす、人間性豊かで国際性に富む人材を育成することです。

本学の全学部に共通する教養教育は、この理念をうけて、「およそ青山学院大学の卒業生であれば、どの学部・学科を卒業したかに関わりなく、一定の水準の技能・能力と一定の範囲の知識・教養をそなえているという社会的評価を受けることを到達目標とする」として、青山スタンダード科目を開講しています。

2. 履修方法

科目の種類			必修の別	必要単位
青山スタンダード科目	1) 教養コア	キリスト教理解関連科目	必修	2
	2) 技能コア	言葉の技能	英語	※ 1
			第二外国語 ※ 2 ※ 3	必修
		身体の技能	必修※ 4	2
		情報の技能	必修	2
	3) テーマ別	キリスト教理解関連科目	必修	2
	4) 教養コア	人間理解関連科目 社会理解関連科目 自然理解関連科目 歴史理解関連科目	左記 4 領域のうち 2 領域から「教養コア科目」を選択	選択必修
5) 領域指定	人間理解関連科目 社会理解関連科目 自然理解関連科目 歴史理解関連科目	左記領域より 4) で選択しなかった 2 領域から各 1 科目（2 単位）ずつ選択。（「教養コア科目」あるいは「テーマ別科目」いずれも可）	選択必修	4
	フレッシュアップ・セミナー、ウェルカム・レクチャー、教養コア科目、技能コア科目（教育・経済・経営・総合文化政策・社会情報以外）、テーマ別科目から選択。（1）～（5）で修得した科目は除く）		選択	6

※ 1 言葉の技能・英語は、所属する学部（学科）が開講する科目を履修します。詳しくは、所属する学部（学科）の外国語科目履修方法および配置表に関するページを参照してください。（英語スキル I-1、I-2 を除く）

※ 2 第二外国語科目の中から 1 外国語を選択します（入学手続き時に申請されています）。

※ 3 第二外国語科目には、履修順序があります。

・「(第二外国語) I (A)」「(第二外国語) I (B)」について、それぞれ前期の単位が修得できた者のみが後期の履修を認められます（日本語は除く）。

・「インテンシブ・(第二外国語)」「(第二外国語) II」あるいは「(第二外国語) 会話 (I)」は、「(第二外国語) I」の必要単位をすべて修得した者のみが履修を認められます。

・「(第二外国語) III」は、「インテンシブ・(第二外国語)」あるいは「(第二外国語) II」の単位を修得した者のみが履修を認められます。

・「(第二外国語) 会話 (II)」は、「(第二外国語) II」あるいは「(第二外国語) 会話 (I)」の単位を修得した者のみが履修を認められます。

※ 4 教育人間科学部教育・経済・経営・総合文化政策・社会情報のみ必修です。

○必要単位以上修得した場合は、卒業要件の中の自由選択科目に算入されます。

○第二外国語として修得した外国語以外の第二外国語科目を修得した単位は、卒業要件の中の自由選択科目に算入されます（国際政治経済学部除く）。

○受講者数の著しく多い科目については、教室の収容人数、教育効果等を考慮して、クラスの分割・抽選などの措置をとることがあります。

○総合文化政策学部生は、履修年次が 3 年次以上の青山キャンパス開講科目を 2 年次に履修できる場合があります。詳細は時間割表等で確認してください。

3. 授業科目配置表

(太字は必修科目)

		授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	開 講 キャンパス	備 考	
		フレッシュャーズ・セミナー	2	1	相	1年生のみ	
		ウェルカム・レクチャー	2	1	相	1年生のみ	
教養コア科目		(キリスト教理解関連科目) キリスト教概論Ⅰ	2	1	相		
		(人間理解関連科目) 自 己 理 解 (総合科目) 自 己 理 解 (個別科目)	2 2	1 1	相 相	(総合科目)：複数の教員による担当 (個別科目)：一人の教員による担当	
		(社会理解関連科目) 現代社会の諸問題(総合科目) 現代社会の諸問題(個別科目)	2 2	1 1	相 相	(総合科目)：複数の教員による担当 (個別科目)：一人の教員による担当	
		(自然理解関連科目) 科学・技術の視点 (総合科目) 科学・技術の視点 (個別科目)	2 2	1 1	相 相	(総合科目)：複数の教員による担当 (個別科目)：一人の教員による担当	
		(歴史理解関連科目) 歴 史 と 人 間 (総合科目) 歴 史 と 人 間 (個別科目)	2 2	1 1	相 相	(総合科目)：複数の教員による担当 (個別科目)：一人の教員による担当	
	技能コア科目	英語	英 語 ス キ ル Ⅰ - 1	1	1	相	1年生のみ
			英 語 ス キ ル Ⅰ - 2	1	1	相	1年生のみ
		第二外国語	(第二外国語)Ⅰ(A)-1	1	1	相	(第二外国語)はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語、韓国語を指します。
			(第二外国語)Ⅰ(A)-2	1	1	相	
			(第二外国語)Ⅰ(B)-1	1	1	相	
(第二外国語)Ⅰ(B)-2			1	1	相		
英 語 (ⅠA)-1			1	1	相	外国人留学生のみ	
英 語 (ⅠA)-2			1	1	相	外国人留学生のみ	
英 語 (ⅠB)-1			1	1	相	外国人留学生のみ	
英 語 (ⅠB)-2			1	1	相	外国人留学生のみ	
	日 本 語 Ⅰ(A)	2	1	相	外国人留学生のみ		
	日 本 語 Ⅰ(B)	2	1	相	外国人留学生のみ		
	身技 体能の	健 康 ・ ス ポ ー ツ 演 習	2	1	相	教育人間科学部教育・経済・経営・総合文化政策・社会情報のみ必修	
	情技 情報の	情 報 ス キ ル Ⅰ	2	1	相		
テーマ別科目	キリスト教理解関連科目(領域A)	キリスト教概論Ⅱ	2	2・3	相・青	理工学部・社会情報学部は2年次他は3年次配置	
		旧 約 聖 書 と 人 間	2	2・3・4	相		
		新 約 聖 書 と 人 間	2	2・3・4	青		
		キリスト教生命倫理	2	3・4	青		
		キリスト教政治倫理	2	3・4	青		
		キリスト教と自然科学	2	3・4	相		
		キリスト教環境倫理	2	2・3・4	相		
		キリスト教音楽	2	3・4	青		
	キリスト教美術	2	3・4	青			

キリスト教理解関連科目 (領域A)	メソジスト教会史	2	3・4	青		
	キリスト教教育	2	3・4		閉講	
	世界の諸宗教	2	2・3・4	相		
	現代神学	2	3・4	青		
	キリスト教と社会福祉	2	3・4		閉講	
	聖書の中の女性たち(旧約)	2	3・4	青		
	聖書の中の女性たち(新約)	2	2・3・4	相		
	サービス・ラーニング I	2	2・3・4	相		
	サービス・ラーニング II	2	2・3・4	相		
	テーマ別科目 人間理解関連科目 (領域B)	哲学 A	2	2・3・4	相	
		哲学 B	2	2・3・4	相	
		哲学の諸問題 A	2	3・4	青	
		哲学の諸問題 B	2	3・4	青	
		哲学の諸問題 C	2	3・4	青	
		哲学の諸問題 D	2	3・4	青	
		論理学 A	2	2・3・4	相	
		論理学 B	2	2・3・4	相	
		論理学の諸問題 A	2	3・4	青	
		論理学の諸問題 B	2	3・4	青	
		倫理学 A	2	2・3・4	相	
		倫理学 B	2	2・3・4	相	
		倫理学の諸問題 A	2	3・4	青	
		倫理学の諸問題 B	2	3・4	青	
		西洋倫理思想史 A	2	3・4	青	
西洋倫理思想史 B		2	3・4	青		
言語学 A		2	2・3・4	相		
言語学 B		2	2・3・4	相		
日本語学 A		2	2・3・4	相		
日本語学 B		2	2・3・4	相		
文学 A		2	2・3・4	相		
文学 B		2	2・3・4	相		
文学史 A		2	3・4	青		
文学史 B		2	3・4	青		
美術 A		2	2・3・4	相		
美術 B		2	2・3・4	相		
美術史 A		2	3・4	青		
美術史 B		2	3・4	青		
音楽 A		2	2・3・4	相		
音楽 B		2	2・3・4	相		
音楽史 A		2	3・4	青		
音楽史 B		2	3・4	青		
文化人類学 A	2	2・3・4	相・青			

人間理解関連科目 (領域B)	文化人類学 B	2	2・3・4	相・青		
	比較文化 A	2	2・3・4	相		
	比較文化 B	2	2・3・4	相		
	比較文化の諸問題 A	2	3・4	青		
	比較文化の諸問題 B	2	3・4	青		
	心理学 A	2	2・3・4	相	心理学科除く	
	心理学 B	2	2・3・4	相	心理学科除く	
	教育学 A	2	2・3・4	相		
	教育学 B	2	2・3・4	相		
	平和を考える A	2	3・4	青		
	平和を考える B	2	3・4	青		
	人間関係とコミュニケーションA	2	2・3・4	相		
	人間関係とコミュニケーションB	2	2・3・4	相		
	文化とコミュニケーションA	2	2・3・4	相	国際政治経済学部除く	
	文化とコミュニケーションB	2	2・3・4	相	国際政治経済学部除く	
	テーマ別科目 社会理解関連科目 (領域C)	法学(日本国憲法を含む)	4	2・3・4	相・青	法学部除く。 教員免許状取得申請者は、1年次から履修できます。
		日本の法と社会 A	2	3・4	青	
		日本の法と社会 B	2	3・4	青	
		国際政治経済学 A	2	2・3・4	相	
		国際政治経済学 B	2	2・3・4	相	
		国際関係概論 A	2	2・3・4	相	
		国際関係概論 B	2	2・3・4	相	
		社会学 A	2	2・3・4	相・青	
		社会学 B	2	2・3・4	相・青	
		現代社会と教育人間学 A	2	2・3・4	相	
		現代社会と教育人間学 B	2	2・3・4	相	
経済学 A		2	2・3・4	相	経済学部除く	
経済学 B		2	2・3・4	相	経済学部除く	
情報社会科学 A		2	2・3・4	相・青		
情報社会科学 B		2	2・3・4	相・青		
情報社会論		2	3・4	青		
社会情報論		2	3・4	青		
人口問題 A		2	2・3・4	相		
人口問題 B		2	2・3・4	相		
フェミニズム A		2	3・4	青		
フェミニズム B		2	3・4	青		
民族問題 A		2	3・4	青		
民族問題 B		2	3・4	青		
マスメディアと社会		2	2・3・4	相		
データサイエンス		2	2・3・4	相		
福祉と人間 A		2	3・4	青		

テーマ別科目	社会理解関連科目(領域C)	福祉と人間 B	2	3・4	青	
		国際ビジネス入門 A	2	2・3・4	相	
		国際ビジネス入門 B	2	2・3・4	相	
		感性ビジネス A -ファッション産業のフロンティア-	2	2・3・4	相・青	
		感性ビジネス B -ファッション産業のフロンティア-	2	2・3・4	相・青	
		感性ビジネス C -ファッション・ビジネス戦略論-	2	3・4	青	㈱ファッション産業人材育成機構 (IFI) 寄附講座
		感性ビジネス D -ファッション・ビジネス戦略論-	2	3・4	青	㈱ファッション産業人材育成機構 (IFI) 寄附講座
		パーソナル・マネー・マネジメント入門	2	3・4	青	三井生命寄附講座
		企業のモノづくりと人づくりのリテラシー	2	2・3・4	相	
		国際ビジネスと海外事情 A	2	3・4	青	
		国際ビジネスと海外事情 B	2	3・4	青	
		グローバリゼーションとWTO	2	3・4	青	
		日本農業とWTO	2	3・4	青	
		環境問題と社会	2	3・4	青	NPO 環境平和持続の会寄附講座
		現代金融の諸問題	2	3・4	青	金融青山会寄附講座
	経済・金融とファイナンス	2	3・4	青	閉講	
	ファイナンシャルプランニング入門	2	2・3・4	相・青	㈱近代セールス社寄附講座	
	自然理解関連科目(領域D)	技術史 A	2	2・3・4	相	
		技術史 B	2	2・3・4	相	
		日常生活の数理	2	2・3・4	相	
		数理科学入門 I	2	2・3・4	相	理工学部・社会情報学部除く 本年度休講
		数理科学入門 II	2	2・3・4	相	理工学部・社会情報学部除く 本年度休講
		数理科学の視点	2	2・3・4	相	
		数理モデル	2	2・3・4	相	本年度休講
		自然科学概論 A	2	2・3・4	相	本年度休講
		自然科学概論 B	2	2・3・4	相	本年度休講
		文化としての科学・技術 A	2	3・4	相・青	
文化としての科学・技術 B		2	3・4	相・青		
現代物理		2	2・3・4	相		
ライフサイエンス	2	2・3・4	相			
ゲノム	2	2・3・4	相			
生物と地球環境	2	3・4	青			
地球環境保全	2	3・4	青			
バイオテクノロジーと生命倫理	2	3・4	青			
地球観(自然と人の倫理)	2	2・3・4	相	本年度休講		
生命と地球の歴史	2	2・3・4	相	本年度休講		
宇宙科学	2	2・3・4	相			

テ ー マ 別 科 目	自然理解関連科目 (領域D)	野鳥の生態	2	2・3・4	相	
		鳥類と生物多様性	2	2・3・4	相	
		植物生態学	2	2・3・4	相	
		メカワールド	2	2・3・4	相	理工学部除く
		経営管理の技術	2	2・3・4	相	理工学部除く
		先端エレクトロニクス	2	2・3・4	相	
		環境科学 A	2	2・3・4	相	
		環境科学 B	2	2・3・4	相	
		自然地理学 A	2	2・3・4	相	本年度休講
		自然地理学 B	2	2・3・4	相	本年度休講
		科学史	2	2・3・4	相	
		生命と生態系(環境と生物)	2	2・3・4	相	
		生命の連続(遺伝)	2	2・3・4	相	
		かたちの科学	2	2・3・4	相	
		自然史	2	2・3・4	相	
		自然観の変遷	2	2・3・4	相	
	歴史理解関連科目 (領域E)	青山学院大学の歴史	2	2・3・4	相・青	
		日本社会史 A	2	2・3・4	相	
		日本社会史 B	2	2・3・4	相	
		日本社会史 C	2	3・4	青	
		中国史 A	2	2・3・4	相	
		中国史 B	2	2・3・4	相	
		中国史 C	2	3・4	青	
		ヨーロッパ史 A	2	2・3・4	相	
		ヨーロッパ史 B	2	2・3・4	相	
		ヨーロッパ史 C	2	3・4	青	
		現代史 A	2	2・3・4	相	
		現代史 B	2	2・3・4	相	
		現代史 C	2	2・3・4	相	
		現代史 D	2	2・3・4	相	
		考古学 A	2	2・3・4	相	
		考古学 B	2	2・3・4	相	
		科学思想史 A	2	2・3・4	相	
科学思想史 B	2	2・3・4	相			
言葉の技能 (領域F)	インテンシブ・(第二外国語) (A)	2	2・3・4	相	(第二外国語) はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語、韓国語を指します。	
	インテンシブ・(第二外国語) (B)	2	2・3・4	相		
	インテンシブ・(第二外国語) (C)	2	2・3・4	相		
	インテンシブ・(第二外国語) (D)	2	2・3・4	相		
	(第二外国語) II(A)	2	2・3・4	相	(第二外国語) はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、スペイン語、中国語を指します。	
	(第二外国語) II(B)	2	2・3・4	相		
	(第二外国語) II(C)	2	2・3・4	相		
	(第二外国語) II(D)	2	2・3・4	相		

テーマ別科目 言葉の技能 (領域F)	(第二外国語) II(E)	2	2・3・4	相	(第二外国語)はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、中国語を指します。
	中国語 II (F)	2	2・3・4	相	
	(第二外国語) II	2	2・3・4	相・青	(第二外国語)はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語、韓国語を指します。
	英語 (IIA)	2	2・3・4	相	外国人留学生のみ
	英語 (IIB)	2	2・3・4	相	外国人留学生のみ
	日本語 II	2	2・3・4	相	外国人留学生のみ
	(第二外国語) III	2	3・4	青	(第二外国語)はドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語、韓国語を指します。
	フランス語 III (A)	2	3・4	青	フランス文学科除く
	フランス語 III (B)	2	3・4	青	フランス文学科除く
	英語 III	2	3・4	青	フランス文学科のみ
	英語 (III)	2	3・4	青	外国人留学生のみ
	日本語 III	2	3・4	青	外国人留学生のみ
	(第二外国語) 会話 (I)	2	2・3・4	相・青	(第二外国語)はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語、韓国語、英語(フランス文学科のみ)を指します。
	(第二外国語) 会話 (II)	2	3・4	青	(第二外国語)はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語を指します。
	日本語 (I)A	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (I)B	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (I)C	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (I)D	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (II)A	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (II)B	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (II)C	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (II)D	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (III)A	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (III)B	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (III)C	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (III)D	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (IV)A	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (IV)B	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (IV)C	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (IV)D	1	3	青	交換留学生のみ
日本語 (V)A	1	3	青	交換留学生のみ	
日本語 (V)B	1	3	青	交換留学生のみ	

テ マ 別 科 目	言葉の技能 (領域F)	日 本 語 (V)C	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (V)D	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 事 情 (I)	2	3	青	交換留学生のみ
		日 本 事 情 (II)	2	3	青	交換留学生のみ
		日 本 事 情 (III)	2	3	青	交換留学生のみ
		日 本 事 情 (IV)	2	3	青	交換留学生のみ
		日 本 事 情 (V)	2	3	青	交換留学生のみ
		アメリカ合衆国の社会と文化A	2	2・3・4	相	
		アメリカ合衆国の社会と文化B	2	2・3・4	相	
		英語圏の社会と文化A	2	2・3・4	相	国際政治経済学部除く
		英語圏の社会と文化B	2	2・3・4	相	
		フランス語圏の社会と文化A	2	2・3・4	相	
		フランス語圏の社会と文化B	2	2・3・4	相	
		フランス語圏の社会と文化C	2	3・4	青	
		ドイツ語圏の社会と文化A	2	2・3・4	相	
		ドイツ語圏の社会と文化B	2	2・3・4	相	
		ドイツ語圏の社会と文化C	2	3・4	青	
		スペイン語圏の社会と文化A	2	2・3・4	相	
		スペイン語圏の社会と文化B	2	2・3・4	相	
		スペイン語圏の社会と文化C	2	3・4	青	
		中国語圏の社会と文化A	2	2・3・4	相	
		中国語圏の社会と文化B	2	2・3・4	相	
		中国語圏の社会と文化C	2	3・4	青	
		ロシア語圏の社会と文化A	2	2・3・4	相	
		ロシア語圏の社会と文化B	2	3・4	青	
		韓国・朝鮮の社会と文化A	2	2・3・4	相	
		韓国・朝鮮の社会と文化B	2	3・4	青	
		イスラム圏の社会と文化A	2	3・4	青	
		イスラム圏の社会と文化B	2	3・4	青	
		日 本 学 A	2	3・4	青	交換留学生・外国人留学生のみ
		日 本 学 B	2	3・4	青	交換留学生・外国人留学生のみ
		English Studies A	2	2・3・4	相	
		English Studies B	2	2・3・4	相	
		English Studies C	2	3・4	青	
		English Studies D	2	3・4	青	本年度休講
		English Studies E	2	3・4	青	本年度休講
ことばの研究A	2	2・3・4	相			
ことばの研究B	2	3・4	青			
少数民族の社会と文化A	2	3・4	青	本年度休講		
少数民族の社会と文化B	2	3・4	青	本年度休講		
民族文化論A	2	2・3・4	相			
民族文化論B	2	2・3・4	相			

テ ー マ 別 科 目	身体 の 技能 (領 域 G)	健 康 医 学	2	2・3・4	相・青	
		身体 の 仕 組 み と 病 気 A	2	2・3・4	相	
		身体 の 仕 組 み と 病 気 B	2	2・3・4	相	
		ス ポ ー ツ 生 理 学	2	2・3・4	相	
		ス ポ ー ツ バ イ オ メ カ ニ ク ス	2	2・3・4	相	
		ス ポ ー ツ 心 理 学	2	2・3・4	相	
		動 き の 人 間 学	2	2・3・4	相	
		医 療 社 会 学	2	2・3・4	相	
		ス ポ ー ツ 運 動 実 習	1	2・3・4	相・青	4回まで重複履修を認めます。 教員免許状取得申請者は、1年次 から履修できます。
		ア ド バ ン ス ト ス ポ ー ツ 実 習	2	2・3・4	相	
	情 報 の 技 能 (領 域 H)	プ ロ グ ラ ミ ン グ 基 礎 I	2	2・3・4	相・青	
		プ ロ グ ラ ミ ン グ 基 礎 II	2	2・3・4	相・青	
		情 報 ス キ ル II	2	2・3・4	相	本年度休講
		e ラ ー ニ ン グ 入 門	2	2・3・4	相	
		イ ン ス ト ラ ク シ ョ ナ ル デ ザ イン 入 門	2	2・3・4	相	
		教 育 シ ス テ ム の た め の IT 入 門	2	2・3・4	相	
		e ラ ー ニ ン グ の 法 的 課 題 入 門	2	2・3・4	相	

【3】外国語科目履修方法および配置表

1. 第一外国語
科目履修方法

外国語のクラスは指定制なので指定以外のクラスで履修することはできません。
なお、所要単位を超えて修得した単位は自由選択科目の単位に算入されます。

2. 第一外国語
科目配置表

外国語科目は、まず1・2年次に英語基礎科目として、日本語に加えて英語によるコミュニケーションの大切さを学び、3・4年次に英語融合系科目として、社会情報学における問題について具体的に英語でプレゼンテーションする科目を学びます。また、将来、海外留学や実務においても有効となりうる科目も開講しています。

(1) 外国語科目の必要単位 [] 内は単位数

必修 [6単位]

英語基礎科目 イングリッシュコミュニケーション I [2] イングリッシュコミュニケーション II [2]
英語融合系科目 イングリッシュプレゼンテーション [2]

選択必修 [6単位]

2～4年次の間に、英語基礎科目・英語融合系科目のうち、必修科目を除いた科目から6単位を選択必修。

外国語科目配置表

(太字は必修)

授業科目		単位	履修年次	備考
英語基礎科目	イングリッシュコミュニケーション I	2	1	
	イングリッシュコミュニケーション II	2	1	
	英語実践演習 I	2	2・3	検定試験対策 I (TOEIC®)
	英語実践演習 II	2	2・3	検定試験対策 II (TOEIC®)
英語融合系科目	英語実践演習 III	2	2・3・4	検定試験対策 III (TOEFL®)
	英語実践演習 IV	2	2・3・4	検定試験対策 IV (TOEFL®)
	イングリッシュプレゼンテーション	2	3	
	意思決定理論と実践	2	3・4	
	ジャーナリズム	2	3・4	
	リーディングの理論と実践	2	3・4	
	ビジネスライティング	2	3・4	
	論文構成論	2	4	

(2) 外国語科目は、下表のように履修順序があります。

1	2
	1を履修し合格した場合のみ履修できます。
イングリッシュコミュニケーション I イングリッシュコミュニケーション II	イングリッシュプレゼンテーション

(3) 必修科目および選択必修科目の必要単位を満たしたうえ、さらに外国語選択科目を修得した場合、その単位は自由選択科目に算入されます。

3. 第二外国語

(1) 第二外国語の履修単位

2009年度以降入学者は、必修（4単位） ※下表参照

第二外国語科目：青山スタンダード科目技能コア科目（言葉の技能）

第二外国語科目

①	②	③	④
	①を合格した場合のみ履修可	①②の必修科目をすべて合格した場合のみ履修可	③を合格した場合のみ履修可
青山スタンダード科目			
I (A)-1 フランス語 ドイツ語 スペイン語 中国語 ロシア語 韓国語	I (A)-2 フランス語 ドイツ語 スペイン語 中国語 ロシア語 韓国語	II フランス語 ドイツ語 スペイン語 中国語 ロシア語 韓国語	III フランス語 ドイツ語 スペイン語 中国語 ロシア語 韓国語
I (B)-1 フランス語 ドイツ語 スペイン語 中国語 ロシア語 韓国語	I (B)-2 フランス語 ドイツ語 スペイン語 中国語 ロシア語 韓国語	II or 会話 (I) フランス語 ドイツ語 スペイン語 中国語 ロシア語 韓国語	会話 (II) フランス語 ドイツ語 スペイン語 中国語 ロシア語 韓国語

※上表①の単位が修得できない時、②の科目の履修登録は自動的に削除されます。

【4】 専門科目履修方法および配置表

1. 専門科目履修方法

(1) 学部専門科目の必要単位

必修〔22単位〕

基礎科目〔12単位〕

社会情報入門Ⅰ〔2〕 コミュニケーション基礎〔2〕 基礎数学〔2〕 統計入門〔2〕
 情報科学入門〔2〕 コンピュータ実習〔2〕

共通演習科目〔10単位〕

社会情報演習Ⅰ〔2〕 卒業研究〔8〕

選択必修科目〔60単位〕

基礎科目・共通演習科目〔4単位〕

1～4年次の間に、基礎科目、共通演習科目のうち、必修科目を除く4単位を選択必修。

（「インターンシップ」は除く。）

基盤科目〔32単位〕

1～4年次の間に、社会科学系基盤科目、情報科学系基盤科目のうち、32単位を選択必修。ただし、それぞれの系より、10単位以上修得することを条件とする。

展開科目〔24単位〕

2～4年次の間に、社会科学系、融合系、情報科学系のいずれか二つの系より、それぞれ少なくとも6単位以上修得することを条件とし、24単位を選択必修とする。

(2) 履修登録にあたっての条件等について

学部専門科目においては、履修登録にあたって条件等が示されているものがあります。必ず、講義内容目次のほか講義内容をよく読んでその条件等を備えているか確認をしてください。

(3) 「社会情報演習Ⅱ」について

2011年度は、プロジェクト形式を前期に、個別研究形式を後期に開講します。同一科目なので履修を希望する場合は、どちらかを選択することになります。履修方法、履修登録等については、年度初頭の履修ガイダンスにて説明します。また、後期の社会情報演習Ⅱは受講者数に制限があります。選抜の方法、手順については履修ガイダンスにて説明します。

(4) 「社会情報演習Ⅳ」について

社会情報演習Ⅳの履修登録は、年度初頭ではなく、2011年度前期授業期間中に実施する研究室選考の後に行います。

したがって、社会情報演習Ⅳの履修希望者は、年度初頭の履修登録において、2単位分余裕を持って履修登録を行ってください。

なお、研究室選考に漏れた場合には、後期履修変更期間に他の科目を追加履修することができます。履修の変更には制限がありますので、詳細についてはP13を確認してください。

(5) 同一科目の履修について

既に合格した科目を再度履修することはできません。

2. 専門科目配置表

(太字は必修)

科目区分		授業科目	単位	履修年次	備考
専 門 科 目	基礎科目	社会情報入門Ⅰ	2	1	
		社会情報入門Ⅱ	2	1	
		コミュニケーション基礎	2	1	
		基礎数学	2	1	
		統計入門	2	1	
		情報科学入門	2	1	
		コンピュータ実習	2	1	
	共通演習科目	社会情報演習Ⅰ	2	1	
		社会情報演習Ⅱ	2	2	
		社会情報演習Ⅲ	2	3	
		社会情報演習Ⅳ	2	3	
		卒業研究	8	4	
		インターンシップ	2	2・3・4	卒業要件外
	社会科学系基盤科目	社会情報 A	2	2	
		社会情報 B	2	2	
		メディアコミュニケーション	2	2	
		心理学概論	2	2	
		社会心理学	2	2	
		学習科学	2	2	
		経済学入門Ⅰ	2	2	
		経済学入門Ⅱ	2	2	
		経営情報Ⅰ	2	2	
		経営情報Ⅱ	2	2	
		社会統計	2	2	
		社会統計演習	2	2	
		データ分析	2	2	
		データ分析演習	2	2	
		科学技術と社会	2	2	
		プレゼンテーション技法	2	2	
		メディアリテラシ	2	2	
情報科学系基盤科目	社会数理基礎Ⅰ	2	1・2		
	社会数理基礎Ⅱ	2	1・2		
	社会数理基礎Ⅰ演習	1	1・2		
	社会数理基礎Ⅱ演習	1	1・2		
	数理情報基礎Ⅰ	2	1・2		
	数理情報基礎Ⅱ	2	1・2		

情報科学系 基盤科目	数理情報基礎Ⅰ演習	1	1・2	
	数理情報基礎Ⅱ演習	1	1・2	
	数の歴史	2	2・3	
	確率統計	2	2	
	情報科学基礎Ⅰ	2	2	
	情報科学基礎Ⅱ	2	2	
	プログラミング基礎	2	2	
	プログラミング基礎実習	2	2	
	システム分析・設計基礎	2	2	
	システム分析・設計基礎演習	2	2	
	データベース基礎	2	2	
	コンピュータネットワーク基礎	2	2	
	インターネット概論	2	1	
	社会科学系 展開科目	環境情報論	2	3・4
環境経済論		2	3・4	
経済政策Ⅰ		2	3・4	
応用経済Ⅰ		2	3・4	
応用経済Ⅱ		2	3・4	
公共経済学		2	3・4	
行政学		2	3・4	
社会変動論		2	3・4	
社会調査Ⅰ		2	3・4	
経営分析		2	3・4	
経営戦略論		2	3・4	
数理ファイナンス		2	3・4	
計量経済学Ⅰ		2	3・4	
金融論		2	3・4	
証券市場Ⅰ	2	3・4		
融合系 展開科目	コーポレートファイナンス	2	3・4	
	コーポレートガバナンス	2	3・4	
	認知心理学	2	3・4	
	組織心理学	2	3・4	
	学習心理学	2	3・4	
	心理学演習	2	3・4	
	スポーツと心の科学	2	3・4	
	ナレッジマネジメント	2	3・4	
コミュニティマネジメント	2	3・4		
リスクマネジメント	2	3・4		

	融合系 展開科目	情報システム計画	2	3	
		インターネット応用	2	3・4	
		ウェブ論	2	3・4	
		ウェブコンテンツ作成実習	2	3・4	
		ウェブラーニング	2	3・4	
		ヒューマンインタフェース	2	3・4	
		デジタルアーカイビング	2	3・4	
		社会情報特別講義 A	2	3・4	
		社会情報特別講義 B	2	3・4	
専 門 科 目	情報 科 学 系 展 開 科 目	数理解析基礎	2	2・3	
		数理解析基礎演習	2	2・3	
		現象の数理 I	2	2・3	
		現象の数理 I 演習	2	2・3	
		離散数学	2	2・3・4	
		数理代数 I	2	3・4	
		数理代数 I 演習	2	3・4	
		情報科学応用 I	2	3・4	
		情報科学応用 II	2	3・4	
		オブジェクト指向プログラミング	2	3・4	
		プログラミング応用実習	2	3・4	
		マルチメディアプログラミング	2	3・4	
		システム分析・設計応用	2	3・4	
		データベースシステム応用	2	3・4	
		ネットワーク構成実習	2	3・4	
データマイニング	2	3・4			
情報科学総合演習 I	2	3・4			
	社会 科 学 系 自 由 科 目	知的財産法	2	3・4	
		経済政策 II	2	3・4	
		社会調査 II	2	3・4	
		計量経済学 II	2	3・4	
		国際ファイナンス	2	3・4	
		証券市場 II	2	3・4	
		インベストメント	2	3・4	
		デリバティブズ	2	3・4	
		経済解析 I	2	3・4	
		経済解析 II	2	3・4	
		企業経営の経済学	2	3・4	
		現代の経済	2	3・4	

		グローバルビジネス	2	3・4	
		社会情報特別講義 C	2	3・4	
		社会情報特別講義 D	2	3・4	
専 門 科 目	融 合 系 自 由 科 目	組織論	2	3・4	
		人間関係論	2	3・4	
		情報倫理	2	3・4	
		文化心理学	2	3・4	
		組織意思決定論	2	3・4	
		プロジェクトマネジメント	2	3・4	
		広報論	2	3・4	
		情報化社会と文化	2	3・4	
		異文化コミュニケーション	2	3・4	
		情報アクセス法	2	3・4	
		コンピュータグラフィックス	2	3・4	
		情報システム開発	2	3・4	
		ソフトウェア開発・保守	2	3・4	
		社会情報特別講義 E	2	3・4	
		社会情報特別講義 F	2	3・4	
		情 報 科 学 系 自 由 科 目	情 報 科 学 系 自 由 科 目	基礎数学入門	2
数理情報基礎Ⅲ	2			2・3	
数理情報基礎Ⅳ	2			2・3	
構造幾何Ⅰ	2			2・3	
構造幾何Ⅰ演習	2			2・3	
複素解析	2			3・4	
複素解析演習	2			3・4	
現象の数理Ⅱ	2			3・4	
数理代数Ⅱ	2			3・4	
構造幾何Ⅱ	2			3・4	
構造幾何Ⅱ演習	2			3・4	
集合と位相	2			3・4	
集合と位相演習	2			3・4	
情報処理基礎	2			2・3・4	
情報科学応用Ⅲ	2			3・4	
情報科学総合演習Ⅱ	2			3・4	
情報と職業	2	2・3	卒業要件外 ※1		

※1 「情報と職業」は教職申請者のみ履修を認めます。

【5】自由選択科目履修方法

自由選択科目履修方法

下記の（イ）（ロ）（ハ）（ニ）のうちから任意に14単位修得しなければなりません。

- （イ） 青山スタンダード科目
- （ロ） 外国語科目
- （ハ） 自学部専門科目
- （ニ） 他学部科目

（卒業に必要な単位を超えて修得した単位は、自由選択科目に算入されます。）

ただし、卒業要件外科目は除きます。

【6】履修ガイドライン

本学部の履修モデルを策定するにあたり、本学部の教育課程を履修することによって、どのような人材が育成されるのかを明らかにしておくことは意味のあることと考え、より具体的に教育課程設計のポイントをまとめます。

まず、社会科学系の視点から、経営・経済の基礎概念の修得と社会活動や経済活動の分析（データ分析や社会調査等）を重視しています。社会科学系の展開プログラムとして、社会政策領域では経済政策（環境資源エネルギー・人口福祉）の担い手の育成に役立つこと、金融ファイナンス領域では金融アナリストの育成を念頭においています。文理融合の本学部だからできることとして、理論と実践を融合した教育課程による情報技術を駆使した大量データの分析や、論理的な取り組みや理論的背景を理解させる教育課程により「なぜ？」に対して説明ができる人材の養成を念頭においています。

人間・社会・情報融合系の視点では、人や社会に関する問題を考える上で必要となる心理や教育に関する基盤の修得、数量的なものに限らず質的な情報の処理能力の修得を目指す教育課程であることを念頭においています。人間・社会・情報融合系の展開プログラムでは、人と人、社会と人のコミュニケーションのあり方や組織の設計、組織における意思決定や知識の有効な活用法、経済活動がもたらす人間社会への問題の発見と解決能力の育成に留意し、本学部だからできることとして、経済活動と直結した人間心理の解明、企業や政策における人的要素の解明、そして知識基盤社会が人間に及ぼすさまざまな影響の解明ができる人材養成が可能となるよう教育課程の設計に配慮しています。

情報科学系の視点では、数理的な基盤や情報を高度に利用するための基盤の修得や、情報システム構築のための幅広い素養を身につけられるように教育課程を設計しています。情報科学系の展開プログラムとしては、高度な情報システム設計能力をもつシステムエンジニアの育成を基本とします。とくに、高度な情報活用による人のコラボレーション構築技術をもつシステムエンジニアの育成、企業活動や政策立案過程を理解したシステムエンジニアの育成、社会ニーズの正確な把握とその問題解決のための的確な判断をおこなう技術と、その反映を実現できるシステムエンジニアの育成を目指すべく教育課程を設計しています。さらに、人や社会に内在する問題を、論理的に解明するだけでなく、分析的あるいはシステム指向の考え方に基づいて捉えることのできる数学・情報教育の担い手の育成も視野に入れます。

上述した教育課程、養成する人材像に対応した本学部の代表的な履修モデルを以下に示します。

【履修モデル 1:社会科学系からの視点】（数理・情報に強い金融アナリストの養成）

【履修モデル 2:人間・社会・情報融合系からの視点】（タフな組織マネージャーの養成）

【履修モデル 3:情報科学系からの視点】（組織に明るい情報システムスペシャリストの養成）

なお、履修モデルでは、卒業に必要な最低の合計単位数 134 単位から青山スタンダード(26 単位)を除いた 108 単位以上を履修するように作成しています。また、科目分類は、(A) 専門基礎科目・共通演習科目（必修）22 単位、(B) 専門基礎科目・共通演習科目（選択必修）4 単位、(C) 専門基盤科目（選択必修）32 単位、(D) 専門展開科目（選択必修）24 単位、(E) 外国語科目（必修・選択必修）12 単位、(F) 自由選択科目（選択）14 単位以上履修、としています。

将来目指す進路にあわせこんな学びを提案できます。

履修モデル 1	数理・情報に強い金融アナリスト
<p style="text-align: center;">1－2年次で学ぶ主な科目</p>	<p style="text-align: center;">3－4年次で学ぶ主な科目</p>
<p style="text-align: center;">【英語基礎科目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇ イングリッシュコミュニケーション I・II Academic Listening/Speaking・Reading/Writing <p style="text-align: center;">【専門基礎科目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇ 社会情報入門 I 学部の基本コンセプトの解説 ◇ コミュニケーション基礎 レポート作成、文献調査の方法等 ◇ 基礎数学 社会情報学部で必要とされる数学を初歩から教えます ◇ 統計入門 確率分布、統計的推測、検定 ◇ 情報科学入門 情報、コンピュータの概念、情報の扱い方 ◇ コンピュータ実習 プログラミング入門 ◇ 社会情報演習 I 本学部教員全員が行う少人数セミナー <p style="text-align: center;">【基盤科目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇ 経済学入門 I・II 経済学の両輪であるマクロ、ミクロ経済学 ◇ 経営情報 I・II 株式会社、企業、市場等の基礎概念 ◇ データ分析、演習 経済、社会統計の扱い方の修得 ◇ プレゼンテーション技法 伝達したい内容を効果的に伝えていくための方法を修得 ◇ 社会数理基礎 I・II 経済学に必要な解析学の基礎 ◇ プログラミング基礎 Java 言語、手続き型プログラミング、データ構造と関数化 ◇ 確率統計 金融工学に必要な確率論の基礎、数理統計学 	<p style="text-align: center;">【外国語科目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇ イングリッシュプレゼンテーション 英語での発表の実践 <p style="text-align: center;">【展開科目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇ 応用経済 I・II より高度な経済学のモデル分析 ◇ 数理ファイナンス 確率過程、ブラックショールズ式等 ◇ 計量経済学 I 経済理論仮説の検証、経済動向予測等 ◇ 金融論 金融制度、金融政策（ゼロ金利政策、量的緩和政策）の評価等 ◇ 国際ファイナンス 国際分散投資、為替ヘッジ等 ◇ デリバティブズ 先物、オプション、デリバティブズの評価理論 <p style="text-align: center;">【共通演習科目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇ 卒業研究

履修モデル2	タフな組織マネージャー
<p style="text-align: center;">1－2年次で学ぶ主な科目</p>	<p style="text-align: center;">3－4年次で学ぶ主な科目</p>
<p style="text-align: center;">【英語基礎科目】</p> <p>◇ イングリッシュコミュニケーション I・II Academic Listening/Speaking・Reading/Writing</p> <p style="text-align: center;">【専門基礎科目】</p> <p>◇ 社会情報入門 I 学部の基本コンセプトの解説</p> <p>◇ コミュニケーション基礎 レポート作成、文献調査の方法等</p> <p>◇ 基礎数学 社会情報学部で必要とされる数学を初歩から教えます</p> <p>◇ 統計入門 確率分布、統計的推測、検定</p> <p>◇ 情報科学入門 情報、コンピュータの概念、情報の扱い方</p> <p>◇ コンピュータ実習 プログラミング入門</p> <p>◇ 社会情報演習 I 本学部教員全員が行う少人数セミナー</p> <p style="text-align: center;">【基盤科目】</p> <p>◇ 心理学概論 社会情報学に必要な心理学の基本概念</p> <p>◇ 学習科学 学習に関する認知科学的研究</p> <p>◇ 社会統計 相関係数、回帰分析、多変量分析等の修得とその現実社会への応用</p> <p>◇ データ分析、演習 経済、社会統計の扱い方の修得</p> <p>◇ プレゼンテーション技法 伝達したい内容を効果的に伝えていくための方法を修得</p> <p>◇ プログラミング基礎 Java 言語、手続き型プログラミング、データ構造と関数化</p>	<p style="text-align: center;">【外国語科目】</p> <p>◇ イングリッシュプレゼンテーション 英語での発表の実践</p> <p>◇ 意思決定理論と実践 英語による Debate（議論）力の養成</p> <p>◇ リーダーシップの理論と実践 英語によるリーダーシップの実践</p> <p style="text-align: center;">【展開科目】</p> <p>◇ 経営戦略論 事業戦略（business strategy）の基礎</p> <p>◇ 組織心理学 組織と人の関係を心理学的アプローチから分析</p> <p>◇ リスクマネジメント 伝統的リスク、不確実性リスク、事業機会リスク等</p> <p>◇ 公共経済学 財政、一般会計、財政投融资等</p> <p style="text-align: center;">【共通演習科目】</p> <p>◇ 卒業研究</p>

履修モデル3	組織に明るい情報システムスペシャリスト
1－2年次で学ぶ主な科目	3－4年次で学ぶ主な科目
<p style="text-align: center;">【英語基礎科目】</p> <p>◇ イングリッシュコミュニケーションⅠ・Ⅱ Academic Listening/Speaking・Reading/Writing</p> <p style="text-align: center;">【専門基礎科目】</p> <p>◇ 社会情報入門Ⅰ 学部の基本コンセプトの解説</p> <p>◇ コミュニケーション基礎 レポート作成、文献調査の方法等</p> <p>◇ 基礎数学 社会情報学部で必要とされる数学を初歩から教えます</p> <p>◇ 統計入門 確率分布、統計的推測、検定</p> <p>◇ 情報科学入門 情報、コンピュータの概念、情報の扱い方</p> <p>◇ コンピュータ実習 プログラミング入門</p> <p>◇ 社会情報演習Ⅰ 本学部教員全員が行う少人数セミナー</p> <p style="text-align: center;">【基盤科目】</p> <p>◇ 経営情報Ⅰ・Ⅱ 株式会社、企業、市場等の基礎概念</p> <p>◇ 数理情報基礎Ⅰ・Ⅱ 情報科学、社会科学に必要な線形代数の基礎</p> <p>◇ プログラミング基礎 Java 言語、手続き型プログラミング、データ構造と関数化</p> <p>◇ システム分析・設計基礎 構造化技法、オブジェクト指向等ための方法を修得</p> <p>◇ コンピュータネットワーク基礎 通信プロトコル、LAN の基本的な構成</p>	<p style="text-align: center;">【外国語科目】</p> <p>◇ イングリッシュプレゼンテーション 英語での発表の実践</p> <p>◇ ビジネスライティング 英語によるビジネスレポート等の作成</p> <p style="text-align: center;">【自由科目】</p> <p>◇ 知的財産法 特許法や著作権法等</p> <p style="text-align: center;">【展開科目】</p> <p>◇ マルチメディアプログラミング デジタルメディアのデータ構造・処理</p> <p>◇ データベースシステム応用 リレーショナルデータベース管理システム等</p> <p>◇ 経営分析 企業の実態分析、社会的責任の分析等</p> <p>◇ コーポレートファイナンス 投資のリスクとリターン、金融資産の価格決定のメカニズム等</p> <p style="text-align: center;">【共通演習科目】</p> <p>◇ 卒業研究</p>

社会情報学部
B. 2008 年度入学者

A. 社会情報学部履修要項

【1】社会情報学部履修について

1. 学位について

社会情報学部で4年以上（ただし8年を限度とします）在学し、卒業に必要な134単位以上を修得した者には、学位記を与え「学士（学術）」の学位を授与します。

2. 卒業要件

本学部を卒業するためには、以下に示す卒業要件単位表にある区分ごとに、それぞれ必要な単位を修得しなければなりません。

規定以上に修得した選択必修科目の単位は自由選択科目の選択の単位として扱います。

卒業要件単位表

科目の種類		必選の別	必要単位
青山スタンダード科目		必修 選択必修	22
外国語科目	英語基礎科目	必修	4
	英語融合系科目	必修	2
	英語基礎科目、英語融合系科目	選択必修	6
専門科目	基礎科目	必修	12
	共通演習科目(卒業研究含む)	必修	10
	専門基礎科目、共通演習科目 専門基盤科目、専門展開科目	選択必修	60
自由選択科目	青山スタンダード科目、自学部専門科目、外国語科目、他学部科目の中より履修する。	選択	18
総計			134

3. 最高履修制限単位

最高履修制限単位とは、各年度で履修申請できる最高限度の単位数です。

社会情報学部における最高履修制限単位は次のとおりです。各年次でこの表に示す単位数を超えて履修することはできません。なお、各年次においては、1科目以上の履修をしなければなりません。

学 年	最高履修制限単位	合計
1～4年次	各 54 単位	216 単位

(注意) 教育職員免許状の申請を希望する学生の教職課程科目の単位は、最高履修制限単位に含まれません。

4. 進級条件

3年次生から4年次生に進級するためには、卒業見込者でなければなりません。
また、卒業要件単位を満たすことのできない4年次生は、次の年度も4年次生となります。

卒業見込者

卒業見込者とは、在学3年次終了時の修得した単位により卒業見込みの判定をおこない、「卒業研究」を履修が可能な場合、卒業見込者とします。

卒業見込証明書は、4年次年度初頭に卒業要件を満たす履修登録をおこなったことが確認された後、発行可能となります。4年次前期の単位履修の結果により年度末に卒業する見込みがなくなった場合は、卒業見込証明書は発行されなくなります。

卒業研究の履修条件

卒業研究の履修条件は、以下のとおりです。

- I) 3年以上在学していること。
- II) 1年次の専門科目および外国語科目の必修科目18単位と青山スタンダード科目の1年次の必修科目10単位を修得済みであること。
- III) 卒業要件単位のうち、100単位以上修得していること。

5. 修得単位僅少者

入学後の2年間（休学期間を除く）で修得単位が32単位に満たない学生は、成業の見込のない学生として除籍されることがありますので、該当しないよう特に注意してください。

【2】 青山スタンダード科目履修方法および配置表

1. 全学部に共通する教養教育の理念・目標

青山学院の教育方針は、キリスト教信仰にもとづく教育を基盤として、幅広く深い知識を授けることにより、主体的な学習能力、着実な思考力、問題解決能力および総合的な判断力を培い、愛と奉仕の精神をもってすべての人と社会とに対する責任を進んで果たす、人間性豊かで国際性に富む人材を育成することです。

本学の全学部に共通する教養教育は、この理念をうけて、「およそ青山学院大学の卒業生であれば、どの学部・学科を卒業したかに関わりなく、一定の水準の技能・能力と一定の範囲の知識・教養をそなえているという社会的評価を受けることを到達目標とする」として、青山スタンダード科目を開講しています。

2. 履修方法

科目の種類			必修の別	必要単位
青山スタンダード科目	1) 教養コア	キリスト教理解関連科目	必修	2
	2) 技能コア	言葉の技能	英語	※ 1
			第二外国語 ※ 2 ※ 3	選択
		身体の技能	必修※ 4	2
		情報の技能	必修	2
	3) テーマ別	キリスト教理解関連科目	必修	2
	4) 教養コア	人間理解関連科目 社会理解関連科目 自然理解関連科目 歴史理解関連科目	左記 4 領域のうち 2 領域から「教養コア科目」を選択	選択必修
5) 領域指定	人間理解関連科目 社会理解関連科目 自然理解関連科目 歴史理解関連科目	左記領域より 4) で選択しなかった 2 領域から各 1 科目（2 単位）ずつ選択。（「教養コア科目」あるいは「テーマ別科目」いずれも可）	選択必修	4
	フレッシュャーズ・セミナー、教養コア科目、技能コア科目（教育・経済・経営・総合文化政策以外）、テーマ別科目から選択。 (1)～5) で修得した科目は除く)		選択	6

※ 1 言葉の技能・英語は、所属する学部（学科）が開講する科目を履修します。詳しくは、所属する学部（学科）の外国語科目履修方法および配置表に関するページを参照してください。（英語スキル I-1、I-2 を除く）

※ 2 第二外国語科目の中から 1 外国語を選択します。

※ 3 第二外国語科目には、履修順序があります。

・「(第二外国語) I (A)」「(第二外国語) I (B)」について、それぞれ前期の単位が修得できた者のみが後期の履修を認められます（日本語は除く）。

・「インテンシブ・(第二外国語)」「(第二外国語) II」あるいは「(第二外国語) 会話 (I)」は、「(第二外国語) I」の必要単位をすべて修得した者のみが履修を認められます。

・「(第二外国語) III」は、「インテンシブ・(第二外国語)」あるいは「(第二外国語) II」の単位を修得した者のみが履修を認められます。

・「(第二外国語) 会話 (II)」は、「(第二外国語) II」あるいは「(第二外国語) 会話 (I)」の単位を修得した者のみが履修を認められます。

※ 4 教育・経済・経営・総合文化政策・社会情報のみ必修です。

○必要単位以上修得した場合は、卒業要件の中の自由選択科目に算入されます。

○第二外国語として修得した単位は、卒業要件の中の自由選択科目に算入されます。

○受講者数の著しく多い科目については、教室の収容人数、教育効果等を考慮して、クラスの分割・抽選などの措置をとることがあります。

○総合文化政策学部生は、履修年次が 3 年次以上の青山キャンパス開講科目を 2 年次に履修できる場合があります。詳細は時間割表等で確認してください。

3. 授業科目配置表

(太字は必修科目)

	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	開 講 キャンパス	備 考		
	フレッシュャーズ・セミナー	2	1	相	1年生のみ		
教養コア科目	(キリスト教理解関連科目) キリスト教概論Ⅰ	2	1	相			
	(人間理解関連科目) 自 己 理 解 (総合科目) 自 己 理 解 (個別科目)	2 2	1 1	相 相	(総合科目)：複数の教員による担当 (個別科目)：一人の教員による担当		
	(社会理解関連科目) 現代社会の諸問題(総合科目) 現代社会の諸問題(個別科目)	2 2	1 1	相 相	(総合科目)：複数の教員による担当 (個別科目)：一人の教員による担当		
	(自然理解関連科目) 科学・技術の視点 (総合科目) 科学・技術の視点 (個別科目)	2 2	1 1	相 相	(総合科目)：複数の教員による担当 (個別科目)：一人の教員による担当		
	(歴史理解関連科目) 歴 史 と 人 間 (総合科目) 歴 史 と 人 間 (個別科目)	2 2	1 1	相 相	(総合科目)：複数の教員による担当 (個別科目)：一人の教員による担当		
	技能コア科目	英 語	英 語 ス キ ル Ⅰ - 1	1	1	相	1年生のみ
			英 語 ス キ ル Ⅰ - 2	1	1	相	1年生のみ
		言葉の技能 第二外国語	(第二外国語)Ⅰ(A)-1	1	1	相	(第二外国語)はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語、韓国語を指します。
			(第二外国語)Ⅰ(A)-2	1	1	相	
			(第二外国語)Ⅰ(B)-1	1	1	相	
(第二外国語)Ⅰ(B)-2			1	1	相		
英 語 (ⅠA)-1			1	1	相	外国人留学生のみ	
英 語 (ⅠA)-2			1	1	相	外国人留学生のみ	
英 語 (ⅠB)-1			1	1	相	外国人留学生のみ	
英 語 (ⅠB)-2			1	1	相	外国人留学生のみ	
日 本 語 Ⅰ(A)			2	1	相	外国人留学生のみ	
日 本 語 Ⅰ(B)			2	1	相	外国人留学生のみ	
身体能の		健康・スポーツ演習	2	1	相	教育・経済・経営・総合文化政策・社会情報のみ必修	
情報能の	情報スキルⅠ	2	1	相			
テーマ別科目	キリスト教理解関連科目(領域A)	キリスト教概論Ⅱ	2	2・3	相・青	理工学部・社会情報学部は2年次他は3年次配置	
		旧約聖書と人間	2	2・3・4	相		
		新約聖書と人間	2	2・3・4	青		
		キリスト教生命倫理	2	3・4	青		
		キリスト教政治倫理	2	3・4	青		
		キリスト教と自然科学	2	3・4	相		
		キリスト教環境倫理	2	2・3・4	相		
		キリスト教音楽	2	3・4	青		
		キリスト教美術	2	3・4	青		
		メソジスト教会史	2	3・4	青		

キリスト教理解関連科目 (領域A)	キリスト教教育	2	3・4		閉講	
	世界の諸宗教	2	2・3・4	相	旧称「比較宗教学」	
	現代神学	2	3・4	青		
	キリスト教と社会福祉	2	3・4		閉講	
	聖書の中の女性たち(旧約)	2	3・4	青	「フェミニズムと聖書」(2008年度)	
	聖書の中の女性たち(新約)	2	2・3・4	相	旧称「聖書の中の女性たち」	
	サービス・ラーニング I	2	2・3・4	相		
	サービス・ラーニング II	2	2・3・4	相		
	人理解関連科目 (領域B)	哲学 A	2	2・3・4	相	
		哲学 B	2	2・3・4	相	
		哲学の諸問題 A	2	3・4	青	
		哲学の諸問題 B	2	3・4	青	
		哲学の諸問題 C	2	3・4	青	
		哲学の諸問題 D	2	3・4	青	
		論理学 A	2	2・3・4	相	
		論理学 B	2	2・3・4	相	
		論理学の諸問題 A	2	3・4	青	
		論理学の諸問題 B	2	3・4	青	
		倫理学 A	2	2・3・4	相	
		倫理学 B	2	2・3・4	相	
		倫理学の諸問題 A	2	3・4	青	
		倫理学の諸問題 B	2	3・4	青	
		西洋倫理思想史 A	2	3・4	青	
		西洋倫理思想史 B	2	3・4	青	
		言語学 A	2	2・3・4	相	
		言語学 B	2	2・3・4	相	
		日本語学 A	2	2・3・4	相	
日本語学 B		2	2・3・4	相		
文学 A		2	2・3・4	相		
文学 B		2	2・3・4	相		
文学史 A		2	3・4	青		
文学史 B		2	3・4	青		
美術 A		2	2・3・4	相		
美術 B		2	2・3・4	相		
美術史 A		2	3・4	青		
美術史 B		2	3・4	青		
音楽 A		2	2・3・4	相		
音楽 B		2	2・3・4	相		
音楽史 A	2	3・4	青			
音楽史 B	2	3・4	青			
文化人類学 A	2	2・3・4	相・青			
文化人類学 B	2	2・3・4	相・青			

テーマ別科目	人間理解関連科目 (領域B)	比較文化 A	2	2・3・4	相	
		比較文化 B	2	2・3・4	相	
		比較文化の諸問題 A	2	3・4	青	
		比較文化の諸問題 B	2	3・4	青	
		心理学 A	2	2・3・4	相	心理学科除く
		心理学 B	2	2・3・4	相	心理学科除く
		教育学 A	2	2・3・4	相	
		教育学 B	2	2・3・4	相	
		平和を考える A	2	3・4	青	
		平和を考える B	2	3・4	青	
		人間関係とコミュニケーションA	2	2・3・4	相	
		人間関係とコミュニケーションB	2	2・3・4	相	
		文化とコミュニケーションA	2	2・3・4	相	国際政治経済学部除く
		文化とコミュニケーションB	2	2・3・4	相	国際政治経済学部除く
	社会理解関連科目 (領域C)	法学(日本国憲法を含む)	4	2・3・4	相・青	法学部除く。 教員免許状取得申請者は、1年次から履修できます。
		日本の法と社会 A	2	3・4	青	
		日本の法と社会 B	2	3・4	青	
		国際政治経済学 A	2	2・3・4	相	
		国際政治経済学 B	2	2・3・4	相	
		国際関係概論 A	2	2・3・4	相	
		国際関係概論 B	2	2・3・4	相	
		社会学 A	2	2・3・4	相・青	
		社会学 B	2	2・3・4	相・青	
		現代社会と教育人間学 A	2	2・3・4	相	
現代社会と教育人間学 B		2	2・3・4	相		
経済学 A		2	2・3・4	相	経済学部除く	
経済学 B		2	2・3・4	相	経済学部除く	
情報社会科学 A		2	2・3・4	相・青		
情報社会科学 B		2	2・3・4	相・青		
情報社会論		2	3・4	青		
社会情報論		2	3・4	青		
人口問題 A		2	2・3・4	相		
人口問題 B		2	2・3・4	相		
フェミニズム A		2	3・4	青		
フェミニズム B	2	3・4	青			
民族問題 A	2	3・4	青			
民族問題 B	2	3・4	青			
マスメディアと社会	2	2・3・4	相			
データサイエンス	2	2・3・4	相			
福祉と人間 A	2	3・4	青			
福祉と人間 B	2	3・4	青			

テ ー マ 別 科 目	社会理解関連科目 (領域C)	国際ビジネス入門 A	2	2・3・4	相	
		国際ビジネス入門 B	2	2・3・4	相	
		感性ビジネス A -ファッション産業のフロンティア-	2	2・3・4	相・青	
		感性ビジネス B -ファッション産業のフロンティア-	2	2・3・4	相・青	
		感性ビジネス C -ファッション・ビジネス戦略論-	2	3・4	青	(財)ファッション産業人材育成機構 (IFI) 寄附講座
		感性ビジネス D -ファッション・ビジネス戦略論-	2	3・4	青	(財)ファッション産業人材育成機構 (IFI) 寄附講座
		パーソナル・マネー・マネジメント入門	2	3・4	青	三井生命寄附講座
		企業のモノづくりと 人づくりのリテラシー	2	2・3・4	相	
		国際ビジネスと海外事情 A	2	3・4	青	
		国際ビジネスと海外事情 B	2	3・4	青	
		グローバリゼーションとWTO	2	3・4	青	
		日本農業とWTO	2	3・4	青	
		環境問題と社会	2	3・4	青	NPO 環境平和持続の会寄附講座
		現代金融の諸問題	2	3・4	青	金融青山会寄附講座
		経済・金融とファイナンス	2	3・4	青	閉講
	ファイナンシャルプランニング入門	2	2・3・4	相・青	(株)近代セールス社寄附講座	
	自然理解関連科目 (領域D)	技術史 A	2	2・3・4	相	
		技術史 B	2	2・3・4	相	
		日常生活の数理	2	2・3・4	相	
		数理科学入門 I	2	2・3・4	相	理工学部・社会情報学部除く 本年度休講
		数理科学入門 II	2	2・3・4	相	理工学部・社会情報学部除く 本年度休講
		数理科学の視点	2	2・3・4	相	
		数理モデル	2	2・3・4	相	本年度休講
		自然科学概論 A	2	2・3・4	相	本年度休講
		自然科学概論 B	2	2・3・4	相	本年度休講
		文化としての科学・技術 A	2	3・4	相・青	
		文化としての科学・技術 B	2	3・4	相・青	
		現代物理	2	2・3・4	相	
		ライフサイエンス	2	2・3・4	相	
		ゲノム	2	2・3・4	相	
		生物と地球環境	2	3・4	青	
		地球環境保全	2	3・4	青	
		バイオテクノロジーと生命倫理	2	3・4	青	
地球観(自然と人の倫理)		2	2・3・4	相	本年度休講	
生命と地球の歴史	2	2・3・4	相	本年度休講		
宇宙科学	2	2・3・4	相			
野鳥の生態	2	2・3・4	相			

テ ー マ 別 科 目	自然理解関連科目目 (領域D)	鳥類と生物多様性	2	2・3・4	相	
		植物生態学	2	2・3・4	相	
		メカワールド	2	2・3・4	相	理工学部除く
		経営管理の技術	2	2・3・4	相	理工学部除く
		先端エレクトロニクス	2	2・3・4	相	
		環境科学 A	2	2・3・4	相	
		環境科学 B	2	2・3・4	相	
		自然地理学 A	2	2・3・4	相	本年度休講
		自然地理学 B	2	2・3・4	相	本年度休講
		科学史	2	2・3・4	相	
		生命と生態系(環境と生物)	2	2・3・4	相	
		生命の連続(遺伝)	2	2・3・4	相	
		かたちの科学	2	2・3・4	相	
		自然史	2	2・3・4	相	
		自然観の変遷	2	2・3・4	相	
	歴史理解関連科目目 (領域E)	青山学院大学の歴史	2	2・3・4	相・青	
		日本社会史 A	2	2・3・4	相	
		日本社会史 B	2	2・3・4	相	
		日本社会史 C	2	3・4	青	
		中国史 A	2	2・3・4	相	
		中国史 B	2	2・3・4	相	
		中国史 C	2	3・4	青	
		ヨーロッパ史 A	2	2・3・4	相	
		ヨーロッパ史 B	2	2・3・4	相	
		ヨーロッパ史 C	2	3・4	青	
		現代史 A	2	2・3・4	相	
		現代史 B	2	2・3・4	相	
		現代史 C	2	2・3・4	相	
		現代史 D	2	2・3・4	相	
		考古学 A	2	2・3・4	相	
	考古学 B	2	2・3・4	相		
	科学思想史 A	2	2・3・4	相		
	科学思想史 B	2	2・3・4	相		
言葉の技能 (領域F)	インテンシブ・(第二外国語) (A)	2	2・3・4	相	(第二外国語) はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語、韓国語を指します。	
	インテンシブ・(第二外国語) (B)	2	2・3・4	相		
	インテンシブ・(第二外国語) (C)	2	2・3・4	相		
	インテンシブ・(第二外国語) (D)	2	2・3・4	相		
	(第二外国語) II(A)	2	2・3・4	相	(第二外国語) はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、スペイン語、中国語を指します。	
	(第二外国語) II(B)	2	2・3・4	相		
	(第二外国語) II(C)	2	2・3・4	相		
	(第二外国語) II(D)	2	2・3・4	相		

テーマ別科目 言葉の技能 (領域F)	(第二外国語) II(E)	2	2・3・4	相	(第二外国語)はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、中国語を指します。
	中国語 II (F)	2	2・3・4	相	
	(第二外国語) II	2	2・3・4	相・青	(第二外国語)はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語、韓国語を指します。
	英語 (IIA)	2	2・3・4	相	外国人留学生のみ
	英語 (IIB)	2	2・3・4	相	外国人留学生のみ
	日本語 II	2	2・3・4	相	外国人留学生のみ
	(第二外国語) III	2	3・4	青	(第二外国語)はドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語、韓国語を指します。
	フランス語 III (A)	2	3・4	青	フランス文学科除く
	フランス語 III (B)	2	3・4	青	フランス文学科除く
	英語 III	2	3・4	青	フランス文学科のみ
	英語 (III)	2	3・4	青	外国人留学生のみ
	日本語 III	2	3・4	青	外国人留学生のみ
	(第二外国語) 会話 (I)	2	2・3・4	相・青	(第二外国語)はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語、韓国語、英語(フランス文学科のみ)を指します。
	(第二外国語) 会話 (II)	2	3・4	青	(第二外国語)はフランス語(フランス文学科除く)、ドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語を指します。
	日本語 (I)A	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (I)B	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (I)C	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (I)D	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (II)A	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (II)B	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (II)C	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (II)D	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (III)A	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (III)B	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (III)C	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (III)D	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (IV)A	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (IV)B	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (IV)C	1	3	青	交換留学生のみ
	日本語 (IV)D	1	3	青	交換留学生のみ
日本語 (V)A	1	3	青	交換留学生のみ	
日本語 (V)B	1	3	青	交換留学生のみ	

テ マ 別 科 目	言葉の技能 (領域F)	日 本 語 (V)C	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 語 (V)D	1	3	青	交換留学生のみ
		日 本 事 情 (I)	2	3	青	交換留学生のみ
		日 本 事 情 (II)	2	3	青	交換留学生のみ
		日 本 事 情 (III)	2	3	青	交換留学生のみ
		日 本 事 情 (IV)	2	3	青	交換留学生のみ
		日 本 事 情 (V)	2	3	青	交換留学生のみ
		アメリカ合衆国の社会と文化A	2	2・3・4	相	
		アメリカ合衆国の社会と文化B	2	2・3・4	相	
		英語圏の社会と文化A	2	2・3・4	相	国際政治経済学部除く
		英語圏の社会と文化B	2	2・3・4	相	
		フランス語圏の社会と文化A	2	2・3・4	相	
		フランス語圏の社会と文化B	2	2・3・4	相	
		フランス語圏の社会と文化C	2	3・4	青	
		ドイツ語圏の社会と文化A	2	2・3・4	相	
		ドイツ語圏の社会と文化B	2	2・3・4	相	
		ドイツ語圏の社会と文化C	2	3・4	青	
		スペイン語圏の社会と文化A	2	2・3・4	相	
		スペイン語圏の社会と文化B	2	2・3・4	相	
		スペイン語圏の社会と文化C	2	3・4	青	
		中国語圏の社会と文化A	2	2・3・4	相	
		中国語圏の社会と文化B	2	2・3・4	相	
		中国語圏の社会と文化C	2	3・4	青	
		ロシア語圏の社会と文化A	2	2・3・4	相	
		ロシア語圏の社会と文化B	2	3・4	青	
		韓国・朝鮮の社会と文化A	2	2・3・4	相	
		韓国・朝鮮の社会と文化B	2	3・4	青	
		イスラム圏の社会と文化A	2	3・4	青	
		イスラム圏の社会と文化B	2	3・4	青	
		日 本 学 A	2	3・4	青	交換留学生・外国人留学生のみ
		日 本 学 B	2	3・4	青	交換留学生・外国人留学生のみ
		English Studies A	2	2・3・4	相	
		English Studies B	2	2・3・4	相	
		English Studies C	2	3・4	青	
English Studies D	2	3・4	青	本年度休講		
English Studies E	2	3・4	青	本年度休講		
ことばの研究A	2	2・3・4	相			
ことばの研究B	2	3・4	青			
少数民族の社会と文化A	2	3・4	青	本年度休講		
少数民族の社会と文化B	2	3・4	青	本年度休講		
民族文化論A	2	2・3・4	相			
民族文化論B	2	2・3・4	相			

テ ー マ 別 科 目	身体 の 技 能 （ 領 域 G）	健 康 医 学	2	2・3・4	相・青	
		身体 の 仕 組 み と 病 気 A	2	2・3・4	相	
		身体 の 仕 組 み と 病 気 B	2	2・3・4	相	
		ス ポ ー ツ 生 理 学	2	2・3・4	相	
		ス ポ ー ツ バ イ オ メ カ ニ ク ス	2	2・3・4	相	
		ス ポ ー ツ 心 理 学	2	2・3・4	相	
		動 き の 人 間 学	2	2・3・4	相	
		医 療 社 会 学	2	2・3・4	相	
		ス ポ ー ツ 運 動 実 習	1	2・3・4	相・青	4回まで重複履修を認めます。 教員免許状取得申請者は、1年次 から履修できます。
		ア ド バ ン ス ト ス ポ ー ツ 実 習	2	2・3・4	相	
	情 報 の 技 能 （ 領 域 H）	プ ロ グ ラ ミ ン グ 基 礎 I	2	2・3・4	相・青	
		プ ロ グ ラ ミ ン グ 基 礎 II	2	2・3・4	相・青	
		情 報 ス キ ル II	2	2・3・4	相	本年度休講
		e ラ ー ニ ン グ 入 門	2	2・3・4	相	
		イ ン ス ト ラ ク シ ョ ナ ル デ ザ イン 入 門	2	2・3・4	相	
		教 育 シ ス テ ム の た め の IT 入 門	2	2・3・4	相	
		e ラ ー ニ ン グ の 法 的 課 題 入 門	2	2・3・4	相	

【3】外国語科目履修方法および配置表

1. 第一外国語 科目履修方法

外国語のクラスは指定制なので指定以外のクラスで履修することはできません。
なお、所要単位を超えて修得した単位は自由選択科目の単位に算入されます。

2. 第一外国語 科目配置表

外国語科目は、まず1・2年次に英語基礎科目として、日本語に加えて英語によるコミュニケーションの大切さを学び、3・4年次に英語融合系科目として、社会情報学における問題について具体的に英語でプレゼンテーションする科目を学びます。また、将来、海外留学や実務においても有効となりうる科目も開講しています。

（1）外国語科目の必要単位 〔 〕内は単位数

必修〔6単位〕

英語基礎科目 イングリッシュコミュニケーションⅠ〔2〕 イングリッシュコミュニケーションⅡ〔2〕

英語融合系科目 イングリッシュプレゼンテーション〔2〕

選択必修〔6単位〕

2～4年次の間に、英語基礎科目・英語融合系科目のうち、必修科目を除いた科目から6単位を選択必修。

外国語科目配置表

（太字は必修）

授業科目		単位	履修年次	備考
英語基礎科目	イングリッシュコミュニケーションⅠ	2	1	
	イングリッシュコミュニケーションⅡ	2	1	
	英語実践演習Ⅰ	2	2・3	検定試験対策Ⅰ（TOEIC®）
	英語実践演習Ⅱ	2	2・3	検定試験対策Ⅱ（TOEIC®）
英語融合系科目	英語実践演習Ⅲ	2	2・3・4	検定試験対策Ⅲ（TOEFL®）
	英語実践演習Ⅳ	2	2・3・4	検定試験対策Ⅳ（TOEFL®）
	イングリッシュプレゼンテーション	2	3	
	意思決定理論と実践	2	3・4	
	ジャーナリズム	2	3・4	
	リーダシップの理論と実践	2	3・4	
	ビジネスライティング	2	3・4	
	論文構成論	2	4	

（2）外国語科目は、下表のように履修順序があります。

1	2
	1を履修し合格した場合のみ履修できます。
イングリッシュコミュニケーションⅠ イングリッシュコミュニケーションⅡ	イングリッシュプレゼンテーション

（3）必修科目および選択必修科目の必要単位を満たしたうえ、さらに外国語選択科目を修得した場合、その単位は自由選択科目に算入されます。

3. 第二外国語

(1) 第二外国語の履修単位

2008年度入学者は、選択（4単位） ※下表参照

第二外国語科目：青山スタンダード科目技能コア科目（言葉の技能）

第二外国語科目

①	②	③	④
	①を合格した場合のみ履修可	①②の科目をすべて合格した場合のみ履修可	③を合格した場合のみ履修可
青山スタンダード科目			
I (A)-1 フランス語 ドイツ語 スペイン語 中国語 ロシア語 韓国語	I (A)-2 フランス語 ドイツ語 スペイン語 中国語 ロシア語 韓国語	II フランス語 ドイツ語 スペイン語 中国語 ロシア語 韓国語	III フランス語 ドイツ語 スペイン語 中国語 ロシア語 韓国語
I (B)-1 フランス語 ドイツ語 スペイン語 中国語 ロシア語 韓国語	I (B)-2 フランス語 ドイツ語 スペイン語 中国語 ロシア語 韓国語	II or 会話（I） フランス語 ドイツ語 スペイン語 中国語 ロシア語 韓国語	会話（II） フランス語 ドイツ語 スペイン語 中国語 ロシア語 韓国語

※上表①の単位が修得できない時、②の科目の履修登録は自動的に削除されます。

【4】 専門科目履修方法および配置表

1. 専門科目履修方法

(1) 学部専門科目の必要単位

必修〔22単位〕

基礎科目〔12単位〕

社会情報入門Ⅰ〔2〕 コミュニケーション基礎〔2〕 基礎数学〔2〕 統計入門〔2〕
 情報科学入門〔2〕 コンピュータ実習〔2〕

共通演習科目〔10単位〕

社会情報演習Ⅰ〔2〕 卒業研究〔8〕

選択必修科目〔60単位〕

基礎科目・共通演習科目〔4単位〕

1～4年次の間に、基礎科目、共通演習科目のうち、必修科目を除く4単位を選択必修。

（「インターンシップ」は除く。）

基盤科目〔32単位〕

1～4年次の間に、社会科学系基盤科目、情報科学系基盤科目のうち、32単位を選択必修。ただし、それぞれの系より、10単位以上修得することを条件とする。

展開科目〔24単位〕

2～4年次の間に、社会科学系、融合系、情報科学系のいずれか二つの系より、それぞれ少なくとも6単位以上修得することを条件とし、24単位を選択必修とする。

(2) 履修登録にあたっての条件等について

学部専門科目においては、履修登録にあたって条件等が示されているものがあります。

必ず、講義内容目次のほか講義内容をよく読んでその条件等を備えているか確認をしてください。

(3) 「社会情報演習Ⅱ」について

2011年度は、プロジェクト形式を前期に、個別研究形式を後期に開講します。

同一科目なので履修を希望する場合は、どちらかを選択することになります。

履修方法、履修登録等については、年度初頭の履修ガイダンスにて説明します。

また、後期の社会情報演習Ⅱは受講者数に制限があります。

選抜の方法、手順については履修ガイダンスにて説明します。

(4) 「社会情報演習Ⅳ」について

社会情報演習Ⅳの履修登録は、年度初頭ではなく、2011年度前期授業期間中に実施する研究室選考の後に行います。

したがって、社会情報演習Ⅳの履修希望者は、年度初頭の履修登録において、2単位分余裕を持って履修登録を行ってください。

なお、研究室選考に漏れた場合には、後期履修変更期間に他の科目を追加履修することができます。履修の変更には制限がありますので、詳細についてはP13を確認してください。

(5) 同一科目の履修について

既に合格した科目を再度履修することはできません。

2. 専門科目配置表

(太字は必修)

科目区分		授業科目	単位	履修年次	備考
専門科目	基礎科目	社会情報入門Ⅰ	2	1	
		社会情報入門Ⅱ	2	1	
		コミュニケーション基礎	2	1	
		基礎数学	2	1	
		統計入門	2	1	
		情報科学入門	2	1	
		コンピュータ実習	2	1	
	共通演習科目	社会情報演習Ⅰ	2	1	
		社会情報演習Ⅱ	2	2	
		社会情報演習Ⅲ	2	3	
		社会情報演習Ⅳ	2	3	
		卒業研究	8	4	
		インターンシップ	2	2・3・4	卒業要件外
	社会科学系基盤科目	社会情報 A	2	2	
		社会情報 B	2	2	
		メディアコミュニケーション	2	2	
		心理学概論	2	2	
		社会心理学	2	2	
		学習科学	2	2	
		経済学入門Ⅰ	2	2	
		経済学入門Ⅱ	2	2	
		経営情報Ⅰ	2	2	
		経営情報Ⅱ	2	2	
		社会統計	2	2	
		社会統計演習	2	2	
		データ分析	2	2	
		データ分析演習	2	2	
		科学技術と社会	2	2	
		プレゼンテーション技法	2	2	
		メディアリテラシ	2	2	
情報科学系基盤科目	社会数理基礎Ⅰ	2	1・2		
	社会数理基礎Ⅱ	2	1・2		
	社会数理基礎Ⅰ演習	1	1・2		
	社会数理基礎Ⅱ演習	1	1・2		
	数理情報基礎Ⅰ	2	1・2		
	数理情報基礎Ⅱ	2	1・2		

情報科学系 基盤科目	数理情報基礎Ⅰ演習	1	1・2			
	数理情報基礎Ⅱ演習	1	1・2			
	数の歴史	2	2・3			
	確率統計	2	2			
	情報科学基礎Ⅰ	2	2			
	情報科学基礎Ⅱ	2	2			
	プログラミング基礎	2	2			
	プログラミング基礎実習	2	2			
	システム分析・設計基礎	2	2			
	システム分析・設計基礎演習	2	2			
	データベース基礎	2	2			
	コンピュータネットワーク基礎	2	2			
	インターネット概論	2	1			
	専 門 科 目	社会科学系 展開科目	環境情報論	2	3・4	
			環境経済論	2	3・4	
経済政策Ⅰ			2	3・4		
応用経済Ⅰ			2	3・4		
応用経済Ⅱ			2	3・4		
公共経済学			2	3・4		
行政学			2	3・4		
社会変動論			2	3・4		
社会調査Ⅰ			2	3・4		
経営分析			2	3・4		
経営戦略論			2	3・4		
数理ファイナンス			2	3・4		
計量経済学Ⅰ			2	3・4		
金融論			2	3・4		
証券市場Ⅰ			2	3・4		
コーポレートファイナンス	2	3・4				
コーポレートガバナンス	2	3・4				
融 合 系 展 開 科 目		認知心理学	2	3・4		
		組織心理学	2	3・4		
		学習心理学	2	3・4		
		心理学演習	2	3・4		
		スポーツと心の科学	2	3・4		
		ナレッジマネジメント	2	3・4		
		コミュニティマネジメント	2	3・4		
		リスクマネジメント	2	3・4		

専 門 科 目	融 合 系 展 開 科 目	情報システム計画	2	3
		インターネット応用	2	3・4
		ウェブ論	2	3・4
		ウェブコンテンツ作成実習	2	3・4
		ウェブラーニング	2	3・4
		ヒューマンインタフェース	2	3・4
		デジタルアーカイビング	2	3・4
		社会情報特別講義 A	2	3・4
		社会情報特別講義 B	2	3・4
	情 報 科 学 系 展 開 科 目	数理解析基礎	2	2・3
		数理解析基礎演習	2	2・3
		現象の数理 I	2	2・3
		現象の数理 I 演習	2	2・3
		離散数学	2	2・3・4
		数理解代数 I	2	3・4
		数理解代数 I 演習	2	3・4
		情報科学応用 I	2	3・4
		情報科学応用 II	2	3・4
		オブジェクト指向プログラミング	2	3・4
		プログラミング応用実習	2	3・4
		マルチメディアプログラミング	2	3・4
		システム分析・設計応用	2	3・4
		データベースシステム応用	2	3・4
		ネットワーク構成実習	2	3・4
	データマイニング	2	3・4	
	情報科学総合演習 I	2	3・4	
	社 会 科 学 系 自 由 科 目	知的財産法	2	3・4
		経済政策 II	2	3・4
		社会調査 II	2	3・4
		計量経済学 II	2	3・4
国際ファイナンス		2	3・4	
証券市場 II		2	3・4	
インベストメント		2	3・4	
デリバティブズ		2	3・4	
経済解析 I		2	3・4	
経済解析 II		2	3・4	
企業経営の経済学		2	3・4	
現代の経済		2	3・4	

専 門 科 目		グローバルビジネス	2	3・4		
		社会情報特別講義 C	2	3・4		
		社会情報特別講義 D	2	3・4		
	融 合 系 自 由 科 目		組織論	2	3・4	
			人間関係論	2	3・4	
			情報倫理	2	3・4	
			文化心理学	2	3・4	
			組織意思決定論	2	3・4	
			プロジェクトマネジメント	2	3・4	
			広報論	2	3・4	
			情報化社会と文化	2	3・4	
			異文化コミュニケーション	2	3・4	
			情報アクセス法	2	3・4	
			コンピュータグラフィックス	2	3・4	
			情報システム開発	2	3・4	
			ソフトウェア開発・保守	2	3・4	
			社会情報特別講義 E	2	3・4	
			社会情報特別講義 F	2	3・4	
	情 報 科 学 系 自 由 科 目		基礎数学入門	2	1	
			数理情報基礎Ⅲ	2	2・3	
			数理情報基礎Ⅳ	2	2・3	
			構造幾何Ⅰ	2	2・3	
			構造幾何Ⅰ演習	2	2・3	
			複素解析	2	3・4	
			複素解析演習	2	3・4	
			現象の数理Ⅱ	2	3・4	
			数理代数Ⅱ	2	3・4	
		構造幾何Ⅱ	2	3・4		
		構造幾何Ⅱ演習	2	3・4		
		集合と位相	2	3・4		
		集合と位相演習	2	3・4		
		情報処理基礎	2	2・3・4		
		情報科学応用Ⅲ	2	3・4		
		情報科学総合演習Ⅱ	2	3・4		
		情報と職業	2	2・3	卒業要件外 ※1	

※1 「情報と職業」は教職申請者のみ履修を認めます。

【5】自由選択科目履修方法

自由選択科目履修方法

下記の（イ）（ロ）（ハ）（ニ）のうちから任意に18単位修得しなければなりません。

（イ） 青山スタンダード科目

（ロ） 外国語科目

（ハ） 自学部専門科目

（ニ） 他学部科目

（卒業に必要な単位を超えて修得した単位は、自由選択科目に算入されます。）

ただし、卒業要件外科目は除きます。

【6】履修ガイドライン

本学部の履修モデルを策定するにあたり、本学部の教育課程を履修することによって、どのような人材が育成されるのかを明らかにしておくことは意味のあることと考え、より具体的に教育課程設計のポイントをまとめます。

まず、社会科学系の視点から、経営・経済の基礎概念の修得と社会活動や経済活動の分析（データ分析や社会調査等）を重視しています。社会科学系の展開プログラムとして、社会政策領域では経済政策（環境資源エネルギー・人口福祉）の担い手の育成に役立つこと、金融ファイナンス領域では金融アナリストの育成を念頭においています。文理融合の本学部だからできることとして、理論と実践を融合した教育課程による情報技術を駆使した大量データの分析や、論理的な取り組みや理論的背景を理解させる教育課程により「なぜ？」に対して説明ができる人材の養成を念頭においています。

人間・社会・情報融合系の視点では、人や社会に関する問題を考える上で必要となる心理や教育に関する基盤の修得、数量的なものに限らず質的な情報の処理能力の修得を目指す教育課程であることを念頭においています。人間・社会・情報融合系の展開プログラムでは、人と人、社会と人のコミュニケーションのあり方や組織の設計、組織における意思決定や知識の有効な活用法、経済活動がもたらす人間社会への問題の発見と解決能力の育成に留意し、本学部だからできることとして、経済活動と直結した人間心理の解明、企業や政策における人的要素の解明、そして知識基盤社会が人間に及ぼすさまざまな影響の解明ができる人材養成が可能となるよう教育課程の設計に配慮しています。

情報科学系の視点では、数理的な基盤や情報を高度に利用するための基盤の修得や、情報システム構築のための幅広い素養を身につけられるように教育課程を設計しています。情報科学系の展開プログラムとしては、高度な情報システム設計能力をもつシステムエンジニアの育成を基本とします。とくに、高度な情報活用による人のコラボレーション構築技術をもつシステムエンジニアの育成、企業活動や政策立案過程を理解したシステムエンジニアの育成、社会ニーズの正確な把握とその問題解決のための的確な判断をおこなう技術と、その反映を実現できるシステムエンジニアの育成を目指すべく教育課程を設計しています。さらに、人や社会に内在する問題を、論理的に解明するだけでなく、分析的あるいはシステム指向の考え方に基づいて捉えることのできる数学・情報教育の担い手の育成も視野に入れます。

上述した教育課程、養成する人材像に対応した本学部の代表的な履修モデルを以下に示します。

【履修モデル 1:社会科学系からの視点】（数理・情報に強い金融アナリストの養成）

【履修モデル 2:人間・社会・情報融合系からの視点】（タフな組織マネージャーの養成）

【履修モデル 3:情報科学系からの視点】（組織に明るい情報システムスペシャリストの養成）

なお、履修モデルでは、卒業に必要な最低の合計単位数 134 単位から青山スタンダード(22 単位)を除いた 112 単位以上を履修するように作成しています。また、科目分類は、(A) 専門基礎科目・共通演習科目（必修）22 単位、(B) 専門基礎科目・共通演習科目（選択必修）4 単位、(C) 専門基盤科目（選択必修）32 単位、(D) 専門展開科目（選択必修）24 単位、(E) 外国語科目（必修・選択必修）12 単位、(F) 自由選択科目（選択）18 単位以上履修、としています。

将来目指す進路にあわせこんな学びを提案できます。

履修モデル 1	数理・情報に強い金融アナリスト	
1－2年次で学ぶ主な科目	3－4年次で学ぶ主な科目	
<p style="text-align: center;">[英語基礎科目]</p> <p>◇ イングリッシュコミュニケーション I・II Academic Listening/Speaking・Reading/Writing</p> <p style="text-align: center;">[専門基礎科目]</p> <p>◇ 社会情報入門 I 学部の基本コンセプトの解説</p> <p>◇ コミュニケーション基礎 レポート作成、文献調査の方法等</p> <p>◇ 基礎数学 社会情報学部で必要とされる数学を初歩から教えます</p> <p>◇ 統計入門 確率分布、統計的推測、検定</p> <p>◇ 情報科学入門 情報、コンピュータの概念、情報の扱い方</p> <p>◇ コンピュータ実習 プログラミング入門</p> <p>◇ 社会情報演習 I 本学部教員全員が行う少人数セミナー</p> <p style="text-align: center;">[基盤科目]</p> <p>◇ 経済学入門 I・II 経済学の両輪であるマクロ、ミクロ経済学</p> <p>◇ 経営情報 I・II 株式会社、企業、市場等の基礎概念</p> <p>◇ データ分析、演習 経済、社会統計の扱い方の修得</p> <p>◇ プレゼンテーション技法 伝達したい内容を効果的に伝えていくための方法を修得</p> <p>◇ 社会数理基礎 I・II 経済学に必要な解析学の基礎</p> <p>◇ プログラミング基礎 Java 言語、手続き型プログラミング、データ構造と関数化</p> <p>◇ 確率統計 金融工学に必要な確率論の基礎、数理統計学</p>	<p style="text-align: center;">[外国語科目]</p> <p>◇ イングリッシュプレゼンテーション 英語での発表の実践</p> <p style="text-align: center;">[展開科目]</p> <p>◇ 応用経済 I・II より高度な経済学のモデル分析</p> <p>◇ 数理ファイナンス 確率過程、ブラックショールズ式等</p> <p>◇ 計量経済学 I 経済理論仮説の検証、経済動向予測等</p> <p>◇ 金融論 金融制度、金融政策（ゼロ金利政策、量的緩和政策）の評価等</p> <p>◇ 国際ファイナンス 国際分散投資、為替ヘッジ等</p> <p>◇ デリバティブズ 先物、オプション、デリバティブズの評価理論</p> <p style="text-align: center;">[共通演習科目]</p> <p>◇ 卒業研究</p>	

履修モデル2	タフな組織マネージャー
<p style="text-align: center;">1－2年次で学ぶ主な科目</p>	<p style="text-align: center;">3－4年次で学ぶ主な科目</p>
<p style="text-align: center;">[英語基礎科目]</p> <p>◇ イングリッシュコミュニケーションⅠ・Ⅱ Academic Listening/Speaking・Reading/Writing</p> <p style="text-align: center;">[専門基礎科目]</p> <p>◇ 社会情報入門Ⅰ 学部の基本コンセプトの解説</p> <p>◇ コミュニケーション基礎 レポート作成、文献調査の方法等</p> <p>◇ 基礎数学 社会情報学部で必要とされる数学を初歩から教えます</p> <p>◇ 統計入門 確率分布、統計的推測、検定</p> <p>◇ 情報科学入門 情報、コンピュータの概念、情報の扱い方</p> <p>◇ コンピュータ実習 プログラミング入門</p> <p>◇ 社会情報演習Ⅰ 本学部教員全員が行う少人数セミナー</p> <p style="text-align: center;">[基盤科目]</p> <p>◇ 心理学概論 社会情報学に必要な心理学の基本概念</p> <p>◇ 学習科学 学習に関する認知科学的研究</p> <p>◇ 社会統計 相関係数、回帰分析、多変量分析等の修得とその現実社会への応用</p> <p>◇ データ分析、演習 経済、社会統計の扱い方の修得</p> <p>◇ プレゼンテーション技法 伝達したい内容を効果的に伝えていくための方法を修得</p> <p>◇ プログラミング基礎 Java 言語、手続き型プログラミング、データ構造と関数化</p>	<p style="text-align: center;">[外国語科目]</p> <p>◇ イングリッシュプレゼンテーション 英語での発表の実践</p> <p>◇ 意思決定理論と実践 英語による Debate（議論）力の養成</p> <p>◇ リーダシップの理論と実践 英語によるリーダーシップの実践</p> <p style="text-align: center;">[展開科目]</p> <p>◇ 経営戦略論 事業戦略（business strategy）の基礎</p> <p>◇ 組織心理学 組織と人の関係を心理学的アプローチから分析</p> <p>◇ リスクマネジメント 伝統的リスク、不確実性リスク、事業機会リスク等</p> <p>◇ 公共経済学 財政、一般会計、財政投融资等</p> <p style="text-align: center;">[共通演習科目]</p> <p>◇ 卒業研究</p>

履修モデル3	組織に明るい情報システムスペシャリスト	
1－2年次で学ぶ主な科目	3－4年次で学ぶ主な科目	
<p style="text-align: center;">【英語基礎科目】</p> <p>◇ イングリッシュコミュニケーションⅠ・Ⅱ Academic Listening/Speaking・Reading/Writing</p> <p style="text-align: center;">【専門基礎科目】</p> <p>◇ 社会情報入門Ⅰ 学部の基本コンセプトの解説</p> <p>◇ コミュニケーション基礎 レポート作成、文献調査の方法等</p> <p>◇ 基礎数学 社会情報学部で必要とされる数学を初歩から教えます</p> <p>◇ 統計入門 確率分布、統計的推測、検定</p> <p>◇ 情報科学入門 情報、コンピュータの概念、情報の扱い方</p> <p>◇ コンピュータ実習 プログラミング入門</p> <p>◇ 社会情報演習Ⅰ 本学部教員全員が行う少人数セミナー</p> <p style="text-align: center;">【基盤科目】</p> <p>◇ 経営情報Ⅰ・Ⅱ 株式会社、企業、市場等の基礎概念</p> <p>◇ 数理情報基礎Ⅰ・Ⅱ 情報科学、社会科学に必要な線形代数の基礎</p> <p>◇ プログラミング基礎 Java 言語、手続き型プログラミング、データ構造と関数化</p> <p>◇ システム分析・設計基礎 構造化技法、オブジェクト指向等ための方法を修得</p> <p>◇ コンピュータネットワーク基礎 通信プロトコル、LAN の基本的な構成</p>	<p style="text-align: center;">【外国語科目】</p> <p>◇ イングリッシュプレゼンテーション 英語での発表の実践</p> <p>◇ ビジネスライティング 英語によるビジネスレポート等の作成</p> <p style="text-align: center;">【自由科目】</p> <p>◇ 知的財産法 特許法や著作権法等</p> <p style="text-align: center;">【展開科目】</p> <p>◇ マルチメディアプログラミング デジタルメディアのデータ構造・処理</p> <p>◇ データベースシステム応用 リレーショナルデータベース管理システム等</p> <p>◇ 経営分析 企業の実態分析、社会的責任の分析等</p> <p>◇ コーポレートファイナンス 投資のリスクとリターン、金融資産の価格決定のメカニズム等</p> <p style="text-align: center;">【共通演習科目】</p> <p>◇ 卒業研究</p>	

C. 他学部科目一覽表

C. 他学部科目一覧表

他学部科目の履修について

他学部科目のうち本学部学生が履修可能な科目の一覧表を以下に掲載します。
履修については下記の点に注意してください。

1. 一覧表は他学部が本学部に対して履修可能としている科目を掲載しています。なお、「担当者氏名」及び「本年度休講」の掲載はしていませんので講義内容および授業時間割表にて確認してください。履修希望科目が講義内容および授業時間割表に掲載されていない場合は本年度休講となっています。
また、年度により一覧表の科目のうち履修を認めないなどの措置をとることがあります。
2. 本学部では入学年度によって他学部科目の卒業要件単位に含まれる条件が異なる場合がありますので、授業要覧で確認のうえ履修してください。

文学部共通科目

授 業 科 目	単位	履修年次	授 業 科 目	単位	履修年次	授 業 科 目	単位	履修年次
芸 術 文 化 論	4	3・4	文 化 財 科 学	4	3・4	日 本 の 思 想	4	2・3・4
東 洋 の 思 想	4	2・3・4	現 代 思 想	4	3・4	日 本 美 術 史	4	3・4
東 洋 美 術 史	4	3・4	西 洋 美 術 史	4	3・4	日 本 文 化 史	4	3・4
東 洋 文 化 史	4	3・4	西 洋 文 化 史	4	3・4	映 像 文 化 論 A	2	3・4
映 像 文 化 論 B	2	3・4	東 洋 音 楽 史	4	3・4	西 洋 音 楽 史	4	3・4
生 命 倫 理 学	4	3・4	詩 論	4	3・4	ギリシャ・ローマ文学	4	3・4
テ ク ス ト 論	4	3・4	物 語 文 学	4	3・4	キ リ ス ト 教 文 学	4	3・4
世界各 地域 の 文 学 A	4	3・4	世界各 地域 の 文 学 B	4	3・4	世界各 地域 の 文 学 C	4	3・4
児 童 文 学	4	3・4	比 較 文 学	4	3・4	言 語 学 概 論	4	3・4
比 較 言 語 学	4	3・4	記 号 論	4	3・4	古 典 ギ リ シ ャ 語 I	4	3・4
古 典 ギ リ シ ャ 語 II	4	3・4	ラ テ ン 語 入 門	4	2・3・4	ラ テ ン 語 I	4	3・4
ラ テ ン 語 II	4	3・4	出 版 ジャ ー ナ リ ズ ム	4	3・4	放 送 ジャ ー ナ リ ズ ム	4	3・4
認 知 言 語 学	4	3・4	精 神 分 析 学 入 門	4	3・4	心 理 言 語 学	4	3・4
イ タ リ ア の 言 語 と 文 化	4	2・3・4	通 訳 ワ ー ク シ ョ ッ プ (1)	2	3・4	通 訳 ワ ー ク シ ョ ッ プ (2)	2	3・4
現 代 社 会 と 文 学 部	2	3・4						

文学部教育学科 (2008年度入学者)

授 業 科 目	単位	履修年次	授 業 科 目	単位	履修年次	授 業 科 目	単位	履修年次
日 本 教 育 史 (人間形成の歴史Ⅰ)	4	1・2	西 洋 教 育 史 (人間形成の歴史Ⅱ)	4	3・4	宗 教 教 育 学	2	2
教 育 哲 学 Ⅰ (人間形成の思想と哲学)	2	3・4	教 育 哲 学 Ⅱ (人間形成の文化と社会)	2	3・4	発 達 と 文 化 Ⅰ (教 育 人 類 学)	2	3・4
発 達 と 文 化 Ⅱ (教 育 現 象 学)	2	3・4	図 書 館 情 報 文 化 論	2	2	比 較 発 達 社 会 学	4	1・2
教 育 社 会 学 概 論	4	1・2	比 較 教 育 学	4	3・4	教 育 行 政 ・ 制 度	4	2
国 際 理 解 教 育	2	3・4	現 代 社 会 と 社 会 教 育 Ⅰ (高 齢 化 社 会 と 教 育)	2	3・4	現 代 社 会 と 社 会 教 育 Ⅱ (青 年 期 の 教 育)	2	3・4
現 代 社 会 と 社 会 教 育 Ⅲ (ジ ェ ン ダ ー と 教 育)	2	3・4	家 庭 教 育	4	2	発 達 文 化 論	2	3・4
発 達 心 理 学	4	1・2	教 育 調 査 ・ 統 計	4	3・4	社 会 教 育 計 画	4	3・4
※1社 会 教 育 演 習	4	3・4	図 書 館 情 報 学 概 論	2	2	図 書 館 シ ス テ ム 経 営 論	2	3・4
図 書 館 シ ス テ ム サ ー ビ ス 論	2	2	図 書 館 情 報 学 特 論	2	3・4	児 童 サ ー ビ ス 論	2	3・4
生 涯 学 習 概 論	4	2	※1生 涯 学 習 演 習	4	3・4	学 校 教 育 学 総 論	4	1・2
初 等 教 育 原 理	4	1・2	教 育 課 程 論	4	3・4	学 校 経 営 ・ 管 理	4	3・4
教 材 開 発 論	2	3・4	学 校 教 育 学 特 論	4	3・4	音 楽 教 材 研 究	2	3・4
図 画 工 作 教 材 研 究	2	3・4	体 育 教 材 研 究	2	3・4	国 語 教 材 研 究	2	3・4
社 会 教 材 研 究	2	3・4	算 数 教 材 研 究	2	3・4	理 科 教 材 研 究	2	3・4
生 活 科 教 材 研 究	2	3・4	家 庭 教 材 研 究	2	3・4	学 校 経 営 と 学 校 図 書 館	2	2
学 習 指 導 と 学 校 図 書 館	2	3・4	読 書 教 育 論	2	3・4	学 校 心 理 学	2	3・4
臨 床 保 育 学	4	3・4	幼 児 教 育 原 理	4	1・2	小 児 保 健 学	4	3・4
小 児 精 神 神 経 学	2	3・4	保 育 方 法 の 研 究	4	3・4	保 育 内 容 総 論	4	3・4
保 育 内 容 研 究 (健 康)	2	3・4	保 育 内 容 研 究 (人 間 関 係)	2	3・4	保 育 内 容 研 究 (環 境)	2	3・4
保 育 内 容 研 究 (こ と ば)	2	3・4	保 育 内 容 研 究 (表 現 A)	2	3・4	保 育 内 容 研 究 (表 現 B)	2	3・4
臨 床 心 理 学 総 論	4	2	人 格 心 理 学	4	3・4	相 談 心 理 学	4	3・4
養 護 教 育	4	1・2	障 害 児 ・ 者 の 心 理 Ⅰ	2	2	障 害 児 ・ 者 の 心 理 Ⅱ	2	3・4
障 害 児 ・ 者 の 教 育	2	3・4	障 害 児 ・ 者 の 福 祉	2	3・4	障 害 児 ・ 者 の 医 学	2	3・4
メ デ ィ ア コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 概 論	2	1・2	認 知 科 学 概 論	2	2	イ ン タ ー フ ェ ー ス 論	2	3・4
知 的 表 現 論	2	3・4	メ デ ィ ア ・ コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 特 論 Ⅰ	2	3・4	メ デ ィ ア ・ コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 特 論 Ⅱ	2	3・4
視 聴 覚 教 育 メ デ ィ ア 論	2	3・4	情 報 メ デ ィ ア 論 Ⅰ	2	2	情 報 メ デ ィ ア 論 Ⅱ	2	3・4
情 報 メ デ ィ ア 特 論	2	3・4	メ デ ィ ア 組 織 法 Ⅰ	2	3・4	メ デ ィ ア 組 織 法 Ⅱ	4	3・4
学 校 図 書 館 メ デ ィ ア	2	3・4	情 報 サ ー ビ ス 論	4	3・4	情 報 検 索 法	4	3・4
情 報 メ デ ィ ア 利 用 論	2	3・4	※2教 育 学 概 論 Ⅱ	2	3・4	※3生 涯 学 習 概 論 Ⅱ	2	3・4
イ ン ス ト ラ ク シ ョ ナ ル デ ザ イ ン 総 論	2	3・4	教 育 シ ス テ ム の た め の IT フ ェ ン ダ メ ン タ ル	2	3・4	コ ン ピ ュ ー タ 利 用 教 育 と 学 習 理 論	2	3・4
コ ン テ ン ツ 開 発 演 習	2	3・4	eラ ー ニ ン グ シ ス テ ム マ ネ ジ メ ン ト 演 習	2	3・4	コ ー ス 実 施 と 学 習 支 援 演 習	2	3・4
オ ン ラ イ ン 調 査 解 析 演 習	2	3・4	協 調 学 習 デ ザ イ ン 演 習	2	3・4	キ リ ス ト 教 学 校 論	2	3・4
聖 書 の 世 界 (旧 約)	2	3・4	聖 書 の 世 界 (新 約)	2	3・4	キ リ ス ト 教 の 教 理	2	3・4
キ リ ス ト 教 と 法 思 想	2	3・4	宗 教 と 社 会	2	3・4	礼 拝 学	2	3・4
キ リ ス ト 教 と 精 神 医 学	2	3・4						

※1：社会教育主事希望者のみ履修可 ※2：学芸員希望者のみ履修可 ※3：司書・社会教育主事・学芸員希望者のみ履修可

他学部科目一覧表

文学部英米文学科（2010年度以降入学者）

授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次
イギリス文学史	4	1・2	イギリス文学概論	4	1・2	イギリス文化概論	4	1・2
アメリカ文学史	4	1・2	アメリカ文学概論	4	1・2	アメリカ文化概論	4	1・2
グローバル文学・文化概論	4	1・2	グローバル文学理論	4	1・2	英語学概論	4	1・2
英語史	4	1・2	英文法	4	1・2	英語教育学概論	4	1・2
イギリス文学特講	4	3・4	イギリス文化特講	4	3・4	アメリカ文学特講	4	3・4
アメリカ文化特講	4	3・4	グローバル文学特講	4	3・4	グローバル文化特講	4	3・4
英語学特講	4	3・4	言語学特講	4	3・4	コミュニケーション特講	4	3・4
英語教育学特講	4	3・4	英詩概論	4	3・4	イギリス事情	4	3・4
アメリカ事情	4	3・4	英語聖書	4	3・4	ビジネスイングリッシュ I	2	3・4
メディアイングリッシュ I	2	3・4	メディアイングリッシュ II	2	3・4			

文学部英米文学科（2009年度以前入学者）

授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次
英国文学史 I	4	1	英国文学史 II	4	1	英語学概論	4	1
米国文学史	4	1	英語史	4	1	英文学概論	4	1
米文学概論	4	1	英文学特講	4	3・4	米文学特講	4	3・4
英語学特講	4	3・4	言語学特講	4	3・4	コミュニケーション特講	4	3・4
英詩概論	4	3・4	英語教授法	4	3・4	イギリス事情	4	3・4
アメリカ事情	4	3・4	英語聖書	4	3・4	ビジネスイングリッシュ I	2	3・4
メディアイングリッシュ I	2	3・4	メディアイングリッシュ II	2	3・4			

文学部フランス文学科（2011年度入学者）

授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次
※1フランス語会話	4	1	フランス文学研究	4	3・4	フランス語学研究	4	3・4
フランス文化研究	4	3・4	エクспリカシオン(A)	4	3・4	エクспリカシオン(B)	4	3・4
コミュニケーション I	4	3・4	コミュニケーション II	4	3・4	エクプレシオン・エクリット II	4	3・4
エクプレシオン・エクリット III	4	3・4	フランス文学特講	4	2・3・4	フランス語学特講	4	2・3・4
フランス文化特講	4	2・3・4	フランス文学演習 I	4	2・3	フランス語学演習 I	4	2・3
フランス文化演習 I	4	2・3	フランス文学演習 II	4	3・4	フランス語学演習 II	4	3・4
フランス文化演習 II	4	3・4	フランス語教授法 I	4	3・4	フランス語教授法 II	4	3・4
フランス語作文	4	2・3・4	フランス語学概論	4	2・3・4	実務フランス語	4	3・4

※1：既修得者用クラスのみ履修可

文学部フランス文学科（2010年度以前入学者）

授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次
講 読 演 習	4	3・4	フランス文学史概説Ⅱ	4	3・4	フランス語学概論	4	3・4
フランス語史	4	3・4	エクスプリカシオン	4	3・4	コミュニケーションⅠ・Ⅱ	8	3・4
コミュニケーションⅢ	4	3・4	フランス語作文Ⅱ	4	3・4	フランス語作文Ⅲ	4	4
時事フランス語	4	3・4	実務フランス語	4	3・4	フランス文学特講	4	3・4
フランス語学特講	4	3・4	フランス文化特講	4	3・4	フランス文学演習	4	3・4
フランス語学演習	4	3・4	フランス文化演習	4	3・4	※1フランス語会話Ⅲ	4	3・4
※2フランス語教授法	4	3・4	※3フランス語教授法Ⅰ	4	3・4	※3フランス語教授法Ⅱ	4	3・4

※1：「フランス語会話Ⅱ」修得者は履修不可

※2：2008年度以前入学者

※3：2009年度入学者

文学部日本文学科

授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次
日本文学史Ⅰ	2	1	日本文学史Ⅱ	2	1	日本文学史Ⅲ	2	2
日本文学史Ⅳ	2	2	古典文学概論	4	1・2	近代文学概論	4	1・2
漢文学概論	4	1・2	日本語学概論	4	1・2	日本語史	4	1・2
日本文学講読〔1〕～〔4〕	4	1・2	漢文学講読	4	1・2	日本語学講読	4	1・2
表象文化論〔1〕～〔3〕	4	3・4	日本文学特講〔1〕～〔12〕	4	3・4	日本文学特講A・B	2	3・4
漢文学特講〔1〕・〔2〕	4	3・4	日本語学特講〔1〕～〔3〕	4	3・4	書 理 論	4	3・4

文学部史学科

授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次
※考古学概説	2	1	史学概論	2	1	人文地理学概論	4	3
古文書学	4	2・3・4	日本史特講	4	2・3・4	東洋史特講	4	2・3・4
西洋史特講	4	2・3・4	考古学特講	4	2・3・4	芸術史特講	4	2・3・4
史学特講A	4	1・2・3・4	史学特講B	4	1・2・3・4	※博物館概論	2	3のみ
※博物館学各論	4	3・4	※博物館実習Ⅰ	2	3のみ	※博物館実習Ⅱ	2	4

※学芸員希望者のみ

他学部科目一覧表

文学部心理学科（2008年度入学者）

授 業 科 目	単位	履修年次	授 業 科 目	単位	履修年次	授 業 科 目	単位	履修年次
基 礎 心 理 学	2	2	心 理 統 計 学 基 礎	4	2	哲 学 的 認 識 論	4	3・4
心 理 統 計 実 習	2	3・4	心 の 哲 学	4	3・4	心 理 学 史	2	3・4
心 理 学 研 究 法	2	3	発 達 心 理 学	4	1・2	生 涯 発 達 心 理 学 I	2	2
生 涯 発 達 心 理 学 II	2	2	知 覚 心 理 学	2	2	認 知 科 学 概 論	2	2
感 情 心 理 学	2	3・4	神 経 心 理 学	2	3・4	人 格 心 理 学	4	3・4
健 康 心 理 学	2	3・4	社 会 心 理 学 I	2	3・4	社 会 心 理 学 II	2	3・4
産 業 心 理 学	2	3・4	広 告 心 理 学	2	3・4	ノ ン バ ー バ ル ・ コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン I	2	3・4
ノ ン バ ー バ ル ・ コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン II	2	3・4	音 楽 心 理 学	2	3	心 理 学 特 講 A	2	3・4
心 理 学 特 講 B	2	3・4	学 校 心 理 学	2	3・4	臨 床 心 理 学	4	2
臨 床 心 理 学 I	2	3・4	臨 床 心 理 学 II	2	3・4	心 理 療 法	4	3・4
精 神 分 析 学	2	3・4	家 族 心 理 学	2	3・4	犯 罪 心 理 学	4	3・4
臨 床 心 理 学 特 講	4	3・4	相 談 心 理 学	4	3・4	音 楽 療 法	2	3・4
音 楽 療 法 演 習	2	3・4	コ ミ ュ ニ テ ィ 心 理 学	2	3・4	臨 床 心 理 実 務 倫 理 論	2	3・4
心 理 面 接 法	4	3・4	精 神 医 学	4	3・4	身 体 医 学	2	3・4
心 身 医 学	2	3・4	薬 理 学	2	3・4	脳 生 理 学	2	3・4
精 神 衛 生	2	3・4	生 涯 発 達 論	2	3・4	母 子 保 健	2	3・4
成 人 ・ 高 齢 者 保 健	2	3・4	精 神 保 健 福 祉	2	3・4	保 健 ・ 医 療 ・ 福 祉 ・ 制 度 論	2	3・4
社 会 保 障 制 度 と 関 連 法 規	2	3・4	障 害 児 ・ 者 の 心 理 I	2	2	障 害 児 ・ 者 の 心 理 II	2	3・4
障 害 児 ・ 者 の 教 育	2	3・4	障 害 児 ・ 者 の 福 祉	2	3・4	障 害 児 ・ 者 の 医 学	2	3・4
学 校 教 育 学 総 論	4	1・2	保 育 内 容 総 論	4	3・4	臨 床 保 育 学	4	3・4
保 育 方 法 の 研 究	4	3・4	生 涯 学 習 概 論	4	2	現 代 社 会 と 社 会 教 育 I (高 齢 化 社 会 と 教 育)	2	3・4
現 代 社 会 と 社 会 教 育 II (青 年 期 の 教 育)	2	3・4	現 代 社 会 と 社 会 教 育 III (ジ ェ ン ダ ー と 教 育)	2	3・4	心 理 学 原 書 講 読 A	2	3・4
心 理 学 原 書 講 読 B	2	3・4						

教育人間科学部教育学科（2009年度以降入学者）

授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次
人 間 形 成 学 総 論	2	1・2	日 本 教 育 史 I	2	1・2	日 本 教 育 史 II	2	1・2
西 洋 教 育 史 I	2	3・4	西 洋 教 育 史 II	2	3・4	教 育 史 特 殊 講 義	2	3・4
宗 教 教 育 学	2	2	発 達 と 文 化 A	2	3・4	発 達 と 文 化 B	2	3・4
教 育 哲 学 A	2	3・4	教 育 哲 学 B	2	3・4	教 育 学 特 論 A	2	3・4
教 育 学 特 論 B	2	3・4	教 育 社 会 学 総 論	2	1・2	比 較 発 達 社 会 学	2	1・2
生 涯 発 達 心 理 学 I	2	1・2	生 涯 発 達 心 理 学 II	2	1・2	キ ャ リ ア 教 育 A	2	2
キ ャ リ ア 教 育 B	2	3・4	家 庭 教 育 A	2	2	家 庭 教 育 B	2	2
比 較 教 育 学	2	3・4	異 文 化 理 解 教 育	2	3・4	老 年 学	2	3・4
教 育 学 特 論 C	2	3・4	教 育 学 特 論 D	2	3・4	社 会 福 祉 概 論	2	2
臨 床 心 理 学 概 論 I	2	2	臨 床 心 理 学 概 論 II	2	2	小 児 精 神 神 経 学	2	3・4
相 談 心 理 学 I	2	3・4	相 談 心 理 学 II	2	3・4	特 別 支 援 教 育	2	3・4
障 害 児 ・ 者 の 心 理 I	2	2	障 害 児 ・ 者 の 心 理 II	2	3・4	障 害 児 ・ 者 の 教 育	2	3・4
障 害 児 ・ 者 の 福 祉	2	3・4	障 害 児 ・ 者 の 医 学	2	3・4	教 育 学 特 論 E	2	3・4
教 育 学 特 論 F	2	3・4	生 涯 学 習 概 論 I	2	2	生 涯 学 習 概 論 II	2	2
高 等 教 育 論 A	2	2	高 等 教 育 論 B	2	3・4	社 会 教 育 計 画 I	2	3・4
社 会 教 育 計 画 II	2	3・4	社 会 教 育 課 題 研 究	4	3・4	高 齢 化 社 会 と 教 育	2	3・4
青 年 期 と 教 育	2	3・4	ジ ェ ン ダ ー と 教 育	2	3・4	青 年 文 化 論	2	3・4
ボ ラ ン テ ィ ア 教 育 論	2	3・4	地 域 ネット ワ ー キ ン グ 論	2	3・4	ス ポ ー ツ ・ レ ク リ ー シ ョ ン 論	2	3・4
教 育 学 特 論 G	2	3・4	教 育 学 特 論 H	2	3・4	教 育 情 報 学 総 論	2	1・2
メ デ ィ ア ・ コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 総 論	2	1・2	認 知 科 学 概 論	2	2	学 校 経 営 と 学 校 図 書 館	2	2
視 聴 覚 教 育 メ デ ィ ア 論	2	3・4	イ ン タ ー フ ェ ー ス 論	2	3・4	知 的 表 現 論	2	3・4
教 材 開 発 論	2	3・4	学 習 指 導 と 学 校 図 書 館	2	3・4	学 校 図 書 館 メ デ ィ ア	2	3・4
情 報 メ デ ィ ア 利 用 論	2	3・4	読 書 教 育 論	2	3・4	学 習 心 理 学 I	2	3・4
学 習 心 理 学 II	2	3・4	社 会 心 理 学 I	2	3・4	社 会 心 理 学 II	2	3・4
教 育 学 特 論 I	2	3・4	教 育 学 特 論 J	2	3・4	図 書 館 情 報 学 概 論	2	2
図 書 館 シ ス テ ム サ ー ビ ス 論	2	2	図 書 館 情 報 文 化 論	2	2	図 書 館 シ ス テ ム 経 営 論	2	3・4
情 報 メ デ ィ ア 論 A	2	2	情 報 メ デ ィ ア 論 B	2	3・4	情 報 メ デ ィ ア 論 C	2	3・4
児 童 サ ー ビ ス 論	2	3・4	メ デ ィ ア 組 織 法 I	2	3・4	メ デ ィ ア 組 織 法 II	2	3・4
メ デ ィ ア 組 織 法 III	2	3・4	情 報 サ ー ビ ス 論 I	2	3・4	情 報 サ ー ビ ス 論 II	2	3・4
情 報 検 索 法 I	2	3・4	情 報 検 索 法 II	2	3・4	図 書 館 情 報 学 実 習	2	4
教 育 学 特 論 K	2	3・4	教 育 学 特 論 L	2	3・4	幼 児 教 育 原 理 A	2	1・2
幼 児 教 育 原 理 B	2	1・2	児 童 福 祉 論	2	1・2	臨 床 保 育 学 A	2	2
臨 床 保 育 学 B	2	2	小 児 保 健 論	2	3・4	教 育 学 特 論 M	2	3・4
教 育 学 特 論 N	2	3・4	小 児 栄 養 学	2	3・4	教 育 学 特 論 O	2	3・4
教 育 学 特 論 P	2	3・4	学 校 教 育 学 総 論	2	1・2	初 等 教 育 原 理 A	2	1・2
初 等 教 育 原 理 B	2	1・2	学 校 心 理 学	2	3・4	教 育 学 特 論 Q	2	3・4
教 育 学 特 論 R	2	3・4	初 等 英 語 概 説 A	2	3・4	初 等 英 語 概 説 B	2	3・4
教 育 学 特 論 S	2	3・4	教 育 学 特 論 T	2	3・4	イ ン ス ト ラ ク シ ョ ナ ル デ ザ イン 総 論	2	3・4
教 育 シ ス テ ム の た め の IT フ ァ ン ダ メ ン タ ル	2	3・4	コ ン ピ ュ ー タ 利 用 教 育 と 学 習 理 論	2	3・4	コ ン テ ン ツ 開 発 演 習	2	3・4
eラーニングシステムマネジメント演習	2	3・4	コ ー ス 実 施 と 学 習 支 援 演 習	2	3・4	オ ン ラ イ ン 調 査 解 析 演 習	2	3・4
協 調 学 習 デ ザ イン 演 習	2	3・4	キ リ ス ト 教 学 校 論	2	3・4	聖 書 の 世 界 (旧 約)	2	3・4
聖 書 の 世 界 (新 約)	2	3・4	キ リ ス ト 教 の 教 理	2	3・4	キ リ ス ト 教 と 法 思 想	2	3・4
宗 教 と 社 会	2	3・4	礼 拝 学	2	3・4	キ リ ス ト 教 メ ン タ ル ヘ ル ス	2	3・4

他学部科目一覧表

教育人間科学部心理学科（2009年度以降入学者）

授 業 科 目	単位	履修年次	授 業 科 目	単位	履修年次	授 業 科 目	単位	履修年次
心理統計実習	2	3・4	哲学的認識論	4	3・4	心の哲学	4	3・4
心理学史	2	3・4	学習心理学	4	3・4	発達心理学	4	1・2
生涯発達心理学Ⅰ	2	2	生涯発達心理学Ⅱ	2	2	生涯発達論	2	3・4
知覚心理学	2	2	認知心理学	4	3・4	音楽心理学	2	3・4
感情心理学	2	3・4	神経心理学	2	3・4	人格心理学	4	3・4
犯罪心理学	4	3・4	社会心理学	4	3・4	社会心理学Ⅰ	2	3・4
社会心理学Ⅱ	2	3・4	産業心理学	2	3・4	広告心理学	2	3・4
ノンバーバル・コミュニケーションⅠ	2	3・4	ノンバーバル・コミュニケーションⅡ	2	3・4	応用社会心理学特講Ⅰ	2	3・4
応用社会心理学特講Ⅱ	2	3・4	応用社会心理学特講Ⅲ	2	3・4	応用社会心理学特講Ⅳ	2	3・4
応用社会心理学特講Ⅴ	2	3・4	応用社会心理学特講Ⅵ	2	3・4	心理学特講A	2	3・4
学校心理学	2	3・4	臨床心理学	4	2	臨床心理学Ⅰ	2	3・4
臨床心理学Ⅱ	2	3・4	障害児・者の心理Ⅰ	2	2	臨床心理学特講	4	3・4
精神分析学	2	3・4	精神医学	4	3・4	音楽療法	2	3・4
相談心理学	4	3・4	家族心理学	2	3・4	健康心理学	2	3・4
コミュニティ心理学	2	3・4	障害児・者の心理Ⅱ	2	3・4	障害児・者の教育	2	3・4
障害児・者の福祉	2	3・4	障害児・者の医学	2	3・4	心理面接法	4	3・4
応用行動分析	2	3・4	身体医学	2	3・4	心身医学	2	3・4
薬理学	2	3・4	脳生理学	2	3・4	精神衛生	2	3・4
母子保健	2	3・4	成人・高齢者保健	2	3・4	精神保健福祉	2	3・4
保健・医療・福祉・制度論	2	3・4	社会保障制度と関連法規	2	3・4	心理学原書講読A	2	3・4
心理学原書講読B	2	3・4						

経済学部経済学科 (2011年度入学者)

授 業 科 目	単位	履修年次	授 業 科 目	単位	履修年次	授 業 科 目	単位	履修年次
統 計 学 概 論 I	2	1・2	統 計 学 概 論 II	2	1・2	国 際 経 済 学 I	2	2
国 際 経 済 学 II	2	2	経 済 学 史 I	2	2	経 済 学 史 II	2	2
応 用 ミ ク ロ 経 済 学 I	2	3・4	応 用 ミ ク ロ 経 済 学 II	2	3・4	応 用 マ ク ロ 経 済 学 I	2	3・4
応 用 マ ク ロ 経 済 学 II	2	3・4	経 済 動 学 I	2	3・4	経 済 動 学 II	2	3・4
オ ー プ ン マ ク ロ 経 済 学 I	2	3・4	オ ー プ ン マ ク ロ 経 済 学 II	2	3・4	経 済 統 計 I	2	3・4
経 済 統 計 II	2	3・4	数 理 統 計 I	2	3・4	数 理 統 計 II	2	3・4
経 済 数 学 I	2	3・4	経 済 数 学 II	2	3・4	社 会 政 策 論 I	2	3・4
社 会 政 策 論 II	2	3・4	社 会 保 障 論 I	2	3・4	社 会 保 障 論 II	2	3・4
産 業 論 (損 害 保 険 業)	2	3・4	産 業 論 (航 空 事 業 I)	2	3・4	産 業 論 (航 空 事 業 II)	2	3・4
産 業 論 (税 法)	2	3・4	労 働 経 済 論 I	2	3・4	労 働 経 済 論 II	2	3・4
産 業 組 織 論 I	2	3・4	産 業 組 織 論 II	2	3・4	国 際 金 融 論 I	2	3・4
国 際 金 融 論 II	2	3・4	日 本 経 済 史 I	2	3・4	日 本 経 済 史 II	2	3・4
欧 米 経 済 史 I	2	3・4	欧 米 経 済 史 II	2	3・4	東 洋 経 済 史 I	2	3・4
東 洋 経 済 史 II	2	3・4	経 済 思 想 史 I	2	3・4	経 済 思 想 史 II	2	3・4
キ リ ス ト 教 社 会 思 想 史 I	2	3・4	キ リ ス ト 教 社 会 思 想 史 II	2	3・4	日 本 経 済 論 I	2	3・4
日 本 経 済 論 II	2	3・4	世 界 経 済 論 I	2	3・4	世 界 経 済 論 II	2	3・4
各 国 経 済 論 A I	2	3・4	各 国 経 済 論 A II	2	3・4	各 国 経 済 論 B I	2	3・4
各 国 経 済 論 B II	2	3・4	交 通 経 済 学 I	2	3・4	交 通 経 済 学 II	2	3・4
農 業 経 済 論 I	2	3・4	農 業 経 済 論 II	2	3・4	簿 記 論	4	1・2
経 営 史 I	2	3・4	経 営 史 II	2	3・4			

他学部科目一覧表

経済学科（2010年度以前入学者）

授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次
統 計 学 概 論	4	1・2	国 際 経 済 学	4	2	経 済 学 史	4	2
応 用 ミ ク ロ 経 済 学	4	3・4	応 用 マ ク ロ 経 済 学	4	3・4	経 済 動 学	4	3・4
オ ー プ ン マ ク ロ 経 済 学	4	3・4	経 済 統 計	4	3・4	数 理 統 計	4	3・4
経 済 数 学 I	2	3・4	経 済 数 学 II	2	3・4	社 会 政 策 論	4	3・4
社 会 保 障 論	4	3・4	産 業 論 (損 害 保 険 業)	2	3・4	産 業 論 (航 空 事 業 I)	2	3・4
産 業 論 (航 空 事 業 II)	2	3・4	産 業 論 (税 法)	2	3・4	労 働 経 済 論	4	3・4
産 業 組 織 論	4	3・4	国 際 金 融 論	4	3・4	日 本 経 済 史	4	3・4
欧 米 経 済 史	4	3・4	東 洋 経 済 史	4	3・4	経 済 思 想 史	4	3・4
キ リ ス ト 教 社 会 思 想 史	4	3・4	日 本 経 済 論	4	3・4	世 界 経 済 論	4	3・4
各 国 経 済 論 A	4	3・4	各 国 経 済 論 B	4	3・4	交 通 経 済 学	4	3・4
農 業 経 済 論	4	3・4	簿 記 論	4	1・2	経 営 史 (2008年度以前入学者)	4	3・4
経 営 史 I (2009年度以降入学者)	2	3・4	経 営 史 II (2009年度以降入学者)	2	3・4			

現代経済デザイン学科（2008年度以降入学者）

授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次
公 的 規 制 の 経 済 学	2	3・4	N P O 論 A	2	3・4	契 約 の 経 済 学	2	3・4
公 共 政 策 の 経 済 学	2	3・4	公 共 選 択 論	2	3・4	N P O 論 B	2	3・4
政 策 と 評 価 A	2	3・4	法 と 経 済 学	2	3・4	都 市 再 生 論	2	3・4
ま ち づ くり と 都 市 計 画	2	3・4	住 宅 と 不 動 産 の 経 済 学	2	3・4	郊 外 地 域 論	2	3・4
地 域 人 口 論	2	3・4	経 済 地 理	2	2	経 済 地 誌	2	2
地 方 財 政 の 経 済 学 I	2	3・4	地 方 財 政 の 経 済 学 II	2	3・4	開 発 経 済 学	2	3・4
政 策 と 評 価 B	2	3・4	地 域 経 済 学 II	2	3・4	都 市 経 済 学	2	3・4

法学部

授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次
裁 判 と 法	2	1・2	行 政 と 法	2	1・2	現 代 弁 護 士 論	2	1・2
企 業 と 法	2	1・2	ア メ リ カ の 社 会 と 法	2	1・2	中 国 の 社 会 と 法	2	1・2
労 働 と 法	2	1・2	市 民 生 活 と 税 法	2	1・2	イ ン タ ー ネ ッ ト と 法	2	1・2
憲 法 I	4	1	憲 法 II	4	2	比 較 憲 法	4	3・4
立 法 学 入 門	2	3・4	憲 法 特 殊 講 義	2	1・2	言 論 法	4	3・4
行 政 法 I	4	3・4	行 政 法 II	4	3・4	行 政 法 III	2	3・4
地 方 自 治 法	4	3・4	教 育 法	4	3・4	税 法	4	3・4
民 法 III	4	2	民 法 IV	4	3・4	民 法 V	4	3・4
借 地 借 家 法	2	3・4	知 的 財 産 法 II	2	3・4	知 的 財 産 法 III	2	3・4
※知 的 財 産 法 IV	2	3・4	登 記 法	4	3・4	不 動 産 法	2	3・4
民 事 訴 訟 法 I	4	3・4	民 事 訴 訟 法 II	4	3・4	破 産 法	4	3・4
刑 法 I	4	2	刑 法 II	4	3・4	刑 事 訴 訟 法	4	3・4
刑 事 政 策	4	3・4	商 法 (手 形 法 ・ 小 切 手 法)	4	3・4	商 法 (保 険 法)	4	3・4
商 法 (海 商 法 ・ 航 空 法)	4	3・4	※企 業 法 務	2	3・4	国 際 労 働 法	2	3・4
金 融 商 品 取 引 法	2	3・4	西 洋 法 史 学	4	3・4	法 思 想 史	4	1・2
法 哲 学	4	3・4	法 社 会 学	4	3・4	ロ ー マ 法	4	3・4
日 本 法 史 学	4	3・4	外 国 法 入 門	4	1・2	イ ギ リ ス 法	4	3・4
ア メ リ カ 法 (刑 法 ・ 刑 事 訴 訟 法)	2	3・4	ド イ ツ 法	4	3・4	フ ラ ン ス 法	4	3・4
ア メ リ カ 法 (憲 法 ・ 司 法 制 度 論 I)	2	3・4	ア メ リ カ 法 (憲 法 ・ 司 法 制 度 論 II)	2	3・4	ア メ リ カ 法 (契 約 法)	2	3・4
ア メ リ カ 法 (財 産 法 ・ 担 保 付 取 引 論)	2	3・4	ア メ リ カ 法 (知 的 財 産 法 論)	2	3・4	ア メ リ カ 法 (不 法 行 為 法 ・ PL 法)	2	3・4
ア メ リ カ 法 (家 族 法)	2	3・4	ア メ リ カ 法 (会 社 法 ・ 商 法)	2	3・4	現 代 法 特 講	2	3・4
E U 法	4	3・4	ラ テ ン ア メ リ カ の 法	2	3・4	中 国 法 I	2	3・4
中 国 法 II	2	3・4	中 国 法 III	2	3・4	中 国 法 IV	2	3・4
国 際 法 II	4	3・4	国 際 私 法 I	4	3・4	国 際 私 法 II	2	3・4
国 際 取 引 法 I	2	3・4	国 際 取 引 法 II	2	3・4	国 際 取 引 法 III	2	3・4
社 会 保 障 法	4	3・4	消 費 者 法	2	3・4	政 治 学 原 論	4	1・2
日 本 政 治 史	4	1・2	政 治 過 程 論	4	3・4	比 較 政 治 学	4	3・4
政 治 思 想 史	4	3・4	西 洋 政 治 史	4	3・4	外 交 史	4	3・4
国 際 関 係 論	4	3・4	N P O と 国 際 公 共 政 策	2	3・4	英 語 文 献 講 読	4	3・4
ド イ ツ 語 文 献 講 読	4	3・4	フ ラ ン ス 語 文 献 講 読	4	3・4	中 国 法 文 献 講 読	2	3・4
国 際 社 会 と 法	2	1・2	銀 行 取 引 法	2	3・4	経 済 と 法	2	3・4
環 境 法	4	3・4	金 融 ・ 商 品 先 物 取 引 法	4	3・4	地 域 社 会 と 法 II	2	1・2
国 際 金 融 法	2	3・4						

※「企業法務（経営学部科目・4単位）」を修得済の者は履修不可

上記科目は、法学部成績評価基準（法学部要覧又は法学部 HP 参照）にのっとり成績評価をいたします。

他学部科目一覧表

経営学部 (2011年度入学者)

授 業 科 目	単位	履修年次	授 業 科 目	単位	履修年次	授 業 科 目	単位	履修年次
事 業 戦 略 論 I	2	2	事 業 戦 略 論 II	2	2	マ ー ケ テ ィ ン グ 論 I	2	2
マ ー ケ テ ィ ン グ 論 II	2	2	財 務 会 計 論 I	2	2	財 務 会 計 論 II	2	2
経 営 デ ー タ 分 析 の た め の 基 礎 解 析 入 門 I	2	1・2	経 営 デ ー タ 分 析 の た め の 基 礎 解 析 入 門 II	2	1・2	経 営 デ ー タ 分 析 の た め の 線 形 代 数 入 門 I	2	1・2
経 営 デ ー タ 分 析 の た め の 線 形 代 数 入 門 II	2	1・2	フ ァ イ ナ ン ス I	2	2	フ ァ イ ナ ン ス II	2	2
経 営 史 I	2	2	経 営 史 II	2	2	企 業 法 務 I	2	3・4
企 業 法 務 II	2	3・4	経 営 戦 略 論 I	2	3・4	経 営 戦 略 論 II	2	3・4
経 営 組 織 論 I	2	2	経 営 組 織 論 II	2	2	組 織 心 理 学 I	2	3・4
組 織 心 理 学 II	2	3・4	人 材 育 成 論 I	2	3・4	人 材 育 成 論 II	2	3・4
人 的 資 源 管 理 論 I	2	3・4	人 的 資 源 管 理 論 II	2	3・4	サ ブ ラ イ チ ェ ー ン ・ マ ネ ジ メ ン ト I	2	3・4
サ ブ ラ イ チ ェ ー ン ・ マ ネ ジ メ ン ト II	2	3・4	事 業 創 造 戦 略 I	2	3・4	事 業 創 造 戦 略 II	2	3・4
経 営 デ ー タ 分 析 基 礎 I	2	1・2	経 営 デ ー タ 分 析 基 礎 II	2	1・2	経 営 デ ー タ 分 析 応 用 I	2	3・4
経 営 デ ー タ 分 析 応 用 II	2	3・4	経 営 情 報 シ ス テ ム 論 I	2	3・4	経 営 情 報 シ ス テ ム 論 II	2	3・4
マ ネ ジ メ ン ト サ イ エ ン ス I	2	3・4	マ ネ ジ メ ン ト サ イ エ ン ス II	2	3・4	産 業 労 働 衛 生 論	2	3・4
医 療 経 営 論	2	3・4	戦 略 ・ マ ネ ジ メ ン ト 特 論 I	2	3・4	戦 略 ・ マ ネ ジ メ ン ト 特 論 II	2	3・4
戦 略 ・ マ ネ ジ メ ン ト 特 論 III	2	3・4	戦 略 ・ マ ネ ジ メ ン ト 特 論 IV	2	3・4	競 争 戦 略 論 I	2	3・4
競 争 戦 略 論 II	2	3・4	組 織 行 動 論 I	2	3・4	組 織 行 動 論 II	2	3・4
中 級 簿 記 I	2	2	中 級 簿 記 II	2	2	企 業 評 価 論 I	2	3・4
企 業 評 価 論 II	2	3・4	実 証 会 計 論 I	2	3・4	実 証 会 計 論 II	2	3・4
会 計 情 報 論 I	2	3・4	会 計 情 報 論 II	2	3・4	財 務 分 析 論 I	2	3・4
財 務 分 析 論 II	2	3・4	制 度 会 計 論 I	2	2	制 度 会 計 論 II	2	2
国 際 会 計 論 I	2	2	国 際 会 計 論 II	2	2	税 務 会 計 論 I	2	3・4
税 務 会 計 論 II	2	3・4	監 査 論 I	2	3・4	監 査 論 II	2	3・4
原 価 計 算 論	2	2	コ ス ト マ ネ ジ メ ン ト	2	3・4	意 思 決 定 会 計 論	2	2
予 算 管 理 論	2	2	戦 略 管 理 会 計 I	2	2	戦 略 管 理 会 計 II	2	2
財 務 管 理 論 I	2	2	財 務 管 理 論 II	2	2	証 券 投 資 論 I	2	2
証 券 投 資 論 II	2	2	会 計 ・ フ ァ イ ナ ン ス 特 論 I	2	3・4	会 計 ・ フ ァ イ ナ ン ス 特 論 II	2	3・4
会 計 ・ フ ァ イ ナ ン ス 特 論 III	2	3・4	会 計 ・ フ ァ イ ナ ン ス 特 論 IV	2	3・4	統 合 マ ー ケ テ ィ ン グ コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン	2	3・4
広 告 論 I	2	2	広 告 論 II	2	2	文 化 創 造 マ ー ケ テ ィ ン グ I	2	2
文 化 創 造 マ ー ケ テ ィ ン グ II	2	2	消 費 者 行 動 論	2	3・4	ブ ラ ン ド 戦 略 論	2	3・4
サ ー ビ ス マ ー ケ テ ィ ン グ	2	3・4	国 際 マ ー ケ テ ィ ン グ	2	3・4	商 業 英 語	4	3・4
商 業 英 語 論	4	3・4	貿 易 商 務 論	4	3・4	損 害 保 険 論	4	3・4
国 際 貿 易 論 I	2	2	国 際 貿 易 論 II	2	2	交 通 論 I	2	3・4
交 通 論 II	2	3・4	金 融 市 場 論 I	2	3・4	金 融 市 場 論 II	2	3・4
市 場 シ ス テ ム 論 I	2	2	市 場 シ ス テ ム 論 II	2	2	リ ス ク ・ マ ネ ジ メ ン ト 論 I	2	3・4
リ ス ク ・ マ ネ ジ メ ン ト 論 II	2	3・4	現 代 日 本 産 業 史	4	3・4	社 会 情 報 ネットワーク論 I	2	3・4
社 会 情 報 ネットワーク論 II	2	3・4	流 通 情 報 シ ス テ ム 論 I	2	2	流 通 情 報 シ ス テ ム 論 II	2	2
流 通 政 策 I	2	3・4	流 通 政 策 II	2	3・4	国 際 経 営 論 I	2	3・4
国 際 経 営 論 II	2	3・4	市 場 シ ス テ ム 特 論 I	2	3・4	市 場 シ ス テ ム 特 論 II	2	3・4
市 場 シ ス テ ム 特 論 III	2	3・4	市 場 シ ス テ ム 特 論 IV	2	3・4	イ ギ リ ス 文 化 論 I	2	3・4
イ ギ リ ス 文 化 論 II	2	3・4	英 語 圏 社 会 ・ 文 化 研 究 I	2	3・4	英 語 圏 社 会 ・ 文 化 研 究 II	2	3・4
ユ グ ヤ 文 化 と ビ ジ ネ ス I	2	3・4	ユ グ ヤ 文 化 と ビ ジ ネ ス II	2	3・4	韓 国 の 経 営 文 化 I	2	3・4
韓 国 の 経 営 文 化 II	2	3・4	ア メ リ カ 文 化 論 I	2	3・4	ア メ リ カ 文 化 論 II	2	3・4
世 界 の 言 語 文 化 I	2	3・4	世 界 の 言 語 文 化 II	2	3・4	経 済 原 論	4	2
金 融 組 織 論	4	3・4	民 法 I	4	3・4	民 法 II	4	3・4
商 法 I	4	3・4	商 法 II	4	3・4	経 済 法	4	3・4
労 働 法	4	3・4	国 際 法	4	3・4			

経営学科 (2009・2010年度入学者)

授 業 科 目	単位	配置年次	授 業 科 目	単位	配置年次	授 業 科 目	単位	配置年次
事業戦略論 I	2	2	事業戦略論 II	2	2	マーケティング論	4	2
財務会計論	4	2	経営データ分析のための基礎解析入門 I	2	1・2	経営データ分析のための基礎解析入門 II	2	1・2
経営データ分析のための線形代数入門 I	2	1・2	経営データ分析のための線形代数入門 II	2	1・2	ファイナンス I	2	2
ファイナンス II	2	2	経営史 I	2	3・4	経営史 II	2	3・4
企業法務 I	2	3・4	企業法務 II	2	3・4	経営戦略論 I	2	3・4
経営戦略論 II	2	3・4	経営組織論 I	2	3・4	経営組織論 II	2	3・4
組織心理学 I	2	3・4	組織心理学 II	2	3・4	人材育成論 I	2	3・4
人材育成論 II	2	3・4	人的資源管理論 I	2	3・4	人的資源管理論 II	2	3・4
サプライチェーン・マネジメント I	2	3・4	サプライチェーン・マネジメント II	2	3・4	事業創造戦略 I	2	3・4
事業創造戦略 II	2	3・4	経営データ分析基礎 I	2	1・2	経営データ分析基礎 II	2	1・2
経営データ分析応用 I	2	3・4	経営データ分析応用 II	2	3・4	経営情報システム論 I	2	3・4
経営情報システム論 II	2	3・4	マネジメントサイエンス I	2	3・4	マネジメントサイエンス II	2	3・4
産業労働衛生論	2	3・4	医療経営論	2	3・4	戦略・マネジメント特論 I	2	3・4
戦略・マネジメント特論 II	2	3・4	戦略・マネジメント特論 III	2	3・4	戦略・マネジメント特論 IV	2	3・4
簿記論 II	4	3・4	企業評価論 I	2	3・4	企業評価論 II	2	3・4
実証会計論 I	2	3・4	実証会計論 II	2	3・4	会計情報論 I	2	3・4
会計情報論 II	2	3・4	財務分析論 I	2	3・4	財務分析論 II	2	3・4
制度会計論 I	2	3・4	制度会計論 II	2	3・4	国際会計論 I	2	3・4
国際会計論 II	2	3・4	税務会計論 I	2	3・4	税務会計論 II	2	3・4
監査論 I	2	3・4	監査論 II	2	3・4	原価計算論	2	3・4
コストマネジメント	2	3・4	意思決定会計論	2	3・4	予算管理論	2	3・4
戦略管理会計 I	2	3・4	戦略管理会計 II	2	3・4	財務管理論 I	2	3・4
財務管理論 II	2	3・4	証券投資論 I	2	3・4	証券投資論 II	2	3・4
会計・ファイナンス特論 I	2	3・4	会計・ファイナンス特論 II	2	3・4	会計・ファイナンス特論 III	2	3・4
会計・ファイナンス特論 IV	2	3・4	競争戦略論 I	2	3・4	競争戦略論 II	2	3・4
組織行動論 I	2	3・4	組織行動論 II	2	3・4	統合マーケティングコミュニケーション	2	3・4
広告論	4	3・4	文化創造マーケティング I	2	3・4	文化創造マーケティング II	2	3・4
消費者行動論	2	3・4	ブランド戦略論	2	3・4	マーケティングチャンネル	2	3・4
サービスマーケティング	2	3・4	国際マーケティング	2	3・4	商業英語	4	3・4
商業英語論	4	3・4	貿易商務論	4	3・4	損害保険論	4	3・4
国際貿易論 I	2	3・4	国際貿易論 II	2	3・4	交通論	4	3・4
金融市場論 I	2	3・4	金融市場論 II	2	3・4	市場システム論 I	2	3・4
市場システム論 II	2	3・4	リスク・マネジメント論 I	2	3・4	リスク・マネジメント論 II	2	3・4
現代日本産業史	4	3・4	社会情報ネットワーク論 I	2	3・4	社会情報ネットワーク論 II	2	3・4
流通情報システム論 I	2	3・4	流通情報システム論 II	2	3・4	流通政策 I	2	3・4
流通政策 II	2	3・4	市場システム特論 I	2	3・4	市場システム特論 II	2	3・4
市場システム特論 III	2	3・4	市場システム特論 IV	2	3・4	国際経営論 I	2	3・4
国際経営論 II	2	3・4	イギリス文化論 I	2	3・4	イギリス文化論 II	2	3・4
英語圏社会・文化研究 I	2	3・4	英語圏社会・文化研究 II	2	3・4	ユダヤ文化とビジネス I	2	3・4
ユダヤ文化とビジネス II	2	3・4	韓国の経営文化 I	2	3・4	韓国の経営文化 II	2	3・4
アメリカ文化論 I	2	3・4	アメリカ文化論 II	2	3・4	世界の言語文化 I	2	3・4
世界の言語文化 II	2	3・4	経済原論	4	2	経済政策論	4	3・4
財政学	4	3・4	経済史概論	4	2	日本経済論	4	3・4
国際経済学	4	2	地域経済学	4	3・4	産業組織論	4	3・4
金融論	4	2	金融組織論	4	3・4	民法 I	4	3・4
民法 II	4	3・4	商法 I	4	3・4	商法 II	4	3・4
経済法	4	3・4	労働法	4	3・4	国際法	4	3・4

他学部科目一覽表

経営学部（2008年度入学者）

授 業 科 目	単位	配置年次	授 業 科 目	単位	配置年次	授 業 科 目	単位	配置年次
経営データ分析入門Ⅰ	4	1・2	経営データ分析入門Ⅱ	4	1・2	経営データ分析Ⅰ	4	1・2
現代企業論	4	2	マーケティング論	4	2	財務会計論	4	2
企業法務	4	3・4	事業創造戦略	4	3・4	経営組織論	4	3・4
人的資源管理論	4	3・4	事業戦略評価	4	3・4	サプライチェーン・マネジメント	4	3・4
財務管理論	4	3・4	投資行動論	4	3・4	経営データ分析Ⅱ	4	3・4
経営情報システム論	4	3・4	インフォメーションマネジメントⅠ	4	3・4	インフォメーションマネジメントⅡ	4	3・4
マネジメントサイエンスⅠ	2	3・4	マネジメントサイエンスⅡ	2	3・4	文化産業マーケティング論Ⅰ	2	3・4
文化産業マーケティング論Ⅱ	2	3・4	消費者行動論	2	3・4	製品戦略論	2	3・4
マーケティングチャンネル論	2	3・4	総合マーケティング コミュニケーション論	2	3・4	サービスマーケティング論	2	3・4
国際マーケティング論	2	3・4	市場システム論	4	3・4	金融市場論	4	3・4
交通論	4	3・4	国際貿易論	4	3・4	貿易商務論	4	3・4
商業英語論	4	3・4	流通政策	4	3・4	簿記論Ⅱ	4	3・4
原価計算論	2	3・4	連結会計論	2	3・4	制度会計論	2	3・4
会計監査論	4	3・4	税務会計論	4	3・4	国際会計論	4	3・4
意思決定会計論	2	3・4	予算管理論	2	3・4	原価管理論	2	3・4
会計情報論	4	3・4	財務分析論	4	3・4	経営学特殊講義Ⅰ (人材育成論Ⅰ)	2	3・4
経営学特殊講義Ⅱ (人材育成論Ⅱ)	2	3・4	商学特殊講義Ⅰ (マーケティング・プロフェッショナル実践Ⅰ)	2	3・4	商学特殊講義Ⅱ (マーケティング・プロフェッショナル実践Ⅱ)	2	3・4
会計学特殊講義Ⅰ (企業評価論Ⅰ)	2	3・4	会計学特殊講義Ⅱ (企業評価論Ⅱ)	2	3・4	会計学特殊講義Ⅲ (国際会計論)	2	3・4
会計学特殊講義Ⅳ (会計学文献研究)	2	3・4	企業と社会	2	3・4	技術と経営	2	3・4
経営組織と個人	2	3・4	経営と文化	2	3・4	経営と法	2	3・4
経済原論	4	2	財政学	4	3・4	経済史概論	4	2
日本経済論	4	3・4	国際経済学	4	2	地域経済学	4	3・4
産業組織論	4	3・4	民法Ⅰ	4	3・4	民法Ⅱ	4	3・4
商法Ⅰ	4	3・4	商法Ⅱ	4	3・4	経済法	4	3・4
労働法	4	3・4	国際法	4	3・4			

国際政治経済学部

国際政治経済学部は、学科科目 B 群科目の履修を他学部の学生に認めています。ただし、以下の一覧に掲載する科目については、履修を認めていません。

授 業 科 目	授 業 科 目	授 業 科 目
国際政治学特殊講義Ⅲ	国際経済学特殊講義Ⅲ	外国書（フランス語）講読Ⅰ・Ⅱ
外国書（ドイツ語）講読Ⅰ・Ⅱ	外国書（スペイン語）講読Ⅰ・Ⅱ	外国書（中国語）講読Ⅰ・Ⅱ
外国書（ロシア語）講読Ⅰ・Ⅱ	インターンシップ	演習ⅠA・ⅠB
演習Ⅰ・Ⅱ	通訳の理論と実践Ⅰ・Ⅱ	翻訳の理論と実践Ⅰ・Ⅱ
国際ビジネス・コミュニケーション(Ⅰ)・(Ⅱ)	アンケート・社会調査の方法	言語の普遍性
情報と組織の経済学Ⅰ	日本経済と証券ビジネス	民法概論Ⅰ・Ⅱ
国際私法Ⅰ・Ⅱ	財政学	簿記論Ⅰ・Ⅱ
広告コミュニケーション論	国際取引法	インターネットと法*
紛争解決と法	インターカルチュラル・コミュニケーション	国際コミュニケーション特殊講義(海外研修)
国連研究Ⅱ	コミュニケーション研究法の全体像	イギリス文化論
文化とコミュニケーションⅠ・Ⅱ	パブリック・リレーションズ	
また、以下の科目は、社会情報学部開講科目と同一名称科目もしくは、類似科目のため履修を許可しない		
計量経済学Ⅰ	計量経済学Ⅱ	数理ファイナンスⅠ
数理ファイナンスⅡ	コーポレートファイナンスⅠ	コーポレートファイナンスⅡ
経営情報Ⅰ	経営情報Ⅱ	情報倫理学

※ 2011年度入学者は、簿記論ⅡA・ⅡBについても履修を認めていません。

他学部科目一覧表

総合文化政策学部

授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次	授 業 科 目	単 位	履 修 年 次
経済分析(1ミクロ)	2	3・4	経済分析(2マクロ)	2	3・4	社会調査法 I	2	3・4
公共社会論	2	3・4	金融概論	2	3・4	行政学概論	2	3・4
国際関係	2	3・4	公共政策論	2	3・4	憲法概論	2	3・4
民法概論	2	3・4	行政法概論	2	3・4	著作権法	2	3・4
国際政治学概論	2	3・4	経済発展論	2	3・4	国際平和論	2	3・4
経済政策概論	2	3・4	公共経済学概論	2	3・4	文化経済学	2	3・4
文化行政法	2	3・4	文化産業概論	2	3・4	観光産業論	2	3・4
消費経済論	2	3・4	日本経済概論	2	3・4	社会福祉論	2	3・4
キリスト教福祉論	2	3・4	マーケティング概論	2	3・4	会計学	2	3・4
サービスマーケティング概論	2	3・4	地域のマーケティング	2	3・4	消費文化論	2	3・4
経営戦略概論	2	3・4	組織論入門	2	3・4	人的資源管理概論	2	3・4
経営情報論	2	3・4	管理会計概論	2	3・4	経営分析論	2	3・4
非営利会計論	2	3・4	プロジェクトマネジメント論	2	3・4	ビジネスプロセスマネジメント論	2	3・4
プロジェクトファイナンス	2	3・4	マーケティング戦略論	2	3・4	ブランド戦略論	2	3・4
公共経営論	2	3・4	文化財保護法	2	3・4	プロジェクトプロデュース論	2	3・4
世界経済概論	2	3・4	社会調査論 I	2	3・4	社会調査論 II	2	3・4
統計学	2	3・4	文化人類学概論	2	3・4	日本文化の歴史	2	3・4
異文化間コミュニケーション論	2	3・4	表象文化概論	2	3・4	社会分析学	2	3・4
宗教史	2	3・4	経済史(1)	2	3・4	経済史(2)	2	3・4
社会思想史	2	3・4	経済と文明	2	3・4	比較文明論	2	3・4
地域文化論(1)	2	3・4	地域文化論(2)	2	3・4	地域文化論(3)	2	3・4
地域文化論(4)	2	3・4	宗教文化概論	2	3・4	宗教社会学	2	3・4
比較宗教論	2	3・4	ネットワーク社会と文化	2	3・4	文化遺産論	2	3・4
都市文化論	2	3・4	経営文化論	2	3・4	文化と精神分析	2	3・4
現代経済史	2	3・4	現代日本文化論	2	3・4	近代哲学史	2	3・4
論理学	2	3・4	公共哲学概論	2	3・4	認識論	2	3・4
存在論	2	3・4	倫理学入門	2	3・4	象徴記号論	2	3・4
情報環境論(1)	2	3・4	情報環境論(2)	2	3・4	メディアリテラシー	2	3・4
宗教哲学	2	3・4	社会倫理	2	3・4	日本思想史概論	2	3・4
現代哲学	2	3・4	現代思潮	2	3・4	現代の神学	2	3・4
認知哲学	2	3・4	環境美学	2	3・4	芸術哲学	2	3・4
情報工学	2	3・4	社会調査法 II	2	3・4	社会統計学	2	3・4
社会調査実習	4	3・4	ダイレクトマーケティング論	2	3・4	ベンチャービジネス起業論	2	3・4

理工学部

授 業 科 目	単 位	配 置 年 次	授 業 科 目	単 位	配 置 年 次	授 業 科 目	単 位	配 置 年 次
現代物理学概論	2	2・3・4	現代化学概論	2	2・3・4	一般電気工学	2	2・3・4
社会と経営システム工学	2	2・3・4						

V. 授業について

1. 授業

授業時間

各キャンパスの授業時間は、次のとおりです。

	青山キャンパス (文学部心理学科夜間主コース・第二部を含む)	相模原キャンパス
第1時限	9:00~10:30	9:00~10:30
礼 拝	10:30~11:00	10:30~11:00
第2時限	11:00~12:30	11:00~12:30
昼休み	12:30~13:10	12:30~13:10
第3時限	13:10~14:40	13:10~14:40
第4時限	14:45~16:15	14:55~16:25
第5時限	16:20~17:50	16:40~18:10
第6時限	(月・水・木・土) 18:00~19:30 (火・金) 18:00~19:25	/
礼拝・課外活動	(火) 礼拝 (金) 課外活動 19:30~20:00	
第7時限	(月・水・木・土) 19:40~21:10 (火・金) 20:05~21:30	

相模原キャンパス

2011年度相模原キャンパス授業時間割は原則5時限で実施予定です。しかし、学科目配置上5時限で実施できないことが起きた場合のみ6時限目に配置いたします。

なお、6時限目は現在の5時限終了後15分休憩後より開始いたします。

青山キャンパス

青山キャンパス第一部の授業時間割は原則1~5時限で配置しておりますが、学科目配置の都合により6時限にも配置することがあります。なお、6時限は第二部の授業時間と同様に18:00より開始いたします。

また、特別な行事のときに授業時間が変更となることがあります。日程については「I. 学事暦等」を参照してください。

授業教室

授業教室については、別冊子『授業時間割表』に掲載されています。授業教室が変更になる場合は、随時「学生ポータル」で伝達しますので、毎日必ず確認してください。建物の配置については『授業時間割表』巻末に掲載されている「大学建物配置図」を参照してください。

休 講

授業が休講になる場合は、主に「学生ポータル」で伝達します。

休講情報がなく、授業開始から30分以上経過しても担当教員が来ず、連絡もない場合は、学務担当窓口(巻末参照)に問い合わせ、指示を受けてください(学生共通細則第7条参照)。

補 講

休講となった授業に対し、補講を行う場合があります。補講日は、前期・後期とも、定期試験開始前にそれぞれ数日間設けられています。日程については、「I. 学事暦等」を参照してください。詳細は「学生ポータル」などで伝達しますので、必ず確認してください。また、補講期間以外にも補講を行う場合もあります。担当者が直接教室で発表するか、または「学生ポータル」などで発表しますので、随時確認してください。

授業の欠席について

本学では、特定の理由による欠席を認める「公欠制度」は設けておりません。ケガ・病気・忌引きなどで授業を欠席した場合は、次回の授業時に直接担当教員に申し出て、指示を受けてください。なお、長期にわたる欠席の場合は、学務担当窓口（巻末参照）に相談してください。

2. 大学からの伝達

本学では、大学から学生のみなさんへの通知や連絡は、主に「学生ポータル」と「掲示」によって行います。

「学生ポータル」を学内で利用する場合は学生証が必要ですので、必ず携帯してください。また、利用方法については、冊子『学生ポータル利用案内』を参照してください。

「掲示板」の設置場所については次のとおりです。

青山キャンパス	8号館と9号館の間（1階）
相模原キャンパス	E棟とF棟の間（外階段下通路内）

「学生ポータル」「掲示板」では、授業・試験など学生生活に直接関係のある事項が随時伝達されています。情報を確認しなかったことにより、後になって不利益を被ることのないよう、十分注意してください。また、電話による問い合わせには一切応じられませんので、質問などがある場合は直接窓口に来室してください。

3. 緊急時の「授業の取り扱い」および「伝達手段」について

事故、災害などにより通常利用している交通機関の運行が停止した場合の授業の取扱いは次のとおりとします。

下記いずれの場合も大学からの情報伝達手段で確認してください。

1. 通常利用している交通機関運休時における対応

- (1) 代替交通機関を利用して登校が可能と判断できた場合には、危険な状況でない限り、極力、登校するよう努めてください。
- (2) 代替交通機関の利用ができず登校できなかった場合には、学務担当窓口（巻末参照）に用意されている「交通機関不通による授業欠席届」に、交通機関などが発行した遅延証明書、事故証明書などを添えて授業担当者に提出して欠席分の学習補填の指示を受けてください。

上記1.で休講などの情報

携帯電話 <http://mobile.jm.aoyama.ac.jp>

2. 台風の接近時などの対応

台風の接近などによる被害が予想される場合には、休講などの特別措置がとられることがあります。

3. 大規模地震の発生が予想されるときへの対応

- (1) 大規模地震対策特別措置法による「地震防災対策強化地域判定会」の招集が報道された時点で休校措置がとられます。
- (2) 警戒宣言が解除され、または「判定会」が解散されたときは、休校を解き、平常授業に戻ります。

上記 2.3.

テレドーム 0180-993171 (青山学院大学用番号)

Web <http://www.aoyama.ac.jp>

(緊急の情報がない場合、テレドームは呼び出し音のみになります)

ただしこのサービスについては、利用可能な電話と、利用できない電話があります。

利用可能な電話

- ① 一般電話
- ② 携帯電話…NTT docomo、au、SoftBank

利用できない電話

携帯電話…NTT docomo を除くプリペイド式携帯、PHS、
列車公衆電話、「050」から始まる IP 電話、NTT の「ひかり電話」、
一部のケーブルテレビ電話、海外からの国際電話

緊急時には、原則として「学生ポータル」では情報提供されません。

4. 新型インフルエンザに対する本学の対応について

2009年より全国的に新型インフルエンザ「インフルエンザ A 型 (H1N1)」が流行し、本学院においても、感染した学生、生徒等が多数確認されています。

現段階では、教育研究活動および課外活動を平常どおり行う予定でありますが、今後、青山学院の園児・児童・生徒・学生および教職員における新型インフルエンザの感染状況により、各学校において状況等を判断し、学校ごとに休校等の措置を講じる場合がありますので、青山学院公式ウェブサイトの最新情報にご注意ください。

なお、「新型インフルエンザ (H5N1)」に対する本学の対応については引き続き以下の通りとなります。

新聞等の発表では、各都道府県内で1人でも新型インフルエンザ感染患者が発生した場合はその都道府県内の幼稚園から大学までの全ての教育施設が一斉休校となっていますが、青山学院としては、**国内で1人でも発生が認められた場合は幼稚園から大学までを完全休校**とします(休校の期間は1ヵ月以上の長期にわたる可能性があります)。休校の開始と解除に関しましては、学生・生徒・保護者等に青山学院ホームページや学内一斉配信メール(学生ポータル等)、緊急連絡網、文書等でお知らせいたしますが、厚生労働大臣によるフェーズ4B(ヒト-ヒト感染発生)の宣言が行われた時点で登校を控えてください。

新型インフルエンザの休校情報は発生次第、テレドームで確認できます。

◇テレドーム 0180-993171

Ⅵ. 試験・レポートについて

授業科目の履修状況を評価し単位を認定するため、試験が行われます。試験は、筆記のほかに、科目によっては、論文、レポート、口述試験、実技テスト、その他担当者の指定する方法で行われることもあります。

試験は、受験資格のある学生のみ受験できます。

受験資格は、以下のとおりです。

- ① 受験する授業科目を履修登録していること
- ② 学費を納入済みであること

なお、学期を通じ欠席の多い学生は、その科目の受験資格を失うことがあります（学生共通細則第7条参照）。

1. 試験の種別

定期試験

前期末、後期末に期間を定めて実施する試験を定期試験といいます。

試験時間割は、試験開始日の約2週間前に「学生ポータル」で発表します（情報は変更される場合もあるので、随時確認してください）。試験実施教室や時間割は通常授業時と異なります。

また、不測の事態によって試験が延期される場合もあるので、試験の有無にかかわらず、定期試験期間最終日まで予定（旅行など）を入れないでください。

平常試験

定期試験期間以外の、平常の授業時間に行う試験を平常試験といいます。この場合、担当者によって実施日その他の詳細が決定され、担当者が直接教室で発表するか、または「学生ポータル」で発表します（情報は変更される場合もあるので、随時確認してください）。

レポート

レポートは、提出先によって2種類あります。

【学務担当窓口提出レポート】

おおむね定期試験の前後に受付が行われます。詳細は「学生ポータル」で発表します（情報は変更される場合もあるので、随時確認してください）。

テーマ、枚数、提出期限などを確認し、必ず指定された期間（時間）内に提出してください。指定された期間内であれば、当該授業科目開講キャンパスに限らず、どちらのキャンパスでも受け付けますが、締切時間はキャンパスで異なりますのでよく確認してください。

提出後の内容変更および指定された期間以外の提出は認めません。

このレポートを提出するときは、以下の点に注意してください。

- ① 用紙は指定されたものを使用してください。
- ② 必ず大学所定の表紙をつけて綴じてください。
- ③ 表紙には、整理番号その他、記入事項のすべてを「学生ポータル」で確認の上、ボールペンまたはペンで記入してください。鉛筆書きは受け付けません。
- ④ 窓口に持参する際は、表紙記入・ホチキス留めなどをすべて完了し、作成が完了した状態にしておいてください。窓口での表紙記入・ホチキス留めはできません。
- ⑤ 提出した際に受領印の押印された「レポート受領証（学生保存）」を受け取り、成績が発表されるまで各自保管しておいてください。後日、提示を求められる場合があります。

【担当者提出レポート】

情報は担当者が直接教室で発表するか、または「学生ポータル」で発表します（情報は変更される場合もあるので、随時確認してください）。テーマ、用紙、枚数、提出期限、提出方法など、すべて担当者の指示に従ってください。

提出先として学務グループ設置あるいは学務部教務課の提出ボックスを指定される場合がありますが、このレポートは担当者提出レポートとして扱います。

追試験

定期試験を、病気、その他やむを得ない理由によって受験できなかった学生に対して行われる試験を追試験といいます。受験資格は厳密に定められており、自己の不注意によって受験できなかった場合、および、公的な証明書のない場合は、追試験を受けることはできません。

資格および申請方法などについては後述の「3. 追試験」を参照してください。なお、出席日数不足など、担当者の判断によって追試験の受験が認められない場合があります。

2. 定期試験の受験 定期試験時間

定期試験時間帯は以下のとおりです。授業時間帯とは異なるので注意してください。

相模原キャンパスでは定期試験科目配置上、5時限で実施できないことが起きた場合のみ6時限目に配置します。なお、6時限目は18時10分より開始します。

試験時間は原則として60分です（理工学部・社会情報学部専門科目のみ最長85分の場合があります）。

	青山キャンパス (文学部心理学科夜間主コース・第二部を含む)	相模原キャンパス
第1時限	9:40 ~ 10:40	9:30 ~ 10:30
第2時限	11:00 ~ 12:00	11:10 ~ 12:10
第3時限	13:00 ~ 14:00	13:10 ~ 14:10
第4時限	14:30 ~ 15:30	14:50 ~ 15:50
第5時限	16:00 ~ 17:00	16:30 ~ 17:30
第6時限	18:20 ~ 19:20	/
第7時限	19:40 ~ 20:40	

受験上の注意

受験上の注意は以下の通りです。あらかじめよく読んでおいてください。

試験教室で配布される受験票は、試験を受けた証拠になりますので学年・クラス番号等、正確に記入してください。答案用紙の学年・クラス番号を正しく記入しない場合、担当教員の成績報告に支障をきたすことがあります。また指定されたクラス・試験教室で必ず受験してください。

受験上の注意

1. 監督者の指示に従うこと。
2. 机の空いている限り、一机一名で着席すること。
3. 机上等に書き込みがある場合は、開始前に申し出ること。
4. 学生証はケースから出し、通路側の机の上に置くこと。※注
5. 以下の行為は、不正行為に該当するので充分留意すること。
 - ① 受験資格のない者の受験（代人も含む）。
 - ② 答案の交換及び他人の答案を盗み見ること。
 - ③ カンニングペーパー（縮小コピー）等の準備および使用。
 - ④ 答案用紙を提出せずに試験場から退室すること。
 - ⑤ 机の中にノート、コピー、文献等を開いたまま置くこと。
 - ⑥ 所持品やかばん、透明ファイルケース等の中身が見える形のまま、身の回りに置くこと。
6. 机には、許可された文献類および筆記用具以外は置かないこと。
なお、筆箱・ペンケース等も置いてはならない。

7. 携帯電話等の電子機器類の電源を切り、かばん等に入れておくこと。
(携帯電話は時計として使用できない)
8. 試験終了前に退室する場合は、他の受験者の妨げにならないよう留意すること。
9. 不正行為は恥ずべき行為であり大学として厳重に対処する。

※注 学生証を提示しない学生は受験できません。

- ・試験開始後20分以上の遅刻者は受験できません。また試験開始後30分を経過するまで退室できません。
- ・試験当日学生証を忘れた場合、相模原キャンパスでは学務グループ、青山キャンパスでは学務部教務課で学生カードを受け取り受験してください。学生カードの使用については以下の点に注意してください。
 - a. 学生カードは、試験受験以外には一切利用できません。
 - b. 学生カードは発行日に限り記載者本人のみ有効です。使用後は自己の責任において適切に処分してください。

不正行為

不正行為を行った学生は、以下に示す『試験における不正行為者処分規則』が適用され、単位を修得することができません。科目によっては4年間で卒業することが不可能になります。

青山学院規則集『試験における不正行為者処分規則』より抜粋

第3条 不正行為者の処分内容は、学則に基づく懲戒処分（訓告、停学、退学）とするほか不正行為を行った授業科目、当該授業科目を含む数科目または全授業科目の履修届を無効とする。

第4条 不正行為者の氏名および処分は学内に掲示し、本人および保証人へ通知する。

不正行為とは、『試験における不正行為者処分規則施行細則』第2条に定められた、以下の行為をいいます。

- ① 代人として受験することまたは代人に受験させること。
- ② 答案を交換すること。
- ③ カンニング・ペーパーおよびそれに準ずるもの（メモ類）の用意またはそれらを使用すること。
- ④ カンニング・ペーパーおよびそれに準ずるもの（メモ類）を廻し見すること。
- ⑤ 使用が許可されていない文献等を使用すること。
- ⑥ 使用が許可されている文献等を貸借すること。
- ⑦ 所持品、身体、机、壁等に解答およびそれに類するものを書き込むこと。
- ⑧ 答案を写させること、または写しとること。
- ⑨ 他人の答案を盗み見ること。
- ⑩ 声、動作等で解答を伝達すること、または伝達を受けること。
- ⑪ 受験資格のない者が受験すること。
- ⑫ 他人の学生証を使用して受験すること。
- ⑬ 偽名または故意により無記名答案を提出すること。
- ⑭ 答案を提出しないこと。
- ⑮ 監督者の指示や注意に従わないこと。
- ⑯ その他上記各号に類すると認められる行為。

3. 追試験

申請資格

定期試験を病気、その他やむを得ない理由によって受験できなかった学生のみ申請することができます。

以下の場合には追試験の対象とはなりません。

- ① 自己の不注意（時間割の見間違い・変更情報の見落としなど）によって受験できなかった場合

- ② 公共交通機関以外を利用した場合の、天候や交通事故などによる道路の渋滞、車両の故障を理由とする遅刻・欠席の場合
- ③ 平常試験（定期試験以外の試験を指す）の場合
- ④ 定期試験を受験した場合

申請方法

申請の日程、追試験日程については、定期試験前に「学生ポータル」で発表します。

追試験の受験を希望する学生は、**直接、授業科目の開講キャンパスの学務担当窓口**（巻末参照）で、**定められた期間に申請してください**。当該授業科目開講キャンパス以外の学務担当窓口では申請できません。

申請時には、当該試験の受験が不可能であったことを証明する公的な書類を持参してください。公的な書類は、**学生氏名、定期試験を受験できなかった日時、理由、証明者名の記載および証明者印のあるもの**に限ります。**コピーは不可です**。申請後「追試験願」用紙を交付しますので、その場で記入し、持参した書類とともに提出してください。なお、受験料は無料です。

欠席理由と、それを示す証明書は次のとおりです。

理 由	証 明 書
病気	医師の診断書（通院・入院・安静期間などの記載のあるもの）
忌引（両親、兄弟姉妹、祖父母、配偶者、子供） ※法事は忌引に含めない	死亡に関する公的証明書および保証人などによる続柄の証明（要押印） または、 葬儀に参列したことを示す会葬礼状（日付が明記されているもの） および保証人などによる続柄・参列の証明（要押印）
就職試験	就職試験の受験を証明するもの（受験票では不可）
災害（台風、地震、水害、火災など）	官公庁による被災証明書
交通関係（遅延）	交通機関などの証明書（通学路線に限る。遅延当日必ず学務担当窓口で指示を受けること）
教育実習	教育実習参加証明書（教職課程課・学務グループにて発行）
科目の時限重複	定期試験実施前に学務担当窓口で指示を受けること

上記以外の理由または、公的な証明書が無い場合については、事前に「**追試験受験資格審査**」を受けてください。審査で認められた場合のみ申請することができます。

追試験時間・採点

原則として60分で実施し、答案は100点満点で採点されます。

Ⅶ. 成績評価について

成績評価

学業成績は、授業科目ごとに行う試験（筆記試験、レポート、論文、口述試験、実技テスト、その他担当者の指定する方法）によって評価されます。

本学の成績は100点法によって評価されます。60点以上が合格とされ、所定の単位が与えられます。

成績証明書および成績通知書には AA、A、B、C の表記が用いられます。ただし、「情報スキル I」および指定の海外研修については、所定の単位が与えられた場合、成績証明書には「RR」、成績通知書には「合格」と表示されます。

実点数範囲	学生への成績通知	成績証明書の記載
100～90	AA	AA
89～80	A	A
79～70	B	B
69～60	C	C
59以下または不合格	XX	表示せず
欠席	X	表示せず
「情報スキル I」、海外研修等による単位修得	合格	RR

G.P.A.

2009年度以降のカリキュラム適用学生については、成績通知書に「G.P.A.」の数値を表示しています。G.P.A. (Grade Point Average) とは、学生の履修登録科目の1単位あたりの評点平均値を指します。これは、欧米で広く用いられている世界標準的な成績評価方法で、本学では給付奨学金や学業奨励賞の候補者選出、学位授与式の総代選出、本学大学院進学などの際に活用されています。

履修した科目には、A、B、C、XX などの成績が与えられます。これらの評価を数値化して1単位ごとの平均を算出したものが G.P.A. です。

本学では、各評価に与えられる評点は次のとおりです。

本学評価	評点
AA	4.0
A	3.0
B	2.0
C	1.0
XX(不合格)	0.0
X (欠席)	0.0

上記の評点を次の計算式に当てはめて G.P.A. を算出します。

$$G.P.A. = \frac{(AA \text{ の単位数} \times 4 + A \text{ の単位数} \times 3 + B \text{ の単位数} \times 2 + C \text{ の単位数} \times 1)}{(AA \text{ の単位数} + A \text{ の単位数} + B \text{ の単位数} + C \text{ の単位数} + XX \text{ の単位数} + X \text{ の単位数})}$$

※理工・社会情報学部は、教職課程科目を G.P.A. 算出の対象外とします。

※「情報スキル I」は、G.P.A. 算出の対象外とします。

成績通知

学生の成績評価は、3月上旬および9月中旬に学生ポータルメニュー「成績通知書」にてお知らせします。学外 PC から閲覧する場合は、あらかじめ学内で Secure Matrix パスワードの登録を済ませておく必要があります。(詳細は、学生ポータルメニュー「学外から成績通知書を閲覧する手順」を参照してください。) 成績通知書は各自で印刷し、修得した科目とその評価を確認してください。

成績調査

成績評価に疑問がある場合は、「成績調査」を申請することができます。これは、科目担当者に対して、安易に再考・変更を求めるものではありません。成績に疑問を持つ**明確な根拠がある場合にのみ**申請してください。

大学が指定する調査期間中に、成績通知書持参のうえ所属キャンパスの学務担当窓口（巻末参照）へ申し出てください。調査期間は、「学生ポータル」でお知らせします。

電話での問い合わせ、期間外の申し出には一切応じません。

Ⅷ. 進級および卒業について

進 級	<p>進級については、所属する学部で条件が異なるので、「Ⅳ. 学部履修要項」の各学部、学科の進級条件の項を参照してください。進級するには、1年間をとおして在学することが必要です。</p> <p>休学をして復学した場合は、休学前と同一学年になります。</p>
卒 業	<p>(1) 本学に4年以上在学し(休学期間を除く)、各学部で定められた、卒業に必要な単位を修得した者は、卒業が認められ学士の学位が授与されます。</p> <p>(2) 卒業発表は3月上旬に行います。卒業の可否は必ず本人が確認してください。電話による問い合わせには一切応じておりません。</p>
9 月 卒 業	<p>4年生で留年した場合、不足する科目や単位数により、次年度の前期で単位を修得し、卒業要件単位を満たすことができれば、願い出によって9月に卒業できる制度があります。</p> <p>(1) 希望者は、学務担当窓口(巻末参照)で相談し、「9月卒業希望届」を定められた期間に提出してください。</p> <p>(2) 期限を過ぎてからの提出は、一切認められません。</p> <p>(3) 学費については、本学の財務部資金グループにお問い合わせください。</p>
卒業延期制度	<p>4年次に在学する学生が卒業要件を満たし、具体的な勉学継続計画、国家試験受験等明確な理由、目的を有したうえで、在学期間を延長して学修継続を希望する場合、卒業の延期を認めて学修継続の機会を与える制度です。</p> <p>(1) 希望者は、学務担当窓口(巻末参照)で相談し、「卒業延期許可願」、「学修計画書」、「誓約書・保証書」を定められた期間に提出してください。</p> <p>(2) 期限を過ぎてからの提出は、一切認められません。</p> <p>(3) 学費については、本学の財務部資金グループにお問い合わせください。</p>

Ⅸ. 学籍について

		内 容	取扱・問い合わせ窓口											
修業年限		本学の教育課程を修了するために必要な最低修業年限は、4年です。	学則第35条参照											
在学年限		① 本学に在学できる期間は、休学期間を除き8年です。 ② 2年次編入学生、2年次転部または転学部・転学科生の在学年限は6年です。 ③ 3年次編入学生、3年次転部または転学部・転学科生の在学年限は4年です。 ④ 再入学者の在学年限は、退学以前を加えて8年です。 ⑤ 編入学、転部または転学部・転学科をした再入学者の在学年限は、退学以前を加え、編入学、転部または転学部・転学科生の在学年限を越えることはできません。	学則第36条参照											
休 学	休学期間	① 休学期間は、通年(1年間)、前期、後期の3種類があり、1年または1学期ごとに更新しなければなりません。 ② 休学期間は連続2年までとしますが、特にやむを得ない場合は、審議をしたうえで、連続して3年まで認めることがあります。 ③ 休学期間は通算して3年を超えることはできません。 ④ 休学期間は在学期間に算入しません。	学則第29・36条参照											
	休学をするには	病気その他やむを得ない理由で休学しようとする学生は、以下の手続きを行い、教授会の承認を得なければなりません。 ① 「休学願」(大学所定用紙)(保証人連署)の提出 ② 学生証の提示 ③ 休学費の納入 ④ 「理由書(書式は任意)」休学期間が通算であっても連続であっても、2年を超えてさらに休学を願い出る場合のみ提出 ※休学は原級(元の学年)にとどめるので、通年または半期休学をした場合、進級することができません。進級するには、4月から翌年3月まで1年間とおして在学することが必要ですのでご注意ください。	⇒学務担当窓口 (巻末参照) 学則第28条参照											
	休学願の提出期限	「休学願」の提出期限は次のとおりです。 <table border="1" data-bbox="263 1249 880 1438"> <thead> <tr> <th></th> <th>休学期間</th> <th>提出期限</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>通年休学</td> <td>4月1日～翌年3月31日</td> <td>6月末日</td> </tr> <tr> <td>前期休学</td> <td>4月1日～9月30日</td> <td>6月末日</td> </tr> <tr> <td>後期休学</td> <td>10月1日～翌年3月31日</td> <td>12月末日</td> </tr> </tbody> </table>		休学期間	提出期限	通年休学	4月1日～翌年3月31日	6月末日	前期休学	4月1日～9月30日	6月末日	後期休学	10月1日～翌年3月31日	12月末日
	休学期間	提出期限												
通年休学	4月1日～翌年3月31日	6月末日												
前期休学	4月1日～9月30日	6月末日												
後期休学	10月1日～翌年3月31日	12月末日												
	休学費の納入	休学の願い出の手続きと同時に、下記のとおり、休学期間終了までの学費を完納しなくてはなりません。 ① 通年休学の場合……授業料年額の1/2相当額 ② 1学期間休学の場合…授業料年額の3/4相当額および諸費	⇒財務部資金グループ (青山キャンパス) 学則 別記学費納付に関する取扱い8参照											
復 学	復学をするには	休学者が復学を希望する場合、大学所定の「復学願」を提出し、教授会の承認を経て復学することができます。休学期間満了の約2ヶ月前に、学務部教務課(相模原キャンパスは学務グループ)から次期の復学・休学の継続などについての問い合わせをします。なお、復学が承認された場合の年次は、休学の種類にかかわらず、休学前と同一年次となります。	⇒学務担当窓口 (巻末参照) 学則第30条参照											

		内 容	取扱・問い合わせ窓口
退 学	退学の期日	退学の期日は、学費の納付期間によって異なります。前期分まで納付している場合は9月30日付、後期分まで納付している場合は3月31日付となります。	学則 別記学費納付に関する 取扱い10参照
	退学をするには	病気その他やむを得ない事情で退学を希望する場合は、以下の手続きを行い、教授会の承認を得なければなりません。 ① 「退学願」(大学所定用紙)(保証人連署)の提出 ② 学生証の提出 ③ 退学期日を含む学期までの学費の納入	⇒学務担当窓口 (巻末参照) 学則第32条参照
再入学		退学した後に再入学を願い出た場合、事情を審査のうえ相当年次に再入学を許可することがあります。願い出をするためには以下のような条件があります。 ① 再入学の願い出ができる期間は、原則として退学した日から2年以内とし、「再入学願」は1月中旬～1月末日(要問い合わせ)の間に学務担当窓口へ提出してください。 ② 再入学できる時期は、学年の初めとします。	⇒学務担当窓口 (巻末参照) 学則第27条参照
二重学籍	二の重学止籍	本学学生は、他大学および本学他学部または他学科と併せて在学することはできません。	学則第27条の2参照
除籍	籍	学費を期限内に納入しない、履修登録をしない、などの場合は修学の意思がないものとして除籍され、本学学生としての身分を失うこととなります。なお、除籍者に対しては、以後、在学中の修得単位・成績の証明などは一切行いません。また、再入学の資格も失うこととなります。	学則第34条参照
転部・転学部・転学科	転部とは	同一学部(学科)内で昼間部または第二部に移ることで、転部を願い出た場合には、選考の上、当該学部学科への転部を許可することがあります。許可された場合、転部届の提出が必要となります。	⇒学務担当窓口 (巻末参照)
	転学部とは	文学部、教育人間科学部、文学部第二部、法学部、国際政治経済学部へ学部を移ることで、転学部を願い出た場合には、選考の上、当該学部への転学部を許可することがあります。許可された場合、転学部届の提出が必要となります。	学則第26条参照 (詳細については、広報入試センター(青山キャンパス)から、10月初旬発行予定の「試験要項」を確認してください。)
	転学科とは	同一学部内で学科を移ることで、文学部の学生で転学科を願い出た場合には、選考の上、文学部および文学部第二部の他学科への転学科を許可することがあります。また、教育人間科学部の学生が転学科を願い出た場合には、選考の上、教育人間科学部の他学科への転学科を許可することがあります。許可された場合、転学科届の提出が必要となります。	

X. 教職課程（教員免許状・各種資格）について

1. 本学で取得できる 教育職員免許状

〔取得できる免許状の種類・
教科（学部・学科別）〕

本学で取得できる学部・学科別の免許状の種類・教科は次のとおりです。

（2009年度以降入学者）

学 部	学 科	免 許 状 の 種 類 ・ 教 科
文学部	英米文学科	中 学 校教諭1種免許状（英語） 高等学校教諭1種免許状（英語）
	フランス文学科	中 学 校教諭1種免許状（フランス語） 高等学校教諭1種免許状（フランス語）
	日本文学科	中 学 校教諭1種免許状（国語） 高等学校教諭1種免許状（国語）
	史学科	中 学 校教諭1種免許状（社会） 高等学校教諭1種免許状（地理歴史）
教育人間科学部	教育学科	幼 稚 園教諭1種免許状 小 学 校教諭1種免許状 中 学 校教諭1種免許状（国語・社会・英語） 高等学校教諭1種免許状 （国語・地理歴史・公民・英語）
経済学部	経済学科	中 学 校教諭1種免許状（社会） 高等学校教諭1種免許状（地理歴史※1・公民）
法学部	法学科	中 学 校教諭1種免許状（社会） 高等学校教諭1種免許状（公民）
経営学部	経営学科	高等学校教諭1種免許状（商業）※2
理工学部	物理・数学科	中 学 校教諭1種免許状（理科・数学） 高等学校教諭1種免許状（理科・数学）
	化学・生命科学科	中 学 校教諭1種免許状（理科） 高等学校教諭1種免許状（理科）
	電気電子工学科	高等学校教諭1種免許状（工業）
	機械創造工学科	高等学校教諭1種免許状（工業）
	経営システム工学科	高等学校教諭1種免許状（情報）
	情報テクノロジー学科	高等学校教諭1種免許状（情報）
社会情報学部	社会情報学科	中 学 校教諭1種免許状（数学） 高等学校教諭1種免許状（数学・情報）
文学部第二部	英米文学科	中 学 校教諭1種免許状（英語）※1 高等学校教諭1種免許状（英語）※1

※1 2009年度・2010年度入学者のみ

※2 2009年度入学者のみ。

(2005～2008年度入学者)

学 部	学 科	免 許 状 の 種 類 ・ 教 科
文学部	教育学科	幼稚園教諭1種免許状 小学校教諭1種免許状 中学校教諭1種免許状 (国語・社会・英語) 高等学校教諭1種免許状 (国語・地理歴史・公民・英語)
	英米文学科	中学校教諭1種免許状 (英語) 高等学校教諭1種免許状 (英語)
	フランス文学科	中学校教諭1種免許状 (フランス語) 高等学校教諭1種免許状 (フランス語)
	日本文学科	中学校教諭1種免許状 (国語) 高等学校教諭1種免許状 (国語)
	史学科	中学校教諭1種免許状 (社会) 高等学校教諭1種免許状 (地理歴史)
経済学部	経済学科	中学校教諭1種免許状 (社会) 高等学校教諭1種免許状 (地理歴史・公民)
法学部	法学科	中学校教諭1種免許状 (社会) 高等学校教諭1種免許状 (公民)
経営学部	経営学科	高等学校教諭1種免許状 (商業)
理工学部	物理・数理学科	中学校教諭1種免許状 (理科・数学) 高等学校教諭1種免許状 (理科・数学)
	化学・生命科学科	中学校教諭1種免許状 (理科) 高等学校教諭1種免許状 (理科)
	電気電子工学科	高等学校教諭1種免許状 (工業)
	機械創造工学科	高等学校教諭1種免許状 (工業)
	経営システム工学科	高等学校教諭1種免許状 (情報)
	情報テクノロジー学科	高等学校教諭1種免許状 (情報)
文学部第二部	教育学科	幼稚園教諭1種免許状 小学校教諭1種免許状 中学校教諭1種免許状 (国語・社会) 高等学校教諭1種免許状 (国語・地理歴史・公民)
	英米文学科	中学校教諭1種免許状 (英語) 高等学校教諭1種免許状 (英語)
経済学部第二部	経済学科	中学校教諭1種免許状 (社会) 高等学校教諭1種免許状 (地理歴史・公民)
経営学部第二部	経営学科	高等学校教諭1種免許状 (商業)

(2004年度以前入学者は、入学年度の「教職課程履修の手引」を参照してください。)

2. 教員免許状の 取得希望申請に ついて

2006年度以降入学者 の申請方法

教員免許状の取得を希望する者は、入学年度適用の『教職課程履修の手引』を熟読の上、前期履修登録期間に Web の履修登録画面から「教職・各種資格申請」の画面を開き、登録を行ってください。

この申請は、毎年度前期履修登録期間に必ず行うものであり、在学中における申請内容の変更・取消、またはその有無にかかわらず、教職履修申請継続の意思を持っている場合には、毎年度申請を更新してください。申請内容は毎年度末にクリアされます。

2005年度以前入学者 の申請方法

教員免許状の取得を希望する者は、入学年度適用の『教職課程履修の手引』を熟読の上、Web の履修登録画面から「教職・各種資格申請」の画面を開き、登録を行ってください。

なお、この申請は、変更・取消がない限り在学期間中に一度行えばよく、毎年再申請する必要はありません。

3. 教職課程料の 納入について

2006年度以降入学者の 教職課程料の納入方法

教員免許状の申請登録 (Web) をすると、申請した年度ごとに後期学費納入時に教職課程料を納入することになります。たとえ教職課程科目の履修登録をしなくても、教員免許状の申請登録によって教職課程料が後期学費に加算されますので、各自の責任において免許教科を確認し、熟考の上申請をしてください。また、申請登録 (Web) の取消しは、前期履修登録期間内しか行えません。なお、一旦納入された教職課程料は、いかなる理由があっても返還しません。

※学費を前期納付時に一括納付した者については、教職課程料の納付時期は9月となります。

2005年度以前入学者の 教職課程料の納入方法

教員免許状の申請登録をすると、後期学費納入時に教職課程料を納入することになります。たとえ教職課程科目の履修登録をしなくても、教員免許状の申請登録によって教職課程料が後期学費に加算されますので、各自の責任において免許教科を確認し、熟考の上申請をしてください。また、申請を取り消す場合には、最初に申請を行った年度に限り、前期履修登録期間内に Web で修正 (取消) を行えば、教職課程料は徴収されません。教職課程料は在学中に一度納入すればよく、毎年徴収されることはありません。また、一旦納入された教職課程料は、いかなる理由があっても返還しません。

4. 教職課程履修について

履修上の注意

教職課程の履修は、1年次の年度初頭に開催される**教職課程オリエンテーション**で配付される入学年度適用の『**教職課程履修の手引**』に従ってください。また、履修方法・科目名称の変更などについては、年度初頭に開催される2年次生対象**教職課程オリエンテーション**と3年次生および4年次生対象**教育実習説明会**で資料を配付しますので、必ず確認してください。

教職課程関係の**オリエンテーション・説明会**および**手続**などで、主なものは「**10. 教育職員免許状・各種資格取得計画予定表**」のとおりです（学年については、基準となる学年を記載しています）。これらの日程の詳細については、『**学年初頭行事**』（学生ポータル、授業要覧等に掲載）、教職課程掲示板で確認してください。

オリエンテーション・説明会に欠席したり、指定期間内に**介護等体験登録・教育実習予備登録・教員免許状大学一括申請**などの手続を行わなかった場合、卒業時までには教員免許状を取得できない事態に陥ることがありますので、遺漏のないよう自己管理してください。

履修順序のある教職課程科目

教員免許状取得のための科目には、次ページ以下のとおり「**履修順序**」が定められたものがあります。詳細については、『**教職課程履修の手引**』の該当する学部・学科別の免許教科の項を併せて参照してください。

また、学部・学科別の取得可能な教員免許状の校種・教科は、「**1. 本学で取得できる教育職員免許状**」の表のとおりです。

〔教員免許状取得に必要な科目の履修順序〕

(2010年度以降入学者に適用)

幼稚園教諭免許状取得希望者

第1段階		第2段階		第3段階
				第1段階に合格した場合のみ履修できる
				第2段階に合格した場合のみ履修できる
(1年次配置科目)	(2年次配置科目)	(3年次配置科目)		(4年次配置科目)
教育思想概説 教育心理学概説 教育制度概説	教職論	保育内容教育法を 3教科以上	幼児教育実習 I	幼児教育実習 II 教職実践演習(幼)

小学校教諭免許状取得希望者

第1段階		第2段階		第3段階
				第1段階に合格した場合のみ履修できる
				第2段階に合格した場合のみ履修できる
(1年次配置科目)	(2年次配置科目)	(3年次配置科目)		(4年次配置科目)
教育思想概説 教育心理学概説 教育制度概説	教職論	初等教科教育法を 4教科以上	初等教育実習 I	初等教育実習 II 教職実践演習(小)

中学校・高等学校教諭免許状取得希望者(第一部・第二部)

第1段階		第2段階		第3段階
				第1段階に合格した場合のみ履修できる
				第2段階に合格した場合のみ履修できる
(1年次配置科目)	(2年次配置科目)	(3年次配置科目)		(4年次配置科目)
教育原理 A (教育思想概説) 教育心理 (教育心理学概説) 教育原理 B (教育制度概説)	教職論	中等教育実習 I 国語科教育法 又は 国語科教材論 社会科教育法 又は 社会科教材論 地理歴史科教育法 又は 地理歴史科教材論 公民科教育法 又は 公民科教材論 英語科教育法 又は 英語科教育法特論 フランス語科教育法 (フランス語教授法 I) 又は フランス語科教育法特論 理科教育法 I 及び理科教育法 II 又は 理科教材論 数学科教育法 又は 数学科教育法特論 工業科教育法 情報科教育法 又は 情報科教育法特論		中等教育実習 II A 中等教育実習 II B 教職実践演習(中・高)

- ・「教育原理 A」「教育心理」「教育原理 B」は2年次までしか履修できません。
- ・第二部英米文学科生が「中等教育実習 I」、「英語科教育法」および「英語科教育法特論」を履修するには、第1段階の授業科目に合格している事に加えて「教職課程 英語能力認定制度」に合格していることを条件としています。

・「教職課程 英語能力認定制度」認定申請手続については、「10. 教育職員免許状・各種資格取得計画予定表」を参照してください。また、詳細については、11月上旬より、教職課程掲示板（9号館1階）で周知します。

(2009年度入学者に適用)

幼稚園教諭免許状取得希望者

第1段階		第2段階		第3段階
				第2段階に合格した場合のみ履修できる
		第1段階に合格した場合のみ履修できる		第2段階に合格した場合のみ履修できる
(1年次配置科目)	(2年次配置科目)	(3年次配置科目)		(4年次配置科目)
教育思想概説 教育心理学概説 教育制度概説	教職論	保育内容教育法を 3教科以上	幼児教育実習 I	幼児教育実習 II

小学校教諭免許状取得希望者

第1段階		第2段階		第3段階
				第2段階に合格した場合のみ履修できる
		第1段階に合格した場合のみ履修できる		第2段階に合格した場合のみ履修できる
(1年次配置科目)	(2年次配置科目)	(3年次配置科目)		(4年次配置科目)
教育思想概説 教育心理学概説 教育制度概説	教職論	初等教科教育法を 4教科以上	初等教育実習 I	初等教育実習 II

中学校・高等学校教諭免許状取得希望者（第一部・第二部）

第1段階		第2段階		第3段階
				第2段階に合格した場合のみ履修できる
		第1段階に合格した場合のみ履修できる		第2段階に合格した場合のみ履修できる
(1年次配置科目)	(2年次配置科目)	(3年次配置科目)		(4年次配置科目)
教育原理 A (教育思想概説) 教育心理 (教育心理学概説) 教育原理 B (教育制度概説)	教職論	中等教育実習 I 国語科教育法 又は 国語科教材論 社会科教育法 又は 社会科教材論 地理歴史科教育法 又は 地理歴史科教材論 公民科教育法 又は 公民科教材論 英語科教育法（英語教授法） 又は 英語科教育法特論 フランス語科教育法 (フランス語教授法 I) 又は フランス語科教育法特論 商業科教育法 理科教育法 I 及び理科教育法 II 又は 理科教材論 数学科教育法 又は 数学科教育法特論 工業科教育法 情報科教育法 又は 情報科教育法特論		中等教育実習 II A 中等教育実習 II B

- ・「教育原理 A」「教育心理」「教育原理 B」は 2 年次までしか履修できません。
- ・第二部英米文学科生が「中等教育実習 I」、「英語科教育法」および「英語科教育法特論」を履修するには、第 1 段階の授業科目に合格している事に加えて「教職課程 英語能力認定制度」に合格していることを条件としています。
- ・「教職課程 英語能力認定制度」認定申請手続については、「10. 教育職員免許状・各種資格取得計画予定表」を参照してください。また、詳細については、11月上旬より、教職課程掲示板（9 号館 1 階）で周知します。

(2005～2008年度入学者に適用)

幼稚園教諭免許状取得希望者（第一部）

第 1 段階		第 2 段階		第 3 段階
				第 1 段階に合格した場合のみ履修できる
				第 2 段階に合格した場合のみ履修できる
(1 年次配置科目)	(2 年次配置科目)	(3 年次配置科目)		(4 年次配置科目)
教育学概論 教育心理学概論	現代教師論	保育内容研究を 3 教科以上	幼児教育実習 I	幼児教育実習 II

幼稚園教諭免許状取得希望者（第二部）

第 1 段階		第 2 段階		第 3 段階
				第 1 段階に合格した場合のみ履修できる
				第 2 段階に合格した場合のみ履修できる
(1 年次配置科目)	(2 年次配置科目)	(2 年次配置科目)	(3 年次配置科目)	(4 年次配置科目)
教育学概論 教育心理学概論	現代教師論	保育内容研究を 3 教科以上	幼児教育実習 I	幼児教育実習 II

小学校教諭免許状取得希望者（第一部）

第 1 段階		第 2 段階		第 3 段階
				第 1 段階に合格した場合のみ履修できる
				第 2 段階に合格した場合のみ履修できる
(1 年次配置科目)	(2 年次配置科目)	(3 年次配置科目)		(4 年次配置科目)
教育学概論 教育心理学概論	現代教師論	教材研究を 4 教科以上	初等教育実習 I	初等教育実習 II

小学校教諭免許状取得希望者（第二部）

第 1 段階		第 2 段階		第 3 段階
				第 1 段階に合格した場合のみ履修できる
				第 2 段階に合格した場合のみ履修できる
(1 年次配置科目)	(2 年次配置科目)	(2 年次配置科目)	(3 年次配置科目)	(4 年次配置科目)
教育学概論 教育心理学概論	現代教師論	教材研究を 4 教科以上	初等教育実習 I	初等教育実習 II

中学校・高等学校教諭免許状取得希望者（第一部・第二部）

第1段階		第2段階	第3段階
		第1段階に合格した場合のみ履修できる	第2段階に合格した場合のみ履修できる
(1年次配置科目)	(2年次配置科目)	(3年次配置科目)	(4年次配置科目)
教育原理 (教育学概論) 教育心理 (教育心理学概論)	現代教師論	中等教育実習 I 国語科教育法 又は 国語科教材論 社会科教育法 又は 社会科教材論 地理歴史科教育法 又は 地理歴史科教材論 公民科教育法 又は 公民科教材論 英語科教育法 (英語教授法) 又は 英語科教育法特論 フランス語科教育法 (フランス語教授法) 商業科教育法 理科教育法 I 及び理科教育法 II 又は 理科教材論 数学科教育法 又は 数学科教育法特論 工業科教育法 情報科教育法 又は 情報科教育法特論	中等教育実習 II A 中等教育実習 II B

- ・「教育原理」「教育心理」は2年次までしか履修できません。
 - ・2005年度入学者の2年次配置科目「教師論」は名称変更により「現代教師論」になりました。2005年度入学者は「現代教師論」を履修してください。
 - ・第二部英米文学科生が「中等教育実習 I」「英語科教育法」および「英語科教育法特論」を履修するには、第1段階の授業科目に合格している事に加えて「**教職課程 英語能力認定制度**」(旧称 T.E.T.)に合格していることを条件としています。
 - ・「**教職課程 英語能力認定制度**」(旧称 T.E.T.)についての詳細は、**教職課程揭示板(9号館1階)**を参照してください。
 - ・「**教職課程 英語能力認定制度**」認定申請手続については、「**10.教育職員免許状・各種資格取得計画予定表**」を参照してください。また、詳細については、11月上旬より、**教職課程揭示板(9号館1階)**で周知します。
- (2004年度以前入学者は、入学年度の「教育課程履修の手引」を参照してください。)

5. 教職課程科目 配置表

文学部

教育人間科学部

経済学部

法学部

理工学部

社会情報学部

(2010年度以降入学者)

教職課程科目は教育職員免許状の取得を希望し、申請した学生以外は履修できません。				
	科目名	単位数	履修年次	
教 職 課 程 科 目	教職論	2	2	
	教育原理 A	2	1・2	1・2年次のみ履修可
	教育心理	4	1・2	1・2年次のみ履修可
	教育原理 B	2	1・2	1・2年次のみ履修可
	教育課程編成法	2	3・4	
	国語科教育法	4	3	
	国語科教材論	4	3	
	社会科教育法	4	3	
	社会科教材論	4	3	
	地理歴史科教育法	2	3	
	地理歴史科教材論	2	3	
	公民科教育法	2	3	
	公民科教材論	2	3	
	英語科教育法	4	3	
	英語科教育法特論	4	3	
	フランス語科教育法	4	3	
	フランス語科教育法特論	4	3	
	理科教育法 I	2	3	
	理科教育法 II	2	3	
	理科教材論	4	3	
	数学科教育法	4	3	
	数学科教育法特論	4	3	
	工業科教育法	4	3	
	情報科教育法	2	3	
	情報科教育法特論	2	3	
	道德教育指導法	2	3・4	
	特別活動論	2	3・4	
	教育方法の研究	2	3・4	
	生徒・進路指導論	2	3・4	
	教育相談	2	3・4	
	幼児教育実習 I	1	3	
	幼児教育実習 II	4	4	
	初等教育実習 I	1	3	
	初等教育実習 II	4	4	
中等教育実習 I	1	3		
中等教育実習 II A	2	4		
中等教育実習 II B	2	4		
教職実践演習 (幼)	2	4		
教職実践演習 (小)	2	4		
教職実践演習 (中・高)	2	4		

文学部
 教育人間科学部
 経済学部
 法学部
 経営学部
 理工学部
 社会情報学部

(2009年度入学者)

教職課程科目は教育職員免許状の取得を希望し、申請した学生以外は履修できません。				
	科目名	単位数	履修年次	
教 職 課 程 科 目	教職論	2	2	
	教育原理 A	2	1・2	1・2年次のみ履修可
	教育心理	4	1・2	1・2年次のみ履修可
	教育原理 B	2	1・2	1・2年次のみ履修可
	教育課程編成法	2	3・4	
	国語科教育法	4	3	
	国語科教材論	4	3	
	社会科教育法	4	3	
	社会科教材論	4	3	
	地理歴史科教育法	2	3	
	地理歴史科教材論	2	3	
	公民科教育法	2	3	
	公民科教材論	2	3	
	英語科教育法	4	3	
	英語科教育法特論	4	3	
	フランス語科教育法	4	3	
	フランス語科教育法特論	4	3	
	商業科教育法	4	3	
	理科教育法 I	2	3	
	理科教育法 II	2	3	
	理科教材論	4	3	
	数学科教育法	4	3	
	数学科教育法特論	4	3	
	工業科教育法	4	3	
	情報科教育法	2	3	
	情報科教育法特論	2	3	
	道德教育指導法	2	3・4	
	特別活動論	2	3・4	
	教育方法の研究	2	3・4	
	生徒・進路指導論	2	3・4	
	教育相談	2	3・4	
	総合演習	2	3・4	
	幼児教育実習 I	1	3	
幼児教育実習 II	4	4		
初等教育実習 I	1	3		
初等教育実習 II	4	4		
中等教育実習 I	1	3		
中等教育実習 II A	2	4		
中等教育実習 II B	2	4		

文学部
経済学部
法学部
経営学部
理工学部

(2005～2008年度入学者)

教職課程科目は教育職員免許状の取得を希望し、申請した学生以外は履修できません。
(2004年度以前入学者は、入学年度の「教職課程履修の手引」を参照してください。)

	科目名	単位数	履修年次	
教 職 課 程 科 目	現代教師論	2	2	} 1・2年次のみ履修可
	教育原理	4	1・2	
	教育心理	4	1・2	
	国語科教育法	4	3	
	国語科教材論	4	3	
	社会科教育法	4	3	
	社会科教材論	4	3	
	地理歴史科教育法	2	3	
	地理歴史科教材論	2	3	
	公民科教育法	2	3	
	公民科教材論	2	3	
	英語科教育法	4	3	
	英語科教育法特論	4	3	
	フランス語科教育法	4	3	
	商業科教育法	4	3	
	理科教育法 I	2	3	
	理科教育法 II	2	3	
	理科教材論	4	3	
	数学科教育法	4	3	
	数学科教育法特論	4	3	
	工業科教育法	4	3	
	情報科教育法	2	3	
	情報科教育法特論	2	3	
	道德教育の研究	2	3・4	
	特別活動	2	3・4	
	教育方法の研究	2	3・4	
	生徒指導 (進路指導を含む)	2	3・4	
	教育相談	2	3・4	
	総合演習	2	3・4	
	中等教育実習 I	1	3	
中等教育実習 II A	2	4		
中等教育実習 II B	2	4		

文学部第二部 (2010年度入学者)

教職課程科目は教育職員免許状の取得を希望し、申請した学生以外は履修できません。				
	科目名	単位数	履修年次	
教 職 課 程 科 目	教職論	2	2	
	教育原理 A	2	1・2	1・2年次のみ履修可
	教育心理	4	1・2	1・2年次のみ履修可
	教育原理 B	2	1・2	1・2年次のみ履修可
	教育課程編成法	2	3・4	
	英語科教育法	4	3	
	英語科教育法特論	4	3	
	道德教育指導法	2	3・4	
	特別活動論	2	2・3・4	
	教育方法の研究	2	2・3・4	
	生徒・進路指導論	2	2・3・4	
	教育相談	2	2・3・4	
	中等教育実習 I	1	3	
	中等教育実習 II A	2	4	
	中等教育実習 II B	2	4	
教職実践演習 (中・高)	2	4		

文学部第二部 (2009年度入学者)

教職課程科目は教育職員免許状の取得を希望し、申請した学生以外は履修できません。				
	科目名	単位数	履修年次	
教 職 課 程 科 目	教職論	2	2	
	教育原理 A	2	1・2	1・2年次のみ履修可
	教育心理	4	1・2	1・2年次のみ履修可
	教育原理 B	2	1・2	1・2年次のみ履修可
	教育課程編成法	2	3・4	
	英語科教育法	4	3	
	英語科教育法特論	4	3	
	道德教育指導法	2	3・4	
	特別活動論	2	2・3・4	
	教育方法の研究	2	2・3・4	
	生徒・進路指導論	2	2・3・4	
	教育相談	2	2・3・4	
	総合演習	2	3・4	
	中等教育実習 I	1	3	
	中等教育実習 II A	2	4	
中等教育実習 II B	2	4		

文学部第二部
 経済学部第二部
 経営学部第二部

(2005～2008年度入学者)

教職課程科目は教育職員免許状の取得を希望し、申請した学生以外は履修できません。
 (2004年度以前入学者は、入学年度の「教職課程履修の手引」を参照してください。)

	科目名	単位数	履修年次	
教 職 課 程 科 目	現代教師論	2	2	} 1・2年次のみ履修可
	教育原理	4	1・2	
	教育心理	4	1・2	
	国語科教育法	4	3	
	国語科教材論	4	3	
	社会科教育法	4	3	
	社会科教材論	4	3	
	地理歴史科教育法	2	3	
	地理歴史科教材論	2	3	
	公民科教育法	2	3	
	公民科教材論	2	3	
	英語科教育法	4	3	
	英語科教育法特論	4	3	
	商業科教育法	4	3	
	道德教育の研究	2	3・4	
	特別活動	2	2・3・4	
	教育方法の研究	2	2・3・4	
	生徒指導 (進路指導を含む)	2	2・3・4	
	教育相談	2	2・3・4	
	総合演習	2	3・4	
中等教育実習 I	1	3		
中等教育実習 II A	2	4		
中等教育実習 II B	2	4		

6. 本学で取得 できる資格

[取得できる資格の種類
(学部・学科別)]

本学で取得できる学部・学科別の資格の種類は次のとおりです。

(2005年度以降入学者)

学 部	学 科	資 格 の 種 類
文学部	教育学科	司書教諭・司書・社会教育主事・学芸員
	英米文学科	
	フランス文学科	
	日本文学科	
	史学科	
	心理学科	司書・社会教育主事・学芸員
教育人間科学部	教育学科	司書教諭・司書・社会教育主事・学芸員
	心理学科	司書・社会教育主事・学芸員
経済学部	経済学科	司書教諭・司書・社会教育主事・学芸員
	現代経済デザイン学科	司書・社会教育主事・学芸員
法学部	法学科	司書教諭・司書・社会教育主事・学芸員
経営学部	経営学科	司書教諭・司書・社会教育主事・学芸員 (2010年度以降経営学科入学生は司書教諭を除く)
	マーケティング学科	司書・社会教育主事・学芸員
国際政治経済学部	国際政治学科	司書・社会教育主事・学芸員
	国際経済学科	
	国際コミュニケーション学科	
総合文化政策学部	総合文化政策学科	司書・社会教育主事・学芸員
理工学部	物理・数理学科	司書教諭・司書・社会教育主事・学芸員
	化学・生命科学科	
	電気電子工学科	
	機械創造工学科	
	経営システム工学科	
	情報テクノロジー学科	
社会情報学部	社会情報学科	司書教諭・司書・社会教育主事・学芸員
文学部第二部	教育学科	司書教諭・社会教育主事
	英米文学科	
経済学部第二部	経済学科	
経営学部第二部	経営学科	

7. 各種資格の取得 希望申請について

2006年度以降入学者の 申請方法

各種資格（司書教諭・司書・社会教育主事・学芸員）の取得を希望する者は、入学年度適用の『教職課程履修の手引』を熟読の上、前期履修登録期間に、Webの履修登録画面から「教職・各種資格申請」の画面を開き、登録を行ってください。

この申請は、毎年度前期履修登録期間に必ず行うものであり、在学中における申請内容の変更・取消、またはその有無にかかわらず、継続の意思を持っている場合には、毎年度申請を更新してください。申請内容は毎年度末にクリアされます。

2005年度以前入学者の 申請方法

各種資格（司書教諭・司書・社会教育主事・学芸員）の取得を希望する者は、入学年度適用の『教職課程履修の手引』を熟読の上、Webの履修登録画面から「教職・各種資格申請」の画面を開き、登録を行ってください。

なお、この申請は、変更・取消がない限り在学期間中に一度行えばよく、毎年申請する必要はありません。

8. 資格課程料の 納入方法

2006年度以降入学者の 納入方法

各種資格（司書教諭・司書・社会教育主事・学芸員）の申請登録（Web）をすると、それぞれの資格について申請した年度ごとに後期学費納入時に資格課程料を納入することになります。たとえ必要科目の履修登録をしなくても、各種資格の申請登録によって資格課程料が後期学費に加算されますので、熟考の上申請をしてください。また、申請登録（Web）の取消しは、前期履修登録期間内しか行えません。なお、一旦納入された資格課程料は、いかなる理由があっても返還しません。

※学費を前期納付時に一括納付した者については、資格課程料の納付時期は9月となります。

2005年度以前入学者の 納入方法

- ① 司書教諭：「教職・各種資格申請」で司書教諭資格の申請登録をし、「学校経営と学校図書館」を履修登録すると、司書教諭の資格課程料が後期学費で徴収されます。
- ② 司書：「教職・各種資格申請」で司書資格の申請登録をし、「図書館情報学概論」を履修登録すると、司書の資格課程料が後期学費で徴収されます。
- ③ 社会教育主事：「教職・各種資格申請」で社会教育主事資格の申請登録をし、「生涯学習概論」を履修登録すると、社会教育主事の資格課程料が後期学費で徴収されます。
- ④ 学芸員：「教職・各種資格申請」で学芸員資格の申請登録をし、「博物館実習Ⅰ」を履修登録すると、学芸員の資格課程料が後期学費で徴収されます。

①～④の各種資格課程料は在学中に一度納入すればよく、毎年徴収されることはありません。また、一旦納入された資格課程料は、いかなる理由があっても返還しません。

9. 各種資格取得に必要な科目の履修について

履修上の注意

各種資格取得に必要な科目の履修は、1年次の年度初頭に開催される**各種資格オリエンテーション**で配付される入学年度適用の『**教職課程履修の手引**』に従ってください（第二部は、オリエンテーションはありませんので、教職課程課窓口で各種資格申請希望者に『**教職課程履修の手引**』を配付します）。

また、履修方法・科目名称などの変更があった場合には、年度初頭に開催される2年次生対象の**司書・司書教諭・社会教育主事オリエンテーション**、**学芸員オリエンテーション**、2年次生対象「**博物館実習Ⅰ**」**予備登録説明会**（学芸員資格取得希望者対象）などで資料を配付しますので、必ず確認してください。

各種資格関係の**オリエンテーション・説明会**および**手続**等で、主なものは「**10. 教育職員免許状・各種資格取得計画予定表**」のとおりです（学年については、基準となる学年を記載しています）。これらの日程の詳細については、『**学年初頭行事**』（学生ポータル、授業要覧等に掲載）、**教職課程掲示板**で確認してください。

オリエンテーション・説明会に欠席したり、指定期間内に**博物館実習予備登録・各種資格申請**などの手続を行わなかった場合、卒業時までには資格の取得ができない事態に陥ることがありますので、遺漏のないよう自己管理してください（但し、**司書教諭資格**の取得時期については、『**教職課程履修の手引**』を参照してください）。

履修順序のある科目

学芸員資格取得のための科目には、「**履修順序**」が定められたものがあります。詳細については、『**教職課程履修の手引**』の**学芸員**の項を参照してください。

また、学部・学科別の取得可能な資格の種類は、「**6. 本学で取得できる資格**」の表のとおりです。

〔学芸員資格取得に必要な科目の履修順序〕

①	②
	①を履修し合格した場合のみ履修できる
3年次配置科目	4年次配置科目
博物館実習Ⅰ 博物館概論 博物館学各論	博物館実習Ⅱ

- ・「**博物館実習Ⅰ**」および「**博物館概論**」は、**3年次生しか履修できません**。
- ・「**博物館実習Ⅰ**」は、**実習・設備等の諸事情**により、**受講者は30名までとします**。また、**2年次10月に博物館実習予備登録を受付け**、**3年次年度初頭に選抜試験を実施**します。
- ・「**博物館実習Ⅰ**」**説明会・予備登録**の日程については、「**10. 教育職員免許状・各種資格取得計画予定表**」を参照してください。

履修順序のある科目の登録方法

- ① 「**博物館実習Ⅰ**」（3年次配置科目）は、**事前登録科目**です。2年次10月に**博物館実習予備登録**をし、3年次の年度初頭に実施される**選抜試験**に合格することにより**事前登録**されるので、履修登録期間中に個人が登録する必要はありません。履修登録期間中に、Webの履修登録画面で登録内容を確認してください。
- ② 「**博物館実習Ⅱ**」（4年次配置科目）は、Webの履修登録画面から各自が登録をしてください。履修順序の条件を満たしていない場合は、登録することができません。

10. 教育職員免許状・各種資格取得計画予定表 (学年については、基準となる学年を記載)

	1 年	2 年	3 年	4 年
4 月	<ul style="list-style-type: none"> ・教職課程オリエンテーション ・各種資格オリエンテーション (第一部のみ) ・教育職員免許状、各種資格取得希望申請 (Web) (2006年度以降入学者は毎年申請) ・「教職課程履修カルテ」配付 (2010年度以降入学者) 	<ul style="list-style-type: none"> ・教職課程オリエンテーション ・司書、司書教諭、社会教育主事オリエンテーション (第一部のみ) ・学芸員オリエンテーション (第一部のみ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習説明会 ・実習校との交渉・内諾 ・「幼児教育実習Ⅰ」「初等教育実習Ⅰ」「中等教育実習Ⅰ」履修登録 ・介護等体験オリエンテーション (欠席の場合は体験辞退とみなす) 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習説明会 ・「幼児教育実習Ⅱ」「初等教育実習Ⅱ」「中等教育実習ⅡA・ⅡB」履修登録確認 (事前登録) ・教育実習関係書類提出 (個人校実習) ・教育実習オリエンテーション ・実習前指導 (前期実習者) ・教育委員会による教員採用試験オリエンテーション 4月23日 (土) 相模原キャンパス
5 月				<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習 (5月～11月までに行う) ・教員採用試験対策講座 青山キャンパス 5月14日 (土) 相模原キャンパス (中旬)
6 月				<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習事後指導 (前期実習者) ・実習前指導 (後期実習者) 青山キャンパス
7 月			<ul style="list-style-type: none"> ・小学校1日体験実習オリエンテーション 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員採用試験第二次試験対策講座 ・公立教員採用試験 (一次)
8 月				<ul style="list-style-type: none"> ・教員採用試験第二次試験対策講座 ・公立教員採用試験 (二次)
9 月			<ul style="list-style-type: none"> ・「幼児教育実習Ⅱ」「初等教育実習Ⅱ」「中等教育実習ⅡA・ⅡB」予備登録説明会 9月20日 (火) [相模原キャンパスは 9月24日 (土)] ・予備登録 9月21日 (水)～27日 (火) [相模原キャンパスは 9月26日 (月)～27日 (火)] ・小学校1日体験実習 ・教員採用試験対策講座 青山キャンパス 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習前指導 (後期実習者) 相模原キャンパス
10 月		<ul style="list-style-type: none"> ・介護等体験登録 青山キャンパス：10月18日 (火)～21日 (金) 相模原キャンパス：10月19日 (水)～21日 (金) ・「博物館実習Ⅰ」予備登録者対象説明会 10月20日 (木) 予備登録 10月24日 (月)～26日 (水) 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習依頼状等の交付 (個人校実習) 青山キャンパス：10月18日 (火)～21日 (金) 相模原キャンパス：10月12日 (水)～14日 (金) ・実習依頼状等を実習校へ持参 (個人校実習) 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育職員免許状、司書教諭申請手続 10月4日 (火)～10月7日 (金) [相模原キャンパスは10月6日 (木)～7日 (金)]
11 月			<ul style="list-style-type: none"> ・教員採用試験対策講座 青山キャンパス 11月26日 (土) 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習事後指導 (後期実習者)
12 月			<ul style="list-style-type: none"> ・実習校決定第一次発表 (指定校実習) 	
1 月			<ul style="list-style-type: none"> ・教員採用試験対策講座 相模原キャンパス 1月7日 (土) ・教育実習関係書類提出 (指定校実習) 	
2 月	<ul style="list-style-type: none"> ・教職課程 英語能力認定制度 申請手続【第二部英米文学科で、認定資格該当者のみ】 (上旬) 		<ul style="list-style-type: none"> ・実習校決定第二次発表 (指定校実習) ・教育実習関係書類提出 (指定校実習第二次発表決定者) 	
3 月				<ul style="list-style-type: none"> ・教育職員免許状、各種資格取得判定発表 ・教育職員免許状交付 3月24日 (土) 学位授与式

・年度初頭の各説明会およびオリエンテーションの日程については『学年初頭行事』(学生ポータル、授業要覧等に掲載)、教職課程掲示板で確認してください。

・説明会、手続等の詳細に関する連絡は、教職課程掲示板または学生ポータルで行うので、各自が責任を持って確認してください。

・上記の開催予定は、所属キャンパスのみの対応となります。(教員採用試験対策講座は除く)

XI . 大学院について

本学には、より高度な専門知識と技術によって確かな実績と高い評価をうける「大学院」各研究科・専攻に加え、時代と社会の要請に応える高度専門職業人養成の「専門職大学院」があります。

学部から本学「大学院」「専門職大学院」へ進学を希望する学生は、詳細を下記に問い合わせてください。

《問い合わせ先》

大学院

進学希望研究科	問い合わせ先（担当部署）
文学研究科 教育人間科学研究科 経済学研究科 法学研究科 経営学研究科 国際政治経済学研究科 総合文化政策学研究科 社会情報学研究科社会情報学専攻ヒューマンイノベーションコース	大学院事務室 所在：青山キャンパス 総研ビル2階
理工学研究科 社会情報学研究科社会情報学専攻社会情報学コース	スチューデントセンター・学務グループ 所在：相模原キャンパス B棟1階
国際マネジメント研究科	専門職大学院事務室 所在：青山キャンパス5号館1階

専門職大学院

進学希望研究科	問い合わせ先（担当部署）
国際マネジメント研究科（ビジネススクール） 法務研究科（ロースクール） 会計プロフェッション研究科（アカウンティングスクール）	専門職大学院事務室 所在：青山キャンパス 5号館1階

* 青山学院大学ホームページ（<http://www.aoyama.ac.jp>）にも、情報が載っていますので、参照してください。

○文学研究科

英米文学専攻 博士前期課程

特色	英国・米国の文学作品研究を通して、著者の人間性や時代、社会、文化的背景や特徴を探求します。また、英語という言語について歴史的な分析、意味論、音声学、心理言語学、教育論、翻訳などを通して考察も深めていきます。	
学内進学	学内進学選抜試験は実施しません。	
	大学院科目特別履修資格試験 (3年生対象：3月実施) ※学部4年次に大学院の科目を履修するための試験です。 ※大学院に入学するためには入学試験に合格する必要があります。	出願資格： 本学文学部英米文学科3年次に在籍する者で、第3年次終了時点で卒業要件単位の90%以上を修得し、学科科目(英語科目・専門科目)のG.P.A.が2.80以上の者。 ただし、上記の要件を満たす者が3年次から4年次にかけて協定校へ交換留学し、留学終了の次年度も在学を要する場合は、留学終了年度(4年次)での出願を認める。 選考方法：面接(書類審査を含む) 【注意】 第3年次の最終成績により、出願資格を満たさなかった者は不合格となります。
一般入試	秋・春実施(詳細は要問い合わせ)	*学生募集要項は、7月中旬頃発行予定

フランス文学・語学専攻 博士前期課程

特色	17～20世紀の文学作品研究を通して、著者の人間性や時代、社会、文化的背景、その特徴の洞察、あるいは思想、哲学面からなど多面的に考察します。また、語学分野では、文法・語法・音韻などをより深く研究します。	
学内進学	学内進学選抜試験は実施しません。	
	大学院科目特別履修資格試験 (3年生対象：3月実施) ※学部4年次に大学院の科目を履修するための試験です。 ※大学院に入学するためには入学試験に合格する必要があります。	出願資格： 本学文学部フランス文学科3年次に在籍する者で、第3年次終了時点で卒業要件単位の90%以上を修得し、学科科目(フランス語科目・専門科目)のG.P.A.が2.60以上の者。 ただし、上記の要件を満たす者が3年次から4年次にかけて協定校へ交換留学し、留学終了の次年度も在学を要する場合は、留学終了年度(4年次)での出願を認める。 選考方法：面接(書類審査を含む) 【注意】 第3年次の最終成績により、出願資格を満たさなかった者は不合格となります。
一般入試	秋・春実施(詳細は要問い合わせ)	*学生募集要項は、7月中旬頃発行予定

日本文学・日本語専攻 博士前期課程

特色	上代から近世・近代までの小説・戯曲・詩歌などをテーマに、文学表現の研究や、時代や社会状況との関係などについて考察を深めます。また、日本語の変遷や文法体系に関する研究、漢文学研究も盛んです。	
学内進学	学内進学選抜試験は実施していません。	
一般入試	秋・春実施(詳細は要問い合わせ)	*学生募集要項は、7月中旬頃発行予定

史学専攻 博士前期課程

特色	日本史、東洋史、西洋史の3部門において、古代、中世、近代・現代の各時代における人間の営み・文化を、古文書や遺品、史料、研究論文などから考察します。その他、遺物や遺跡をもとに研究する考古学部門、また、芸術作品から探求する芸術史部門を選ぶこともできます。2008年度より5部門編成となりました。	
学内進学	学内進学者選抜試験は実施しません。	
	大学院科目特別履修資格試験 (3年生対象：3月実施) ※学部4年次に大学院の科目を履修するための試験です。 ※大学院に入学するためには入学試験に合格する必要があります。	出願資格： 本学文学部史学科3年次に在籍する者で、第3年次終了時点で卒業要件単位の90%以上を修得し、学科科目(専門科目)のG.P.A.が2.60以上の者。 ただし、上記の要件を満たす者が3年次から4年次にかけて協定校へ交換留学し、留学終了の次年度も在学を要する場合は、留学終了年度(4年次)での出願を認める。 選考方法：面接(書類審査を含む) 【注意】第3年次の最終成績により、出願資格を満たさなかった者は不合格となります。
一般入試	秋・春実施(詳細は要問い合わせ)	*学生募集要項は、7月中旬頃発行予定

○教育人間科学研究科

教育学専攻 博士前期課程

特色	多様な教育問題を根源から解決していくため、誕生から臨終に至るライフサイクルを視野に入れつつ、実践的かつ理論的な研究を進めています。思想・歴史・理論の領域と臨床・実践・方法の領域の双方が提供するさまざまなアプローチを、現実に即して協調的に生かす方法を探求します。	
学内進学	学内進学者選抜試験は実施していません。	
一般入試	秋・春実施(詳細は要問い合わせ)	*学生募集要項は、7月中旬頃発行予定

心理学専攻(心理学コース・臨床心理学コース) 博士前期課程

特色	認知心理学や発達心理学など心理学の基礎分野から、実社会に密着した臨床心理学、産業心理学などまで、幅広い研究を通して人間に対する深い洞察力を養成していきます。 (本専攻の臨床心理学コースは財団法人臨床心理士資格認定協会の認定する第1種指定大学院です。臨床心理士の資格取得を目指す方は必ずこのコースに出願してください。)	
学内進学	試験時期：10月頃実施 *学生募集要項は、7月中旬頃発行予定 出願資格：本学文学部 来年3月卒業見込み者 ただし、心理学関連の科目について出願時までに32単位以上修得済みであること。	
	試験科目	〔心理学コース〕： ・論文読解(心理学関連の英語の論文) ・専門A(心理学に関する論述) ・専門B(心理学研究に関する基礎知識) ・面接(第1次試験合格者のみ) 〔臨床心理学コース〕： ・論文読解(臨床心理学および心理学関連の英語の論文) ・専門A(臨床心理学および心理学に関する論述) ・専門C(臨床心理学および心理学研究に関する基礎知識) ・面接(第1次試験合格者のみ)
一般入試	春実施(詳細は要問い合わせ)	*学生募集要項は、7月中旬頃発行予定

○経済学研究科

経済学専攻 博士前期課程

特色	21世紀における国内外の経済的諸問題の探求と解決を目指し、高度かつ総合的な経済学の専門能力を身につけた人材を育成します。	
学内進学	学内進学者選抜試験 (4年生対象)	試験時期：第1回 7月中旬頃実施 第2回 12月上旬頃実施 出願資格：本学経済学部、経営学部及び国際政治経済学部を来年3月卒業見込みの者 ただし前年度までの専門科目および第一外国語(英語必修科目、外国人留学生で第一外国語を日本語として申請している場合は、日本語必修科目)のG.P.A.がそれぞれ2.4以上であること。 試験科目：面接(詳細は要問い合わせ)
	大学院科目特別履修生試験 (3年生対象) ※学部4年次に大学院の科目を履修するための試験です。	試験時期：第1回 12月上旬頃実施 第2回 2月下旬頃実施 出願資格：本学経済学部第3年次に在学する者で、3年次終了時において、以下の要件を満たす見込みの者。 経済学部の卒業要件単位の90%以上を修得し、3年次までの専門科目のG.P.A.および第一外国語(英語必修科目、外国人留学生で第一外国語を日本語として申請している場合は、日本語必修科目)のG.P.A.がそれぞれ2.4以上でなければならない。 (注意)合格発表後、3年次終了時の成績が出願資格を満たすことができなかった場合、合格は取り消しとなります。 大学院に入学するためには、本専攻の入学試験を受験し、合格する必要があります。 試験科目：面接
一般入試	秋・春実施(詳細は要問い合わせ) *学生募集要項は、7月中旬頃発行予定	

公共・地域マネジメント専攻 博士前期課程

特色	経済学の知見のもと、新しい公共社会を実現するために、現代に即した経済システムをデザインし、政府や地域・コミュニティのマネジメントを提案していきます。	
学内進学	学内進学者選抜試験 (4年生対象)	試験時期：第1回 7月中旬頃実施 第2回 12月上旬頃実施 出願資格：本学学部を来年3月卒業見込みの者 ただし、前年度までのG.P.A.が2.4以上であること。 試験科目：面接(詳細は要問い合わせ)
	大学院科目特別履修生試験 (3年生対象) ※学部4年次に大学院の科目を履修するための試験です。	試験時期：第1回 12月上旬頃実施 第2回 2月下旬頃実施 出願資格：本学学部第3年次に在学する者 大学院に入学するためには、本専攻の入学試験を受験し、合格する必要があります。 試験科目：面接
一般入試	秋・春実施(詳細は要問い合わせ) *学生募集要項は、7月中旬頃発行予定	

○法学研究科

私法専攻 博士前期課程

公法専攻 博士前期課程

特色	私法専攻	社会生活、企業活動、マルチメディア化が進展するなかでの知的所有権など、私法における問題は国際化しています。こうした領域の法学的能力と確かな視点を育み、研究を深めていきます。	
	公法専攻	社会や時代に密接に関わる、憲法解釈、住民権と行政施策との関係といった公法の問題に、的確な判断と深い洞察で柔軟に対応できるよう、高い専門能力を身につけながら研究を進めていきます。	
学内進学	3種類の試験があります (詳細は要問い合わせ)	内部推薦入試 (本学法学部4年生対象)	試験時期：第1回 6月下旬頃実施 第2回 11月下旬頃実施 出願資格：本学法学部を来年3月卒業見込みの者 ただし G.P.A. (外国語および専門教育科目) が2.8以上の者 試験科目：書類審査、面接 すべて詳細は大学院事務室へ問い合わせること。
		外部推薦入試 (出身大学、出身学部問わず)	試験時期：第1回 6月下旬頃実施 第2回 11月下旬頃実施 出願資格：来年大学(本学あるいは本学法学部に限りません)を卒業見込みの者又は既に卒業した者。 試験科目：書類審査、面接 すべて詳細は大学院事務室へ問い合わせること。
		大学院科目特別履修資格試験 (3年生対象： 11月下旬頃実施) ※学部4年次に大学院の科目を履修するための試験です。 ※大学院に入学するためには入学試験に合格する必要があります。	出願資格：本学法学部3年次在籍学生で下記のすべてに該当すること。 ・法学部3年次終了時点で卒業要件単位の90%以上を修得見込みであり、かつそのG.P.A.が2.80以上であること。 ・3年次までに留年していないこと。ただし、留学による休学等やむをえない事情の場合はこの限りではない。 【注意】合格発表後に3年次終了時の成績が出願資格を満たさなかった場合には、合格は取り消しとなります。 試験科目： ・書類審査 ・口述試験
一般入試	秋・春実施(詳細は要問い合わせ)	*学生募集要項は、7月中旬頃発行予定	

ビジネス法務専攻 修士課程

特色	ビジネス法務専攻は、ビジネスとリーガルのリテラシーを兼ね備えた人材の育成を目的とします。この専攻は、人事労務法務プログラム、知財法務プログラム、税法務プログラム、金融法務プログラムの4つにわかれ、それぞれが専任の教員のほかに実務に精通した兼任教員(弁護士、公認会計士、税理士や企業法務で長い経験をお持ちの方)が実務的な観点から指導を行います。		
学内進学	学内進学者選抜試験は実施しません。		
	大学院科目特別履修資格試験 (3年生対象：11月下旬頃実施) ※学部4年次に大学院の科目を履修するための試験です。 ※大学院に入学するためには入学試験に合格する必要があります。	出願資格：本学法学部3年次在籍学生で下記のすべてに該当すること。 ・法学部3年次終了時点で卒業要件単位の90%以上を修得見込みであり、かつそのG.P.A.が2.80以上であること。 ・3年次までに留年していないこと。ただし、留学による休学等やむをえない事情の場合はこの限りではない。 【注意】合格発表後に3年次終了時の成績が出願資格を満たさなかった場合には、合格は取り消しとなります。 試験科目： ・書類審査 ・口述試験	
一般入試	実施(詳細は要問い合わせ)	*学生募集要項は、7月中旬頃発行予定	

○経営学研究科

経営学専攻 博士前期課程

特色	情報技術の急速な発展とそれに伴う意思決定のスピードアップなど、現代の企業経営は多くの課題を抱えています。経営学研究科は、経営学部門、会計学部門、IMC 統合マーケティング部門という3部門によって構成され、企業経営の理論的、実証的研究を行うとともに、高度な専門知識・能力を持つ人材を育成します。	
学内進学	<p>学内進学者選抜試験 (4年生対象： 第1回7月頃実施 第2回10月頃実施) *学生募集要項は、5月中旬頃発行予定</p>	<p>出願資格：本学経営学部及び経済学部を来年3月卒業見込みの者。ただし G.P.A. が2.4以上であること (卒業要件外科目は除く) 試験科目：小論文 (入学後の研究領域に関する出題)、口述試験</p>
	<p>学内飛び級入学試験 (3年生対象： 2・3月頃実施) *学部を3年終了時点で退学し大学院に入学するための試験です。 *学生募集要項は、11月中旬頃発行予定</p>	<p>出願資格：本学経営学部第3年次に在学する者で、3年次終了時において、経営学部の卒業要件単位の90%以上を修得し、かつ第一外国語(英語必修科目)の要件単位を満たし、そのG.P.A.がそれぞれ3.0以上の者。(全体のG.P.A.が3.0以上で、かつ英語必修科目のG.P.A.が3.0以上) ただし、第一外国語(英語必修科目)については、第一外国語科目を日本語として申請している外国人留学生は第一外国語(日本語必修科目)とする。 (注1) 出願時において、上記の要件に該当する見込みであること。 (注2) 合格発表後、3年次終了時の成績が出願資格を満たすことができなかった場合、合格は取り消しとなる。 試験科目：口述試験 (書類審査を含む)</p>
	<p>大学院科目特別履修生試験 (3年生対象： 2・3月頃実施) *学部4年次に大学院の科目を履修するための試験です。 *大学院に入学するためには下に記載の入学試験に合格する必要があります。 *試験要項は、11月中旬頃発行予定</p>	<p>出願資格：本学経営学部第3年次に在学する者で、3年次終了時において、経営学部の卒業要件単位の90%以上を修得し、かつ第一外国語(英語必修科目)の要件単位を満たし、そのG.P.A.がそれぞれ2.6以上の者。(全体のG.P.A.が2.6以上で、かつ英語必修科目のG.P.A.が2.6以上) ただし、第一外国語(英語必修科目)については、第一外国語科目を日本語として申請している外国人留学生は第一外国語(日本語必修科目)とする。 (注1) 出願時において、上記の要件に該当する見込みであること。 (注2) 合格発表後、3年次終了時の成績が出願資格を満たすことができなかった場合、合格は取り消しとなる。 試験科目：口述試験 (書類審査を含む)</p>
	<p>学内入学試験 (大学院科目特別履修中の4年生対象：10月頃実施) *学生募集要項は、7月中旬頃発行予定</p>	<p>出願資格：本学経営学部第4年次に在学する経営学研究科大学院科目特別履修生で、来年3月卒業見込みの者。 試験科目：口述試験 (書類審査を含む)</p>
一般入試	秋・春実施 (詳細は要問い合わせ)	*学生募集要項は、7月頃発行予定

○国際政治経済学研究科

国際政治学専攻 修士課程

国際経済学専攻 修士課程

国際コミュニケーション専攻 修士課程

特色	国際政治学専攻	ダイナミックに変動する国際政治経済の今日の事象について、学際的な解明に取り組んでいます。国際政治事象、安全保障や国際秩序に関する分析、地域経済圏に焦点を当てた地域研究などの分野があります。	
	国際経済学専攻	発展途上国における人口増加や貧困、自然破壊と資源の枯渇など、深刻化する国際経済問題を解決するための理論的、実践的分析力を身につけていきます。関連分野も含め、体系的に理解する研究者の養成を推進します。	
	国際コミュニケーション専攻	国際コミュニケーションに関するさまざまな事象について、1) コミュニケーション論、2) 言語学、3) 比較文化・地域文化論、の諸領域を3本の柱として、理論的、実践的に研究します。	
学内進学	3種類の試験があります (詳細は要問い合わせ)	学内進学者選抜試験 (4年生対象： 7・11月実施予定)	出願資格：国際政治経済学部第4年次在籍学生（国際経済学専攻は経済学部第4年次在籍学生を含む）で、下記のいずれかに該当する者。 ①本研究科科目特別履修試験に合格し、本年度本学部卒業見込みの者。 ②第3年次終了時点で修得卒業要件単位のG.P.A.が2.50以上で、本年度本学卒業見込みの者。 試験科目：①該当者…書類審査 ②該当者…口述試問（書類審査を含む）
		学内飛び級入試 (3年生対象： 3月実施予定)	出願資格：本学国際政治経済学部第3年次在籍学生で、下記のすべてに該当する者。 ①第3年次終了時点で卒業要件単位の90%以上を修得し、そのG.P.A.が2.5以上の者。 ②外国語要件単位を満たし、そのうち必修科目のG.P.A.が2.5以上の者。 試験科目：口述試問（書類審査を含む）
		大学院授業科目 特別履修資格試験 (3・4年生対象：3月 4年生対象：9月 実施予定)	(3・4年次3月実施予定分) 出願資格：国際政治経済学部3・4年次在籍学生で、下記のすべてに該当する者。但し、出願資格条件を満たすことができなかった者は、不合格となります。 ①本学部第3・4年次在籍学生で、本年度終了時点で卒業要件単位の90%以上修得し、そのG.P.A.が2.50以上取得（見込）の者。 ②本学部外国語要件単位を満たし、そのうち必修科目のG.P.A.が2.50以上修得（見込）の者。 試験科目：口述試問（書類審査を含む） (4年次9月実施予定分) 出願資格：国際政治経済学部4年次在籍学生で、下記のすべてに該当する者。但し、出願資格条件を満たすことができなかった者は、不合格となります。 ①本学部第4年次在籍学生で、第4年次前期終了時点で卒業要件単位の90%以上修得し、そのG.P.A.が2.50以上取得（見込）の者。 ②本学部外国語要件単位を満たし、そのうち必修科目のG.P.A.が2.50以上修得（見込）の者。 試験科目：口述試問（書類審査を含む）
一般入試	秋・春実施（詳細は要問い合わせ）	*学生募集要項は、7月頃発行予定	

○総合文化政策学研究所

文化創造マネジメント専攻 修士課程

特色	文化芸術の創造並びにその事業化、企業・団体における文化政策の立案、文化産業のプロデュース等の分野で高度な専門性を発揮する人材を養成します。専門科目（政策マネジメント分野、都市・国際分野、メディア・アート分野）に加えて、自らが課題を設定し、その解決を図るプロジェクト演習を重視します。修業年限は、標準2年の他に3年制のコースも選べます。
学内選抜	試験時期：第1回 7月頃 第2回 10月頃 出願資格：本学学部を来年3月卒業見込みの者。ただし3年次までのG.P.A.が2.5以上であること。 試験科目：書類審査及び面接（希望する専門分野についての口述試問を含む）
	大学院科目特別履修生試験（3年生対象） ※学部4年次に大学院の科目を履修するための試験です。（詳細は問い合わせ）
一般入試	秋・春実施（詳細は問い合わせ） *学生募集要項は、7月頃発行予定

総合文化政策学専攻 博士課程（5年一貫制）

特色	総合文化政策学は、文化に係わるさまざまな問題の発見と解決、文化や芸術の創造のための構想、政策やプロジェクトの立案と具体化の実際を系統的に明らかにするものであります。その分野において、研究者として自立して研究活動を行い、あるいは総合文化政策学と関係する学術分野において高度に専門的な業務に従事するに必要な研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養います。
学内選抜	試験時期：第1回 7月頃 第2回 10月頃 出願資格：本学学部を来年3月卒業見込みの者。ただし3年次までのG.P.A.が2.5以上であること。 試験科目：書類審査及び面接（希望する専門分野についての口述試問を含む）
一般入試	秋・春実施（詳細は要問い合わせ） *学生募集要項は、7月頃発行予定

○理工学研究科

理工学専攻 博士前期課程

特色	基礎科学コース	数理学、理論物理学、宇宙物理学、原子・分子物理学の分野を中心とし、複雑系など新分野へも視野を広げています。また、専門分野の研究を通じて、さまざまな問題に対するモデル構築能力および問題解決能力を涵養します。
	化学コース	物理化学、有機化学、無機分析化学の3分野で構成されています。個々の分子から生体機能などの種々の機能性を示す組織系に至るまでの幅広い分子系を対象にして、化学本来の視点から研究を遂行し、幅広く底深い化学的素養を身につけた学生を育てます。
	機能物質創成コース	新機能を持つ物質の創成を中心に、物質設計やデバイス作製等の応用も視野に入れた総合的な研究を行うことを目的としています。物性物理学、固体化学、物質科学、薄膜工学、電気物性工学、表面科学等のいずれかを基礎におきつつ、分野を横断した幅広い知識に精通した、最先端の物質科学を行う人材を育成します。
	生命科学コース	生命科学の共通基盤となる生化学、分子生物学、細胞生物学、生物物理学の知識を身につけ、これらを応用したバイオテクノロジーやバイオインフォマティクスなどの新しい分野について学ぶとともに、既存学問分野の枠を超えた方法論を駆使して、生命現象を担う分子の構造、機能、および調節機能を研究します。
	電気電子工学コース	回路系から情報通信系、物性系まで広い研究分野の研究室がそれぞれ大学院生を受け入れています。技術者、研究者を目指す者として、現代社会の基盤を支えるエネルギー分野、計測・制御分野、情報・通信分野、電子デバイス分野、材料・物性分野、またそれらの関連分野を対象に学習、研究を進めています。研究指導を重視し、それらを通して自ら考える能力、発見能力、問題解決能力の育成に努めます。

機械創造コース	本コースは、人類の福祉と持続的発展に役立ち、優れた機能を持つ機器やシステムを創造する研究者を養成します。すなわち、エネルギー・環境・安全・倫理に対する広い視野を持ち、ものの形や機構と力学的作用を深く理解させる教育・研究を行います。さらに、機械に代表されるハードと知能に代表されるソフトとの融合を図り、進んだ情報処理能力、高度な計測技術と解析技術を修得させ、研究指導を通じて総合力を養い、自ら問題発掘と解決のできる学生を育てます。	
知能情報コース	知識処理・ヒューマンインタフェース・ネットワークをキーワードに工学専門領域からビジネスまで広範囲に勉強・研究します。各領域で世界をリードする研究を行い、理系出身者が専門知識を高める専門フロンティアプログラム、また最新のネットワーク技術でビジネス開拓を目指すなど文系出身者を受け入れる複合フロンティアプログラムがあります。	
マネジメントテクノロジーコース	製品ライフサイクル、生産システム、サプライチェーン、経営技術、環境経営、品質経営などの領域について、経営管理、IE・生産管理、統計・品質管理、OR・情報の観点に立ったそれらのマネジメントに必要な概念・方法論・システムの構築とその運用を学びます。	
学内進学	<p>本学部に在籍の卒業見込み者で、本理工学専攻への進学を第一志望とする者は、「学内進学」入試を受けることができます。この「学内進学」入試は、4年生の前期において、</p> <p>(1) 学科での被推薦資格の認定 (2) 各コースでの入学候補者の内定</p> <p>の2段階のステップを踏んで行われます。</p> <p>ステップ(1)では、各学科において、次の「A」または「B」を満たしたものを被推薦資格者として認定します。</p> <p>「A」：3年次終了時(卒業見込者となった時)における成績順位(全科目のG.P.A.または専門科目のG.P.A.による順位)で上位1/2以上であるもの</p> <p>「B」：各学科が定めた独自の推薦基準(実力試験など)を満たしたもの</p> <p>ステップ(2)では、被推薦資格者が希望する指導教員の面接を受けたうえで入学の申請を行い、各コースが審議の上、入学候補者を内定します。</p> <p>各学科が定める独自の推薦基準(上記「B」)を以下に示します。(2011年度入試参考)</p>	
	物理学科、 物理・数理学科	物理・数理学科で実施する実力試験において、上位3分の1以内の成績を取めた者。
	化学科、 化学・生命科学科	前記のステップ(1)におけるAの推薦基準に満たない者に対して専門科目に関する実力試験(4月中旬)を課し、一定の合格基準に達した者を被推薦資格者として認定します。ただし、全科目および専門科目のG.P.Aが2.0に達しない者は受験することはできません。
	電気電子工学科	2010年11月に電気電子工学科で実施した学力試験の得点が基準点以上であること。基準点を満たした者は4月上旬に公表します。
	機械創造工学科	機械創造工学科で実施する実力試験で満点の6割以上の成績を取めた者。または、技術士第一次試験合格者。
	経営システム工学科	経営システム工学科で実施する実力試験の結果、大学院推薦レベルに該当する成績を取めた者。または、技術士第一次試験合格者。
	情報テクノロジー学科	2011年2月中旬に行った実力試験で大学院推薦レベルの得点を得た者。
一般入試	<p>一般入試には、「7月入試」と「9月入試」があり、特に「7月入試」については理工学部以外の学部出身者でも受験しやすい内容となっております。ただし、「7月入試」は本学理工学部 に在籍する学生は、出願できません。</p> <p>7月入試 選考内容(「書類審査」「小論文」および「口述試問」)</p> <p>9月入試 選考内容(「書類審査」「数学」「英語」および「口述試問」)</p> <p>(詳細は要問い合わせ) *学生募集要項は、4月上旬に発行予定。</p>	

○社会情報学研究科

社会情報学専攻 社会情報学コース

社会情報学専攻 ヒューマンイノベーションコース

特色	社会情報学コース	社会情報学は、社会科学と情報科学の融合と、それにより従来の文系、理系の枠に捉われない極めて多角的な視点から現代社会の問題点をえぐり、その問題解決を自らが見出す高度な人材を養成することを目指しています。このような能力は、現代の輻輳した社会において、ファイナンス関連、経済や地域政策関連、情報システム関連等、あらゆる分野で活躍しようとする人々にとって必要不可欠なものです。経営・経済概念の精深な理解、社会活動、経済活動の優れた分析（データ分析や社会調査等）能力、人や社会を考える上で必要となる心理や教育に関する基盤の修得、数量的なものに限らず質的な情報の処理能力、数理的な基盤、情報を高度に利用するための基盤や、情報システム構築のための幅広い素養を身につけた人材を養成します。
	ヒューマンイノベーションコース	さまざまな現場で「学び」を生み出し、それを人・組織・社会の変革＝イノベーションへと結びつけることのできる専門的能力をもった人材の育成に重点を置いたコースです。学習科学、認知科学、学習環境デザインなど広義の「学び」に関する最先端の理論と研究方法を学び、それをベースにしてワークショップデザイン、人材育成、組織変革、学校教育、地域活性化、コンサルテーション、NPO活動、行政サービスなどさまざまな現場でイノベーションを生み出す高度な実践力を身につけることを目指します。
学内進学	出願資格：本学学部を来年3月卒業見込みの者。 ただし3年次までの全取得科目のG.P.A.が2.4以上であること。 試験科目：書類審査及び面接	
一般入試	9月・1月実施（詳細は要問い合わせ） *学生募集要項は、7月頃発行予定	

○国際マネジメント研究科

国際マネジメントサイエンス専攻 博士課程（5年一貫制）

特色	創造性豊かな優れた学術研究者の育成を目指す「学術理論研究志向」のPh.D.（博士：国際経営学）プログラムと、企業等で専門性が要求される研究課題に取り組む研究者を養成する「実践的研究志向」のDBA（博士：経営管理）プログラムから構成されています。
学内進学	学内進学入試は実施していないので、一般の入試を受験してください。
一般入試	10月・2月実施（2010年度実績）

○国際マネジメント研究科（専門職大学院）

国際マネジメント専攻

特色	国際社会のより豊かな未来を切り拓いていくために、高い倫理観と国際的視野を身につけた企業家精神に富む人材を育成することをミッションとして掲げています。これを達成するために「自ら考え、分析し、意志決定の行える経営プロフェッショナル」を育成する教育プログラムを開発し、絶え間ない改善努力を続けています。
学内進学	学内進学入試は実施していないので、一般の入試を受験してください。
一般入試	10月・1月・2月実施（2010年度実績）

○法務研究科（専門職大学院）

法務専攻

特色	キリスト教理念に基づく豊かな人間性や法曹としての倫理意識の涵養と、専門的な法知識の確実な修得を基盤として、批判的・創造的な思考力と法的な分析・議論能力を養成し、国際的視野をもって社会的責任を果たすことができる法曹を育成しています。
学内進学	学内進学入試は実施していないので、一般の入試を受験してください。
一般入試	秋実施（2010年度実績） *学生募集要項は、6月下旬発行予定

○会計プロフェッション研究科（専門職大学院）

会計プロフェッション専攻

特色	青山学院の教育理念に基づいた高度な職業倫理性と国際感覚に優れた会計プロフェSSIONナルの育成を目指しています。質の高い独自のカリキュラムにより、社会的要求に応えられる幅広い人材育成を実践します。
学内進学	未定
一般入試	10月実施（2010年度実績）
自己推薦入試	7月・1月・2月実施（2010年度実績）

XII . 大学組織概要

1. 大学役職員

院	長	山北 宣久
学	長	伊藤 定良
副 学	長	長谷川 信
副 学	長	岡田 昌志
副 学	長	土山 實男
文 学 部	長	西澤 文昭
教育人間科学部	長	酒井 豊
経 済 学 部	長	米澤 義衛
法 学 部	長	菊池 純一
経 営 学 部	長	田中 正郎
国際政治経済学部	長	仙波 憲一
総合文化政策学部	長	杉浦 勢之
理 工 学 部	長	林 洋一
社会情報学部	長	稻積 宏誠

2. 教育・研究組織

学部・学科



3. 教員組織

文学部

<准教授>

シュー土戸 ポール
(シューツチド ポール)

英米文学科

<教授>

ダブズ (DABBS, T.W.)
パウンズ (POUNDS, W.E.)
ロビンソン (ROBINSON, P.J.)
ストロング (STRONG, G.B.)
アレン玉井 光江 (アレンタマイ ミツエ)
小野寺 典子 (オノデラ ノリコ)
折島 正司 (オリシマ マサシ)
木村 松雄 (キムラ マツオ)
佐久間 康夫 (サクマ ヤスオ)
佐野 弘子 (サノ ヒロコ)
高田 賢一 (タカダ ケンイチ)
武内 信一 (タケウチ シンイチ)
伊達 直之 (イダ ナオユキ)
田中 啓史 (タナカ ケイシ)
外池 滋生 (トノイケ シゲオ)
外岡 尚美 (トノオカ ナオミ)
富山 太佳夫 (トミヤマ タカオ)
中澤 和夫 (ナカザワ カズオ)
中野 康司 (ナカノ コウジ)
野邊 修一 (ノベ シュウイチ)
福田 敬子 (フクダ タカコ)
松井 優子 (マツイ ユウコ)
水野 的 (ミズノ アキラ)
山内 一芳 (ヤマノウチ カズヨシ)
吉波 弘 (ヨシバ ヒロシ)

<准教授>

ディアス (DIAS, J.V.)
マクレディ (McCREADY, E.S., JR.)
麻生 えりか (アソウ エリカ)
稲生 衣代 (イノウ キヌヨ)
大川 道代 (オオカワ ミチヨ)
西本 あづさ (ニシモト アツサ)
横谷 輝男 (ヨコタニ テルオ)
若林 麻希子 (ワカバヤシ マキコ)

フランス文学科

<教授>

ドルヌ (DHORNE, F.)
秋山 伸子 (アキヤマ ノブコ)
荒木 善太 (アラキ センタ)
尾形 こづえ (オガタ コヅエ)
露崎 俊和 (ツヅギ トシカズ)
鳥居 正文 (トリイ マサフミ)
西澤 文昭 (ニシザワ フミアキ)
西村 哲一 (ニシムラ テツイチ)

<准教授>

デグランジュ (DESGRANGES, G.)

ルクレール (LECLERCQ, A.)

阿部 崇 (アベ タカシ)
井田 尚 (イダ ヒサン)
久保田 剛史 (クボタ タケシ)
濱野 耕一郎 (ハマノ コウイチロウ)
和田 恵里 (ワダ エリ)

日本文学科

<教授>

大上 正美 (オオガミ マサミ)
小川 靖彦 (オガワ ヤスヒコ)
片山 宏行 (カタヤマ ヒロユキ)
近藤 泰弘 (コンドウ ヤスヒロ)
佐伯 眞一 (サエキ シンイチ)
佐藤 泉 (サトウ イズミ)
篠原 進 (シノハラ ススム)
高田 祐彦 (タカダ ヒロヒコ)
日置 俊次 (ヒオキ シュンジ)
土方 洋一 (ヒジカタ ヨウイチ)
廣木 一人 (ヒロキ カズヒト)
矢島 泉 (ヤジマ イズミ)
安田 尚道 (ヤスタ ナオミチ)
山下 喜代 (ヤマシタ キヨ)
<准教授>
大屋 多詠子 (オオヤ タエコ)

史学科

<教授>

青木 敦 (アオキ アツシ)
浅井 和春 (アサイ カズハル)
飯島 渉 (イジマ ワタル)
伊藤 定良 (イトウ サダヨシ)
岩田 みゆき (イワタ ミユキ)
小名 康之 (オナ ヤスユキ)
北村 優季 (キタムラ マサキ)
小林 和幸 (コバヤシ カズユキ)
阪本 浩 (サカモト ヒロシ)
清水 信行 (シミズ ノブユキ)
高橋 達史 (タカハシ タツシ)
手塚 直樹 (テヅカ ナオキ)
那須 輝彦 (ナス テルヒコ)
平田 雅博 (ヒラタ マサヒロ)
藤原 良章 (フジワラ ヨシアキ)
松尾 精文 (マツオ キョフミ)
三嶋 輝夫 (シマ テルオ)
安村 直己 (ヤスマラ ナオキ)
渡辺 節夫 (ワタナベ セツオ)

教育人間科学部

<教授>

伊藤 悟 (イトウ サトル)
緒方 孝文 (オガタ タカフミ)
<准教授>
高木 亜希子 (タカギ アキコ)
山本 史歩子 (ヤマモト シホコ)
<助教>
北村 哲 (キタムラ テツ)
高島 瑠依 (タカバタケ ルイ)

教育学科

<教授>

井上 直子 (イノウエ ナオコ)
今井 重孝 (イマイ シゲタカ)
大森 秀子 (オオモリ ヒデコ)
小田 光宏 (オダ ミツヒロ)
川崎 仁志 (カワサキ ヒトシ)
河本 洋子 (カワモト ヨウコ)
北本 正章 (キタモト マサアキ)
小林 紀子 (コバヤシ トシコ)
小森 茂 (コモリ シゲル)
酒井 豊 (サカイ ユカ)
鈴木 宏昭 (スズキ ヒロアキ)
鈴木 眞理 (スズキ マコト)
早坂 方志 (ハヤサカ マサシ)
樋田 大二郎 (ヒダ ダイジロウ)
古荘 純一 (フルシヨウ ジュンイチ)
安井 年文 (ヤスイ トシフミ)
柳田 雅明 (ヤナギダ マサアキ)
横山 徹 (ヨコヤマ トオル)
<特任教授>
藏元 幸二 (クラモト コウジ)
長嶋 清 (ナガシマ キヨシ)
野口 芳宣 (ノグチ ヨシノリ)

<准教授>

杉谷 祐美子 (スギタニ ユミコ)
野末 俊比古 (ノズエ トシヒコ)
藤田 幹夫 (フジタ ミキオ)
吉仲 淳 (ヨシナカ アツシ)

<助教>

佐々木 竜太 (ササキ リュウタ)

心理学科

<教授>

入不二 基義 (イリフジ モトヨシ)
遠藤 健治 (エンドウ ケンジ)
小俣 和義 (オマタ カズヨシ)
北村 文昭 (キタムラ フミアキ)
重野 純 (シゲノ スミ)
平山 栄治 (ヒラヤマ エイジ)
丸山 千秋 (マルヤマ チアキ)
山根 律子 (ヤマネ リツコ)

<准教授>

坂上 裕子 (サカガミ ヒロコ)

繁樹 江里 (シゲマス エリ)

薬師神 玲子 (ヤクシジン レイコ)

<助教>

駒屋 雄高 (コマヤ ユタカ)

経済学部

<教授>

遠藤 光暁 (エンドウ ミツアキ)
大島 力 (オオシマ チカラ)
小張 敬之 (オバリ ヒロユキ)
金田 由紀子 (カネダ ユキコ)
黒沼 健 (クロヌマ タケン)
三條 和博 (サンジョウ カズヒロ)
玉木 隆敏 (タマキ タカトシ)
橋本 清一 (ハシモト セイイチ)
堀 真理子 (ホリ マリコ)

<准教授>

メニッシュ (MENISH, M.C.)

経済学科

<教授>

石井 信之 (イシイ ノブユキ)
後藤 文廣 (ゴトウ フミヒロ)
白井 邦彦 (シライ クニヒコ)
白須 洋子 (シラス ヨウコ)
芹田 敏夫 (セリタ トシオ)
田付 茉莉子 (タツキ マリコ)
中込 正樹 (ナカゴメ マサキ)
中澤 進一 (ナカザワ シンイチ)
中村 まづる (ナカムラ マヅル)
成田 淳司 (ナリタ ジュンジ)
馬場 弓子 (ババ ユミコ)
平出 尚道 (ヒライデ ナオミチ)
平澤 典男 (ヒラサワ ノリオ)
本郷 茂 (ホンゴウ シゲル)
本間 照光 (ホンマ テルミツ)
松尾 孝一 (マツオ コウイチ)
矢吹 初 (ヤブキ ハジメ)
美添 泰人 (ヨシゾエ ヤスト)
米澤 義衛 (ヨネザワ ヨシエ)

<准教授>

高嶋 修一 (タカシマ シュウイチ)
永山 のどか (ナガヤマ ノドカ)
堀 健夫 (ホリ タケオ)
松本 茂 (マツモト シゲル)
水上 英貴 (ミズカミ ヒデキ)

<助教>

今 喜史 (イマ ヨシフミ)

現代経済デザイン学科

<教授>

井上 孝 (イノウエ タカシ)
須田 昌弥 (スダ マサヤ)
高橋 重雄 (タカハシ シゲオ)
高橋 朋一 (タカハシ トモカズ)
中川 辰洋 (ナカガワ タツヒロ)
西川 雅史 (ニシカワ マサシ)
藤村 学 (フジムラ マナブ)
堀場 勇夫 (ホリバ イサオ)
宮原 勝一 (ミヤハラ ショウイチ)

<准教授>

吉岡 祐次 (ヨシオカ ユウジ)

法学部

<教授>

ギブンス (GIVENS, S.B.)
芦原 貞雄 (アシハラ サダオ)
安藤 泰子 (アンドウ タイコ)
石井 光 (イシイ アキラ)
大石 泰彦 (オオイシ ヤスヒコ)
小蘭 康範 (オノノ ヤスノリ)
菊池 純一 (キクチ ジュンイチ)
許 末恵 (キョ スエ)
久保 茂樹 (クボ シゲキ) (法務研究科兼任)
酒井 安行 (サカイ ヤスユキ)
佐々木 高雄 (ササキ タカオ)
申 恵丰 (シン ヘボン)
住吉 雅美 (スミヨシ マサミ)
関 英昭 (セキ ヒデアキ)
墓 豊 (ダイ ユタカ)
チェン・ポール (チェン・ポール)
手塚 和彰 (テツカ カズアキ)
土橋 正 (ドバシ タダシ)
中村 芳昭 (ナカムラ ヨシアキ)
夏目 博明 (ナツメ ヒロアキ)
西澤 宗英 (ニシザワ ムネヒデア)
原口 健治 (ハラグチ ケンジ)
廣瀬 久和 (ヒロセ ヒサカズ)
藤川 久昭 (フジカワ ヒサアキ)
松川 実 (マツカワ ミノル)
三木 義一 (ミキ ヨシカズ)
安見 ゆかり (ヤスミ ユカリ)
山崎 敏彦 (ヤマザキ トシヒコ) (法務研究科兼任)
山田 央子 (ヤマダ エイコ)
吉田 直 (ヨシダ スナオ)

<准教授>

フクダ (FUKUDA, S.E.)
メニム (MENNIM, P.)
伊藤 敬也 (イトウ タカヤ)
大沢 光 (オオサワ ヒカル)
大山 和寿 (オオヤマ カズトシ)
岡田 直己 (オカダ ナオキ)
塩谷 直也 (シオタニ ナオヤ)
松田 憲忠 (マツダ ノリタダ)
室住 信子 (ムロズミ ノブコ)

<助教>

赤間 聡 (アカマ サトシ)
楊 林凱 (ヨウ リンガイ)

<客員教授>

宇佐美 洋 (ウサミ ヒロシ)

経営学部

経営学科

<教授>

荒木 万寿夫 (アラキ マスオ)
戒野 敏浩 (カイノ トシヒロ)
亀坂 安紀子 (カメサカ アキコ)
五味 慎太郎 (ゴミ シンタロウ)
佐藤 靖 (サトウ オサム)
塩澤 友規 (シオザワ トモキ)
高橋 邦丸 (タカハシ クニマル)
竹田 賢 (タケダ ケン)
玉木 欽也 (タマキ キンヤ)
東海 幹夫 (トウカイ ミキオ)
西村 優子 (ニシムラ ユウコ)
長谷川 信 (ハセガワ シン)
林 伸二 (ハヤシ シンジ)
安田 洋史 (ヤスダ ヒロシ)
山本 寛 (ヤマモト ヒロシ)
尹 志煌 (ユン シウウ)

<准教授>

上枝 正幸 (ウエエダ マサユキ)
楠 由記子 (クス ユキコ)
高松 朋史 (タカマツ トモフミ)
竹内 規彦 (タケウチ ノリヒコ)
立石 義明 (タテishi ヨシアキ)
矢澤 憲一 (ヤザワ ケンイチ)
矢内 一利 (ヤナイ カズトシ)
山下 勝 (ヤマシタ マサル)

マーケティング学科

<教授>

ダフ (DUFF, B.R.)
岩田 伸人 (イワタ ノブト)
薄上 二郎 (ウスガミ ジロウ)
小野 譲司 (オノ ジョウジ)
鹿島 浩之 (カシマ ヒロユキ)
加藤 篤史 (カトウ アツシ)
佐川 和茂 (サガワ カズシゲ)
佐藤 亨 (サトウ トオル)
宋 連玉 (ソン ヨンオク)
田中 正郎 (タナカ マサオ)
芳賀 康浩 (ハガ ヤスヒロ)
三村 優美子 (ミムラ ユミコ)
森川 信男 (モリカワ ノブオ)

<准教授>

東 伸一 (アズマ ノブカズ)
大道 千穂 (オオミチ チホ)
島田 淳二 (シマダ ジュンジ)
高砂 民宣 (タカサゴ タミノブ)
土橋 治子 (ツチハシ ハルコ)
當間 麗 (トウマ ウララ)
永井 忠孝 (ナガイ タダタカ)
宮崎 純一 (ミヤザキ ジュンイチ)

<助教>

理工学部

<教授>

蔭山 友行 (カゲヤマ トモユキ)
加島 健 (カシマ タケシ)
川口 悦 (カワグチ エツ)
瀧本 将弘 (タキモト マサヒロ)
中園 嘉巳 (ナカゾノ ヨシミ)
中村 功 (ナカムラ イサオ)

<准教授>

ペイゲル (PAGEL, J.W.)
リーディ (REEDY, D.W.)
谷口 裕子 (タニグチ ユウコ)

物理・数理学科

<教授>

秋光 純 (アキミツ ジュン)
久保 健 (クボ ケン)
薩摩 順吉 (サツマ ジュンキチ)
高野 恭一 (タカノ キョウイチ)
中山 裕道 (ナカヤマ ヒロミチ)
西尾 泉 (ニシオ イズミ)
西山 享 (ニシヤマ キョウ)
古川 信夫 (フルカワ ノブオ)
松川 宏 (マツカワ ヒロシ)
吉田 篤正 (ヨシダ アツマサ)

<准教授>

北野 晴久 (キタノ ハルヒサ)
谷口 健二 (タニグチ ケンジ)
馬場 彩 (バンバ アヤ)
前田 はるか (マエダ ハルカ)
増田 哲 (マズダ テツ)
三井 敏之 (ミツイ トシユキ)
山崎 了 (ヤマザキ リョウ)

<助教>

磯島 伸 (イソジマ シン)
井上 剛志 (イノウエ ツヨシ)
大槻 道夫 (オオツキ ミチオ)
小林 夏野 (コバヤシ カヤ)
榎 直人 (サカキ ナオト)
佐藤 正寛 (サトウ マサヒロ)
鈴木 正 (スズキ セイ)
高峰 愛子 (タカミネ アイコ)
藤井 康裕 (フジイ ヤスヒロ)
村田 実貴生 (ムラタ ミキオ)
村中 隆弘 (ムラナカ タカヒロ)
山岡 和貴 (ヤマオカ カズタカ)

<理工学部講師>

青木 和巳 (アオキ カズミ)

化学・生命科学科

<教授>

阿部 二郎 (アベ ジロウ)
木村 純二 (キムラ ジュンジ)
小林 迪夫 (コバヤシ ミチオ)
重里 有三 (シゲサト ユウゾウ)
杉村 秀幸 (スギムラ ヒデオキ)

鈴木 正 (スズキ タダシ)
武内 亮 (タケウチ リョウ)
田代 朋子 (タシロ トモコ)
長谷川 美貴 (ハセガワ ミキ)
宮野 雅司 (ミヤノ マサシ)

<准教授>

阿部 文快 (アベ フミヨシ)
中田 恭子 (ナカダ キョウコ)

<助教>

磯崎 輔 (イソザキ タスク)
岡 伸人 (オカ ノブト)
小野寺 玄 (オノデラ ゲン)
川島 麗 (カワシマ レイ)
高橋 勇雄 (タカハシ イサオ)
辻本 恭 (ツジモト タカシ)
根岸 隆之 (ネギシ タカユキ)
優 乙石 (ユウ イッセキ)

<理工学部講師>

稲吉 倫子 (イナヨシ トモコ)
<助手>
河合 重和 (カワイ シゲカズ)

電気電子工学科

<教授>

井出 英人 (イデ ヒデト)
澤邊 厚仁 (サワベ アツヒト)
地主 創 (ジヌシ ハジメ)
中田 時夫 (ナカダ トキオ)
永田 勇二郎 (ナガタ ユウジロウ)
橋本 修 (ハシモト オサム)
林 洋一 (ハヤシ ヨウイチ)
松谷 康之 (マツヤ ヤスユキ)

<准教授>

外林 秀之 (ソトバヤシ ヒデオキ)
春山 純志 (ハルヤマ ジュンジ)
米山 淳 (ヨネヤマ ジュン)

<助教>

児玉 英之 (コタマ ヒデオキ)
名取 賢二 (ナトリ ケンジ)
水崎 壮一郎 (ミズサキ ソウイチロウ)

<助手>

浅野 裕俊 (アサノ ヒロトシ)
井岡 恵理 (イオカ エリ)
今村 薫 (イマムラ コオル)
内田 ゆず (ウチダ ユズ)
風間 保裕 (カザマ ヤスヒロ)
須賀 良介 (スガ リョウスケ)
三瀬 貴寛 (ミセ タカヒロ)
吉田 隆弘 (ヨシダ タカヒロ)

機械創造工学科

<教授>

大石 進 (オオイシ ススム)
岡田 昌志 (オカダ マサシ)
小川 武史 (オガワ タケシ)
小林 信之 (コバヤシ ノブユキ)
林 光一 (ハヤシ コウイチ)

横田 和彦 (ヨコタ カズヒコ)
渡邊 昌宏 (ワタナベ マサヒロ)

<准教授>

長 秀雄 (チョウ ヒデオ)
米山 聡 (ヨネヤマ サトル)

<助教>

浅岡 龍徳 (アサオカ タツノリ)
橋本 宣慶 (ハシモト ノブヨシ)
原 謙介 (ハラ ケンスケ)
松尾 卓摩 (マツオ タクマ)
山田 英助 (ヤマダ エイスケ)

<助手>

有川 秀一 (アリカワ シュウイチ)
金田 忍 (カナダ シノブ)
姜 東赫 (カン ドンヒョク)

経営システム工学科

<教授>

天坂 格郎 (アマサカ カクロウ)
石津 昌平 (イシズ ショウヘイ)
熊谷 敏 (クマガイ ヒサシ)
松本 俊之 (マツモト トシユキ)

<准教授>

大内 紀知 (オウチ ノリトモ)
宋 少秋 (ソン ショウシュウ)
日吉 久礎 (ヒヨシ ヒサモト)
水山 元 (ミズヤマ ハジメ)

<助教>

中田 洋平 (ナカダ ヨウヘイ)
松浦 峻 (マツウラ シュン)

<理工学部講師>

安瀬 美知子 (アンセ ミチコ)
<助手>

梶山 朋子 (カジヤマ トモコ)
金子 雅明 (カネコ マサアキ)
繁住 健哉 (シゲズミ タケヤ)
早坂 弘達 (ハヤサカ ヒロタツ)

情報テクノロジー学科

<教授>

テュールスト (DUERST, M.J.)
小宮山 摂 (コミヤマ セツ)
佐久田 博司 (サクタ ヒロシ)
鷺見 和彦 (スミ カズヒコ)
原田 実 (ハラダ ミノル)
水澤 純一 (ミズサワ ジュンイチ)
山口 博明 (ヤマグチ ヒロアキ)

<准教授>

大原 剛三 (オオハラ コウゾウ)
<助教>

河上 篤史 (カワカミ アツシ)
狐崎 直文 (キツネザキ ナオフミ)
斉藤 友彦 (サイトウ トモヒコ)
藤本 悠 (フジモト ユウ)
松田 源立 (マツダ ヨシタツ)
武藤 剛 (ムトウ タケシ)
矢吹 太郎 (ヤブキ タロウ)

<助手>

松原 俊一(マツバラ シュンイチ)

国際政治経済学部

<教授>

嶋田 順好(シマダ マサヨシ)

国際政治学科

<教授>

青井 千由紀(アオイ チユキ)

押村 高(オシムラ タカシ)

菊池 努(キクチ ツトム)

小島 敏郎(コジマ トシロウ)

土山 實男(ツチヤマ ジツオ)

中山 俊宏(ナカヤマ トシヒロ)

納家 政嗣(ナヤ マサツグ)

袴田 茂樹(ハカマダ シゲキ)

羽場 久美子(ハバ クミコ)

<准教授>

阿部 達也(アベ タツヤ)

倉松 中(クラマツ ナカシ)

武田 興欣(タケダ オキヨシ)

<助教>

和田 洋典(ワダ ヒロノリ)

国際経済学科

<教授>

内田 達也(ウチダ タツヤ)

内山 義英(ウチヤマ ヨシヒデ)

大野 昭彦(オノ アキヒコ)

岡村 稔(オカムラ ミノル)

木村 光彦(キムラ ミツヒコ)

仙波 憲一(センバ ケンイチ)

友原 章典(トモハラ アキノリ)

中川 浩宣(ナカガワ ヒロノブ)

本田 重美(ホンダ シゲミ)

港 徹雄(ミナト テツオ)

<准教授>

飯坂 ひとみ(イザカ ヒトミ)

竹田 憲史(タケタ ケンシ)

<専任講師>

瀬尾 佳美(セオ カミ)

<助教>

上原 克仁(ウエハラ カツヒト)

国際コミュニケーション学科

<教授>

エバノフ (EVANOFF, R.J.)

ポダルコ (PODALKO, P.)

井川 肇(イカワ ハジメ)

大久保 典子(オオクボ ミチコ)

抱井 尚子(カカイ ヒサコ)

狩野 良規(カノウ ヨシキ)

末田 清子(スエダ キヨコ)

田辺 正美(タナベ マサミ)

陳 継東(チン ケイトウ)

林 世景(リン セイケイ)

渡邊 千秋(ワタナベ チアキ)

<准教授>

幸地 茂(コウチ シゲル)

國分 俊宏(クニヅミ トシヒロ)

猿橋 順子(サルハシ ジュンコ)

田崎 勝也(タサキ カツヤ)

総合文化政策学部

<教授>

井口 典夫(イグチ ノリオ)

石崎 晴己(イシザキ ハルミ)

内山 隆(ウチヤマ タカシ)

梅津 順一(ウメツ ジュンイチ)

大島 正嗣(オオシマ マサツグ)

岡 真理子(オカ マリコ)

岡部 篤行(オカベ アツユキ)

懸田 豊(カケダ ユウカ)

黒石 いずみ(クロイシ イズミ)

茂 牧人(シゲル マキト)

杉浦 勢之(スギウラ セイシ)

鈴木 博之(スズキ ヒロユキ)

東方 敬信(トウボウ ヨシノブ)

鳥越 けい子(トリゴエ ケイコ)

中野 昌宏(ナカノ マサヒロ)

福岡 伸一(フクオカ シンイチ)

堀内 正博(ホリウチ マサヒロ)

真鍋 一史(マナベ カズフミ)

宮澤 淳一(ミヤザワ ジュンイチ)

<准教授>

沖本 幸子(オキモト ユキコ)

関根 小織(セキネ サオリ)

竹内 孝宏(タケウチ タカヒロ)

矢野 晋吾(ヤノ シンゴ)

<助教>

福田 大輔(フクダ ダイスケ)

社会情報学部

<准教授>

大宮 謙 (オオミヤ ケン)

<助教>

阿部 慶賀 (アベ ケイガ)

齋藤 裕 (サイトウ ユカ)

社会情報学科

<教授>

飯島 泰裕 (イジマ ヤスヒロ)

石田 博之 (イシダ ヒロユキ)

稲積 宏誠 (イナヅミ ヒロシゲ)

岩井 千尋 (イワイ チヒロ)

魚住 清彦 (ウオズミ キヨヒコ)

苅宿 俊文 (カリヤド トシブミ)

小池 和彦 (コイケ カズヒコ)

佐伯 胖 (サエキ ユカ)

清水 康司 (シミズ ヤスシ)

高木 光太郎 (タカギ コウタロウ)

長橋 透 (ナガハシ トオル)

開澤 栄相 (ヒラキザワ エイスケ)

吹春 俊隆 (フキハル トシタカ)

福田 亘孝 (フクダ ノブタカ)

増永 良文 (マズナガ ヨシフミ)

宮川 裕之 (ミヤガワ ヒロユキ)

村川 久子 (ムラカワ ヒサコ)

矢野 公一 (ヤノ コウイチ)

<准教授>

ランバッカー (LAMBACHER, S.G.)

伊藤 一成 (イトウ カズナリ)

清成 透子 (キヨナリ トオコ)

寺尾 敦 (テラオ アツシ)

伏屋 広隆 (フシヤ ヒロタカ)

宮治 裕 (ミヤジ ユカ)

<助教>

東 るみ子 (アズマ ルミコ)

遠藤 俊典 (エンドウ トシノリ)

高村 正志 (タカムラ マサシ)

南部 和香 (ナンブ カズカ)

<助手>

森田 武史 (モリタ タケシ)

学内兼任

法学研究科

<特任教授>

小林 一郎 (コバヤシ イチロウ)

総合文化政策学研究科

<特任教授>

青木 保 (アオキ タモツ)

国際マネジメント研究科

<教授>

岩井 千明 (イワイ チアキ)

小林 孝雄 (コバヤシ タカオ)

榊原 正幸 (サカキバラ マサユキ)

中里 宗敬 (ナカサト ムネノリ)

西谷 幸介 (ニシタニ コウスケ)

法務研究科 法務専攻

<教授>

レンツ (LENZ, K.F.)

関 武志 (セキ タケシ)

芹沢 斉 (セリザワ ヒトシ)

新倉 修 (ニクラ オサム)

宮崎 万壽夫 (ミヤザキ マスオ)

山崎 敏彦 (ヤマザキ トシヒコ)

<客員教授>

永井 均 (ナガイ ヒトシ)

会計プロフェッション研究科

<教授>

唐沢 昌敬 (カラサワ マサタカ)

多賀谷 充 (タガヤ ミツル)

<客員教授>

平 仁 (ヒライ ヒトシ)

<特任教授>

吉村 貞彦 (ヨシムラ サダヒコ)

<准教授>

久持 英司 (ヒサモチ エイジ)

院内兼任

短期大学

河見 誠 (カミ マコト)

齋藤 修三 (サイトウ シュウゾウ)

橋本 典子 (ハシモト ノリコ)

松村 伸一 (マツムラ シンイチ)

湯本 久美子 (ユモト クミコ)

幼稚園

多々内 三恵子 (タタウチ ミエコ)

大学特別招聘教授

小倉 和夫 (オクラ カズオ)

榊原 英資 (サカキバラ エイスケ)

非常勤講師

アンダーソン (ANDERSON, T.C.)

アンドラディ (ANDRADE, M.)

アームストロング

(ARMSTRONG, W.H.)

オードリー (AUDOLY, E.)

バランス (BALLANCE, T.L.)

バラット (BARAT, R.)

バスソ (BASSO, R.J.)

バウマン (BAUMAN, J.)

バインダー (BINDER, S.R.)

ビゼ (BIZET, F.)

ボダン (BODIN, E.)

ボリンジャー (BOLLINGER, D.J.)

ボレンステン (BORENSTEIN, C.)

ブラウン、A. (BRAUN, A.)

ブレッフエール (BREFUEL, R.)

ブロードブリッジ

(BROADBRIDGE, J.R.)

ブルック (BROOKE, S.J.)

ブラウニング (BROWNING, T.L.)

ブルース (BRUCE, J.M.)

バックレー (BUCKLEY, H.L.)

ブラック (BULACH, J.J.)

バント (BUNDT, L.L.)

バトラー、B.J. (BUTLER, B.J.)

カルトン (CARTON, M.)

カズウェル (CASWELL, I.M.)

クープ (COOP, S.L.)

コンルール (CONREUR, G.)

コートニー (COURTNEY, G.R.)

クレイグ (CRAIG, J.R.)

クレイン (CRANE, G.A.)

クラウン (CROWN, K.A.)

ダーリン (DARLING, M.W.)

ドゥ ウルフ (DE WOLF, C.)

デニー (DENNY, J.S.)

ドーラン (DORAN, S.)

ダイグナン (DUIGNAN, R.)

ドボルジャーク (DVORJAK, Y.)

エリオット (ELLIOTT, M.)

フォスター、J. (FOSTER, J.J.)

フレンドーフ (FUHLENDORF, A.M.)

ガルシアールイス (GARCIA-RUIZ, P.)

ガブリロワ (GAVRILOVA, M.)

ガーション (GERSHON, B.)

ガダード (GODDARD, J.A.)

グレイ (GRAY, M.A.)

ホイサーマン、P.

(HAEUSSERMANN, P.)

ハードグレイヴ (HARDGRAVE, B.J.)

ハーバー (HARPER, P.A.K.)

ヒントンの、R.D. (HINTON, R.D.)

ハウル (HOWL, P.F.)

ジャンセン (JANSEN, W.A.)

カミムラ タンウォング

(KAMIMURA, T.H.)

カーリン (KARLIN, O.C.)

カズマー (KASMER, W.B.)

ケン フジオカ (KEN FUJIOKA)

ランバート (LAMBERT, N.)

ローガン (LOGAN, R.A.JR.)

マディーン (MADEEN, E.C.)

マレシャル (MARECHAL, B.)

マーティン (MARTIN, J.P.)

マクエバリ (McEVILLY, P.M.)

ミーハン (MEEHAN, K.)

ミニオン (MIGNON, E.T.)

ミゲス (MIGUEZ, G.V.)

マルチアドス (MULTIADOUS, M.M.)

モハメッド (MOHAMED, G.A.)

ネルソン (NELSON, F.M.)

オチャンド (OCHANDO, F.)

オクハラ-カズウェル

(OKUHARA-CASWELL)

モミヤマ (ORDONEZ DE MOMIYAMA, M.)

パタン (PATIN, C.)

ペンゴスロ (PENGOSRO, E.K.)

ピーターソン (PETERSON, L.M.)

ポポフスキー (POPOVSKI, V.)

ポーシャック (POULSHOCK, J.W.)

プラスキー (PULASKI, J.C.)

ラフボ (RACHUBO, A.P.)

ラルフ (RALPH, B.J.)

レイナード (RANARD, A.B.)

リーバー (REBER, M.F.)

リー、S. (REE, S.A.)

ライリー (REILLY, J.E.)

ライマン (REIMANN, A.N.)

ルヌール (RENOUL, C.)

ロバートソン (ROBERTSON, P.E.)

ローゼンキヤー (ROSENKJAR, P.R.)

ローワン (ROWAN, P.A.R.)

ルシンスキー (RUCYNSKI, T.J.)

ラファエル (RUIZ, RAFAEL)

シェイド (SHADE, E.)

ソロモンス (SOLOMONS, R.A.)

タケダ (TAKEDA, N.K.)

タニグチ (TANIGUCHI, J.M.)

トムソン (THOMSON, B.J.)

トッテン (TOTTEN, P.J.)

タイナー (TYNER, C.H.)

ウチダ (UCHIDA, A.)

ヴァジラサーン (VAJIRASARN, A.)

バルギース (VARGHESE, M.)

ヴォート (VOGT, L.)

ウォルツァー (WALZER, R.)

ヨダ (YODER, R.S.)

ヤング (YOUNG, J.)

ジャンジェ (ZHANJE, T.W.)

青木 敦子 (アオキ アツコ)

青木 詔司 (アオキ ショウジ)

青木 久子 (アオキ ヒサコ)

青柳 いづみこ (アオヤギ イヅミコ)

青山 清英 (アヤマ キョヒデ)	石井 仁 (イシイ ヒトシ)	植芝 牧 (ウエシバ マキ)	大輪 公彦 (オウ コウイチ)
青山 治世 (アヤマ ハルトシ)	石川 健治 (イシカワ ケンジ)	上田 修一 (ウエダ シュウイチ)	小笠原 耕司 (オガサワラ コウジ)
赤崎 祐子 (アカサキ ユウコ)	石川 泰 (イシカワ タイ)	植田 みどり (ウエダ ミドリ)	小笠原 弘幸 (オガサワラ ヒロユキ)
赤平 恵理 (アカヒラ エリ)	石黒 敏明 (イシクロ トシアキ)	上原 行義 (ウエハラ コウギ)	岡田 純一 (オカダ ジュンイチ)
秋場 勝彦 (アキバ カツヒコ)	石黒 弓美子 (イシクロ ユミコ)	上原 美知子 (ウエハラ ミチコ)	小方 伴子 (オガタ トモコ)
秋元 実治 (アキモト ミノジ)	石橋 和代 (イシハシ カズヨ)	植松 希久磨 (ウエマツ キクマ)	岡留 聡子 (オガドメ サトコ)
秋山 聰 (アキヤマ アキラ)	石橋 満 (イシハシ ミツル)	植松 公彦 (ウエマツ キミヒコ)	岡野 智彦 (オカノ トモヒコ)
秋山 映一 (アキヤマ エイチ)	石原 信一 (イシハラ シンイチ)	上村 佳世子 (ウエムラ カヨコ)	岡村 陽子 (オカムラ ヨウコ)
秋山 茂幸 (アキヤマ シゲユキ)	石原 比伊呂 (イシハラ ヒイロ)	上村 威 (ウエムラ タケシ)	岡本 さだこ (オカモト サダコ)
秋山 武清 (アキヤマ タケキヨ)	石本 英彦 (イシモト ヒデヒコ)	植村 恒一郎 (ウエムラ ツネイチロウ)	小川 誠子 (オガワ セイコ)
秋山 靖浩 (アキヤマ ヤスヒロ)	石森 大知 (イシモリ タイチ)	植村 朋弘 (ウエムラ トモヒロ)	小川 忠 (オガワ タダシ)
阿久津 純恵 (アツ スミエ)	伊集院 睦雄 (イジウイン ムツオ)	魚谷 武志 (ウオタニ タケシ)	小川 ルビー (オガワ ルビー)
浅野 清彦 (アサノ キョヒコ)	石渡 彰二 (イシワタ ショウジ)	右近 修治 (ウコン シュウジ)	沖 一雄 (オキ カズオ)
朝比奈 大作 (アサヒナ ダイサク)	石和田 昌利 (イシワダ マサトシ)	宇田川 久美子 (ウダガワ クミコ)	沖塩 有希子 (オキシオ ユキコ)
朝広 謙次郎 (アサヒロ ケンジロウ)	泉 忠司 (イズミ タダシ)	内桶 真二 (ウチオケ シンジ)	荻野 克美 (オギノ カツミ)
浅利 浩一 (アサリ コウイチ)	磯山 久美子 (イソヤマ クミコ)	内田 英二 (ウチダ エイジ)	沖山 充 (オキヤマ ミツル)
東 徹 (アズマ トオル)	板井 広明 (イタイ ヒロアキ)	内田 啓一 (ウチダ ケイチ)	荻原 幸子 (オギワラ サチコ)
東 英弥 (アズマ ヒデヤ)	板垣 良一 (イタガキ リョウイチ)	内田 滋 (ウチダ シゲル)	奥田 英信 (オクダ ヒデノブ)
麻生 英子 (アソウ エイコ)	市川 やよい (イチカワ ヤヨイ)	内田 有紀 (ウチダ ユウキ)	奥野 理恵子 (オクノ リエコ)
足立 崇 (アダチ タカシ)	市来 崙 治 (イチキザキ オサム)	内田 利業 (ウチダ リナ)	奥村 大志 (オクムラ タイシ)
新井 恵理 (アライ エリ)	市倉 信義 (イチクラ ノボヨシ)	内山 幸久 (ウチヤマ ユキヒサ)	小倉 ひろみ (オクラ ヒロミ)
荒井 健二郎 (アライ ケンジロウ)	井出 功一 (イデ コウイチ)	宇野 雅章 (ウノ マサアキ)	生越 まり子 (オゴシ マリコ)
荒井 幸康 (アライ ユキヤス)	伊藤 亜紗 (イトウ アサ)	浦部 尚志 (ウラベ タカシ)	織田 弥生 (オダ ヤヨイ)
荒川 慎太郎 (アラカワ シンタロウ)	伊藤 健一郎 (イトウ ケンイチロウ)	占部 雅一 (ウラベ マサカズ)	鬼丸 洋 (オニマル ヒロシ)
荒木 暉 (アラキ ヒカル)	伊藤 仁美 (イトウ サトミ)	江田 幸子 (エダ サチコ)	鬼山 敬邦 (オニヤマ タカクニ)
荒巻 朋子 (アラマキ トモコ)	伊藤 丈人 (イトウ タケヒト)	衛藤 英達 (エトウ ヒデサト)	小野 晃典 (オノ アキノリ)
新目 真紀 (アラム マキ)	伊藤 直 (イトウ タダシ)	海老沢 達郎 (エビサワ タツオ)	小野 新 (オノ アラタ)
新谷 淳一 (アヲヤ ジュンイチ)	伊藤 忠弘 (イトウ タダヒロ)	遠藤 恭一 (エンドウ キョウイチ)	小野 公一 (オノ コウイチ)
有川 雅裕 (アリカワ マサヒロ)	伊藤 徹哉 (イトウ テツヤ)	王 凌 (オウ リョウ)	小野 俊太郎 (オノ シュンタロウ)
安家 達也 (アンケ タツヤ)	伊藤 匡美 (イトウ マサミ)	王 敏 (オウ ビン)	小野 壽美子 (オノ スミコ)
安齋 有紀 (アンザイ ユキ)	伊東 弥香 (イトウ ミカ)	大川 裕子 (オオカワ ユウコ)	小野 正敏 (オノ マサトシ)
安西 弥生 (アンザイ ヤヨイ)	井戸 美里 (イド ミサト)	大木 京子 (オオキ キョウコ)	小野 森都子 (オノ モトコ)
安藤 勉 (アンドウ ツトム)	伊奈 久喜 (イナ ヒサヨシ)	大窪 高志 (オオクボ タカシ)	尾上 正博 (オノウエ マサヒロ)
安藤 壽茂 (アンドウ ヒサシゲ)	稲垣 久和 (イナガキ ヒサカズ)	大久保 哲也 (オオクボ テツヤ)	小野田 撰子 (オノダ セツコ)
李 恵淑 (イ ヘスク)	稲垣 文男 (イナガキ フミオ)	太下 義之 (オオシタ ヨシユキ)	小野塚 久枝 (オノヅカ ヒサエ)
飯倉 洋一 (イクラ ヨウイチ)	稲富 三夫 (イナトミ ミツオ)	大島 有子 (オオシマ アリス)	小幡 一雄 (オバタ カズオ)
飯沢 耕太郎 (イイザワ コウタロウ)	井野 葉子 (イノ ヨウコ)	太田 和子 (オオタ カズコ)	小幡 勝彦 (オバタ カツヒコ)
飯田 晴巳 (イイダ ハルミ)	井上 恵子 (イノウエ ケイコ)	太田 さつき (オオタ サツキ)	小畑 精和 (オバタ ヨシカズ)
飯田 道子 (イイダ ミチコ)	井上 順雄 (イノウエ ノブオ)	大竹 誠 (オオタケ マコト)	小原 進 (オハラ ススム)
飯田 義明 (イイダ ヨシアキ)	井上 正 (イノウエ マサシ)	大谷 康晴 (オオタニ ヤスハル)	小原 格 (オハラ ツトム)
飯野 明 (イイノ アキラ)	井上 美砂 (イノウエ ミサ)	大津 浩 (オオツ ヒロシ)	小俣 一平 (オマタ イッペイ)
生田 かおる (イクタ カオル)	井上 裕夫 (イノウエ ヤスオ)	大槻 直子 (オオツキ ナオコ)	小山 望 (オヤマ ノゾミ)
井口 磯夫 (イグチ イソオ)	井上 泰日子 (イノウエ ヤスヒコ)	大出 敦 (オオデ アツシ)	恩田 英治 (オンダ ヒデハル)
池内 守厚 (イケウチ モリアツ)	猪塚 元 (イノヅカ ハジメ)	大西 幸子 (オオニシ サチコ)	甲斐 基文 (カイ モトフミ)
池田 明子 (イケダ アキコ)	今井 章久 (イマイ アキヒサ)	大沼 博靖 (オオヌマ ヒロヤス)	甲斐 利恵子 (カイ リエコ)
池田 明史 (イケダ アキフミ)	今井 邦雄 (イマイ クニオ)	大野 伸 (オオノ シン)	香川 知晶 (カガワ チアキ)
池田 和子 (イケダ カズコ)	今井 福司 (イマイ フクジ)	大野 秀夫 (オオノ ヒデオ)	柿崎 孝夫 (カキザキ タカオ)
池田 早苗 (イケダ サナエ)	今泉 美由紀 (イマイズミ ミユキ)	大野 広之 (オオノ ヒロユキ)	柿元 資子 (カキモト モトコ)
池田 信夫 (イケダ ノブオ)	今川 正浩 (イマガワ マサヒロ)	大場 静枝 (オオバ シズエ)	賀来 道生 (カク ミチオ)
池田 まさみ (イケダ マサミ)	井村 俊義 (イムラ トシヨシ)	大橋 知子 (オオハシ トモコ)	河西 由美子 (カサイ ユミコ)
池田 満 (イケダ ミツル)	伊興田 正彦 (イヨダ マサヒコ)	大橋 直義 (オオハシ ナオヨシ)	笠羽 晴夫 (カサバ ハルオ)
池田 稔 (イケダ ミノル)	岩井 克文 (イワイ カツフミ)	大橋 憲広 (オオハシ ノリヒロ)	風間 賢二 (カザマ ケンジ)
石井 一平 (イシイ イッペイ)	岩下 誠 (イワシタ アキラ)	大原 一元 (オオハラ カズモト)	加島 勝 (カシマ マサル)
石井 啓子 (イシイ ケイコ)	岩田 淳子 (イワタ アツコ)	大房 潤一 (オオフサ ジュンイチ)	片上 英俊 (カタカミ ヒデトシ)
石井 恵子 (イシイ ケイコ)	岩原 武則 (イワハラ タケノリ)	大堀 壽夫 (オオホリ トシオ)	片桐 祐 (カタギリ ユウ)
石井 丈二 (イシイ タケジ)	岩丸 良明 (イワマル ヨシアキ)	大嶺 せい子 (オオミネ セイコ)	片野 修一郎 (カタノ シュウイチロウ)
石井 信明 (イシイ ノブアキ)	上杉 嘉見 (ウエスギ ヨシミ)	大山 恭子 (オオヤマ キョウコ)	片見 彰夫 (カタミ アキオ)

片山 等 (カタヤマ ヒトシ)	姜 公淑 (カン コンス)	軍司 敦子 (グンシ アツコ)	齋藤 かおる (サイトウ カオル)
勝田 千恵子 (カツダ チエコ)	神崎 繁 (カンザキ シゲル)	毛塚 敦 (ケヅカ アツシ)	齋藤 敬子 (サイトウ ケイコ)
勝西 良典 (カツニシ ヨシノリ)	菊池 韶彦 (キクチ アキヒコ)	小池 茂子 (コイケ シゲコ)	斎藤 祥恵 (サイトウ サチエ)
勝又 恵理子 (カツマタ エリコ)	菊池 進 (キクチ ススム)	小池 惇平 (コイケ ジュンペイ)	齋藤 直 (サイトウ ナオ)
勝山 裕之 (カツヤマ ヒロユキ)	菊池 哲也 (キクチ テツヤ)	小池 政行 (コイケ マサユキ)	齋藤 長行 (サイトウ ナガユキ)
加藤 章 (カトウ アキラ)	木崎 悠子 (キザキ ユウコ)	小泉 晋一 (コイズミ シンイチ)	斎藤 博 (サイトウ ヒロシ)
加藤 敦子 (カトウ アツコ)	岸 彩子 (キシ アヤコ)	小泉 徹 (コイズミ トオル)	斎藤 正武 (サイトウ マサタケ)
加藤 恵子 (カトウ ケイコ)	北垣 潔 (キタガキ キヨシ)	小磯 花絵 (コイソ ハナエ)	齋藤 希史 (サイトウ マレシ)
加藤 譲 (カトウ ジョウ)	北出 広子 (キタデ ヒロコ)	黄 漢青 (コウ カンセイ)	齋野 岳廊 (サイノ タケロウ)
加藤 尚子 (カトウ ナオコ)	北野 良枝 (キタノ ヨシエ)	郷 義孝 (ゴウ ヨシタカ)	佐伯 奈津子 (サエキ ナツコ)
加藤 弘子 (カトウ ヒロコ)	北村 麻紀子 (キタムラ マキコ)	河野 貴美子 (カノノ キミコ)	酒井 和子 (サカイ カズコ)
加藤 宏 (カトウ ヒロシ)	北村 昌彦 (キタムラ マサヒコ)	河野 康成 (カノノ ヤスナリ)	酒井 智宏 (サカイ トモヒロ)
加藤 麻衣子 (カトウ マイコ)	北山 雅昭 (キタヤマ マサアキ)	小枝 義人 (コエダ ヨシト)	酒井 潔 (サカイ キヨシ)
加藤 昌弘 (カトウ マサヒロ)	橋川 武郎 (キツカワ タケオ)	国分 峰樹 (クニヰ ミネキ)	酒井 幸子 (サカイ サチコ)
加藤 めぐみ (カトウ メグミ)	橋田 栄子 (キツタ エイコ)	越川 邦夫 (コシカワ クニオ)	酒井 良清 (サカイ ヨシキヨ)
香取 英男 (カトリ ヒデオ)	橋田 正造 (キツタ ショウゾウ)	小島 慶一 (コジマ ケイイチ)	榊原 英資 (サカキハラ エイスケ)
金井 光太郎 (カナイ コウタロウ)	木野井 美紗子 (キノイ ミサコ)	小島 章子 (コジマ ショウコ)	阪口 美津子 (サカグチ ミツコ)
金杉 憲治 (カナシギ ケンジ)	木原 朝子 (キハラ アサコ)	小嶋 久子 (コジマ ヒサコ)	坂野 慎二 (サカノ シンジ)
金沢 陽 (カナザワ ヨウ)	金 愛慶 (キム エキヨウ)	小嶋 聡子 (コジマ トモコ)	坂原 眞里 (サカハラ マリ)
金田 耕一 (カナダ コウイチ)	金 敬黙 (キム ケイムク)	兒島 峰 (コジマ ミネ)	坂部 正治 (サカベ マサハル)
金丸 芙美 (カナマル フミ)	金 恵信 (キム ヘシン)	小島 優子 (コジマ ユウコ)	坂元 忠明 (サカモト タダアキ)
金森 努 (カナモリ ツトム)	木村 武雄 (キムラ タケオ)	小嶋 洋介 (コジマ ヨウスケ)	坂本 秀人 (サカモト ヒデト)
金谷 美紗 (カナヤ ミサ)	木村 利夫 (キムラ トシオ)	小谷 真理子 (コタニ マリコ)	坂本 誠 (サカモト マコト)
金谷 良夫 (カナヤ ヨシオ)	木村 みどり (キムラ ミドリ)	児玉 公信 (コジマ キミノブ)	桜井 恵子 (サクライ ケイコ)
金子 一秀 (カネコ カズヒデ)	木元 豊 (キモト ユタカ)	児玉 正博 (コジマ マサヒロ)	櫻井 道子 (サクライ ミチコ)
金子 憲 (カネコ アキラ)	久野 康彦 (キウノ ヤスヒコ)	後藤 和子 (ゴトウ カズコ)	笹川 あゆみ (ササガワ アユミ)
金子 智太郎 (カネコ トモタロウ)	清野 嘉之 (キヨノ ヨシユキ)	後藤 直 (ゴトウ ナガシ)	佐々木 三郎 (ササキ サブロウ)
兼利 琢也 (カネトシ タクヤ)	吉良 文孝 (キラ フミタカ)	小林 愛明 (コバヤシ アイメイ)	佐々木 恵 (ササキ メグミ)
兼平 充明 (カネヒラ ミツアキ)	桐谷 佳裕 (キリタニ ヨシヒロ)	小林 亜起子 (コバヤシ アキコ)	笹倉 優 (ササクラ ユサル)
金山 秋男 (カナヤマ アキオ)	桐谷 栄希 (キリヤ エイキ)	小林 加奈子 (コバヤシ カナコ)	左治木 吾郎 (サジキゴロウ)
狩野 昌央 (カノウ マサヒロ)	金 琦 (キン キ)	小林 群司 (コバヤシ グンジ)	佐志田 晶夫 (サシダ アキオ)
狩野 雄 (カノウ ユウ)	日下 正一 (クサカ ショウイチ)	小林 賢司 (コバヤシ ケンジ)	佐竹 由帆 (サタケ ヨシホ)
鎌田 裕美 (カマタ ヒロミ)	楠 裕行 (クスノキ ヒロユキ)	小林 晴子 (コバヤシ ハルコ)	薩摩 秀登 (サツマ ヒデト)
神尾 真知子 (カミオ マチコ)	楠本 和哉 (クスモト カズヤ)	小林 弘和 (コバヤシ ヒロカズ)	佐藤 和孝 (サトウ カズタカ)
神鷹 徳治 (カミタカ トクハル)	楠本 重行 (クスモト シゲユキ)	小林 学 (コバヤシ マナブ)	佐藤 修司 (サトウ シュウジ)
亀井 奈保美 (カメイ ナオミ)	工藤 章 (クドウ アキラ)	小林 裕子 (コバヤシ ヤスコ)	佐藤 進 (サトウ ススム)
狩俣 恵美 (カリマタ エミ)	工藤 健一 (クドウ ケンイチ)	小林 保彦 (コバヤシ ヤスヒコ)	佐藤 拓司 (サトウ タクジ)
川井 勇雄 (カワイ イサオ)	工藤 早恵 (クドウ サエ)	小林 由紀 (コバヤシ ユキ)	佐藤 健生 (サトウ タケオ)
河合 久 (カワイ ヒサシ)	工藤 眞一 (クドウ シンイチ)	小林 和歌子 (コバヤシ ワカコ)	佐藤 千明 (サトウ チアキ)
河合 史恵 (カワイ フミエ)	工藤 文三 (クドウ フンゾウ)	小日向 英俊 (コヒナタ ヒデトシ)	佐藤 紀子 (サトウ ノリコ)
川合 ゆみ子 (カワイ ユミコ)	国宗 知子 (クニムネ トモコ)	駒田 亜紀子 (コマダ アキコ)	佐藤 憲久 (サトウ ノリヒサ)
川上 泰 (カワカミ ヤスシ)	久保 陽一 (クボ ヨウイチ)	小松 弥生 (コマツ ヤヨイ)	佐藤 宏 (サトウ ヒロシ)
川口 恵子 (カワグチ ケイコ)	久保田 忠利 (クボタ タダシ)	小峰 和子 (コミネ カズコ)	佐藤 道生 (サトウ ミチオ)
川口 裕司 (カワグチ ユウジ)	久保寺 紀江 (クボテラ ノリエ)	小峰 隆夫 (コミネ タカオ)	佐藤 美由紀 (サトウ ミユキ)
川口 義晴 (カワグチ ヨシハル)	隈井 秀人 (クマイ ヒデト)	五味 潤 (ゴミヰチ ノリツグ)	佐藤 由美 (サトウ ユミ)
川名 晋史 (カワナ シンジ)	熊沢 孝 (クマザワ タカシ)	小柳 潤 (コヤナギ ジュン)	佐藤 義夫 (サトウ ヨシオ)
川鍋 定男 (カワナベ サダオ)	久山 道彦 (クヤマ ミチヒコ)	小柳 春一郎 (コヤナギ シュンイチロウ)	佐藤 凉子 (サトウ リョウコ)
河野 克也 (カワノ カツヤ)	栗原 浩之 (クリハラ ヒロユキ)	古山 みゆき (コヤマ ミユキ)	佐野 栄一 (サノ エイチ)
河野 誠哉 (カワノ セイヤ)	栗山 保之 (クリヤマ ヤスユキ)	根田 隆平 (ネダ リュウヘイ)	佐野 智子 (サノ トモコ)
川端 芳子 (カワバタ ヨシコ)	黒川 学 (クロカワ マナブ)	近藤 存志 (コンドウ アリユキ)	佐野 洋一郎 (サノ ヨウイチロウ)
河原 清志 (カワハラ キヨシ)	黒川 美和 (クロカワ ミワ)	権藤 俊彦 (ゴンドウ トシヒコ)	佐橋 亮 (サハシ リョウ)
川邊 雄大 (カワベ ユウダイ)	黒澤 文貴 (クロサワ フミタカ)	近藤 瑞木 (コンドウ ミズキ)	澤井 和彦 (サワイ カズヒコ)
河村 弘祐 (カワムラ コウスケ)	黒嶋 敏 (クロシマ サトル)	近藤 倫弘 (コンドウ ミチヒロ)	澤村 明 (サワムラ アキラ)
川村 祥子 (カワムラ ショウコ)	黒田 俊太郎 (クロダ シュンタロウ)	近藤 ゆう子 (コンドウ ユウコ)	塩川 徹也 (シオカワ テツヤ)
川本 思心 (カワモト シシン)	桑田 光平 (クワダ コウヘイ)	紺野 卓 (コンノ タク)	塩谷 雅之 (シオタニ マサユキ)
河原 清 (カワラ キヨシ)	桑名 恵 (クワナ メグミ)	雑賀 恭一 (サイガ キョウイチ)	塩谷 敬 (シオノヤ ケイ)
河原崎 やす子 (カワラサキ ヤスコ)	桑原 啓一 (クワハラ ケイチ)	西前 明 (サイゼン アキラ)	志賀 義雄 (シガ ヨシオ)

繁田 進(シゲタ ススム)	鈴木 淳平(スズキ ジュンペイ)	多田 寿康(タダ トシヤス)	堤 一彦(ツツミ カズヒコ)
重田 晴生(シゲタ ハルオ)	鈴木 隆(スズキ タカシ)	多々良 源(タタラ ゲン)	堤 ちはる(ツツミ チハル)
重光 由加(シゲミツ ユカ)	鈴木 貴宇(スズキ タカネ)	立松 隆介(タテマツ リュウスケ)	堤 康德(ツツミ ヤスリ)
宍戸 真(シシド マコト)	鈴木 隆芳(スズキ タカヨシ)	立山 利治(タテヤマ トシハル)	敦賀 陽一郎(ツルガ ヨウイチロウ)
宍戸 渉(シシド ワタル)	鈴木 健(スズキ タケシ)	田所 承己(タドコロ ヨシキ)	津留崎 毅(ツルサキ タケシ)
篠崎 昌子(シノザキ マサコ)	鈴木 匡(スズキ タダシ)	田中 昭(タナカ アキラ)	鶴見 典子(ツルミ ノリコ)
篠崎 英樹(シノザキ ヒデキ)	鈴木 千代(スズキ チヨ)	田中 亜美(タナカ アミ)	ティムソン 真澄(ティムソン マスミ)
柴 宜弘(シバ ノブヒロ)	鈴木 ふさ子(スズキ フサコ)	田中 恵美子(タナカ エミコ)	手塚 裕子(テヅカ ユウコ)
芝井 清久(シバイ キョウヒサ)	鈴木 美恵子(スズキ ミエコ)	田中 訓子(タナカ クニコ)	寺田 至(テラダ イタル)
芝崎 和美(シバサキ カズミ)	鈴木 道也(スズキ ミチヤ)	田中 城次郎(タナカ ジョウジロウ)	寺田 誠一(テラダ セイイチ)
柴崎 聰(シバサキ サトシ)	鈴木 勇一郎(スズキ ユウイチロウ)	田中 信司(タナカ シンジ)	寺戸 淳子(テラド ジュンコ)
柴田 徹(シバタ トオル)	須永 美紀(スナガ ミキ)	田中 孝文(タナカ タカフミ)	寺西 範恭(テラニシ ノリヤス)
柴田 教昭(シバタ ノリアキ)	須山 聡(スヤマ サトシ)	田中 敬文(タナカ タカフミ)	寺林 賢司(テラバヤシ ケンジ)
澁川 顕一(シバカワ ケンイチ)	勢力 尚雅(セイリキ ノアマサ)	田中 成行(タナカ ナリエキ)	東松 秀雄(トウマツ ヒデオ)
澁谷 陽子(シバヤ ヨウコ)	関 仁(セキ ヒトシ)	田中 憲彦(タナカ ノリヒコ)	道用 大介(ドウヨウ ダイスケ)
嶋 正(シマ タダシ)	関口 幸男(セキグチ ユキオ)	田中 秀隆(タナカ ヒデタカ)	遠山 明子(トオヤマ アキコ)
島崎 三津子(シマザキ ミツコ)	関戸 冬彦(セキド フユヒコ)	田中 正邦(タナカ マサクニ)	時弘 哲治(トキヒロ テツジ)
嶋田 淳恵(シマダ アツエ)	関根 正幸(セキネ マサユキ)	田中 裕司(タナカ ユウジ)	徳田 英明(トクダ エイメイ)
島田 和夫(シマダ カズオ)	妹尾 新太郎(セノオ シンタロウ)	田中 洋平(タナカ ヨウヘイ)	徳田 皇毅(トクダ コウキ)
嶋村 元宏(シマムラ モトヒロ)	泉水 清志(センスイ キヨシ)	谷口 康浩(タニグチ ヤスヒロ)	徳永 健伸(トクナガ タケノブ)
清水 信光(シミズ ノブミツ)	仙波 圭子(センバ ケイコ)	谷澤 叙彦(タニザワ ノブヒコ)	得能 壽美(トクノウ トシミ)
清水 尚哉(シミズ ヒサヤ)	曾根 美恵(ソネ ミエ)	田原 啓祐(タハラ ケイスケ)	土佐 尚子(トサ ナオコ)
清水 弥生(シミズ ヤヨイ)	曾根田 純子(ソネダ ジュンコ)	太原 孝英(タハラ タカヒデ)	戸田 勉(トダ ツトム)
下澤 礼子(シモザワ レイコ)	園田 洋一(ソノダ ヨウイチ)	玉井 朗(タマイ アキラ)	戸田 真夏(トダ マナツ)
下田 淳(シモダ ジュン)	田井 健太郎(タイ ケンタロウ)	田村 惠一(タムラ ケイイチ)	戸田 裕美子(トダ ユミコ)
赤土 正貴(シャクト マサタカ)	大門 芳行(ダイモン ヨシユキ)	田村 達久(タムラ タツヒサ)	飛田 綾子(トビタ アヤコ)
朱 全安(シュ センアン)	高井 晋(タカイ ススム)	丹波 美佐子(タンバ ミサコ)	蓬郷 尚代(トマゴウ ヒサヨ)
朱 珉(シュ ミン)	高江洲 昌哉(タカエス マサヤ)	漆 紅(チー ホン)	富澤 達三(トミザワ タツゾウ)
周 剛(シュウゴウ)	高尾 享幸(タカオ タカユキ)	近本 謙介(チカモト ケンスケ)	富田 悠生(トミタ ユウキ)
荀 涛(ジュン トウ)	高木 友子(タカキ ユウコ)	千々岩 靖子(チチイワ ヤスコ)	友澤 宏隆(トモザワ ヒロタカ)
庄司 達也(ショウジ タツヤ)	高木 誠一郎(タカギ セイイチロウ)	千々松 和夫(チチマツ カズオ)	友野 清文(トモノ キョフミ)
庄子 豊(ショウジ ユタカ)	高木 葉子(タカギ ヨウコ)	茅野 嘉司郎(チノ カシロウ)	外山 真理(トヤマ マリ)
正田 良(ショウダ リョウ)	高木 葉子(タカギ ヨウコ)	千葉 一大(チバ イチダイ)	鳥越 泰彦(トリゴエ ヤスヒコ)
白井 勢津子(シライ セツコ)	高鳴 景子(タカシマ ケイコ)	千葉 悦子(チバ エツコ)	トレント 信子(トレント ノボコ)
白岩 拓哉(シライワ タクヤ)	高頭 麻子(タカトウ マコ)	千葉 淳一(チバ ジュンイチ)	内藤 雅一(ナイトウ マサカズ)
白土 茂雄(シラド シゲオ)	高橋 徹(タカハシ トオル)	千葉 宏史(チバ ヒロフミ)	内藤 正人(ナイトウ マサト)
白原 由起子(シラハラ ユキコ)	高橋 尚子(タカハシ ナオコ)	千葉 優子(チバ ユウコ)	内藤 元和(ナイトウ ユキカズ)
白藤 博行(シラフジ ヒロユキ)	高橋 ひさ子(タカハシ ヒサコ)	趙 聖九(チョウ ソンク)	奈尾 信英(ナオ ノブヒデ)
白勢 京子(シロセ キョウコ)	高橋 道子(タカハシ ミチコ)	趙 小鳳(チョウ ショウホウ)	永井 淳子(ナガイ ジュンコ)
秦 邦生(シン クニオ)	高橋 幸雄(タカハシ ユキオ)	張 明傑(チョウ メイケツ)	中井 均(ナカイ ヒトシ)
新宮 富美子(シングウ フミコ)	高畑 千秋(タカハタ チアキ)	千代島 雅(チヨジマ タダシ)	長井 秀友(ナガイ ヒデオ)
新宅 巖(シンタク イワオ)	高部 千春(タカベ チハル)	鄭 洲(チョン ジュ)	長江 眞弥(ナガエ ナオヤ)
新藤 哲雄(シンドウ テツオ)	高村 正志(タカムラ マサシ)	陳 祖蓓(チン ソバイ)	長尾 敦子(ナガオ アツコ)
真道 洋子(シンドウ ヨウコ)	高山 俊則(タカヤマ トシノリ)	塚田 朋子(ツカダ トモコ)	中尾 麻衣子(ナカオ マイコ)
新保 良明(シンボ ヨシアキ)	田川 悦子(タガワ エツコ)	塚田 雅也(ツカダ マサヤ)	中尾 正史(ナカオ マサシ)
陶久 明日香(スエヒサ アスカ)	瀧川 裕貴(タキガワ ヒロキ)	塚田 麻里子(ツカダ マリコ)	長岡 政憲(ナガオカ マサノリ)
菅野 昌彦(スガノ マサヒコ)	滝沢 昌彦(タキザワ マサヒコ)	塚原 拓馬(ツカハラ タクマ)	中兼 和津次(ナカガネ カツジ)
菅原 克也(スガワラ カツヤ)	田北 康成(タキタ ヤスナリ)	塚本 俊也(ツカモト トシヤ)	中川 明博(ナカガワ アキヒロ)
菅原 純(スガワラ ジュン)	田口 幹比古(タグチ ミキヒコ)	佃 陽子(ツクダ ヨウコ)	中川 千恵子(ナカガワ チエコ)
菅原 恒彦(スガワラ ツネヒコ)	宅間 文夫(タケマ フミオ)	辻 リン(ツジ リン)	中川 雅貴(ナカガワ マサキ)
杉田 多佳子(スギタ タカコ)	竹内 倫和(タケウチ トモカズ)	辻本 拓司(ツジモト タクジ)	中川 恭明(ナカガワ ヤスアキ)
杉野 早苗月(スギノ サツキ)	竹内 智子(タケウチ トモコ)	津田 千悦子(ツダ チエコ)	長島 一比古(ナガシマ カズヒコ)
杉本 卓(スギモト タク)	竹田 久美子(タケダ クミコ)	土田 久美子(ツチダ クミコ)	中島 隆(ナカジマ タカシ)
杉山 明(スギヤマ アキラ)	竹田 智志(タケダ サトシ)	土屋 明美(ツチヤ アケミ)	中島 秀男(ナカジマ ヒデオ)
杉山 裕(スギヤマ ヒロシ)	竹中 治堅(タケナカ ハルカタ)	土屋 菜穂子(ツチヤ ナオコ)	中島 洋(ナカジマ ヒロシ)
鈴木 海三(スズキ カイゾウ)	竹野 一雄(タケノ カズオ)	土屋 文子(ツチヤ フミコ)	中島 理暁(ナカジマ マサアキ)
鈴木 聡子(スズキ サトコ)	田代 一聡(タシロ カズトシ)	土屋 良二(ツチヤ リョウジ)	中嶋 幸子(ナカジマ ユキコ)
	田嶋 規雄(タジマ ノリオ)		

中曽根 敬子 (ナカソネ ケイコ)	祢津 啓 (ネツ アキラ)	伴 好彦 (バン ヨシヒコ)	藤原 雅子 (フジワラ マサコ)
仲田 大人 (ナカタ ヒロト)	野木 香里 (ノギ カオリ)	范 力 (ハン リキ)	藤原 義博 (フジワラ ヨシヒロ)
中田 裕康 (ナカタ ヒロヤス)	野口 和彦 (ノグチ カズヒコ)	半田 純子 (ハンダ ジュンコ)	布施 克彦 (フセ カツヒコ)
永谷 万里雄 (ナガタニ マリオ)	野田 研一 (ノダ ケンイチ)	樋口 泰裕 (ヒグチ ヤスヒロ)	二村 まどか (フタムラ マドカ)
永田 雅啓 (ナガタ マサヒロ)	野田 秀三 (ノダ シュウゾウ)	彦江 智弘 (ヒコエ トモヒロ)	船木 順一 (フナキ ジュンイチ)
中條 誠一 (ナカジョウ セイイチ)	野津 寛 (ノツ ヒロシ)	日高 薫 (ヒダカ カオリ)	船木 亨 (フナキ トオル)
中西 史 (ナカニシ フミ)	野津 浩 (ノツ ヒロシ)	日野 康一郎 (ヒノ コウイチロウ)	舟橋 美香 (フナハシ ミカ)
中野 京子 (ナカノ キョウコ)	野中 雅代 (ノナカ マサヨ)	日吉 和子 (ヒヨシ カズコ)	船水 直子 (フナミズ ナオコ)
中野 基光 (ナカノ モトミツ)	野村 昌代 (ノムラ マサヨ)	平井 聰丞 (ヒライ ソウスケ)	降旗 千恵 (フリハタ チエ)
長浜 三千代 (ナガハマ ミチヨ)	野村 祐之 (ノムラ ユウシ)	平井 孝志 (ヒライ タカシ)	古川 江里子 (フルカワ エリコ)
中原 暁彦 (ナカハラ アキヒコ)	野本 茂夫 (ノモト シゲオ)	平尾 清 (ヒラオ キヨシ)	古田 知章 (フルタ トモアキ)
中原 裕貴 (ナカハラ ユタカ)	乗富 秀富 (ノリトミ ヒデタカ)	平岡 敦 (ヒラオカ アツシ)	古田 洋 (フルタ ヒロシ)
長又 高夫 (ナガマタ タカオ)	萩原 綾 (ハギワラ アヤ)	平岡 久夫 (ヒラオカ ヒサオ)	古屋 秀樹 (フルヤ ヒデキ)
中村 馨 (ナカムラ カオル)	白 榮助 (ハク エイクン)	平木 真快 (ヒラキ シンカイ)	古屋 龍太 (フルヤ リュウタ)
中村 貴美子 (ナカムラ キミコ)	朴 倍暎 (ハク ベイオン)	平野 晶子 (ヒラノ アキコ)	部家 直樹 (ヘヤ ナオキ)
中村 國則 (ナカムラ クニノリ)	橋本 到 (ハシモト イタル)	平野 信輔 (ヒラノ シンスケ)	保苅 尚 (ホカリ ヒサシ)
中村 直子 (ナカムラ ナオコ)	橋本 克己 (ハシモト カツミ)	平野 正樹 (ヒラノ マサキ)	保坂 佳男 (ホサカ ヨシオ)
中村 尚子 (ナカムラ ナオコ)	橋本 健一 (ハシモト ケンイチ)	平松 博 (ヒラマツ ヒロシ)	星崎 和子 (ホシザキ カズコ)
中村 祐子 (ナカムラ ユウコ)	橋本 早子 (ハシモト サヨ)	平山 修平 (ヒラヤマ シュウヘイ)	星崎 幸子 (ホシザキ サチコ)
中本 恭平 (ナカモト キョウヘイ)	橋本 貴子 (ハシモト タカコ)	平山 真理 (ヒラヤマ マリ)	星野 愛秀 (ホシノ アイシュウ)
中山 健 (ナカヤマ タケン)	長谷川 明子 (ハセガワ アキコ)	広瀬 洋子 (ヒロセ ヨウコ)	細谷 等 (ホソヤ ヒトシ)
中山 豊 (ナカヤマ ユタカ)	長谷川 淳一 (ハセガワ ジュンイチ)	広瀬 佳一 (ヒロセ ヨシカズ)	堀 宏治 (ホリ コウジ)
南雲 智 (ナグモ サトル)	長谷川 宜之 (ハセガワ ヨシユキ)	広田 紘一 (ヒロタ コウイチ)	堀 健志 (ホリ タケン)
梨本 進 (ナシモト ススム)	栢山 茂樹 (ハセヤマ シゲキ)	廣田 尚子 (ヒロタ ナオコ)	堀 暖 (ホリ ダン)
夏目 麻子 (ナツメ アサコ)	畑中 千晶 (ハタナカ チアキ)	廣田 治子 (ヒロタ ハルコ)	堀 千和子 (ホリ チワコ)
夏目 省悟 (ナツメ ショウゴ)	波多野 知子 (ハタノ トモコ)	廣本 寿夫 (ヒロモト ヒサオ)	堀 広治 (ホリ ヒロハル)
夏目 康子 (ナツメ ヤスコ)	服部 カトリーヌ	深井 智朗 (フカイ トモアキ)	堀 芙三夫 (ホリ フミオ)
鯨 博行 (ナマズ ヒロユキ)	(ハットリ カトリース)	深井 吉男 (フカイ ヨシオ)	堀 有喜衣 (ホリ ユキエ)
植橋 祥一 (ナラハシ ショウイチ)	花岡 民子 (ハナオカ タミコ)	深江 敬志 (フカエ ケイジ)	堀尾 あづみ (ホリオ アヅミ)
成家 亘宏 (ナリヤ ノブヒロ)	羽田 雄一 (ハネダ ユウイチ)	福士 由紀 (フクシ ユキ)	堀尾 耕一 (ホリオ コウイチ)
成瀬 俊一 (ナルセ ジュンイチ)	浜田 一字 (ハマダ カズイ)	福島 君子 (フクシマ キミコ)	堀川 洋子 (ホリカワ ヨウコ)
難波 和子 (ナンバ カズコ)	濱田 瑞美 (ハマダ タマリ)	福島 尚文 (フクシマ ナオフミ)	本所 靖博 (ホンジョ ヤスヒロ)
新居 美津子 (ニイ ミツコ)	濱田 庸子 (ハマダ ヨウコ)	福嶋 揚 (フクシマ ヨウ)	本清 耕造 (ホンセイ コウゾウ)
新野 直哉 (ニイノ ナオヤ)	濱村 良久 (ハマムラ ヨシヒサ)	福嶋 義博 (フクシマ ヨシヒロ)	本田 明美 (ホンダ アケミ)
新村 香 (ニイムラ カオリ)	早川 亜里 (ハヤカワ アリ)	福田 耕介 (フクダ コウスケ)	本田 龍央 (ホンダ タツオ)
西 和彦 (ニシ カズヒコ)	早川 淳 (ハヤカワ ジュン)	福田 保 (フクダ タモツ)	本田 英郎 (ホンダ ヒデオ)
西井 正造 (ニシイ ショウゾウ)	早川 勉 (ハヤカワ ツトム)	福富 満久 (フクトミ ミツヒサ)	本田 秀仁 (ホンダ ヒデヒト)
西海 孝夫 (ニシウミ タカオ)	早川 洋子 (ハヤカワ ヨウコ)	藤尾 美佐 (フジオ ミサ)	本間 俊一 (ホンマ トシカズ)
西岡 祥文 (ニシオカ ヨシフミ)	早坂 五郎 (ハヤサカゴロウ)	藤掛 洋子 (フジカケ ヨウコ)	本間 晴樹 (ホンマ ハルキ)
西川 恵 (ニシカワ メグミ)	早崎 鐘基 (ハヤサキ ショウキ)	藤倉 達郎 (フジクラ タツロウ)	本間 裕章 (ホンマ ヒロアキ)
西島 央 (ニシジマ ヒロシ)	林 克彦 (ハヤシ カツヒコ)	藤沢 千代勝 (フジサワ チョウカツ)	本間 裕子 (ホンマ ヒロコ)
西田 依麻 (ニシダ エマ)	林 精子 (ハヤシ セイコ)	藤田 孝弥 (フジタ タカヤ)	洪 琬伸 (ホン エンシン)
西土 彰一郎 (ニシド ショウイチロウ)	林 力 (ハヤシ チカラ)	藤田 泰正 (フジタ ヤスマサ)	前川 孝雄 (マエカワ タカオ)
仁科 貞文 (ニシナ サダフミ)	林 英樹 (ハヤシ ヒデキ)	藤田 幸広 (フジタ ユキヒロ)	前沢 明枝 (マエザワ アキエ)
西原 稔 (ニシハラ ミノル)	林 茂人 (ハヤシ マキト)	藤林 道夫 (フジバヤシ ミチオ)	前島 和也 (マエジマ カズヤ)
西村 まりこ (ニシムラ マリコ)	林 正樹 (ハヤシ マサキ)	藤原 正仁 (フジハラ マサヒト)	前田 多美子 (マエダ タミコ)
西村 美香 (ニシムラ ミカ)	林 康子 (ハヤシ ヤスコ)	藤牧 新 (フジマキ アラタ)	前野 澄子 (マエノ スミコ)
西村 洋一 (ニシムラ ヨウイチ)	林 瑠美子 (ハヤシ ルミコ)	藤牧 喜久子 (フジマキ キクコ)	馬 燕 (マ エン)
西山 勝昭 (ニシヤマ カツアキ)	林田 愛 (ハヤシダ アイ)	藤卷 光浩 (フジマキ ミツヒロ)	益井 明子 (マスイ アキコ)
西山 千恵子 (ニシヤマ チエコ)	早野 薫 (ハヤノ カオル)	藤村 待子 (フジムラ マチコ)	益井 岳樹 (マスイ タカキ)
新田 司 (ニッタ ツカサ)	羽山 博 (ハヤマ ヒロシ)	藤本 敬三 (フジモト ケイゾウ)	升本 潔 (マシモト キヨシ)
二宮 修治 (ニノミヤ シュウジ)	原 潔 (ハラ キヨシ)	藤本 満 (フジモト ミツル)	俣野 房子 (マノ フサコ)
丹羽 さがの (ニワ サガノ)	原 卓史 (ハラ タカシ)	藤本 頼人 (フジモト ヨリヒト)	町田 隆吉 (マチダ タカヨシ)
庭野 延子 (ニワ ノブコ)	原 佑二 (ハラ ユウジ)	藤山 美典 (フジヤマ ヨシノリ)	町田 俊之 (マチダ トシユキ)
額谷 修二 (ヌカタニ シュウジ)	原田 敦史 (ハラダ アツシ)	藤原 淳賀 (フジワラ アツヨシ)	町田 行男 (マチダ ユキオ)
根岸 徹郎 (ネギシ テツロウ)	原田 理恵 (ハラダ リエ)	藤原 一弘 (フジワラ カズヒロ)	松井 賢治 (マツイ ケンジ)
根岸 知生 (ネギシ トモオ)	春名 宏昭 (ハルナ ヒロアキ)	富士原 紀絵 (フジワラ キエ)	松井 洋 (マツイ ヒロシ)

松井 浩(マツイ ヒロシ)	宮越 智子(ミヤコシ トモコ)	安富 義泰(ヤストミ ヨシヤス)	吉岡 秀輝(ヨシオカ ヒデキ)
松尾 知明(マツオ トモアキ)	宮崎 克己(ミヤザキ カツミ)	安原 伸一朗(ヤスハラ シンイチロウ)	吉川 真(ヨシカワ マコト)
松岡 チカ子(マツオカ チカコ)	宮崎 文典(ミヤザキ フミノリ)	谷田 征子(ヤツダ マサコ)	芳川 ゆかり(ヨシカワ ユカリ)
松壽 英士(マツザキ エイジ)	宮崎 美智子(ミヤザキ ミチコ)	箭内 道彦(ヤナイ ミチヒコ)	吉川 好昭(ヨシカワ ヨシアキ)
松崎 かおり(マツザキ カオリ)	宮沢 厚雄(ミヤザワ アツオ)	柳 宏(ヤナギ ヒロシ)	吉田 典代(ヨシダ ノリヨ)
松壽 くみ子(マツザキ クミコ)	宮下 聡子(ミヤシタ サトコ)	柳澤 波香(ヤナギザワ ナミカ)	吉田 パトリシア(ヨシダ パトリシア)
松崎 毅(マツザキ タケシ)	宮部 頼子(ミヤベ ヨリコ)	柳原 恵津子(ヤナギハラ エツコ)	吉田 寛(ヨシダ ヒロシ)
松澤 孝紀(マツザワ タカトシ)	宮丸 裕二(ミヤマル ユウジ)	矢野 陽子(ヤノ ヨウコ)	吉富 透(ヨシトミ トウル)
松下 純一(マツシタ ジュンイチ)	宮本 和武(ミヤモト カズム)	矢延 洋泰(ヤノベ ヒロヤス)	吉本 素子(ヨシモト モトコ)
松下 正弘(マツシタ マサヒロ)	宮本 直利(ミヤモト ナオシ)	山内 豊(ヤマウチ ユタカ)	米倉 律(ヨネクラ リツ)
松下 みどり(マツシタ ミドリ)	宮森 孝史(ミヤモリ タカシ)	山岡 透(ヤマオカ トオル)	米田 博美(ヨネダ ヒロミ)
松田 英子(マツダ エイコ)	宮脇 和(ミヤワキ カノウ)	山岡 洋一(ヤマオカ ヨウイチ)	米山 明日香(ヨネヤマ アスカ)
松田 英(マツダ スグル)	明日 誠一(アシタガ セイイチ)	山影 進(ヤマカゲ ススム)	羅 奇祥(ラ キシヨウ)
松田 奈利子(マツダ ナリコ)	三輪 イルマ(ミワ イルマ)	山上 真貴子(ヤマガミ マキコ)	李 鴻谷(リ コウコク)
松野 彩(マツノ アヤ)	三輪 久恵(ミワ ヒサエ)	八巻 直一(ヤマキ ナオカズ)	李 鍾強(リ ソウキョウ)
松村 茂樹(マツムラ シゲキ)	向島 正喜(ムコウジマ マサキ)	山岸 健一(ヤマギシ ケンイチ)	李 哲権(リ テツケン)
松村 芳明(マツムラ ヨシアキ)	宗実 陽子(ムネサネ ヨウコ)	山北 宣久(ヤマキタ ノブヒサ)	流郷 吐夢(リュウゴウ トム)
松本 麻子(マツモト アサコ)	村井 英紀(ムライ ヒデノリ)	山口 浩平(ヤマグチ コウヘイ)	若園 智明(ワカノ チアキ)
松本 恵美子(マツモト エミコ)	村岡 正敏(ムラオカ マサトシ)	山口 しのぶ(ヤマグチ シノブ)	涌井 陽子(ウクイ ヨウコ)
松本 旬子(マツモト ジュンコ)	村上 桂一(ムラカミ ケイイチ)	山口 昌也(ヤマグチ マサヤ)	和治元 義博(ワジモト ヨシヒロ)
松本 光朗(マツモト ミツオ)	村椿 真理(ムラツバキ マコト)	山口 まどか(ヤマグチ マドカ)	渡邊 章(ワタナベ アキラ)
松本 渉(マツモト ワタル)	村中 崇信(ムラナカ タカノブ)	山口 理沙(ヤマグチ リサ)	渡辺 聡(ワタナベ アキラ)
真殿 達(マドノ サトル)	村中 亮子(ムラナカ リョウコ)	山崎 朗(ヤマザキ アキラ)	渡辺 敦子(ワタナベ アツコ)
眞部 清孝(マナベ キヨタカ)	村松 廣二(ムラマツ コウジ)	山崎 和美(ヤマザキ カズミ)	渡辺 紫乃(ワタナベ シノ)
真鍋 淳哉(マナベ ジュンヤ)	村山 祐季子(ムラヤマ ユキコ)	山崎 俊明(ヤマザキ トシアキ)	渡辺 隆司(ワタナベ タカシ)
眞鍋 正紀(マナベ マサノリ)	妻鹿 裕子(メガ ユウコ)	山下 清美(ヤマシタ キヨミ)	渡邊 貴彦(ワタナベ タカヒコ)
馬淵 彰(マブチ アキラ)	目黒 正武(メグロ マサタケ)	山田 晶雄(ヤマダ アキオ)	渡辺 岳夫(ワタナベ タケオ)
馬渡 鎮夫(マワタリ シズオ)	持田 顕一(モチダ ケンイチ)	山田 歩(ヤマダ アユミ)	渡部 富栄(ワタナベ トミエ)
三浦 逸雄(ミウラ イツオ)	望月 正光(モチツキ マサミツ)	山田 高敬(ヤマダ タカヒロ)	渡邊 直樹(ワタナベ ナオキ)
三浦 太郎(ミウラ タロウ)	元山 斉(モトヤマ ヒトシ)	山田 忠彰(ヤマダ タダアキ)	渡邊 英則(ワタナベ ヒデノリ)
三浦 正広(ミウラ マサヒロ)	森 一郎(モリ イチロウ)	山田 晴通(ヤマダ ハルミチ)	渡辺 浩(ワタナベ ヒロシ)
三上 威彦(ミカミ タケヒコ)	森 啓次郎(モリ ケイジロウ)	山田 博志(ヤマダ ヒロシ)	渡辺 博之(ワタナベ ヒロユキ)
三神 弘子(ミカミ ヒロコ)	森 幸穂(モリ サチホ)	山田 寛子(ヤマダ ヒロコ)	渡邊 雅之(ワタナベ マサユキ)
美甘 哲秀(ミカモ テツヒデ)	森 徹(モリ トオル)	山田 好一(ヤマダ ヨシカズ)	渡邊 義浩(ワタナベ ヨシヒロ)
三木 泰弘(ミキ ヤスヒロ)	森 長秀(モリ ナガヒデ)	大和 洋子(ヤマト ヨウコ)	渡部 良子(ワタベ リョウコ)
水嶋 裕子(ミズシマ ヒロコ)	森 晴代(モリ ハルヨ)	山中 宏治(ヤマナカ コウジ)	
水島 陽子(ミズシマ ヨウコ)	森 秀夫(モリ ヒデオ)	山根 信二(ヤマネ シンジ)	
水谷 尚子(ミズタニ ナオコ)	森 秀善(モリ ヒデオシ)	山内 康英(ヤマノウチ ヤスヒデ)	
水野 利紀(ミズノ トシキ)	森 正樹(モリ マサキ)	山邊 進(ヤマベ ススム)	
水野 浩幸(ミズノ ヒロユキ)	森 雅文(モリ マサフミ)	山邊 美登子(ヤマベ ミトコ)	
水本 義彦(ミズモト ヨシヒコ)	森崎 初男(モリサキ ハツオ)	山本 昭代(ヤマモト アキヨ)	
見世 千賀子(ミセ チカコ)	森田 茂之(モリタ シゲユキ)	山本 直人(ヤマモト ナオト)	
溝口 甲順(ミゾグチ カブスン)	森田 千草(モリタ チグサ)	山本 宣明(ヤマモト ノブアキ)	
三田村 智(ミタムラ サトシ)	森田 英利(モリタ ヒデトシ)	山本 泰生(ヤマモト ヤスオ)	
道下 徳成(ミチシタ ナルシゲ)	森本 真一(モリモト シンイチ)	山本 裕一(ヤマモト ユウイチ)	
三井 はるみ(ミツイ ハルミ)	森本 平(モリモト タイラ)	山本 幸生(ヤマモト ユキオ)	
三井 清(ミツイ キヨシ)	森山 久留美(モリヤマ クルミ)	山本 吉宣(ヤマモト ヨシノブ)	
光延 京子(ミツノブ キョウコ)	両角 亜希子(モロズミ アキコ)	湯川 次義(ユカワ ツギヨシ)	
三橋 郁雄(ミツハシ イクオ)	八重田 美衣(ヤエダ ミエ)	横江 公美(ヨコエ クミ)	
南山 宏之(ミナヤマ ヒロユキ)	矢ヶ崎 隆二郎(ヤガサキ リュウジロウ)	横川 耕二(ヨコカワ コウジ)	
三原 裕子(ミハラ ユウコ)	八木 直人(ヤギ ナオト)	横田 逸郎(ヨコタ イツロウ)	
宮尾 依子(ミヤオ ヨリコ)	八木岡 茂一(ヤギオカ モイチ)	横田 順子(ヨコタ ジュンコ)	
宮川 真一(ミヤガワ シンイチ)	薬 会(ヤク カイ)	横山 俊一(ヨコヤマ ジュンイチ)	
宮城 妙子(ミヤギ タエコ)	谷口 幸一(ヤグチ コウイチ)	横山 詔一(ヨコヤマ ショウイチ)	
三宅 京子(ミヤケ キョウコ)	矢頭 攸介(ヤズ ユウスケ)	横山 晴彦(ヨコヤマ ハルヒコ)	
三宅 正純(ミヤケ マサスミ)	安田 孝子(ヤスタ タカコ)	吉岡 愛子(ヨシオカ アイコ)	
三宅 麻理(ミヤケ マリ)	安田 努(ヤスタ ツトム)	吉岡 貴雄(ヨシオカ タカオ)	

社会情報学部開講科目

この『講義内容』と、WEB版講義内容検索システムの内容とに相違がある場合は、WEBの内容を優先します。

講義内容では履修年次を履修可能な年次で表しています。
履修順序などで履修が制限されることがありますので、授業要覧で必ず確認し、なるべく望ましい年次での履修を心がけてください。

社会情報学部開講科目

外国語科目

科目区分	授業科目	単位	担当者名	学期	履修年次	講義内容
英語基礎科目	イングリッシュコミュニケーションⅠ	2	LAMBACHER/S.G./上村 威/松本 恵美子/村川 久子/吉岡 貴雄	前期	1~4	S-1
	イングリッシュコミュニケーションⅡ	2	LAMBACHER,S.G./上村 威/松本 恵美子/村川 久子/吉岡 貴雄/渡辺 敦子	後期	1~4	S-2
	英語実践演習Ⅰ	2	上村 威/松本 恵美子/吉岡 貴雄	前期	2~4	S-3
	英語実践演習Ⅱ	2	上村 威/松本 恵美子/吉岡 貴雄	後期	2~4	S-4
英語融合系科目	英語実践演習Ⅲ	2	村川 久子	前期	2~4	S-5
	英語実践演習Ⅳ	2	村川 久子	後期	2~4	S-6
	イングリッシュプレゼンテーション	2	LAMBACHER,S.G./上村 威/村川 久子/吉岡 貴雄	前期	3~4	S-7
	意思決定理論と実践	2	西 和彦	後期	3~4	S-8
	意思決定理論と実践	2	狩野 昌央	後期	3~4	S-9
	ジャーナリズム	2	福島 尚文	後期	3~4	S-10
	ジャーナリズム	2	池田 信夫	後期	3~4	S-11
	リーダーシップの理論と実践	2	狩野 昌央	後期	3~4	S-12
	リーダーシップの理論と実践	2	西 和彦	後期	3~4	S-13
	ビジネスライティング	2	狩野 昌央	後期	3~4	S-14
	ビジネスライティング	2	REILLY,J.E.	後期	3~4	S-15
論文構成論	2	LAMBACHER,S.G.	後期	4のみ	S-16	

専門科目 (担当者名について「・」…1科目につき複数の担当者 「/」…1クラスにつき1担当者)

科目区分	授業科目	単位	担当者名	学期	履修年次	講義内容
基礎科目	社会情報入門Ⅰ	2	寺尾 敦・佐伯 胖・伊藤 一成・高木 光太郎・福田 亘孝・飯島 泰裕	前期	1~4	S-17
	社会情報入門Ⅱ	2	魚住 清彦・宮川 裕之・飯島 泰裕・石田 博之・岩井 千尋・菊宿 俊文・小池 和彦・佐伯 胖・清水 康司・高木 光太郎・吹春 俊隆・伏屋 広隆・宮治 裕・寺尾 敦	後期	1~4	S-18
	コミュニケーション基礎	2	稲積 宏誠・東 るみ子・南部 和香	前期	1~4	S-19
	基礎数学	2	伏屋 広隆/魚住 清彦/矢野 公一/高村 正志	後期	1~4	S-20
	統計入門	2	寺尾 敦/東 るみ子/南部 和香	後期	1~4	S-21
	情報科学入門	2	増永 良文/伊藤 一成/原 潔	前期	1~4	S-22
	コンピュータ実習	2	飯島 泰裕/伊藤 一成/東 るみ子/宮治 裕	後期	1~4	S-23
共通演習科目	社会情報演習Ⅰ	2	宮川 裕之/飯島 泰裕/石田 博之/伊藤 一成/岩井 千尋/魚住 清彦/清成 透子/小池 和彦/清水 康司/寺尾 敦/長橋 透/開澤 栄相/福田 亘孝/吹春 俊隆/伏屋 広隆/増永 良文/宮治 裕/矢野 公一	前期	1~4	S-24
	社会情報演習Ⅱ(前期)	2	飯島 泰裕/東 るみ子/寺尾 敦/南部 和香/宮川 裕之/宮治 裕	前期	2~4	S-25
	社会情報演習Ⅱ(後期)	2	開澤 栄相/石田 博之/岩井 千尋/清水 康司/長橋 透/吹春 俊隆/伏屋 広隆	後期	2~4	S-26
	社会情報演習Ⅲ	2	長橋 透/清成 透子/飯島 泰裕/石田 博之/伊藤 一成/稲積 宏誠/岩井 千尋/魚住 清彦/小池 和彦/清水 康司/寺尾 敦/開澤 栄相/吹春 俊隆/福田 亘孝/伏屋 広隆/宮川 裕之/増永 良文/宮治 裕/矢野 公一	前期	3~4	S-27

社会情報学部開講科目

科目区分	授業科目	単位	担当者名	学期	履修年次	講義内容
共通演習科目	社会情報演習Ⅳ	2	長橋 透/清成 透子/矢野 公一/飯島 泰裕/魚住 清彦/伊藤 一成/小池 和彦/高木 光太郎/宮川 裕之/福田 亘孝/清水 康司/開澤 栄相/岩井 千尋/増永 良文/伏屋 広隆/石田 博之/寺尾 敦/稲積 宏誠/宮治 裕/吹春 俊隆	後期	3~4	S-28
	卒業研究	8	宮川 裕之/長橋 透/飯島 泰裕/石田 博之/伊藤 一成/稲積 宏誠/岩井 千尋/菊宿 俊文/魚住 清彦/小池 和彦/清成 透子/高木 光太郎/清水 康司/寺尾 敦/長橋 透/開澤 栄相/福田 亘孝/伏屋 広隆/増永 良文/宮川 裕之/矢野 公一/宮治 裕	通年	4のみ	S-29
	インターンシップ	2	飯島 泰裕/魚住 清彦	不定	2~4	S-30
社会科学系基盤科目	社会情報A	2	飯島 泰裕/増永 良文	前期	2~4	S-31
	社会情報B	2	福田 亘孝/岩井 千尋	後期	2~4	S-32
	メディアコミュニケーション	2	植村 朋弘	前期	2~4	S-33
	心理学概論	2	高木 光太郎/佐伯 胖/清成 透子/寺尾 敦	後期	2~4	S-34
	社会心理学	2	清成 透子	後期	2~4	S-35
	学習科学	2	佐伯 胖	後期	2~4	S-36
	経済学入門Ⅰ	2	開澤 栄相/南部 和香	前期	2~4	S-37
	経済学入門Ⅱ	2	長橋 透/南部 和香	後期	2~4	S-38
	経営情報Ⅰ	2	清水 康司/松澤 孝紀	前期	2~4	S-39
	経営情報Ⅱ	2	岩井 千尋/松澤 孝紀	後期	2~4	S-40
	社会統計	2	寺尾 敦	前期	2~4	S-41
	社会統計演習	2	寺尾 敦	前期	2~4	S-42
	データ分析	2	石田 博之/清成 透子	後期	2~4	S-43
	データ分析演習	2	石田 博之/清成 透子	後期	2~4	S-44
	科学技術と社会	2	川本 思心	前期	2~4	S-45
	プレゼンテーション技法	2	植村 朋弘	前期	2~4	S-46
	メディアリテラシ	2	楠本 和哉	後期	2~4	S-47
情報科学系基盤科目	社会数理基礎Ⅰ	2	伏屋 広隆/矢野 公一	前期	1~4	S-48
	社会数理基礎Ⅱ	2	伏屋 広隆/矢野 公一	後期	1~4	S-49
	社会数理基礎Ⅰ演習	1	伏屋 広隆/矢野 公一	隔週前期第1週	1~4	S-50
	社会数理基礎Ⅱ演習	1	伏屋 広隆/矢野 公一	隔週後期第1週	1~4	S-51
	数理情報基礎Ⅰ	2	小池 和彦/高村 正志	前期	1~4	S-52
	数理情報基礎Ⅱ	2	小池 和彦/高村 正志	後期	1~4	S-53
	数理情報基礎Ⅰ演習	1	小池 和彦/高村 正志	隔週前期第2週	1~4	S-54
	数理情報基礎Ⅱ演習	1	小池 和彦/高村 正志	隔週後期第2週	1~4	S-55
	数の歴史	2	矢野 公一	前期	2~4	S-56
	確率統計	2	伏屋 広隆	前期	2~4	S-57
	情報科学基礎Ⅰ	2	稲積 宏誠	前期	2~4	S-58
	情報科学基礎Ⅱ	2	増永 良文	後期	2~4	S-59
	プログラミング基礎	2	宮治 裕/東 るみ子	前期	2~4	S-60
	プログラミング基礎実習	2	宮治 裕/東 るみ子	後期	2~4	S-61
	システム分析・設計基礎	2	宮川 裕之/石井 信明	後期	2~4	S-62
	システム分析・設計基礎演習	2	宮川 裕之/石井 信明	後期	2~4	S-63
	データベース基礎	2	増永 良文	後期	2~4	S-64
コンピュータネットワーク基礎	2	宮治 裕	後期	2~4	S-65	
インターネット概論	2	宮治 裕	前期	1~4	S-66	
社会科学系展開科目	環境情報論	2	石田 博之	前期	3~4	S-67
	環境経済論	2	石田 博之	後期	3~4	S-68
	経済政策Ⅰ	2	長橋 透	前期	3~4	S-69
	応用経済Ⅰ	2	長橋 透	前期	3~4	S-70
	応用経済Ⅱ	2	開澤 栄相	後期	3~4	S-71
	公共経済学	2	吹春 俊隆	後期	3~4	S-72
行政学	2	田中 孝文	後期	3~4	S-73	

社会情報学部開講科目

科目区分	授業科目	単位	担当者名	学期	履修年次	講義内容	
社会科学系展開科目	社会変動論	2	福田 亘孝	前期	3~4	S-74	
	社会調査 I	2	福田 亘孝	前期	3~4	S-75	
	経営分析	2	杉山 明	前期	3~4	S-76	
	経営戦略論	2	杉山 明	後期	3~4	S-77	
	数理ファイナンス	2	高山 俊則	後期	3~4	S-78	
	計量経済学 I	2	石田 博之	前期	3~4	S-79	
	金融論	2	開澤 栄相	前期	3~4	S-80	
	証券市場 I	2	岩井 千尋 / 矢ヶ崎 隆二郎	前期	3~4	S-81	
	コーポレートファイナンス	2	清水 康司	前期	3~4	S-82	
	コーポレートガバナンス	2	岩井 千尋	前期	3~4	S-83	
	融合系展開科目	認知心理学	2	阿部 慶賀	前期	3~4	S-84
		組織心理学	2	清成 透子	前期	3~4	S-85
学習心理学		2	寺尾 敦	後期	3~4	S-86	
心理学演習		2	佐伯 胖・清成 透子・高木 光太郎・寺尾 敦	前期	3~4	S-87	
スポーツと心の科学		2	遠藤 俊典	後期	3~4	S-88	
ナレッジマネジメント		2	稲積 宏誠	前期	3~4	S-89	
コミュニティマネジメント		2	苅宿 俊文	前期	3~4	S-90	
リスクマネジメント		2	松澤 孝紀	後期	3~4	S-91	
情報システム計画		2	宮川 裕之	前期	3	S-92	
インターネット応用		2	占部 雅一	前期	3~4	S-93	
ウェブ論		2	飯島 泰裕	後期	3~4	S-94	
ウェブコンテンツ作成実習		2	横川 耕二	後期	3~4	S-95	
ウェブラーニング		2	齋藤 裕	後期	3~4	S-96	
ヒューマンインタフェース		2	藤田 孝弥	前期	3~4	S-97	
デジタルアーカイビング		2	笠羽 晴夫	後期	3~4	S-98	
社会情報特別講義A		2	宮川 裕之・伊藤 一成・飯島 泰裕・稲積 宏誠・南部 和香	前期	3~4	S-99	
社会情報特別講義B		2	宮川 裕之・伊藤 一成・飯島 泰裕・稲積 宏誠・南部 和香	後期	3~4	S-100	
情報科学系展開科目	数理解析基礎	2	矢野 公一	後期	2~4	S-101	
	数理解析基礎演習	2	高村 正志	後期	2~4	S-102	
	現象の数理 I	2	高村 正志	前期	2~4	S-103	
	現象の数理 I 演習	2	高村 正志	前期	2~4	S-104	
	離散数学	2	小池 和彦	後期	2~4	S-105	
	数理代数 I	2	小池 和彦	前期	3~4	S-106	
	数理代数 I 演習	2	高村 正志	前期	3~4	S-107	
	情報科学応用 I	2	増永 良文	前期	3~4	S-108	
	情報科学応用 II	2	八巻 直一	前期	3~4	S-109	
	オブジェクト指向プログラミング	2	伊藤 一成	前期	3~4	S-110	
	プログラミング応用実習	2	伊藤 一成	前期	3~4	S-111	
	マルチメディアプログラミング	2	伊藤 一成	後期	3~4	S-112	
	システム分析・設計応用	2	宮川 裕之	後期	3~4	S-113	
	データベースシステム応用	2	増永 良文	後期	3~4	S-114	
	ネットワーク構成実習	2	宮治 裕	前期	3~4	S-115	
	データマイニング	2	稲積 宏誠	後期	3~4	S-116	
情報科学総合演習 I	2	宮川 裕之	集中	3~4	S-117		
社会科学系自由科目	知的財産法	2	栗原 浩之	後期	3~4	S-118	
	経済政策 II	2	長橋 透	後期	3~4	S-119	
	社会調査 II	2	福田 亘孝	後期	3~4	S-120	
	計量経済学 II	2	南部 和香	後期	3~4	S-121	
	国際ファイナンス	2	開澤 栄相	後期	3~4	S-122	
	証券市場 II	2	岩井 千尋	後期	3~4	S-123	
	インベストメント	2	清水 康司	後期	3~4	S-124	
	デリバティブズ	2	清水 康司	前期	3~4	S-125	
	経済解析 I	2	吹春 俊隆	前期	3~4	S-126	
	経済解析 II	2	吹春 俊隆	後期	3~4	S-127	
	企業経営の経済学	2	内村 勉	後期	3~4	S-128	

社会情報学部開講科目

科目区分	授業科目	単位	担当者名	学期	履修年次	講義内容
	現代の経済	2	吹春 俊隆	前期	3~4	S-129
	グローバルビジネス	2	岩井 克文・井上 裕夫・関 仁・深井 吉男・矢ヶ崎 隆二郎	前期	3~4	S-130
	社会情報特別講義C	2	松澤 孝紀	前期	3~4	S-131
	社会情報特別講義D	2	中川 雅貴	前期	3~4	S-132
融合系自由科目	組織論	2	藤原 正仁	後期	3~4	S-133
	人間関係論	2	担当者未定	後期	3~4	S-134
	情報倫理	2	田北 康成	前期	3~4	S-135
	文化心理学	2	担当者未定	後期	3~4	S-136
	組織意思決定論	2	斎藤 正武	後期	3~4	S-137
	プロジェクトマネジメント	2	石井 信明	後期	3~4	S-138
	広報論	2	田所 承己	前期	3~4	S-139
	情報化社会と文化	2	高橋 尚子	後期	3~4	S-140
	異文化コミュニケーション	2	高木 光太郎	前期	3~4	S-141
	情報アクセス法	2	大谷 康晴	前期	3~4	S-142
	コンピュータグラフィックス	2	土佐 尚子	集中	3~4	S-143
	情報システム開発	2	児玉 公信	前期	3~4	S-144
	ソフトウェア開発・保守	2	原 潔	後期	3~4	S-145
	社会情報特別講義E	2	目黒 正武	前期	3~4	S-146
	社会情報特別講義F	2	河原 清	集中	3~4	S-147
情報科学系自由科目	基礎数学入門	2	伏屋 広隆／魚住 清彦／矢野 公一	前期	1~4	S-148
	数理情報基礎Ⅲ	2	菊地 哲也	前期	2~4	S-149
	数理情報基礎Ⅳ	2	菊地 哲也	後期	2~4	S-150
	構造幾何Ⅰ	2	菊地 哲也	後期	2~4	S-151
	構造幾何Ⅰ演習	2	菊地 哲也	後期	2~4	S-152
	複素解析	2	関根 正幸	前期	3~4	S-153
	複素解析演習	2	関根 正幸	前期	3~4	S-154
	現象の数理Ⅱ	2	部家 直樹	後期	3~4	S-155
	数理代数Ⅱ	2	西山 享	後期	3~4	S-156
	構造幾何Ⅱ	2	谷口 健二	後期	3~4	S-157
	構造幾何Ⅱ演習	2	高村 正志	後期	3~4	S-158
	集合と位相	2	増田 哲	後期	3~4	S-159
	集合と位相演習	2	部家 直樹	後期	3~4	S-160
	情報処理基礎	2	東 るみ子	前期	2~4	S-161
	情報科学応用Ⅲ	2	飯島 泰裕	前期	3~4	S-162
情報科学総合演習Ⅱ	2	桐谷 栄希	後期	3~4	S-163	
情報と職業	2	稲積 宏誠	後期	2~4	S-164	

履修登録にあたっての条件

授業科目	履修年次	履修登録にあたっての条件（太字：開講科目名称）
社会統計演習	2	「 社会統計 」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。
データ分析演習	2	「 データ分析 」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。
社会数理基礎Ⅰ演習	1	「 社会数理基礎Ⅰ 」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。
社会数理基礎Ⅱ演習	1	「 社会数理基礎Ⅱ 」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。
数理情報基礎Ⅰ演習	1	「 数理情報基礎Ⅰ 」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。
数理情報基礎Ⅱ演習	1	「 数理情報基礎Ⅱ 」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。
プログラミング基礎実習	2	「 プログラミング基礎 」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。
数理解析基礎演習	2	「 数理解析基礎 」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。
現象の数理Ⅰ演習	2	「 現象の数理Ⅰ 」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。
数理代数Ⅰ演習	3	「 数理代数Ⅰ 」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。
構造幾何Ⅰ演習	2	「 構造幾何Ⅰ 」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。
複素解析演習	3	「 複素解析 」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。
構造幾何Ⅱ演習	3	「 構造幾何Ⅱ 」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。
集合と位相演習	3	「 集合と位相 」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。
システム分析	2	「 システム分析・設計基礎 」を履修登録すると、必ず「 システム分析・設計基礎演習 」も履修することとなる。
社会情報特別講義A	3	「 社会情報特別講義A 」を履修登録すると、必ず「 社会情報特別講義B 」も履修することとなる。
オブジェクト指向プログラミング	3	「 オブジェクト指向プログラミング 」を履修登録すると、必ず「 プログラミング応用実習 」も履修登録することとなる。

村川 久子, LAMBACHER, S. G., 上村 威, 松本 恵美子, 吉岡 貴雄, 渡辺 敦子

◆ 授業の到達目標及びテーマ

Reading and Writing

◆ 講義の概要

(1) 読解力をつける (コンピュータ、ビジネス)

1) 語彙数を増やす 2) 内容を理解し、覚えておく(クイズにて確認) 3) 速読力をつける

(2) ライティング

1) イーメールの書き方 洗練された英語表現 論文構成の入門

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
	学習状況に応じて内容と進行を変更する事があります。1週間に2コマ(1)(2)・1学期15回の授業があります。授業が毎週2回実施出来ない場合は出来なかった授業を翌週に行います。従って、授業をWeek別に記載してありますが、ずれる可能性もあります。ただし、授業内容はすべて網羅できるように調整致します。
Week 1	(1) Chapter の読み方、速読法、単語の記載&暗記法の指導。 宿題: UCのChapter 1を読み、すべてを暗記しておく。 イーメールの書き方 (2) 宿題: BUSNのChapter 1を読み、すべて暗記しておく。 イーメールの書き方
Week 2	(1) UC, Chapter 1のクイズを実施、宿題はChapter 2 Chapter 1の内容の中から1つサブタイトルを選び白板にそのタイトルを書き、10分間で覚えている事をすべて英文で書く。英文にミスがあっても内容が正しければ、1文章に対して2点。 * イーメールの書き方 * 速読練習/単語暗記練習 (2) BUSNのChapter 1だけのクイズを実施、宿題の中にエッセイの問題があるので、そこからクイズを出す。10分間で書き上げる。評価はCEと同じ。 * イーメールの書き方 * 速読練習/単語暗記練習
Week 3-4	(1) UC, 指定されたChapterのクイズを実施、洗練された英語表現 (暗記) (2) BUSNの指定されたChapterのクイズを実施、洗練された英語表現 (暗記)
Week 6	(1) UC, 指定されたChapterのクイズを実施、論文構成 (2) BUSNの指定されたChapterのクイズを実施、論文構成
Week 7	中間試験 (1) UC 指定されたChapter のクイズを実施 中間試験: イーメール、洗練された英語表現 (2) BUSNの指定されたChapterのクイズを実施 中間試験: 論文構成
Week 8-14	(1) UC, 指定されたChapterのクイズを実施、論文構成 (2) BUSNの指定されたChapterのクイズを実施、論文構成
Week 15	期末試験 (1) 期末試験: 論文構成 (2) 期末試験: 語彙の試験 (UC, BUSN)

◆ 成績評価方法 クイズ、中間試験、期末試験の合計で評価します。ただし、欠席数が予定授業数の3分の1以上になった場合は評価の対象から外します(単位を認定いたしません。)

◆ 教科書 (1) Understanding Computers: Today and Tomorrow (International Edition)
(2) BUSN (Student Edition)

◆ 参考書 独自で開発した解説書

村川 久子, LAMBACHER, S. G., 上村 威, 松本 恵美子, 渡辺 敦子, 吉岡 貴雄

◆ 授業の到達目標及びテーマ

Listening and Speaking

◆ 講義の概要

(1) Listening能力をつける (コンピュータ、ビジネス、科学、その他)

1)英語音を聞き取る。2)内容を理解し、覚えておく。3)問題集をする。

(2) Speaking 能力をつける (コンピュータ、ビジネス、科学、その他)

1)発音矯正2)即答する練習 2)質疑/応答 (Wh-question) 3)読解資料を読み内容を口頭で説明。

4)テープを聞き取り内容を口頭で説明。5)論理的に相手を説得する方法。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
	学習状況に応じてないよう進行を変更することがあります。
	Week 1 授業の内容説明 (1)宿題:テープ(or CD)のChapter 1 Dictation (コンピュータorビジネス) (2)発音:複式呼吸 (70分) 機器の使い方説明 (20分)
	Week 2~5 (1)Chapter 1のDictation 提出 授業中にDictation の校正資料配布で次回ノートを提出。 教員がテープ(CD)をかけ、学生に内容について質問。(45分) 練習問題(コンピュータ、ビジネス、科学、その他)をする。(45分) (2)発音:Week 2 ストレス、イントネーション
	Week 3-4 English /p,t,k/ 復習(15分)Wh-questionの練習(即答)60分
	Week 5 English /r/ と /l/ の相違 読解資料を読み内容を口頭で説明(75分)
	Week 6 English /r/ (1)会話又は講義のテープを聞き質問に答える。 (2)テープの中の質問を聞き英語で答える。(録音)
	Week 7-10 (1)指定のChapterのDictation 提出 授業中にDictation の校正資料配布で次回ノートを提出。 教員がテープ(CD)をかけ、学生に内容について質問。(45分) 練習問題(コンピュータ、ビジネス、科学、その他)をする。(45分) (2)発音: Week 7語頭 /r/ 読解資料を読み内容を口頭で説明。(45分) Week 8 語頭と語中の/r/ Week 9 母音の/r/ (Stressed/unstressed)テープを聞き取り内容を口頭で説明(60分) Week 10 母音の/r/ ものを記述する(60分)復習(15分) PROTSを使い解説と練習と読解資料を読み内容を口頭で説明。(60分)
	Week 11-14(1)指定のChapterのDictation 提出 授業中にDictation の校正資料配布で次回ノートを提出。 教員がテープ(CD)をかけ、学生に内容について質問。(45分) 練習問題(コンピュータ、ビジネス、科学、その他)をする。(45分) (2)発音:Week 11-13 母音実況放送のような発話の練習。(70分) (3)発音:語尾の/n,m/
	Week 15 期末試験 テープを聞き質問に答える。(約50問題)

◆ 成績評価方法 クイズの合計で評価します。ただし、欠席数が予定授業数の3分の1以上になった場合は評価の対象から外します(単位を認定いたしません)。

◆ 教科書 (1) Understanding Computers: Today and Tomorrow (International Edition)

(2) BUSN (Student Edition)

◆ 参考書 (1) コンピュータとビジネス関係の音声ファイル

(2) 独自のCD

(3) PROTS (PRONUNCIATION TRAINING SYSTEM)のDVD

(4) GLeaderSystemの音声分析ソフト

(5) 3D アニメーションソフト

上村 威, 松本 恵美子, 吉岡 貴雄

◆ 授業の到達目標及びテーマ

一般的な、またはビジネスの場面における英語でのコミュニケーション能力、特にリーディング力の向上を目指す。

◆ 講義の概要

- ・TOEICテストを素材に、必須となる文法、語彙、表現などを確認しながら、特にリーディングの技能を高めるためのトレーニングを行うことによって、一般的な、またはビジネスでのコミュニケーションの場面で必要とされる英語能力の基盤を築く。
- ・TOEICテストの傾向と対策を学び、演習を通して、受験の際に自らの英語力を最大限に発揮できるようにする。
- ・上記2点によって、TOEICテストで700点以上の取得を目指す。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	オリエンテーション
第2回	Part 5 (文法・語彙) 傾向と対策
第3回	Part 5 (文法・語彙) 演習
第4回	Part 5 (文法・語彙) 演習
第5回	Part 6 (文法・語彙[長文]) 傾向と対策、演習
第6回	Part 7 (読解) 傾向と対策
第7回	Part 7 (読解) 演習
第8回	中間試験
第9回	Part 5 (文法・語彙) 演習
第10回	Part 5 (文法・語彙) 演習
第11回	Part 6 (文法・語彙[長文]) 演習
第12回	Part 7 (読解) 演習
第13回	Part 7 (読解) 演習
第14回	まとめ／質疑応答
第15回	期末試験

- ◆ 成績評価方法 授業における小テストおよび積極的参加、課題の取り組み、TOEIC公開テスト受験、中間および期末試験をもとに評価する。

◆ 教科書

- 『TOEIC(R)テスト新公式問題集Vol.3』国際ビジネスコミュニケーション協会(2008年)
- 『TOEIC(R)テスト新公式問題集Vol.4』国際ビジネスコミュニケーション協会(2009年)
- 『新TOEIC(R) TEST/パーフェクト模試』村川久子著。日本経済新聞出版社(2007年)

上村 威, 松本 恵美子, 吉岡 貴雄

◆ 授業の到達目標及びテーマ

一般的な、またはビジネスの場面における英語でのコミュニケーション能力、特にリスニング力の向上を目指す。

◆ 講義の概要

・TOEICテストを素材に、必須となる文法、語彙、表現などを確認しながら、特にリスニングの技能を高めるためのトレーニングを行うことによって、一般的な、またはビジネスでのコミュニケーションの場面で必要とされる英語能力の基盤を築く。

・TOEICテストの傾向と対策を学び、演習を通して、受験の際に自らの英語力を最大限に発揮できるようにする。

・上記2点によって、TOEICテストで700点以上の取得を目指す。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	オリエンテーション
第2回	Part 1 (写真描写) 傾向と対策、演習
第3回	Part 2 (応答) 傾向と対策
第4回	Part 2 (応答) 演習
第5回	Part 3 (会話文) 傾向と対策
第6回	Part 3 (会話文) 演習
第7回	Part 4 (説明文) 傾向と対策
第8回	Part 4 (説明文) 演習
第9回	中間試験
第10回	Part 1 (写真描写) 演習
第11回	Part 2 (応答) 演習
第12回	Part 3 (会話文) 演習
第13回	Part 4 (説明文) 演習
第14回	まとめ／質疑応答
第15回	期末試験

◆ 成績評価方法 授業における小テストおよび積極的参加、課題の取り組み、TOEIC公開テスト受験、中間および期末試験をもとに評価する。

◆ 教科書

『TOEIC(R)テスト新公式問題集Vol.3』国際ビジネスコミュニケーション協会(2008年)

『TOEIC(R)テスト新公式問題集Vol.4』国際ビジネスコミュニケーション協会(2009年)

『新TOEIC(R) TESTパーフェクト模試』村川久子著。日本経済新聞出版社(2007年)

村川 久子

◆ 授業の到達目標及びテーマ

世界中の英語圏の国に留学を希望する学生の為の授業です。大学卒業後に海外の大学院に留学や短期留学を希望している学生が海外の大学院等が要求しているminimum scoreを取得する為に試験の傾向と対策を効果的に指導するのが目的です。

◆ 講義の概要

前期は読解とライティングに焦点をあわせた授業内容です。

- (1)IBT TOEFL試験の傾向と対策。
- (2)読解力とライティング力の実力アップ。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
	内容・キーワード
	Week 1 診断テスト、授業の内容説明
	Week 2 読解の傾向と対策の解説
	Week 3～7 練習問題
	Week 8 中間試験、ライティングの解説
	Week 9 ライティングの傾向と対策の解説
	Week 10～14 ライティングの練習問題
	Week 11～Week 14 ライティングの練習問題
	Week 15 期末試験

- ◆ 成績評価方法 中間試験と期末試験で評価します。ただし、欠席数が予定授業日数の3分の1以上になった場合は評価の対象から外します。(単位を認定いたしません)。
- ◆ 教科書 The Official Guide to the New TOEFL iBT with CD-ROM
- ◆ 参考書 独自に開発した参考文献と問題集を使用。

村川 久子

◆ 授業の到達目標及びテーマ

世界中の英語圏の国に留学を希望する学生の為の授業です。大学卒業後に海外の大学院に留学や短期留学を希望している学生が海外の大学院等が要求しているminimum scoreを取得する為に試験の傾向と対策を効果的に指導するのが目的です。

◆ 講義の概要

前期は読解とライティングに焦点をあわせた授業内容です。

(1)IBT TOEFL試験の傾向と対策。

(2)読解力とライティング力の実力アップ

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
	内容・キーワード
	Week 1 診断テスト、授業の内容説明
	Week 2 リスニングの傾向と対策の解説
	Week 3～7 練習問題
	Week 8 中間試験、スピーキングの解説
	Week 9 スピーキングの傾向と対策の解説
	Week 10～14 練習問題
	Week 15 期末試験

◆ 成績評価方法 中間試験と期末試験で評価します。ただし、欠席数が予定授業日数の3分の1以上になった場合は評価の対象から外します。(単位を認定いたしません)。

◆ 教科書 Developing Skills for the TOEFL iBT Listening 2009 or 2008:
Intermediate, Advanced

◆ 参考書 独自に開発した参考文献と問題集を使用。

村川 久子, LAMBACHER, S. G., 上村 威, 吉岡 貴雄

◆ 授業の到達目標及びテーマ

1週間に1コマで1学期15回の授業があります。この授業の目的は学生が約10～15ページのリサーチペーパーを英文で書き、それを最後に発表することです。毎週リサーチペーパーの準備のための宿題を出し、これも最終成績に影響します。また、授業の説明はプレゼンテーションの方法を説明し、毎回学生は学んだ事を活かし、プレゼンテーションを経験することになります。

◆ 講義の概要

授業が毎週実施出来ない場合は出来なかった授業を翌週に行ないます。従って、授業をWeek別に記載してありますが、ずれる可能性もあります。ただし、授業内容はすべて網羅出来るように調整致します。1年生の時に論文の書き方の資料を配布していますので、それを授業に持参して下さい。’

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
Week 1	授業内容の解説、演繹法
Week 2	Logical thinking, Critical thinking
Week 3	プレゼンテーションの資料作成。 プレゼンテーションの目的、論理の組み立て、Visual Aidの準備。
Week 4	聴衆への引きつけ方、英語表現 (Powerful expressions)
Week 5	キーメッセージの伝え方
Week 6	Q & Aの仕方 質問者に対し同意、反論等の表現法
Week 7	ボディーランゲージ ジェスチャー、ポインターの使い方、マイクの使い方、目線の配り方、身振り、手振り、姿勢、態度、顔つき、服装、身だしなみ
Week 8	ボディーランゲージ ジェスチャー、ポインターの使い方、マイクの使い方、目線の配り方、身振り、手振り、姿勢、態度、顔つき、服装、身だしなみ
Week 9	プレゼンテーションのための英語表現
Week 10	発音矯正 複式呼吸法、イントネーション、音の強弱、無声の破裂音、/r/音
Week 11	発音矯正 複式呼吸法、イントネーション、音の強弱、無声の破裂音、/r/音
Week 12	プレゼンテーションの予行演習
Week 13	プレゼンテーション(期末試験)
Week 14	プレゼンテーション(期末試験)
Week 15	プレゼンテーション(期末試験)

◆ 成績評価方法 成績は宿題、リサーチペーパー、プレゼンテーションの総合計を最終成績とします。ただし、欠席数が予定授業日数の3分の1以上になった場合は評価の対象から外します(単位を認定いたしません)

◆ 教科書 配布資料を準備している。

西 和彦

◆ 授業の到達目標及びテーマ

◆ 講義の概要

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
-------	----------

◆ 成績評価方法

狩野 昌央

◆ 授業の到達目標及びテーマ

国際的に評価されている意思決定の質を高めるための科学的アプローチ手法を体系的に学びます。また、事例を基にそれがどのように各企業や政府関連組織などで実践され、どのような結果を得たのかを学び、国際的に役立つ人材の育成を目指します。講師が20年近く外資系企業で働いてきた経験を基に、実践で役立つ事例の紹介を交えながら講義を進めていく予定です。講師の期待は、受講生の就職活動において、採用担当者に認められる知識を得ていただくことです。

◆ 講義の概要

国際的に評価されている意思決定の質を高めるための科学的アプローチ手法の入門編を提供します。また、ロールプレーを通じて、実際の意思決定がどのように行われ、組織内で実践されていくべきかを体験してもらいます。尚、学習内容に応じて講義の内容と進行を変更することがあります。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	ガイダンス 授業の内容を説明します。講師自己紹介。学生とのコミュニケーションをはかります。
第2回 プロセスマネジメント概要	意思決定が必要なタイミングは組織の活動(プロセスマネジメント)と密接に関係します。国際的に標準化されたプロセスマネジメントの体系について概要を説明。組織がどのようなプロセスで動いているのかを一般論で学習します。また日米におけるプロセスマネジメント視点での組織運営の違いについて講師の実体験から説明します。
第3回 意思決定のタイミング	前回の講義に基づき、どのようなタイミング(プロセス)において意思決定が必要となり誰によって意思決定がなされるのかをグループで討議し、発表してもらい、講師学生双方で議論をします。
第4回 意思決定の質	意思決定はその後の組織活動に大きな影響を与えるため、その質が組織の将来を左右します。意思決定の質とは何かを整理し、質を左右する要素は何かを学びます。
第5回 意思決定に必要な要件	意思決定に必要な要件 意思決定に必要な情報は何かを整理します。またそれらの情報はどのようにして誰が収集するのか、事例を基に学びます。
第6回 予測モデル(1)	意思決定に伴い、将来何がもたらされるのか予測しなければ、意思決定をすることができません。意思決定に必要な科学的(統計的)な評価分析モデルの国際的体系を整理し、学びます。
第7回 予測モデル(2)	前回紹介された予測モデルの中から、コストエスティメーションの技法を紹介します。
第8回 予測モデル(3)	コストエスティメーションのツールを紹介し、実際の事例を基に意思決定のプロセスの体験をしてもらいます。
第9回 予測モデル(4)	意思決定後、決定された方針を実践に移しどのような結果を得たのか、過去の歴史を学びます。意思決定が実践に移行される際に注意すべきポイントを整理し、問題点なども紹介します。
第10回 ロールプレー(1)	クラス内を発注者グループと受注者グループに分け、事例に基づくプロジェクトを課題として与えます。同時に今後のロールプレーの進め方について説明します。
第11回 ロールプレー(2)	発注側、受注側に分かれてプロジェクトの計画を立案。スケジュール、リソース、成果物の現在・将来価値、コスト、リスクをパラメトリック技法に基づいて予測します。
第12回 ロールプレー(3)	前回予測された様々な要素を基に、意思決定に必要なレポートを共同で作成し、それぞれのグループ内で擬似的取締役会を開催し、意思決定のプロセスを体験します。レポートには、決定された方針の実践計画(実践計画)を含みます。
第13回 ロールプレー(4)	前回取りまとめられ、決定された方針とレポートを実際の事例と比較し、差異を分析・評価し、質の高い意思決定と実施可能な実践計画について討議します。
第14回 実行(実践)組織	決定された方針を実際の組織ではどのように実行(実践)するのか、日米の事例を基に学びます。プロセスマネジメントの視点で、国際規格と日本の実践活動の差異を明らかにします。
第15回 ラップアップ	本講義における学習とロールプレーを通じて、得られた成果について話し合い、取りまとめます。

◆ 成績評価方法 国際的な企業で採用されている意思決定のプロセスと技法、及び実践を学び擬似的に体験するため、授業への参加状況(出席)と、クラスメイトとの共同作業の状況(協調性とリーダーシップ)が評価対象となります。

◆ 教科書

教科書は使用しません

◆ 参考書

「Winning Decisions」、「Wharton on Making Decisions」、「

JUDGEMENT HOW WINNING LEADERS MAKE GREAT CALLS」、「Cost Estimation Body of Knowledge」、「Project Management Body of Knowledge」などから講師が英語の原文のまま抜粋し紹介します。

福島 尚文

◆ 授業の到達目標及びテーマ

【到達目標】広い視野、歴史的な観点から「ニュース」を読み、自分にとって価値ある情報選びができるジャーナリズム観を身につける。英語ニュースの読解訓練を通じ、インターネット時代の「世界の最新情報」チェック術を身につける。

【テーマ】ジャーナリズム概論

◆ 講義の概要

- ・ジャーナリズムの社会的役割と歴史の変遷、功罪を学び、インターネット時代、地方分権時代のジャーナリズムの課題を考える。
- ・通信社記者38年の経験をベースに、新聞、テレビ、通信社の記者たちによる組織ジャーナリズム、報道を中心に、雑誌やノンフィクション、インターネットを利用した各種メディアも含む広義のジャーナリズムを対象にする。
- ・組織メディアの記者とフリーランサーの違い、「記者クラブ制度」の功罪、メディアリテラシー＝市民社会と言論の関係。
- ・「少数者の声。多数派に対する少数者の異議申し立て」を伝えるジャーナリズムの原点。
- ・「国際報道」＝「国際相互理解」の基礎となる海外事情を日本に伝え、日本事情を海外に伝える言論活動。ネット時代、英語の重要性さらに増大。英字新聞の読み方のコツ。HEADLINEだけを見て、ニュースのつぼをつかむ。CNN、BBCなどテレビの英語ニュースの見方。中国・朝鮮報道を中心に「隣人としてのアジア人」を考える。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
(第1回)オリエンテーション	・自己紹介「考え、行動するのは君たち自身だ。ともに考え、議論しながら進もう」。授業計画の基本的な考え方と工程表 ・「ニュースの見方」＝毎週、注目記事紹介や時事解説をして「眼力」と感性を育む
(第2回)「情報」と「伝えること」	・なぜジャーナリズムか？魂の叫びを伝える力、「自分が伝えなければ、なかったことになってしまう！」 ・人間の怒り、喜び、悲しみを少しでも分かろうとする心、共感する感性を磨け。コミュニケーションの歴史の変遷
(第3回)メディアの現況	・活字印刷メディアの歴史的岐路＝インターネットの登場と新聞、出版界の苦境。テレビの情報伝達力、その功罪。 行間を読み、映像の向こう側にあるものを想像するチカラ。欧米メディア報道と日本のメディア、アルジャーラの登場
(第4回)記者の仕事	①記者とは、ジャーナリストとは？②組織ジャーナリストとフリーランサー・・・その強味と弱点、平均的記者像は③事件記者と記者クラブ制度③職業としてのジャーナリズム「パンか、ペンか」記者の資質、記者の倫理、法と記者活動
(第5回)ジャーナリズム概論	「ニュースの見方」「メディア・リテラシー」「英字新聞の読み方」含む
(第6回)メディア小史①	近代ジャーナリズムの発祥、欧米と日本。日本の新聞誕生。日清日露戦争、大逆事件と新聞。欧米ジャーナリズムの発展(前)
(第7回)メディア小史②	日本の近代ジャーナリズム(後)。太平洋戦争と破局へ。欧米ジャーナリズムの発展(後)。イデオロギー対立とメディア。戦後ジャーナリズム＝言論の再建と民主的報道への歩み
(第8回)ジャーナリズムと社会	ジャーナリズムの役割再考。社会発展に果たした功と罪。戦争とメディア
(第9回)メディア小史③	世界大戦後のジャーナリズム発展と現代。朝鮮戦争、ベトナム戦争から9.11以降。インターネット・ジャーナリズムの登場
(第10回)ジャーナリズムと政治	政治システム・運動とジャーナリズムの役割。反権力メディアと親権力メディア。
(第11回)国際報道とジャーナリズム①	①米メディア報道と世界②戦争と報道③朝鮮・中国近代史とメディア
(第12回)ジャーナリズムの課題	ジャーナリズムの再出発。市民との連携、オンライン・ジャーナリズムの可能性。ITツールと既存メディア
(第13回)国際報道とジャーナリズム②	④朝鮮・中国現代史とメディア⑤近現代史とメディア、イスラム報道
(第14回)講義まとめ	1～13回までに学んだことの要点を整理
(第15回)定期試験	小論文と英文ニュース翻訳(要約)など

◆ 成績評価方法 1か月ごとの小テストと期末の定期試験を行う

◆ 教科書 未定

◆ 参考書

鎌田慧「反骨のジャーナリスト」2002.10岩波新書、亘英太郎「ジャーナリズム『現』論」2004.4世界思想社、春原昭彦「日本新聞通史」1985.5新泉社、倉田保雄「ニュースの商人 ロイター」(1996年1月、朝日文庫)、西山太吉「沖縄密約」2007.5岩波新書ほか

◆ その他

必要に応じて適宜、ビデオなどビジュアル資料を使用。授業の進展具合などにより、授業計画の一部変更もあり得る。

池田 信夫

◆ 授業の到達目標及びテーマ

「ジャーナリズム」という言葉は、伝統的に新聞やテレビなどのマスメディアと結びつけられてきたが、今日ではそういう限定には意味がない。ブログやSNSなどのソーシャルメディアも広義のジャーナリズムであり、そういうメディアを範囲に入れないと現代のジャーナリズムは語れない。

本講義では、日本のメディアの現状を概観し、その歴史をたどり、各メディアの現状を明らかにするとともに、インターネット上の新しいメディアによるジャーナリズムの可能性を考える。

◆ 講義の概要

最初に、ジャーナリズムの発展した歴史を考える。もともとジャーナリズムとは、ジャーナル(日々)の出来事を伝えるというだけの意味だったが、20世紀に入ってマスメディアの世論形成における役割が大きくなってくると、メディアが国家権力を監視する役割をもつようになり、メディアは「第4権力」といわれるようになった。このピークは20世紀後半だろう。

しかし現在のマスメディアは衰退産業であり、紙や電波などの媒体がインターネットによって代替可能になった今、マスメディアを一般のウェブサイトと区別する基準はもはや存在しない。したがってジャーナリズムのあり方も大きく変わらざるをえない。NHKのような公共放送を除いては、公共的な報道という意味でのジャーナリズムも衰退に向かうことは避けられない。

しかしそれを嘆くには当たらない。今後のジャーナリズムの中心はソーシャルメディアに移り、情報量も多様性も在来メディアよりはるかに大きくなるからである。しかしこうしたメディアの質は必ずしも高くなく、嘘や中傷などのノイズが多い。それがビジネスとして収益を上げるシステムも、まだ確立されていない。本講義では、私がアゴラやBLOGOSなどの言論サイトを立ち上げ、電子出版を行っている経験を踏まえ、新しいジャーナリズムのあり方を考える。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1. オリエンテーション	講義全体の概観
2. ジャーナリズムとは何か	ジャーナリズムの意味と社会的な機能
3. メディアの歴史	18世紀以来のメディアと社会の関係
4. 新聞・雑誌	活字ジャーナリズムの解説
5. テレビとジャーナリズム	ジャーナリズムの中心となったテレビ
6. 電波利権とメディア	電波の政治力がメディアをいかにゆが
7. インターネットの登場	インターネットの構造とその社会的役割
8. ソーシャルメディア	ブログ・SNS・ツイッターなどの機能
9. ブログと社会	新しいメディアは社会にどのような影響を与えたか
10. 動画サイト	YouTube、ニコニコ動画、Ustreamなど
11. 電子出版	出版産業の没落と電子化
12. メディアというビジネス	メディアは産業としては小さいが影響力は大きい
13. ジャーナリズムと政治	民主主義はメディアの変化でどう変わるか
14. メディアの制度設計	新しいプラットフォームをいかに作るか
15. まとめ	全体の総括と質疑応答

◆ 成績評価方法 期末の試験で行なう

◆ 参考書 池田信夫『新・電波利権』(アゴラブックス)電子書籍および紙媒体

狩野 昌央

◆ 授業の到達目標及びテーマ

リーダーシップ(指導力)は判断力が源泉となります。著名な国際的リーダー達の判断に関する成功事例を学びながら、リーダーシップを構成する要素やプロセスを体系的に学び、それが実践の場でどのように活かされているかを紹介し、国際的に役立つ人材の育成を目指します。

講師が20年近く外資系企業で働いてきた経験を基に、実践で役立つ事例の紹介を交えながら講義を進めていく予定です。講師の期待は、受講生の就職活動において、採用担当者に認められる知識を得ていただくことです。

◆ 講義の概要

判断力とリーダーシップの関係を体系的に説明します。グローバル企業で指導者として活躍した方々の成功事例を紹介し、併せてリーダーシップにより、企業組織の中で何が変革され実践されたのか紹介します。また受講者とのディスカッションを多く持ち、「正しいことの実践」と「ことを正しく実践」の違いを考え、リーダーシップを身に付けてもらいます。尚、学習内容に応じて講義の内容と進行を変更することがあります。

紹介する文献や論文は英語のオリジナル版を紹介する予定です。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回 ガイダンス	ガイダンス 授業の内容を説明します。講師自己紹介。学生とのコミュニケーションをはかります。
第2回 判断とリーダーシップ(1)	著名な企業におけるリーダーの判断が組織の成功や失敗につながった事例を紹介し、リーダーの役割と仕事を明確にします。
第3回 指導者の判断のための枠組み	正しい判断はリーダーシップの発揮に欠かせません。事例を基に正しい判断を得るための情報収集の枠組みと理論を学びます。
第4回 リーダーの人格と強い意志	リーダーの人格は組織のモラルの羅針盤となります。リーダーの持つ強い意思は組織に結果をもたらします。辞令を基に成功したリーダー達の人格と強い意志について学び、分析します。
第5回 リーダーシップの判断プロセス	良い判断と悪い判断の意思決定プロセスがケーススタディを基に整理されています。これを基に良い判断と悪い判断のプロセスを学びます。
第6回 成功シナリオ	多くの著名なリーダーたちは、組織を突き動かすために成功シナリオを作り組織がそれを実践するためのマネジメントモデルを導入しています。ボーイングなどの事例を紹介し、有機的な判断と成功シナリオ作成の事例を学びます。
第7回 正しい判断のための組織化(1)	いかに有能なリーダーも全能ではありません。そのため成功したリーダーたちは正しい判断のために必要となる人材を集め、質の高い意思決定をするためのチーム構築(組織化)を心がけています。GEなどの事例を基に判断と実践のフェーズごとに組織化のためのフレームを学びます。
第8回 正しい判断のための組織化(2)	前回に引き続き、事例を基に成功を実現するチームビルディングの成功事例を学びます。
第9回 戦略判断(1)	GEの経営者達が強力な指導力で推進した「GEの成長戦略のためのプロセス」を紹介し、戦略判断の重要性和リーダーシップの関係を整理します。
第10回 戦略判断(2)	前回に続きGEの事例を基に「GEの成長を実現したツール類」を紹介し、戦略判断の重要性和リーダーシップがその実行に重要な役割を果たすことを学びます。
第11回 危機判断	リーダーシップは組織が危機に直面したときにも重要です。危機がリーダーシップを強化する機会であることを事例から学び、成功事例、失敗事例を通じて、リーダーが先を見通すことの重要性を学びます。
第12回 知識創造	優れたリーダー達は知識を得ることに貪欲であり、その知識を得るために優れた人々をチームとして集める能力を磨き、常に新しい知識を創造しています。人々から得た知識を基にさらなる成功へ向けて判断能力を磨き上げていく事例をベストバイやGEから学びます。
第13回 ロールプレー(1)	講師が提示する課題を基に受講生はグループに分かれて、企業のリーダーの一人として課題解決に挑戦します。
第14回 ロールプレー(2)	グループごとに正しい判断に必要なとされる要素とその要素が必要とされた考えの基本について発表します。
第15回 ラップアップ	本講義における学習とロールプレーを通じて、得られた成果について話し合い、取りまとめます。

◆ 成績評価方法 授業への参加状況(出席)と、学習意欲、及びクラスメイトとの共同作業の状況(協調性とリーダーシップ)が評価対象となります。

◆ 教科書 教科書は使用しません。

◆ 参考書 「JUDGEMENT HOW WINNING LEADERS MAKE GREAT CALLS」などから講師が抜粋し英語の原文のまま紹介します。

西 和彦

- ◆ 授業の到達目標及びテーマ
- ◆ 講義の概要
- ◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
-------	----------

- ◆ 成績評価方法

狩野 昌央

◆ 授業の到達目標及びテーマ

少子高齢化に代表される日本の内需の将来予測と、成長が見込まれる海外諸国の経済環境を鑑みて、日本企業及びそこで働く人々は、活動とコミュニケーションの対象を海外に移動せざるを得ません。このような環境の中、世界標準語である英語を駆使して世界中の人々と信頼関係を築き上げていくために、英語によるコミュニケーション能力の向上を目指します。特に本講義では、受講者のコミュニケーションの質の向上をめざし、企業他の組織で即戦略となる、世界に通用する人材の育成を目指します。講師が20年近く外資系企業で働いてきた経験を基に、実践で役立つ事例の紹介を交えながら講義を進めていく予定です。講師の期待は、受講生の就職活動において、採用担当者に認められる知識を得ていただくことです。

◆ 講義の概要

実際の業務における英文での事例を利用し、「相手に自分の意図や意思を正しく伝える」あるいは「相手の意図や意思を正しく理解する」ことを通じて、コミュニケーションが行動を促し、その行動が結果を生むためのビジネスライティングを学びます。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回 オリエンテーション	授業の内容を説明します。講師自己紹介。学生自己紹介。受講生とのコミュニケーションをはかります。
第2回 ビジネスレターとEメール	ビジネスレターの基本とEメールの基本
第3回 Eメール(1)	ビジネスレター、Eメールの定石(1)
第4回 Eメール(2)	ビジネスレター、Eメールの定石(2) 事例紹介
第5回 Eメール(3)	簡潔表現紹介
第6回 Eメール(4)	誰がリーダーなのか？パワーバランスの重要性
第7回 ビジネスライティング基礎(1)	冷静かつ簡潔に感情を伝える(感謝、お祝い、お詫びなどビジネスでよく発生する事例)
第8回 ビジネスライティング基礎(2)	相手が行動を起こすEメールによる依頼方法基礎
第9回 ビジネスライティング基礎(3)	相手が行動を起こさざるを得ないEメールによるテクニック基礎
第10回 ビジネスライティング基礎(4)	異文化の人々を仲間として巻き込む基本戦略ガイド
第11回 意思疎通(1)	説明(実践的事例紹介)
第11回 意思疎通(2)	説得(実践的事例紹介)
第12回 意思疎通(3)	反論し理解を促す(実践的事例紹介)
第13回 意思疎通(4)	要求し行動してもらう(実践的事例紹介)
第14回 ラップアップ	全員参加によるディスカッション

◆ 成績評価方法 授業への参加状況(出席)と課題への取り組み姿勢が評価対象となります。

◆ 教科書 教科書は使用しません

REILLY, J. E.

◆ 授業の到達目標及びテーマ

In today's global business world effective written communication in English is essential for organizations doing business in the international marketplace, and for individuals working in these organizations to have successful careers. The focus of this course is to help students develop their business grammar, vocabulary and writing skills so they are more confident, comfortable and competent using written English in the workplace.

◆ 講義の概要

The course will focus on student output through grammar and vocabulary activities, and guided and open writing practice.

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
Week 1	Course Introduction and Practice Writing
Week 2	Unit 1 – Making enquiries (business emails) Pages 7~13
Week 3	Unit 1 – Pages 14~16 Unit 2 – Business prospects (business emails) Pages 17~23
Week 4	Unit 2 – Pages 24~26 Unit 3 – Contacting customers (business emails) Pages 27~33
Week 5	Unit 3 – Pages 34~36 Unit 4 – When things go wrong (business letters) Pages 37~40
Week 6	Unit 4 – Pages 41~47
Week 7	Midterm Examination
Week 8	Unit 5 – Getting things done (business faxes) Pages 48~53
Week 9	Unit 5 – Pages 54~56 Unit 6 – Maintaining contact (personal business letters and emails) Pages 57~63
Week 10	Unit 6 – Pages 64~66
Week 11	Unit 7 – Customer service (informal business letters) Pages 67~73
Week 12	Unit 7 – Pages 74~76
Week 13	Unit 8 – Product Promotion (arranging and confirming meetings) Pages 77~80
Week 14	Unit 8 – Pages 81~85
Week 15	Final Examination

◆ 成績評価方法 Students will be evaluated on coursework (attendance, participation, in-class activities and homework assignments) and midterm and final written examinations.

Coursework:40%
Midterm written examination:30%
Final written examination:30%

◆ 教科書 Company to Company Fourth Edition (Andrew Littlejohn–Cambridge University Press)
(The instructor will also provide handouts.)

LAMBACHER, S. G.

◆ 授業の到達目標及びテーマ

- (1) 学術論文作成のためのリテラシー指導
 (2) 論文作成(15-20頁の学術論文)

1週間に1コマで1学期15回の授業があります。授業が毎週実施出来ない場合は出来なかった授業を翌週に行いません。従って、授業をWeek別に記載してありますが、ずれる可能性もあります。ただし、授業内容はすべて網羅出来るように調整致します。

◆ 講義の概要

学術論文の書き方を指導します。まず、学生の専門分野の学術論文を読ませそこからトピックの見つけ方および内容のアウトラインの書き方、それからトピックセンテンスの書き方、論理の展開、引用文権の書き方、等国際的に通用する論文を仕上げることを目的とします。論文を書くマニュアルスタイルの詳細な箇所はすべて丸暗記をするリテラシー的なことも含みます。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
Week 1	授業について説明。 世界に通用する英語の論文の書き方を細かく学ぶ。30本の学術論文を読む。20の引用文献。 最終的には15-20頁の論文作成。論文のテーマを見つけ設定する準備をする。
Week 2	技術論文を読みリサーチの方法を指導。論文のチェックリスト。
Week 3	論理の展開、起承転結と英語表現
Week 4	トピックセンテンスとパラグラフの展開
Week 5	論文のテーマ(トピック)提出。論文のフォーマットの作成方法。
Week 6	アウトライン提出。注/引用/参考文献の作成の仕方
Week 7	合計30本の学術論文を読んだ内容を1頁に英文で要約したのを提出
Week 8	論文に必要な英語表現
Week 9	論文に必要な英語表現
Week 10	論文に必要な英語表現
Week 11	論文のファストドラフト提出
Week 12	各学生の論文についての質疑応答
Week 13	クラス別に個別指導
Week 14	クラス別に個別指導
Week 15	15-20頁の論文提出

- ◆ 成績評価方法 毎週の課題50% 論文50% ただし、欠席数が予定授業日数の3分の1以上になった場合は評価の対象から外します(単位を認定いたしません)

寺尾 敦, 佐伯 胖, 伊藤 一成, 高木 光太郎, 福田 亘孝, 飯島 泰裕

◆ 授業の到達目標及びテーマ

社会系学問・情報系学問・融合系学問それぞれの学問分野が、社会と情報、人間と情報をどのように捉えているかを理解することを目標とする。

◆ 講義の概要

社会情報を学ぶ上で基本となる社会系学問・情報系学問・融合系学問についての入門講座。各分野の立場から、特に社会と情報、人間と情報の関わりについて学ぶ。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
ガイダンス	全員担当 以下の項目の順序はクラスによって異なる。
第2回 「情報社会」とは何か	福田亘孝が担当
第3回 情報社会と経済	福田亘孝が担当
第4回 情報社会におけるコミュニティ	福田亘孝が担当
第5回 情報社会・グローバル化	福田亘孝が担当
第6回 情報社会とモバイルコンピューティング(1)	飯島 泰裕が担当
第7回 情報社会とモバイルコンピューティング(2)	飯島 泰裕が担当
第8回 情報社会とソフトウェア(1)	伊藤 一成が担当
第9回 情報社会とソフトウェア(2)	伊藤 一成が担当
第10回 行動と認知	佐伯 胖が担当
第11回 状況論的認知論	佐伯 胖が担当
第12回 情報処理心理学でのモデルとは何か	寺尾 敦が担当
第13回 認知への社会文化的アプローチ	高木光太郎が担当
第14回 総括	全員担当
第15回 講義内容に対する質疑応答	全員担当

◆ 成績評価方法 出席及び担当者毎のレポート提出で評価。詳しくは初回に説明。

◆ 教科書 使用しない。

◆ 参考書 各項目ごとに担当教員が紹介する。

◆ 履修前の準備 特に必要としない。

魚住 清彦, 宮川 裕之, 飯島 泰裕, 石田 博之, 岩井 千尋, 苅宿 俊文, 小池 和彦, 佐伯 胖, 清水 康司, 高木 光太郎, 吹春 俊隆, 伏屋 広隆, 宮治 裕, 寺尾 敦

◆ 授業の到達目標及びテーマ

多様な切り口から社会情報に関わる様々な学問分野について学び、大学における今後の学修の参考とすることを目標とする。

◆ 講義の概要

14名の社会情報学部専任教員による、社会情報に関わる様々な学問分野を紹介するオムニバス講義。各週に1名の教員が講義を行う。便宜上 14名の教員を三つのグループ X、Y、Z に分け、各グループ毎に課題の提出を求める。教員のグループ分け、担当スケジュールは初回ガイダンス時に提示する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
初週	ガイダンス
第2週～第14週	各教員による講義

◆ 成績評価方法 出席及び各グループ毎の3度のレポート提出で評価。初回ガイダンスへの出席も評価する。

◆ 教科書 使用しない。

◆ 参考書 各回毎に紹介。

◆ 履修前の準備 特に必要としない。

稲積 宏誠, 東 るみ子, 南部 和香

◆ 授業の到達目標及びテーマ

学部教育課程を通じて必要となるレポートや論文作成能力の基礎となる, 論理的な文章を書くことができるようになること。

◆ 講義の概要

大学では, 自ら主体的に考え, 学ぶことが大切です。高校までとは違い, 単に授業に出席してその内容を記憶するだけではなく, 得られた知識を元に自分の頭で考え, 自分の意見を持ち, それを自分の言葉で表現することで他人に理解してもらうことが必要となります。すなわち, ひとりひとりが問題意識を持って物事を観察し, 問題を発見し, その解決のために自分で積極的に情報を探索し, 分析し, 理解し, 活用することが重要となります。社会情報学部では, こららの取り組みを入学時の必須目標としています。「コミュニケーション基礎」では, 特に今後必要となるレポートや論文作成能力の基礎となる, 論理的な文章を書くことができるようになることを到達目標としています。また, ここで身につけた文章作成技術やプレゼンテーション技術は, 社会情報演習 I で十二分に発揮されるものと期待しています。また, 授業は1学年を3つのクラスに分けて演習を織り交ぜながら進めます。なお, 今年度は, 現在設計中の新しい取組を実践する予定ですので, 以下の授業計画とは若干異なる進め方になりますので, ガイダンス時の指示に従ってください。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
ガイダンス	コミュニケーション基礎で学ぶ内容について
レポート・論文の作成に向けて1	日常用いている文章表現と, レポートや論文で用いる文章表現は何が異なるのかについて学ぶ。
コンピュータリテラシ1	コンピュータの基本操作, ネットワークリテラシ, 文章作成機能の修得1:基本機能
レポート・論文の作成に向けて2	論理的な文章を書くための基本ルールの修得を行う。
レポート・論文の作成に向けて3	パラグラフライティングを中心に, 文章作成のためのトレーニングを行う。
コンピュータリテラシ2	文章作成機能の修得2:高度な編集機能
レポート・論文の作成に向けて4	参考文献や資料収集の方法や, その引用方法について学ぶ。
レポート作成課題演習	課題として与えられたテーマについて小論文を作成し, その問題点を検討する。
コンピュータリテラシ3	プレゼンテーションソフトの利用1:
図表現の活用1	文章理解と趣旨伝達の手段としての図表現の活用方法について学ぶ。
図表現の活用2	文章理解と趣旨伝達の手段としての図表現の活用方法について学ぶ。
コンピュータリテラシ4	プレゼンテーションソフトの利用2
総合演習1	課題として与えられたテーマについて小論文を作成し, 併せてそれを簡潔に説明するためのプレゼンテーション資料を作成する。
総合演習2	課題として与えられたテーマについて小論文を作成し, 併せてそれを簡潔に説明するためのプレゼンテーション資料を作成する。
まとめ	全体のまとめを行う。

◆ 成績評価方法 授業中に与えられた課題, レポートおよび演習の内容により評価する。

◆ 教科書 授業開始時に指示する。

◆ 参考書 適宜指示する。

◆ 履修前の準備 特になし

伏屋 広隆, 魚住 清彦, 高村 正志, 矢野 公一

◆ 授業の到達目標及びテーマ

数列や級数の概念を把握すること, 初等関数について導関数や不定積分が計算できること, グラフを描くことができることなどを目標とする.

◆ 講義の概要

さまざまな量やその変化を取り扱うための基礎となる数理学の分野を解析学と呼ぶ. 社会科学, 情報科学, 自然科学など量を取り扱うほとんどの学問分野において解析学は不可欠であり, 「基礎数学」は解析学の基本的なツールである微分法と積分法への入門講義である. 内容は高等学校の「数学Ⅲ」からの抜粋および大学での学修に備えた発展であり, 記号や言葉は大学での他の数学系講義にあわせる. 講義と演習を組み合わせた形で授業を行う.

授業計画は担当教員や進行状況などによって変わることがあるので注意すること.

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回:	基礎数学入門で学んだ微分法の復習
第2回:	積・商の微分法, 関数値の極限
第3回:	合成関数の微分法, 逆関数の微分法
第4回:	三角関数の極限, 三角関数の微分法
第5回:	ネピアの数, 指数関数の微分法, 対数関数の微分法, べき関数の微分法
第6回:	グラフの接線, 関数値の近似, 関数の増減, 極大・極小
第7回:	高階導関数, 変曲点, グラフの凹凸
第8回:	微分法のまとめ
第9回:	定積分, 原始関数, 不定積分, 基本的な関数の不定積分
第10回:	置換積分法
第11回:	部分積分法, いろいろな関数の積分
第12回:	面積, 体積
第13回:	数列の復習, 数列の極限, 級数
第14回:	区分求積法, 積分法のまとめ
第15回:	定期試験

◆ 成績評価方法 毎回の成果および期末試験で評価する.

◆ 教科書 使用しない.

◆ 参考書 必要に応じて紹介する.

◆ 履修前の準備 「基礎数学入門」あるいは高等学校の「数学I」「数学II」「数学A」の内容を前提とする.

寺尾 敦, 東 るみ子, 南部 和香

◆ 授業の到達目標及びテーマ

統計学に対する理解を深めるとともに、応用分析への基礎を涵養する。統計学は社会情報学を学ぶ上での基礎となる科目である。この講義の目標は、統計学の基礎を理解すること、および、統計学を学ぶのが楽しくなることである。したがって、統計学の基礎がわかり、統計学が楽しくなれば、講義の履修目標を達成したことになる。

◆ 講義の概要

講義はテキストにそって進める。書店で統計学のテキストを何冊か見るとわかるが、統計学の入門コースで学ぶ内容はだいたい決まっている。この講義も、そうした内容を、標準的な進め方で学習する。入門とはいえ、講義を聞いてすぐにわかる学習内容ではない。講義を聞いてもすぐにわからないことが多く、講義に出席することが無意味に思えることもあるかもしれない。しかし、それでも講義に出席し、少しでも理解しようと努力しなければならない。普段は学習せず、試験前の少しの準備で乗り切れるような科目ではない。

講義では問題演習の時間を十分にとることができない。しかし、テキストの内容を理解するために、問題演習は重要である。各章の章末問題などに取り組むこと。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回:ガイダンス	ガイダンス. テキスト第1章.
第2回:データの整理(1)	テキスト第2章:度数分布表とヒストグラム.
第3回:データの整理(2)	テキスト第2章:代表値(平均値・中央値)と散布度(分散・四分位数)を用いた, 1変量のデータの要約.
第4回:確率(1)	テキスト第3章:標本空間. 標本点の数えあげによる複合事象の確率. 確率の乗法定理と加法定理. 条件つき確率.
第5回:確率(2)	テキスト第3章:ベイズの定理を使った「原因の確率」の計算.
第6回:確率分布	テキスト第4章:確率分布. 確率分布の平均(期待値)と分散.
第7回:2項分布	テキスト第5章:代表的な離散型分布として, 2項分布を学ぶ.
第8回:正規分布	テキスト第5章:代表的な連続型分布として, 正規分布を学ぶ. 測定値の標準化. 正規分布表の使い方. 2項分布の正規近似.
第9回:標本抽出	テキスト第6章:無作為抽出. 標本分布(特に, 標本平均の分布). 不偏推定量. 中心極限定理.
第10回:推定(1)	テキスト第7章:点推定と区間推定. 平均値の区間推定(大標本).
第11回:推定(2)	テキスト第7章:割合の区間推定. 平均値の区間推定(小標本).
第12回:統計的仮説検定(1)	テキスト第8章:統計的仮説検定の考え方. 平均値の検定(1標本). 割合の検定(1標本).
第13回:統計的仮説検定(2)	テキスト第8章:平均値の差の検定. 割合の差の検定. 小標本の検定. 対応のあるデータの検定.
第14回:相関と回帰	テキスト第9章:相関係数. 記述統計としての単回帰分析.
第15回:期末試験	期末試験

◆ 成績評価方法 最終試験での得点を成績とする。学習状況の把握のために出席をとることはあるが、出席は成績評価と無関係である。宿題の提出も任意であり、成績とは関係ない。

◆ 教科書 P. G. ホーエル(1981)『初等統計学(原書第4版)』培風館

◆ 参考書 豊田秀樹・前田忠彦・柳井晴夫(1992)『原因をさぐる統計学』講談社(ブルーバックス)

金子治平・上藤一郎(2007)『よくわかる統計学Ⅰ基礎編』ミネルヴァ書房

◆ その他 この講義で取り上げる内容は、講義を一度聞いただけでは理解できない。授業時間以外に予習や復習をすること。予習・復習なしで試験に合格することは不可能である。

増永 良文, 伊藤 一成, 原 潔

◆ 授業の到達目標及びテーマ

情報科学=コンピュータサイエンス (computer science) と称する学問分野は、サイエンスやテクノロジーといった既存の固定化された枠組みを超えて、社会との関係性を密に有する広大な学問分野を形成しつつある。情報科学とは何か、社会情報学を学ぶうえで必須の学問分野を、コンピュータとインターネットに焦点をあてて、それを理解するためのさまざまな基本的概念を学ぶ。あくまで入門ではあるが、さまざまな「なぜ？」に答えられるように、それらの仕組みや動作原理を理解する。

◆ 講義の概要

1. 知識基盤社会におけるコンピュータサイエンスの重要性を論じる。
2. コンピュータについて、その誕生から現在に至るまでの歴史、さまざまなコンピュータのあること、そしてコンピュータの基本構成と動作原理を講義する。
3. コンピュータは高速・大量の情報処理を行えると共に大量のデータを管理できる。そのためには、ハードウェアだけではなく、オペレーティングシステムやプログラミング言語といったソフトウェア、そしてデータベースなどを理解しておかねばならない。それらのエッセンスを講義する。
4. 現代のコンピュータはインターネットを介して世界規模で結びついている。なぜ電子メールが届くのか、なぜウェブがうまく動くのかなど、インターネットテクノロジーの基礎を講義する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	受講ガイダンス: 講義の進め方や評価の方法などを説明すると共に、社会情報学における本科目の位置付けを論じる。
第2回	コンピュータサイエンス: コンピュータサイエンスとは何か、コンピュータサイエンスとその関連分野、知識基盤社会とコンピュータサイエンスについてそのエッセンスを講義する。
第3回	コンピュータの誕生と発達: コンピュータの誕生—ENIAC—、第2・第3・第4世代のコンピュータ、さまざまなコンピュータ、我が国のコンピュータ開発について講義する。
第4回	パーソナルコンピュータとクライアント/サーバコンピューティング: PCとは何か、WYSIWYG、CUIとGUI、クライアント/サーバコンピューティングについてそのエッセンスを講義する。
第5回	コンピュータの基本構成とマイクロプロセッサ: コンピュータの基本構成、マイクロプロセッサ製造技術、ダイオードとトランジスタの仕組みと動作についてそのエッセンスを講義する。
第6回	四則演算の論理回路による実現: コンピュータと2進数、補数を用いた四則演算の実現、四則演算の論理回路による実現、論理回路の論理素子による実現について講義する。
第7回	コンピュータアーキテクチャと動作原理: コンピュータアーキテクチャとは何か、命令セットアーキテクチャ、コンピュータの動作原理—命令サイクル—について講義する。
第8回	オペレーティングシステム: ソフトウェアとOS、TSS、マルチプログラミング、仮想記憶についてそのエッセンスを講義する。
第9回	プログラミング: プログラミングとは何か、フローチャートとプログラム、コンパイラ、プログラミング言語概観についてそのエッセンスを講義する。
第10回	データベース: データベースとは何か、リレーショナルデータベース、リレーショナルデータベース言語SQL、データベース管理システムについてそのエッセンスを講義する。
第11回	インターネット: インターネットとは何か、インターネット開発の歴史、インターネット統計についてそのエッセンスを講義する。
第12回	インターネットテクノロジー I —: IPアドレス、ドメインネームシステム (DNS)、ルーティング、TCP/IPについてそのエッセンスを講義する。
第13回	インターネットテクノロジー II —: IPアドレス、ドメインネームシステム (DNS)、ルーティング、TCP/IPについてそのエッセンスを講義する。
第14回	まとめ: 本講義全般を振り返り、必要なところを補う。
第15回	定期試験

- ◆ 成績評価方法 (ミニ)レポートの提出状況と内容、および定期試験の結果を総合的に判断して評価する。
- ◆ 教科書 増永良文著: コンピュータサイエンス入門、Computer Science Library第1巻、サイエンス社、2008年1月。
- ◆ 参考書 特に指定はない。
- ◆ 履修前の準備 特に必要としない。
- ◆ その他 教科書は講義の毎回忘れないこと。授業は3クラス共に、共通のパワーポイントを用いて行なう。

宮治 裕, 東 るみ子, 伊藤 一成, 飯島 泰裕

◆ 授業の到達目標及びテーマ

プログラミングの基礎を学び、簡単なソフトウェアの開発技能を身に付けることを目標とする。また、プログラミングを通して、コンピュータやソフトウェアの動作原理の理解を深めると共に、論理的な思考能力を身に付けることを目的とする。さらに、プログラム開発の各工程の概要を理解し、説明できるようになることを目的とする。

◆ 講義の概要

VB (Visual Basic) を利用し、プログラミングの基礎を学ぶ。文字列操作や乱数やグラフィックやファイル入出力などを学習し、簡単な単体のアプリケーションソフトを作成する技法について学ぶ。またプログラム開発プロジェクト課題では、プログラム開発の各工程を実践すると共に、チームでの共同開発を経験する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	LMSの利用方法 Excel試験 プログラミング概論・プログラム開発工程の説明 実習環境の説明・簡単なプログラムの作成
第2回	構造・変数・型・式 プログラム作成実習
第3回	条件分岐 プログラム作成実習
第4回	繰り返し処理 プログラム作成実習
第5回	配列 プログラム作成実習
第6回	グラフィクス プログラム作成実習
第7回	ファイル入出力 プログラム作成実習
第8回	中間試験 個人別プログラム企画
第9回	個人別プログラム開発 個人別プログラム開発
第10回	プログラム開発プロジェクト・企画 プログラム開発プロジェクト・遂行
第11回	プログラム開発プロジェクト・遂行 プログラム開発プロジェクト・遂行
第12回	プログラム開発プロジェクト、プレゼンテーション資料作成 プログラム開発プロジェクト・プレゼンテーション練習
第13回	プログラム開発プロジェクト・プレゼンテーション プログラム開発プロジェクト・評価・反省会
第14回	まとめ
第15回	期末試験

◆ 成績評価方法 実習課題(7回、20%)、個人別プログラム課題(1回、20%)、開発プロジェクト課題(1回、20%)、定期試験(2回、40%)にて評価する。なお、Excel試験の結果を成績に加味する。

◆ 教科書

テキストは配布する。

◆ 参考書

適宜指示する。

◆ その他

予習・復習および宿題提出は必須とする。

開発プロジェクトの提出・プレゼンテーションに間に合うよう、チームで協力して作業を進める必要がある。

前期中にIT講習会の表計算中級までのスキルチェックに合格しておくことが望ましい。

本科目のExcel試験の問題には、IT講習会の表計算中級レベルに加え、COUNTIF/SUMIF/VLOOKUP関数が含まれる。

宮川 裕之, 飯島 泰裕, 石田 博之, 伊藤 一成, 岩井 千尋, 魚住 清彦, 清成 透子, 小池 和彦, 清水 康司, 寺尾 敦, 長橋 透, 開澤 栄相, 福田 亘孝, 吹春 俊隆, 伏屋 広隆, 増永 良文, 宮治 裕, 矢野 公一

◆ 授業の到達目標及びテーマ

社会科学, 情報科学, 自然科学に親しむこと, コンピュータを利用すること, 文章を読み解きまた表現することなどの具体的な作業を通じ, 大学生生活へ順応し, 基礎的なコミュニケーション能力を会得することを目標とする。

◆ 講義の概要

各クラスを3分割した少人数のグループを一名の教員が担当する。演習内容には, 履修指導, 個別面談などを含むが, 詳細や教材は担当教員毎に異なる。ただし初回は履修指導を行うので, 必ず「授業要覧」および「私の時間割」を持ってくること。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
初週	履修指導。「授業要覧」「私の時間割」を必ず持つてくること。
第2週以降	担当教員による。

◆ 成績評価方法 担当教員による。具体的内容は初回に提示。ただし出席を重視する。

◆ 教科書 必要ならば担当教員が提示。

◆ 参考書 必要ならば担当教員が提示。

◆ 履修前の準備 特に必要としない。

飯島 泰裕, 宮川 裕之, 東 るみ子, 寺尾 敦, 宮治 裕, 南部 和香

◆ 授業の到達目標及びテーマ

企業や行政などから示された具体的な問題に対して、その問題の所在を見極め、対応策を提案するという作業を通じて、問題発見と解決能力を養う。併せて、グループで問題解決を図っていく過程を通じて、プロジェクトの進め方についての問題点を理解する。

◆ 講義の概要

企業や行政などの抱える具体的な問題、解決すべき課題等を提示する。それに対して小グループを構成して、その課題解決に取り組む。授業は、その進捗報告を中心に行われ、課題解決に向けて必要となる知識や技術などを適宜学習する。したがって、必ずしも授業時間内で教室内での取組にとどまらず、外部への調査等を含めた授業時間外の取組も必要となる。また、全体での中間報告会、最終報告会を、授業時間外に別途設定し行う予定である。

なお、進め方の詳細については、ガイダンス時に説明し、取組内容の詳細は、授業開始時に説明する予定である。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
ガイダンス	授業の進め方, テーマ詳細の説明
第2回から第7回	基礎教育(マナー、発想法、ヒアリング)の後、グループの決定、テーマ選定、問題の所在の確認、取り組み方法の検討と決定等を行う。
中間報告会	進捗報告と問題点の説明
第9回から第14回	具体的な問題解決、提案に向けて取り組む。
最終報告会	

◆ 成績評価方法 中間報告会と最終報告会までの取組とその内容により評価する。

◆ 教科書 特に指定しない。

◆ 参考書 必要な資料等については、適宜配布する。

◆ 履修前の準備 購買会にて、『青山学院大学 創造ノート』を購入し持参すること

開澤 栄相, 石田 博之, 岩井 千尋, 清水 康司, 長橋 透, 吹春 俊隆, 伏屋 広隆

◆ 授業の到達目標及びテーマ

各担当教員によって内容が異なるので、別冊子で確認してください。

◆ 講義の概要

演習は、通常の講義のような教員から学生への一方的な授業ではありません。学生が主体であり、学生自らが調べ、考え、そして議論を交わし合う、双方向的な授業です。したがって、学生には能動的な、積極的な態度が必要とされます。与えられたテーマに対して、自らそれに取り組んでいくことが大切です。

演習Ⅱは、定員10名程度の少人数クラスで行われます。受講生の選考については下記の「履修前の準備」をよく読んでください。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回-第15回	各担当教員によって異なるので、別冊子を確認してください。

◆ 成績評価方法 各担当教員によって差はあるでしょうが、基本的には遅刻、欠席は認められません。授業に対する積極的な態度を一番重視して評価します。

◆ 教科書 各担当教員の指示に従ってください。

◆ 参考書 各担当教員の指示に従ってください。

◆ 履修前の準備 演習Ⅱでは、各担当教員の授業内容や募集方法が記載された別冊子があります。受講希望者は、まず学生ポータルで確認して下さい。また社会情報学部合同研究室(B527)には冊子体がありますので、必要な学生は取りに行ってください。

長橋 透, 清成 透子, 飯島 泰裕, 石田 博之, 伊藤 一成, 稲積 宏誠, 岩井 千尋, 魚住 清彦, 小池 和彦, 清水 康司, 寺尾 敦, 開澤 栄相, 吹春 俊隆, 福田 亘孝, 伏屋 広隆, 宮川 裕之, 増永 良文, 宮治 裕, 矢野 公一

◆ 授業の到達目標及びテーマ

学生が各担当教員の専門分野について興味を覚え、その分野についてより深く学び始めるための少人数ゼミ。

◆ 講義の概要

一般に演習は講義とは違い、各学生が自らの意思によって調べ、報告することが義務付けられます。「学生の自らの意思による」ということが演習科目では重要な要素なので、積極的に知識を身に付けようとする姿勢が何よりも大切です。したがって履修を希望する学生は、それなりの覚悟をもって履修希望教員との面接に望んで下さい。具体的内容は、別冊子「社会情報演習Ⅲガイド」を参照して下さい。

なお社会情報演習Ⅲの募集は、2年次の後期に行う予定です。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回～第15回	詳細は、担当教員による。

◆ 成績評価方法 詳細は、担当教員による。

演習Ⅲは学生の意思で参加を希望するのであるから、欠席は原則認められません。

◆ 教科書 必要に応じて担当教員が提示します。

◆ 参考書 必要に応じて担当教員が提示します。

◆ 履修前の準備 必要に応じて担当教員が指示します。

◆ その他 演習Ⅲでは、各担当教員の授業内容や募集方法が記載された別冊子があります。

受講希望者は、学生ポータルへの指示にしたがって内容を確認して下さい。また社会情報学部合同研究室(B527)には冊子体がありますので、必要な学生は取りに行ってください。

長橋 透, 清成 透子, 矢野 公一, 飯島 泰裕, 魚住 清彦, 伊藤 一成, 小池 和彦, 高木 光太郎, 宮川 裕之, 福田 亘孝, 清水 康司, 開澤 栄相, 岩井 千尋, 増永 良文, 伏屋 広隆, 石田 博之, 寺尾 敦, 稲積 宏誠, 宮治 裕, 吹春 俊隆

◆ 授業の到達目標及びテーマ

学生が各担当教員の専門分野について興味を覚え、その分野についてより深く学ぶための少人数ゼミ。

◆ 講義の概要

一般に演習は講義とは違い、各学生が自らの意思によって調べ、報告することが義務付けられます。「学生の自らの意思による」ということが演習科目では重要な要素なので、積極的に知識を身に付けようとする姿勢が何よりも大切です。したがって履修を希望する学生は、それなりの覚悟をもって履修希望教員との面接に望んで下さい。具体的内容は、別冊子「社会情報演習Ⅳガイド」を参照して下さい。なお社会情報演習Ⅳの募集は、3年次の前期に行う予定です。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回～第15回	詳細は、担当教員による。

◆ 成績評価方法 詳細は、担当教員による。

演習Ⅳは学生の意思で参加を希望するのであるから、欠席は原則認められません。

◆ 教科書 必要に応じて担当教員が提示します。

◆ 参考書 必要に応じて担当教員が提示します。

◆ 履修前の準備 必要に応じて担当教員が指示します。

◆ その他 演習Ⅳでは、各担当教員の授業内容や募集方法が記載された別冊子があります。

受講希望者は、学生ポータルでの指示にしたがって内容を確認して下さい。また社会情報学部合同研究室(B527)には冊子体がありますので、必要な学生は取りに行ってください。

宮川 裕之, 長橋 透, 飯島 泰裕, 石田 博之, 伊藤 一成, 稲積 宏誠, 岩井 千尋, 苅宿 俊文, 魚住 清彦, 小池 和彦, 清成 透子, 高木 光太郎, 清水 康司, 寺尾 敦, 長橋 透, 開澤 栄相, 福田 亘孝, 伏屋 広隆, 増永 良文, 宮川 裕之, 矢野 公一, 宮治 裕

◆ 授業の到達目標及びテーマ

プロジェクト研究としての卒業研究は、複数の学生が1グループとなって与えられたプロジェクトを遂行することにより、1年間をかけて、社交性、協調性そしてコミュニケーション能力といった会社組織に適用するために必要な能力を向上させることを到達目標とする。

個別研究としての卒業研究は、個々の学生が3年生までに身につけた知識をもとにして、自ら設定した課題を1年間かけて、例えば卒業論文の作成といったかたちでまとめることを到達目標とする。

なお、卒業研究は必修科目である。

◆ 講義の概要

卒業研究には、プロジェクト研究と個別研究の二つがある。

プロジェクト研究は、特定の専門領域に偏らず広域的な分野をテーマとし、一人の教員(または複数の教員)の指導のもと3~5人の学生が1グループを作って、卒業研究を行うものである。これに対して個別研究は、一人の教員が学生一人一人の卒業研究の指導を行うものである。履修希望の受け付け方や選抜方法、さらに各教員の研究テーマについては、別冊子「卒業研究ガイド」を参照すること。

なお卒業研究の募集は、3年次の後期に行う予定である。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回～第30回	学生は担当教員とよく話し合いながら各自の目的を達成するための1年を通じた計画を立て、それにしたがって卒業研究を進めていかなければならない。

◆ 成績評価方法 担当教員による。

◆ 教科書 必要に応じて担当教員が提示する。

◆ 参考書 必要に応じて担当教員が提示する。

◆ 履修前の準備 担当教員との意思疎通をよくはかかっておくことが大切である。

◆ その他 卒業研究では、各担当教員の授業内容や募集方法が記載された別冊子「卒業研究ガイド」がある。

学生は、学生ポータルサイトの指示にしたがって内容を確認すること。また社会情報学部合同研究室(B527)には冊子体があるので、必要な学生は取りに行くこと。

魚住 清彦, 飯島 泰裕

◆ 授業の到達目標及びテーマ

実社会を知り、自身の適性を知り、将来を意識した能力の涵養を行う

◆ 講義の概要

企業、官公庁、非営利団体などにおいて、自らの専門や将来のキャリアに関連した就業体験を行うことにより、自身の能力の涵養、適性の評価を図ると共に、将来の進路決定に役立てる。また、他の人の就業体験についてもプレゼンテーションと質疑によって情報交換し、自分の将来の進路決定の一助とする。単位取得の方法については注意が必要なので、ガイダンスにて詳しく述べる。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
事前授業① 4～5月	全体説明
受け入れ企業の応募 4～6月	受け入れ企業の募集案内を、学生支援ユニット進路グループあるいはWebASHIにて参照し、応募する
事前授業② 6月中旬	学生支援ユニット進路グループが主催の「マナー講座」を受講
インターンシップ派遣 7～9月	事前学習で学んだことを意識して、活動する
インターンシップ派遣 7～9月	
事後授業① 10月	インターンシップ報告書の作成、報告会のプレゼンテーション資料作成
事後授業② 11月～1月	インターンシップ報告会

◆ 成績評価方法 インターンシップ報告会の発表と質疑をもとに、総合的に評価する。

◆ 教科書 適宜、資料を配布する

◆ 履修前の準備 受講を希望するものは、履修登録の前に、担当教員(魚住または飯島)の面談を受けること

◆ その他

- ・受け入れ企業は3年生を想定している企業が多い
- ・受け入れが決まった場合、辞退を認めない。必ず、参加すること
- ・この科目では、約1週間以上の就業体験(4日以上かつ32時間以上)のものを対象とする
- ・受け入れ企業が決まりインターンシップへ行く前に、学生支援ユニット学生生活グループで、必ずインターンシップ保険の加入手続きをすること

飯島 泰裕, 増永 良文

◆ 授業の到達目標及びテーマ

コンピュータサイエンスから情報社会、知識社会へ

◆ 講義の概要

コンピュータの出現により、自然科学として情報科学(コンピュータサイエンス)が生まれ、アーキテクチャやアルゴリズムの技術進化により、ワープロ、マルチメディア、インターネット、ケータイ、電子マネー、e-ショップなどの情報テクノロジーが作られ、現代社会へ浸透した。この流れを社会科学的に見ると、利便性向上や効率化に寄与し新たな問題を生みながらも、脱工業社会から情報社会へと進んでいる。また、情報による社会分析テクノロジーも高度化している。これを情報テクノロジー面から、知識社会、メディア、サイバースペースに触れながら解説する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	オリエンテーション(飯島、増永)
第2回	コンピュータと生産性向上、そして戦略的経営(飯島)
第3回	インターネットと企業組織(飯島)
第4回	ICT犯罪とネットワーク犯罪(飯島)
第5回	知的財産権(飯島)
第6回	マルチメディアとICTの変化(飯島)
第7回	コンピュータグラフィックス(飯島)
第8回	人工知能とビジネス(飯島)
第9回	デジタルデバイド(飯島)
第10回	ICTと商店街活性化(飯島)
第11回	Web2.0と知識社会(飯島)
第12回	ウェブと社会(増永)
第13回	情報倫理とセキュリティ(増永)
第14回	総括(飯島、増永)
第15回	試験(飯島、増永)

◆ 成績評価方法 授業時に行うミニツレポートと定期試験の結果を総合的に評価する

◆ 教科書 適宜、資料配布する (飯島)

増永良文『コンピュータサイエンス入門—コンピュータ・ウェブ・社会—』サイエンス社 (増永)

◆ 参考書 情報処理学会編『エンサイクロペディア情報処理 改訂4版』オーム社

福田 亘孝, 岩井 千尋

◆ 授業の到達目標及びテーマ

現代の日本と世界について社会科学的理解を深めることを目的とする。

◆ 講義の概要

今日の生活を考える上で、「情報」はキー・ワードである。現代社会は「情報化社会」と言われるように私たちは数多くの情報を、日々、受信すると同時に、発信もしている。本講義では、情報、経済、政治、文化などに対する社会科学的理解を深めることを目標とする。具体的には、第一に、社会科学の学際的な視点によって情報化社会が持つ特徴を多面的に明らかにする。第二に、情報が人間生活の様々な側面にもたらすインパクトについて考え、情報化社会がもつ光と影について考察する。第三に、情報社会の未来へ向けての、制度、経済、政治、文化、個人などのあり方について検討する。これらを通して、人間社会と情報の関係をより深く理解できるようにする。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	「情報社会」論の系譜(1):1970年代までの展開
第2回	「情報社会」論の系譜(2):1980年代以降の発展
第3回	情報社会化と労働の変容
第4回	情報社会における政治システム
第5回	グローバリゼーションと情報社会
第6回	情報社会における社会福祉
第7回	先進進諸国における環境と情報
第8回	開発途上国における環境と情報
第9回	エネルギー問題と情報
第10回	情報化と持続可能な社会発展
第11回	情報化と日本経済
第12回	世界経済と情報
第13回	市場システムと情報
第14回	情報化と企業
第15回	定期試験

◆ 成績評価方法 授業への貢献度、レポート、学期末試験、等を総合的に評価する。

◆ 教科書 担当教員が講義で随時、指示する。

◆ 参考書 ★『情報通信白書』総務省

★『インターネット白書』財団法人インターネット協会

★公文俊平『リーディングズ 情報社会』NTT出版

★フランク ウェブスター『「情報社会」を読む』青土社

★吉見 俊哉・花田 達朗『社会情報学ハンドブック』東京大学出版会

★アンソニー・ギディンズ(著)(2009)『社会学(第5版)』而立書房

◆ 履修前の準備 ★授業には十分な予習をして出席し、講義中はマナーを守ること。

★授業の復習は必ず行うこと。

◆ その他 ★授業計画はあくまで予定であり、実際の講義の進行とは異なる場合があることに注意すること。

★授業の内容については担当教員が説明する。

植村 朋弘

◆ 授業の到達目標及びテーマ

身近にある表現メディアを使って表現をおこない、それを基に他者とコミュニケーションをおこなうことで、自己と他者と関係の変化を捉える。

◆ 講義の概要

いくつかの表現の事例を通して、表現するメディア・表現内容の違い・表現プロセスについて着目し、その共通点と違いを捉えながらメディアを理解していく。またそれら表現を使って他者とコミュニケーションすることで、そこに生まれる理解とその意味を明示し、メディアのはたらきを探求する。授業では、表現と講義を交えておこなう。また簡単な表現を展開してもらう予定である。ただし特別なスキルや知識は必要としない。授業内容によってグループでおこなう予定。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	オリエンテーション
第2回	メディア表現 1: 視点移動
第3回	メディア表現 2: 経験のデザイン
第4回	メディア表現と対話: 1・2
第5回	メディア表現 3: キーワードから新たな発見へ
第6回	メディア表現 4: 物語のデザイン 1
第7回	メディア表現と対話: 3・4
第8回	メディア表現 5: 表現を通じた対話と他者の理解
第9回	表現メディアによる再構成と解釈 1
第10回	表現メディアによる再構成と解釈 2
第11回	表現メディアによる再構成と解釈 3
第12回	遊び・学びにおけるメディアのはたらき
第13回	多層的人の関わりと表現
第14回	出来事とのデザインと表現活動
第15回	リフレクション

◆ 成績評価方法 授業への積極的な参加、レポート等の提出状況、出席等を総合的に考慮して評価する。

高木 光太郎, 佐伯 胖, 清成 透子, 寺尾 敦

◆ 授業の到達目標及びテーマ

「心理学」というのはどういうことを研究するかについての全体像を把握するとともに、最新の心理学研究が取り組んでいる重要なテーマとその研究成果を紹介し、社会情報学の研究に心理学がどのようにかわるかについての、最新の研究成果を学ぶ。

◆ 講義の概要

1～5回で心理学の主要な研究領域および研究方法についてごく大まかな理解をもらい、6回以降で社会情報学部において実際に学ぶことのできる心理学(各担当教員の専門領域)の概要を理解する。6回以降の担当教員のパートでは、その領域の基本的な考え方、代表的な研究例、最近の動向と課題をわかりやすく整理して説明するようにする。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回(担当 高木)	講義概要／心理学の諸領域(1):学習／感覚・知覚
第2回(担当 高木)	心理学の諸領域(2):記憶／言語と思考
第3回(担当 高木)	心理学の諸領域(3):発達／社会
第4回(担当 高木)	心理学の諸領域(4):パーソナリティ／臨床
第5回(担当 寺尾)	心理学研究法:観察、調査、実験、モデリング
第6回(担当 寺尾)	認知心理学・認知神経科学入門(1):心理学と教科教育の融合
第7回(担当 寺尾)	認知心理学・認知神経科学入門(2):心理学と脳科学の融合
第8回(担当 寺尾)	認知心理学・認知神経科学入門(3):心理学と経済学の融合
第9回(担当 佐伯)	状況論入門(1):分散認知論
第10回(担当 佐伯)	状況論入門(2):実践知と身体知
第11回(担当 佐伯)	状況論入門(3):状況的学習論
第12回(担当 清成)	進化心理学入門(1):心の社会性
第13回(担当 清成)	進化心理学入門(2):血縁淘汰と家族の絆
第14回(担当 清成)	進化心理学入門(3):互惠性と道徳感情
第15回(全員)	まとめ

◆ 成績評価方法 1～4回、5～8回、9～11回、12～14回の各パートの最終回でミニテストを行い、その結果の合計点を算出し、それをもとに評価を行う。

◆ 参考書 担当教員が講義で紹介する。

清成 透子

◆ 授業の到達目標及びテーマ

本講義では、実験や調査といった社会心理学的な手法を用いて導き出された様々な知見から、社会の中で生きる我々人間を理解することを旨とする。

◆ 講義の概要

社会で生活している人間と、そういった人間達を作る社会を分析するにあたって、社会心理学はどのようにアプローチしているのか。この問いに一言で答えるのは難しい。何故なら、社会心理学の研究は多岐にわたっており、統一理論あるいは統一パースペクティブのもとで人間を理解するというやり方ではなく、個別のトピックに対して個別の理論を構築してきた学問だからである。そこで本講義では、社会心理学における著名な研究を一通り学ぶのと同時に、社会、制度、文化といった外的な環境と個々の人間との間にある相互規定関係を分析するマイクロ・マクロ・アプローチを学ぶことを通して、トピックごとの理解を超えた人間行動の統一的理解が社会心理学において可能かどうか、検討していく。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	オリエンテーション
第2回	人間の社会性
第3回	マイクロ・マクロ関係
第4回	社会的影響過程(1)
第5回	社会的影響過程(2)
第6回	社会的影響過程(3)
第7回	心について
第8回	社会的交換(1)
第9回	社会的交換(2)
第10回	援助行動
第11回	間接互惠性(1)
第12回	間接互惠性(2)
第13回	社会規範の実効化
第14回	文化と制度
第15回	まとめ

◆ 成績評価方法 期末試験と授業中のリアクションペーパーに対する反応
詳しい基準は初回のオリエンテーションで説明する

◆ 教科書 特に指定しない

◆ 参考書 山岸俊男編『社会心理学キーワード』有斐閣

佐伯 胖

◆ 授業の到達目標及びテーマ

受講者自身が、自分自身の「学び」を振り返って、本当の学びがどういうものかを探求し、自分自身の学びのあり方を確立する。

◆ 講義の概要

講義は受講者自身が、経験からいつのまにか作り上げてきた「学習観」を、過去の学習理論を歴史的にたどりながら問い直していく。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	学力低下問題について
第2回	「学べない」人／「学べる」人
第3回	「おぼえる」と「わかる」こと
第4回	「勉強」から「学び」へ
第5回	「学校で学ぶ」ということ
第6回	授業で「理解」を獲得する(ランパート実践)
第7回	障がい児の学びから学ぶ(1)
第8回	障がい児の学びから学ぶ(2)
第9回	障がい児の学びから学ぶ(3)
第10回	コンピュータ利用教育とは(1)
第11回	コンピュータ利用教育とは(2)
第12回	共感的学習論(1)
第13回	共感的学習論(2)
第14回	共感的学習論(3)
第15回	まとめ

◆ 成績評価方法 毎回「リアクションペーパー」を提出し、よい意見を出した場合は成績に加算される場合がある。それ以外に、15～30分ぐらいのショート・テストを適宜行う(一週間前に予告するが欠席する場合は事前に申し出よ)。成績はそれらの合計点で評価される。

開澤 栄相, 南部 和香

◆ 授業の到達目標及びテーマ

本授業ではマクロ経済学(初～中級レベル)の標準的内容の前半までの講義を行なう。到達目標は、(1)経済学の用語や理論を正確に言葉で表現できるようになること、(2)理論を図で正しく表現できるようになること、(3)標準的な計算問題が解けるようになること、の三点であり、新聞記事や経済雑誌の論文が理解できる能力を養う。

◆ 講義の概要

1. 標準的なマクロ経済学のエッセンスをまとめた講義資料を用いて講義を行なう。
2. 経済用語を抽象的にではなく具体的に理解するために、必要に応じデータベース(Financial QUESTなど)から現実のデータを取得し、グラフや図を描くことを通じて、用語や理論に対する理解を深めると共に統計数字に対する感覚を養う。
3. 講義内容に関連した練習問題等を課す予定である。
4. 可能であれば、マクロ計量モデルを用いたシミュレーションのデモを行いたい。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	経済学の概要
第2回	マクロ経済学と経済循環
第3回	国民経済計算
第4回	産業連関分析
第5回	国民所得決定理論(1)
第6回	国民所得決定理論(2)
第7回	国民所得決定理論(3)
第8回	消費理論
第9回	投資理論
第10回	財政の理論(1)
第11回	財政の理論(2)
第12回	貨幣の需要と供給の理論(1)
第13回	貨幣の需要と供給の理論(2)
第14回	IS-LM分析(1)
第15回	IS-LM分析(2)

◆ 成績評価方法 ①課題(40%)、②試験(60%)の成績により評価する。但し、課題・試験とも授業出席が前提である。

◆ 教科書 教科書は用いず、教員が作成した講義資料を用いる。

◆ 参考書 浅子・加納・倉澤『マクロ経済学 第2版』新世社 2009年
マンキュー『入門経済学』東洋経済新報社 2008年
ステイグリッツ『マクロ経済学 第3版』東洋経済新報社 2007年
中谷巖『入門マクロ経済学 第5版』日本評論社 2007年
伊藤元重『マクロ経済学』日本評論社 2002年
他、講義中に指示する。

◆ その他 授業計画は、進捗度や理解度などにより、変更されることもありうる。

長橋 透, 南部 和香

◆ 授業の到達目標及びテーマ

現実の経済政策問題への対応策を強く意識したミクロ経済学の考え方の基本を、言葉と図(グラフ)を中心にして理解する。

◆ 講義の概要

ミクロ経済学は個々の家計(消費者)、企業、産業の経済行動や、市場における政府の役割などを分析します。例えば独占や公害に対して政府はどのように介入すべきなのか、労働意欲を削がずに所得再分配をするにはどのようにすべきなのか、などが分析されます。

教科書の「はしがき」によれば、1回の講義で1章ずつ進むことが想定されています。しかし企業の利潤最大化行動や余剰概念に関わる章については、複数回をあてて丁寧に説明したいと思います。その他の章については、各章のコアとなるところをまず丁寧に説明してから、次に一つトピックを選んで説明していきます。したがって受講生は、事前に該当する章をすべて読んでくることを強く勧めます。そして授業で触れられなかったその他のトピックについては、受講生自らが取り組んでみてください。また各章の練習問題も、ぜひ解いてみてください。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	市場と政府の役割分担
第2回	市場(需要曲線、供給曲線、市場均衡)
第3回	供給(生産、費用、利潤) I
第4回	供給(生産、費用、利潤) II
第5回	余剰と参入分析 I
第6回	余剰と参入分析 II
第7回	市場介入
第8回	弾力性・限界収入
第9回	規模の経済・独占
第10回	外部経済と不経済
第11回	減産補助金と環境権
第12回	情報の非対称性
第13回	公共財
第14回	権利の売買
第15回	定期試験

◆ 成績評価方法 定期試験の成績を主とするが、小テストを行った場合にはその成績も参考にして評価する。

◆ 教科書 八田達夫 『ミクロ経済学 I』 東洋経済新報社 2008年

◆ 参考書 岩田規久男 『ゼミナール ミクロ経済学入門』日本経済新聞社 1993年

柳川・町野・吉野 『ミクロ経済学・入門-ビジネスと政策を読みとく-』 有斐閣アルマ 2008年

井堀利宏 『入門・ミクロ経済学(第2版)』 新世社 2004年

◆ 履修前の準備 講義を受ける前に該当する章を読んでくることを強く勧めます。

◆ その他 質問があれば研究室B624に来てください。

清水 康司, 松澤 孝紀

◆ 授業の到達目標及びテーマ

本講義の目的は、経営学を初めて学ぶ者に、経営学の基礎的知識を習得させることである。授業計画のテーマに沿ってキーワードの用法と意味を理解する。

◆ 講義の概要

本講義の目的は、経営学を初めて学ぶ者に、経営学の基礎的知識を習得させることである。

本年度は、以下の授業計画ごとにキーワードを定め、経営学の分野における一般的用法と意味を解説する。これらの言葉は、より専門的な社会科学分野の諸科目において基礎となる重要な用語・概念であるので、十分に理解しておく必要がある。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第 1回 ガイダンス	各担当教員より、シラバス配付。必ず出席して説明を受けること。
第 2回	第1回目に配付するシラバス参照
第 3回	第1回目に配付するシラバス参照
第 4回	第1回目に配付するシラバス参照
第 5回	第1回目に配付するシラバス参照
第 6回	第1回目に配付するシラバス参照
第 7回	第1回目に配付するシラバス参照
第 8回	第1回目に配付するシラバス参照
第 9回	第1回目に配付するシラバス参照
第10回	第1回目に配付するシラバス参照
第11回	第1回目に配付するシラバス参照
第12回	第1回目に配付するシラバス参照
第13回	第1回目に配付するシラバス参照
第14回	第1回目に配付するシラバス参照
第15回	第1回目に配付するシラバス参照

◆ 成績評価方法 試験 : 第1回目の授業で各担当者より指示

◆ 教科書 第1回目の授業で各担当者より指示

- ◆ 参考書 加護野忠男、吉村典久、『1からの経営学』、中央経済社 (2006)
 伊丹敬之、加護野忠男、『ゼミナール経営学入門』 第3版、日本経済新聞社 (2003/02)
 宮川公男、『経営情報入門(基礎シリーズ)』、実教出版 (1999/04)
 深山明、海道ノブチカ、『経営学の基礎』 改訂版、同文館出版 (2006/11)
 P・F・ドラッカー、上田惇生、『マネジメント-基本と原則』[エッセンシャル版]、ダイヤモンド社 (2001/12)
 日本経済新聞、など

◆ 履修前の準備 初回の講義で2回コースガイダンスを実施するので興味のある学生は各教室で担当者の説明を受けることができます。

第1回目: 09:00-09:45 , 第2回目: 09:45-10:30

◆ その他 担当教員が複数なので、必ず第1回目の授業に出席し各担当者の説明(2回に分けて実施)を受けること。

※2010年度のテーマとキーワード

【テーマ】経営学の方法と歴史、株式会社論、企業目標論、経営生産論、マーケティング論、経営財務論、経営管理論、経営組織論、経営労務論、経営意思決定論、組織行動と企業文化、イノベーションとベンチャー・ビジネス、環境問題と企業経営、情報化の進展と企業経営

【主なキーワード】株式会社の仕組み、株主、資本調達、取締役会、経営理念、企業の社会的責任、企業戦略、プロダクトポートフォリオマネジメント、競争戦略、戦略と環境、ポーターの基本戦略、経営資源と戦略、マーケティング、市場細分化、マーケティング・ミックス、企業組織、組織、意思決定、情報、生産管理、企業間取引、市場と取引、業務提携、資本提携、モチベーションとリーダーシップ、動機づけ、リーダーシップ、イノベーション、日本の経営、終身雇用、年功序列など

岩井 千尋, 松澤 孝紀

◆ 授業の到達目標及びテーマ

経営情報Ⅱでは会計学の基本を習得する。

企業経営のための情報として、会計情報が重要であることは論を待たない。

会計学とは、企業、官庁、家計などの経済主体が行う会計行為、すなわち、富の存在とその変動に伴う損益とに関する計数的情報の測定と伝達の行為を対象とし、法則、性格、構造などを、首尾一貫した理論的体系をもって解明しようとする学問のことである。

本講義では、会計情報のうち最重要である「貸借対照表」「損益計算書」が読めるようになって、その「理論性」を体得することを目標とする。

◆ 講義の概要

簿記や他の基礎知識もない人が、会計学の基礎を網羅的に概観し、理解できるように授業を行う。特に、会計学からはみ出ても、経営情報として重要な語句や概念は丁寧に説明していく。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	会計の役割
第2回	利益計算の仕組み
第3回	利益計算のルール
第4回	売上高と売上債権
第5回	棚卸資産と売上原価
第6回	固定資産と減価償却
第7回	<中間テスト>
第8回	金融活動の資産と損益
第9回	営業上の負債と他人資本
第10回	資本の充実と剰余金の分配
第11回	財務諸表の作成と報告
第12回	連結財務諸表
第13回	株式投資と会計情報
第14回	格付けと会計情報
第15回	予備

◆ 成績評価方法 中間テストと期末テスト、レポートなどで評価する

◆ 教科書 会計学入門(日経文庫)(新書) 桜井久勝(著) 価格 ¥ 903

◆ 参考書 『稲盛和夫の実学 経営と会計』日経ビジネス人文庫 稲盛和夫／著 ¥ 550

◆ 履修前の準備 教科書を1章ずつ進むので、前もって読んでくること。

寺尾 敦

◆ 授業の到達目標及びテーマ

社会調査での問題意識と研究方法を理解し、いくつかの実用的な統計解析手法を習得することが目標である。特に重点的に学習する統計解析手法は、分割表の分析、分散分析、回帰分析、主成分分析、因子分析、である。社会統計の理論的側面と実践的側面をバランスよく学習して、社会情報学部のミッションである文理融合の人材を育てることに貢献する。きちんと学習した人が就職でも進学でも報われる講義にする。

◆ 講義の概要

1年生での必修科目「統計入門」の知識を前提として、いくつかの実用的な統計解析手法を講義する。特に重点的に学習する統計解析手法は、分割表の分析、分散分析、回帰分析、因子分析、である。

授業はテキストにそって進める。テキストで取り上げられていない内容を学習するときには、教材を用意したり、適当な参考文献を紹介したりする。

講義には数学的な内容もかなり含まれる。こうした学習は、統計解析手法を正しく用いる助けになるとともに、新しい手法を自力で学習するための基礎となる。社会統計の講義で学習したことを基礎に、もう少し学習を進めれば、品質管理、商品企画、購買心理分析など、様々な領域で活躍できる力を手にできる。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	ガイダンス. 統計入門の落ち穂拾い。(テキスト第1, 2, 3, 5, 6章)
第2回	統計入門の落ち穂拾い(テキスト第1, 2, 3, 5, 6章)
第3回	分割表の分析(テキスト第4, 9章)
第4回	分割表の分析(テキスト第4, 9章)
第5回	1要因の分散分析(テキスト第7章)
第6回	2要因の分散分析・多重比較・被験者内デザイン(テキスト範囲外)
第7回	発展的な分散分析(テキスト範囲外)
第8回	単回帰分析(テキスト第8章)
第9回	多重分割表の分析(テキスト第10章)
第10回	重回帰分析(テキスト第11章)
第11回	重回帰分析(テキスト第11章)
第12回	主成分分析(テキスト範囲外)
第13回	因子分析(テキスト範囲外)
第14回	因果モデル(テキスト第12章)
第15回	まとめ. ただし、未消化の内容があればそれにあてる

◆ 成績評価方法 最終試験での得点を成績とする。学習状況の把握のために出席をとることはあるが、出席は成績評価と無関係である。授業時間以外にも予習・復習をしないと、試験で合格点を取ることは不可能である。

◆ 教科書 ボーンシュテット&ノーキ(1990)『社会統計学—学生版—』ハーベスト社

◆ 参考書 片瀬一男(2007)『社会統計学』放送大学教育振興会

◆ 履修前の準備 ・1年時の必修科目「統計入門」の内容はすべて理解していることを前提に授業を進める。

・線型代数を使って理論の説明を行うことがあるので、「数理情報基礎I」および「数理情報基礎II」を履修することは理解の助けになる。

◆ その他 ・iPhone を毎時間持参すること。電卓を用いて演習問題を解くことなどに使用する。

・この講義で取り上げる内容は、講義を一度聞いただけでは理解できない。授業時間以外に予習や復習をすること。きちんと学習した人が就職でも進学でも報われる講義にする。

・この講義の内容をマスターすれば、統計学の知識に関しては「品質管理検定(QC検定)」の2級に合格できる水準に到達する。受験することを勧める。夏休みに試験対策の勉強会を行う。

寺尾 敦

◆ 授業の到達目標及びテーマ

社会情報学部の社会科学系基盤科目「社会統計」の理解を深めるとともに、実際にデータを分析する能力を養うことが、この講義の目標である。

◆ 講義の概要

フリーの統計解析ソフトウェアである、Rを用いて、データ解析の実習を行う。データ解析を通して、社会統計の講義で学習した内容の理解を深める。

GUIの完備された統計解析ソフトウェアに比べると、コマンド入力が基本となるRは敷居が高いかもしれない。しかしながら、社会情報学部の学生には、オープンソースの文化に触れてほしい。Rはオープンソースであり、世界中のユーザーの協力によって開発がすすめられている。

実習の中心となる統計解析手法は、分割表の分析、分散分析、回帰分析、主成分分析、因子分析、である。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	ガイダンス、Rの基礎(データの扱い、記述統計、など)
第2回	2つの変数の記述統計(テキスト第3章)
第3回	母集団と標本(テキスト第4章)
第4回	統計的仮説検定(テキスト第5章)
第5回	連関測度の計算(テキスト範囲外、社会統計の講義での「分割表の分析」に対応)
第6回	2つの平均値を比較する(テキスト第6章)
第7回	検定の多重性(テキスト第19章)、1要因の分散分析(テキスト第7章)
第8回	多重比較(テキスト第7章)
第9回	2要因の分散分析(テキスト第7章)
第10回	外れ値と相関係数(テキスト第10章)、二項検定(テキスト第12章)
第11回	回帰分析(テキスト第15章)
第12回	共分散分析(テキスト第13章)
第13回	主成分分析(テキスト範囲外、社会統計の講義での「主成分分析」に対応)
第14回	因子分析(テキスト第16章)
第15回	まとめ、未消化の内容があればそれにあてる。

◆ 成績評価方法 授業でのレポート課題と、最終レポートで評価する。最終試験は行わない。最終レポートはJGSSデータの解析である。自分で興味あるテーマを設定し、分析を行い、レポートを作成する。

◆ 教科書 山田剛史・杉澤武俊・村井潤一郎(2008)『Rによるやさしい統計学』オーム社

◆ 参考書 青木繁信(2009)『Rによる統計解析』オーム社

◆ 履修前の準備 船尾暢男(2009)『R流！イメージで理解する統計処理入門』カットシステム

◆ 履修前の準備 ・パソコン室で実習を行うので、IT講習会修了程度のPCスキルを身につけておくこと。

◆ 履修前の準備 ・1年時の必修科目「統計入門」の内容はすべて理解していることを前提に授業を進める。

◆ その他 iPhoneを毎回持参すること。分析に使うデータを、iPhoneを通して、授業への参加者から集めることがある。

【履修登録の条件等】

「社会統計」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。

石田 博之, 清成 透子

◆ 授業の到達目標及びテーマ

統計調査と統計指標の解説を通じて、統計データの基本的な見方について理解することを目的とする。

◆ 講義の概要

本講義では、身近な社会・経済問題を量的に把握する上で基礎となる統計データの見方について、統計調査の概要と統計指標の分析例の紹介を中心に講義を行い、データ分析の基礎を解説する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1 オリエンテーション	統計データの利用と注意
2 統計の種類と分類	内容、作成主体、作成方法、ストックとフロー、質的・量的分類
3 データ分析の基礎(1)	構成比、関係比率、変化率
4 データ分析の基礎(2)	物価指数
5 データの収集(1)	情報収集、研究計画、質問紙作成
6 データの収集(2)	データベースの構成と活用
7 データ間の関係	相関と因果、散布図、相関係数
8 質問紙調査(1)	心理学的データの特徴
9 質問紙調査(2)	尺度の信頼性と妥当性、選択肢
10 人口	人口構成、人口増加率、少子高齢化、単身化
11 労働	就業者数、失業率、雇用、賃金動向
12 家計	家計支出、消費動向、所得格差
13 国民経済	国民経済計算体系、三面等価、GDP、名目と実質
14 人口問題と日本経済 化	人口の構造変化と日本経済への影響
15 期末試験	

◆ 成績評価方法 出席態度、授業での課題、期末試験を総合的に評価する。

◆ 教科書 御園謙吉・良永康平(2007)「よくわかる統計学Ⅱ 経済統計編」ミネルヴァ書房
担当教員が講義で随時、指示する。

◆ 参考書 金子治平・上藤一郎(2007)「よくわかる統計学Ⅰ基礎編」ミネルヴァ書房

◆ 履修前の準備 日本の社会・経済情勢への関心と基礎知識を有することが望ましい

◆ その他 授業計画はあくまで予定であり、実際の講義の進行とは異なる場合があることに注意すること。
授業の内容については担当教員が説明する。

石田 博之, 清成 透子

◆ 授業の到達目標及びテーマ

統計データの収集・加工・分析を通じて、統計データの使い方について理解することを目的とする。

◆ 講義の概要

本講義では、身近な社会・経済問題を量的に把握する上で基礎となる統計データの使い方について、データの収集・整理と統計指標の加工・分析を中心に講義と演習を行い、データ分析の応用を解説する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1 オリエンテーション	データ分析の活用と注意点
2 データの収集・整理	情報スキル I の復習:統計表の作成、グラフの作成
3 比率	成長率、寄与度と寄与率、季節調整
4 指数	個別指数、総合指数、加重総合指数
5 大量データの処理	統計解析ソフトSASの特徴、使い方
6 基礎統計量の算出	平均値、度数分布、カイニ乗検定など
7 データベースの作成	データファイル、データコード表
8 心理尺度分析(1)	質問紙データの解釈
9 心理尺度分析(2)	尺度ラベル、相関分析
10 心理尺度分析(3)	分析結果の解釈、研究レポートの作成
11 人口	人口ピラミッド、合計特殊出生率
12 労働	完全失業率、有効求人倍率
13 家計	ローレンツ曲線、ジニ係数
14 国民経済	名目値と実質値、GDP成長率、支出項目別寄与度
15 まとめ	研究レポート、課題の考察

◆ 成績評価方法 出席態度、授業での課題、レポートを総合的に評価する。

◆ 教科書 担当教員が講義で随時、指示する。

◆ 参考書 御園謙吉・良永康平(2007)「よくわかる統計学 II 経済統計編」ミネルヴァ書房

野宮大志郎・池周一郎・稲葉昭英・杉野勇編著(2004)「SASプログラミングの基礎 第2版」ハーベスト社

◆ 履修前の準備 情報スキル I 合格と同程度のIT活用能力があることが望ましい。

◆ その他 授業計画はあくまで予定であり、実際の講義の進行とは異なる場合があることに注意すること。

授業の内容については担当教員が説明する。

【履修登録の条件等】

「データ分析」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。

川本 思心

◆ 授業の到達目標及びテーマ

科学技術社会論、科学技術コミュニケーション、科学技術リテラシー、そして生物学の観点から、社会の様々な側面で行われている科学技術コミュニケーションを、具体的な事例を通して紹介する。授業の目標は、現代社会の要請として再発明されつつある社会イノベーションとしての科学技術コミュニケーションを理解することを通して、科学技術と社会に対する多面的な視野を獲得することである。

◆ 講義の概要

科学技術と社会の関係は、社会を担う個人の数だけ多様である。本講義では、科学技術の発達とコミュニケーションの様式の変化が、科学技術と社会の関係を変化させつつけていることを、多様な事例から示す。今日的な課題であるパンデミックや遺伝子組換作物などの社会的な事例だけではなく、人々が自然や科学をどう見てきたのかを、近代科学以前の時代の視点や、科学技術リテラシーの視点で紐解く。さらに、科学技術と表裏一体の関係にあるコミュニケーションを、知識の進化やイノベーション普及の視点で捉える。これらを踏まえ、今実践活動としてどのような教育・実践が行われているのかを解説する。本講義を通して、履修者自身としてどう科学技術と社会と関わっていくのかを考察してほしい。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
ガイダンス	講義全体の構造とねらいの説明
なぜ「科学技術と社会」なのか	パンデミック、遺伝子組換、サイバネティクス、エネルギーが作る社会と科学の関係
社会と科学の相互作用	怪物博物館—知識とイメージの蓄積
科学技術リテラシーとは何か1	実用的リテラシーとしての伝統的生態学的知識—トキの事例等から
科学技術リテラシーとは何か2	市民社会に参加するためのリテラシー—知識を超えて
科学技術リテラシーとは何か3	科学とアートを結ぶ—パロディとしての科学
科学とウソ	疑似科学からソーカル事件まで
ディスカッション	前半の内容についてグループディスカッションを行う
科学技術コミュニケーションの今	カフェから官邸まで、今そこにある科学技術コミュニケーション
知識はどう進化するのか	ミーム、精神の生態学、生殖としての学習・教育
人間と機械	延長された表現型としての科学技術
イノベーションとコミュニケーション	地域における太陽光発電の普及から
だれが科学技術を担うのか	コミュニケーションをどう評価し、学習・教育するか
科学技術コミュニケーションは社会を変えるのか	社会は科学をどう見ているのか。それをどう実践につなげるか
まとめとディスカッション	前半を踏まえ、後半のないようについてグループディスカッションを行う

◆ 成績評価方法 出席回数およびレポートによる

◆ 参考書

梶雅範, 野原佳代子, 西條美紀編

「科学技術コミュニケーション入門—科学・技術の現場と社会をつなぐ」培風館 (2009.05)

植村 朋弘

◆ 授業の到達目標及びテーマ

いくつかの表現とそのプレゼンテーションをもとに自己と他者の理解について探り、その意味と仕組みを捉える

◆ 講義の概要

「自己の経験を振り返って表現し、グループ内でプレゼンテーションをおこない、それをもとにディスカッションを展開していく」という流れをいくつかの具体的な事例をもとに、プレゼンテーション本来の意味と仕組みを考察していく。そのときプレゼンテーションによるフィードバックによって、自己と他者の理解を深めていくプロセスに着目していく。授業では演習的な形式と講義形式を組み合わせながら展開していく。演習形式では、簡単な表現を展開してもらう予定である。但し特別なスキルや知識は必要としない。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	オリエンテーション
第2回	自己の経験のふりかえりと表現 1
第3回	表現を通した他者の経験の理解／プレゼンテーション 1
第4回	自己の経験のふりかえりと表現 2-1
第5回	自己の経験のふりかえりと表現 2-2
第6回	表現を通した他者の経験の理解／プレゼンテーション 2
第7回	自己の経験のふりかえりと表現 3
第8回	表現を通した他者の経験の理解／プレゼンテーション 3
第9回	自己の経験のふりかえりと表現 4
第10回	表現を通した他者の経験の理解／プレゼンテーション 4
第11回	表現の背景にある構造
第12回	即興演技によるデザイン発想とプレゼンテーション
第13回	活動の観察とリフレクションを支えるプレゼンテーションツール 1
第14回	活動の観察とリフレクションを支えるプレゼンテーションツール 2
第15回	リフレクション

◆ 成績評価方法 グループワークに対する貢献、授業への積極的な参加、プレゼンテーションのパフォーマンス等を総合的に加味して決定する。

楠本 和哉

◆ 授業の到達目標及びテーマ

マスメディア、インターネット、携帯電話など個々のメディアの成り立ち、特徴、産業構造、ならびにそれらのメディアが抱える課題、社会への影響力を理解した上で、メディアに操作されることなく自立的にメディアと向き合うための基本的な能力の涵養を目指す。

◆ 講義の概要

「メディアとは何か」、「メディアリテラシとは何か」について、メディア論、情報理論を交えながら解説した後、個々のメディアの特徴と今日的な課題について言及する。

講義の前半では、社会的影響力の強いテレビ、新聞に焦点を当て、その生成過程、産業構造、ならびにコンテンツの偏向要因等について解説する。講義の後半では、ラジオ、雑誌、ならびにネット系メディア(インターネット、モバイル)の産業構造、コンテンツ特性とデジタル情報の特性について解説する。最後にメディアの進化が社会にもたらす「光と影」について考察し講義を締めくくる。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
オリエンテーション	本講義の全体像を示す。
メディアとは何か	メディアとは何かについて、情報理論、メディア論を交えて考察する。
メディアリテラシとは何か	情報理論、メディア論を再度確認した上で、メディアリテラシとは何かについて解説する。
テレビの特性と課題①	テレビの産業の特質について特に法規制の観点から解説する。
テレビの特性と課題②	テレビの産業構造ならびに今日的な課題について解説する。
テレビの特性と課題③	テレビ番組の内容に影響を及ぼす要因について解説する。
新聞の特性と課題①	新聞の成立過程を歴史的に解説する。
新聞の特性と課題②	新聞の種類と主たる新聞のプロフィールを解説する。
新聞の特性と課題③	新聞の産業構造と今日的な課題について解説する。
雑誌の特性と課題	雑誌の成立過程、産業特性ならびに雑誌情報の特性について解説する。
ラジオの特性と課題	ラジオの産業構造と音声メディア固有の効果について解説する。
インターネットの特性と課題①	インターネットの産業構造とネット広告の配信技術について解説する。
インターネットの特性と課題②	デジタル情報のもつ特殊性、危険性について解説する。
メディアの進化と社会	メディアの進化が社会にもたらす「光と影」について考察する。
定期試験	講義内容の理解度を問う問題を出題する予定。

◆ 成績評価方法 1.学期末の定期試験(1回、70%) 2.レポート(1回、30%)

◆ 参考書 菅谷明子著「メディア・リテラシー 世界の現場から」岩波新書

伏屋 広隆, 矢野 公一

◆ 授業の到達目標及びテーマ

さまざまな量やその変化を取り扱うための基礎となる数理科学の分野を解析学と呼ぶ。社会科学, 情報科学, 自然科学など量を取り扱うほとんどの学問分野において解析学は不可欠である。解析学の基本的なツールは微分法と積分法であり, 「社会数理基礎I」と「社会数理基礎II」とあわせて, 解析学の基本である微積分法を講義する。前期科目「社会数理基礎I」では, おもに一変数関数の微分法と, 微分法の逆演算である不定積分を扱う。いろいろな関数について, 導関数や不定積分が計算できること, グラフを描くことができること, テイラー展開ができること, 簡単な微分方程式を解くことができることなどを目標とする。

◆ 講義の概要

おもに一変数関数の微分法について講義する。項目としては, 導関数, 高階導関数, 不定積分, テイラー展開, 極値問題, 最大値問題, 簡単な微分方程式など。

授業計画はクラスおよび進行状況などによって変わることがあるので注意すること。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	微分係数と導関数
第2回	合成関数および陰関数の微分法
第3回	逆関数とその導関数
第4回	原始関数と不定積分
第5回	不定積分の計算法
第6回	一次近似とランダウの記号
第7回	高階導関数
第8回	テイラー展開
第9回	テイラー展開の計算法
第10回	不定形の極限
第11回	極値問題
第12回	グラフの凹凸
第13回	最大値の定理, 中間値の定理, 平均値の定理
第14回	微分方程式
第15回	定期試験

◆ 成績評価方法 期末試験で評価する。

◆ 教科書 使用しない。

◆ 参考書 必要に応じて紹介する。

◆ その他 【履修登録の条件等】

学習効果を高めるために「社会数理基礎 I 演習」を同時に履修することを強く勧める。
高等学校の「数学Ⅲ」あるいは「基礎数学」の内容を前提とする。

伏屋 広隆, 矢野 公一

◆ 授業の到達目標及びテーマ

「社会数理基礎Ⅰ」に引き続いて、解析学の基本である微積分法を講義する。後期科目「社会数理基礎Ⅱ」では、多変数関数、特に二変数関数の微分法、一変数関数の定積分、多変数関数の定積分を扱う。いろいろな関数について、偏微分、全微分が計算できること、極値問題を解くことができること、定積分が計算できることなどを目標とする。

◆ 講義の概要

一変数関数の積分および多変数関数の微積分を扱う。一変数関数に関する項目としては、リーマン和、広義積分。多変数関数に関する項目としては、偏微分、全微分、極値問題、条件付き極値問題、最大値問題、重積分など。

授業計画はクラスおよび進行状況などによって変わることがあるので注意すること。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	偏微分と全微分
第2回	陰関数, 合成関数
第3回	逆関数(逆写像)
第4回	多変数関数の高階導関数
第5回	多変数関数のテイラー展開
第6回	多変数関数の極値問題
第7回	条件付き極値問題
第8回	多変数関数の最大値問題
第9回	リーマン和と定積分
第10回	積分法(復習)とその応用
第11回	広義積分
第12回	重積分と累次積分
第13回	一般領域上の重積分
第14回	重積分の変数変換
第15回	定期試験

◆ 成績評価方法 期末試験で評価する。

◆ 教科書 使用しない。

◆ 参考書 必要に応じて紹介する。

◆ その他 【履修登録の条件等】

学習効果を高めるために「社会数理基礎Ⅱ 演習」を同時に履修することを強く勧める。

「社会数理基礎Ⅰ」の内容を前提とする。

伏屋 広隆, 矢野 公一

◆ 授業の到達目標及びテーマ

講義科目「社会数理基礎 I」とあわせて、いろいろな関数について、導関数や不定積分が計算できること、グラフを描くことができること、テイラー展開ができること、簡単な微分方程式を解くことができることなどを目標とする。

◆ 講義の概要

一変数関数の微分法、特に導関数、高階導関数、不定積分、テイラー展開、極値問題、最大値問題、簡単な微分方程式などについての問題演習。

演習中に質問は受けるが、「社会数理基礎 I」の講義内容をあらかじめ一から解説することはないので注意すること。第一週から始まる隔週開講科目である。

講義の進行状況、学事暦などに応じてスケジュール、内容を変更することがある。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	基礎知識の確認
第2回	微分係数と導関数、逆関数とその導関数
第3回	原始関数と不定積分、不定積分の計算法
第4回	一次近似とランダウの記号、高階導関数とテイラー展開
第5回	テイラー展開の計算法とその応用、不定形の極限
第6回	一変数関数の極値問題
第7回	微分方程式、最後のまとめ
第8回	演習内容に関する質疑応答

◆ 成績評価方法 毎回の課題に対する提出物によって評価する。出席だけでは評価しないので注意すること。学期末の試験は行わない。

◆ 教科書 「社会数理基礎 I」の各自のノート

◆ 参考書 「社会数理基礎 I」のための参考書

◆ 履修前の準備 同時履修している「社会数理基礎 I」の復習。講義科目「社会数理基礎 I」を履修登録中であるかあるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。

◆ その他 【履修登録の条件等】

「社会数理基礎 I」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。

伏屋 広隆, 矢野 公一

◆ 授業の到達目標及びテーマ

講義科目「社会数理基礎Ⅱ」とあわせて、いろいろな関数について、偏微分、全微分が計算できること、極値問題を解くことができること、定積分が計算できることなどを目標とする。

◆ 講義の概要

一変数関数に関してリーマン和、広義積分、多変数関数に関して偏微分、全微分、極値問題、条件付き極値問題、最大値問題、重積分などについての問題演習。

演習中に質問は受けるが、「社会数理基礎Ⅱ」の講義内容をあらかじめ一から解説することはないので注意すること。第一週から始まる隔週開講科目である。

講義の進行状況、学事暦などに応じてスケジュール、内容を変更することがある。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	基礎知識の確認
第2回	偏微分、全微分、陰関数、合成関数
第3回	写像と逆写像、高階偏導関数、テイラー展開
第4回	多変数関数の極値問題、最大値問題
第5回	リーマン和と定積分、積分法とその応用
第6回	広義積分、重積分と累次積分
第7回	一般領域上の重積分、重積分の変数変換、最後のまとめ
第8回	演習内容に関する質疑応答

◆ 成績評価方法 毎回の課題に対する提出物によって評価する。出席だけでは評価しないので注意すること。学期末の試験は行わない。

◆ 教科書 「社会数理基礎Ⅱ」の各自のノート

◆ 参考書 「社会数理基礎Ⅱ」のための参考書

◆ 履修前の準備 同時履修している「社会数理基礎Ⅱ」の復習。講義科目「社会数理基礎Ⅱ」を履修登録中であるかあるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。

◆ その他 【履修登録の条件等】

「社会数理基礎Ⅱ」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。

小池 和彦, 高村 正志

◆ 授業の到達目標及びテーマ

この授業ではベクトル、行列の基本的な演算に習熟することと、連立一次方程式の解の求め方とその構造を理解することを目的とする。

◆ 講義の概要

この講義ではまず、平面ベクトル、空間ベクトル、直線の方程式、平面の方程式、ユークリッド内積の定義から出発し、平面と直線の交点、2つの平面の交線の求め方等を学び、後の連立一次方程式の解を求めることの意味を具体的に理解する。

その後、数ベクトルと行列の定義を与え、その基本的な演算について学んだあと、

拡大係数行列の行(左)基本変形による連立一次方程式の解法について学ぶ。

その応用として、正則行列の定義を与え、与えられた行列が正則であるかを判定し、正則の場合に具体的に逆行列を求めるアルゴリズムを与える。

最後に行列のランクの定義の意味と、連立一方程式の解の自由度とランクの間の関係を理解する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	授業概要説明
第2回	平面ベクトル、内積、直線の方程式
第3回	空間ベクトル、内積、直線のベクトル方程式、空間のベクトル方程式、直線の方程式、空間の方程式、ベクトルの外積
第4回	空間ベクトル、内積、直線のベクトル方程式、空間のベクトル方程式、直線の方程式、空間の方程式、ベクトルの外積
第5回	空間ベクトル、内積、直線のベクトル方程式、空間のベクトル方程式、直線の方程式、空間の方程式、ベクトルの外積
第6回	行列の定義、数ベクトル、行列の四則演算、種々の行列
第7回	行列の定義、数ベクトル、行列の四則演算、種々の行列
第8回	行列の定義、数ベクトル、行列の四則演算、種々の行列
第9回	行列の定義、数ベクトル、行列の四則演算、種々の行列
第10回	連立一次方程式の解法、消去法、左基本変形、逆行列の求め方、解の構造、行列のランク
第11回	連立一次方程式の解法、消去法、左基本変形、逆行列の求め方、解の構造、行列のランク
第12回	連立一次方程式の解法、消去法、左基本変形、逆行列の求め方、解の構造、行列のランク
第13回	連立一次方程式の解法、消去法、左基本変形、逆行列の求め方、解の構造、行列のランク
第14回	連立一次方程式の解法、消去法、左基本変形、逆行列の求め方、解の構造、行列のランク
第15回	試験

◆ 成績評価方法 定期試験の成績を主として採点する。学期の最後にノートチェックを行い、出席の代わりとすることもある。

◆ 参考書 入門講義「線形代数」出版社裳華房 足立俊明、山岸正和著

◆ その他 【履修登録の条件等】

学習効果を高めるためにも、並行して「数理情報基礎 I 演習」を履修することが望ましい。

高等学校で「数学B」のベクトル、複素数を履修していないものは、「基礎数学入門」等によりその単元を学ぶことが望ましい。

小池 和彦, 高村 正志

◆ 授業の到達目標及びテーマ

この授業では行列式の定義と基本的性質とその計算方法、および正方行列の固有値、固有ベクトル、固有空間、行列の対角化について習熟することを目標とする。また深入りはしないが、次元、基底等の抽象的な概念に少し慣れ親しむことも目標とする。

◆ 講義の概要

この講義では「数理情報基礎I」の授業の続きとして、線形代数の基礎的な概念を学ぶ。まず一般の行列についてその行列式の定義と基本的な性質について学ぶ。線形空間、線形写像、基底、次元等の抽象的な概念について学んだあとで、行列の固有値、固有多項式、固有ベクトル、対角化等の線形代数の標準的な内容を学ぶ。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	授業概要説明
第2回	行列式の定義、置換とその符号、行列式の基本的な性質とその計算法、余因子展開、クラメルの公式
第3回	行列式の定義、置換とその符号、行列式の基本的な性質とその計算法、余因子展開、クラメルの公式
第4回	行列式の定義、置換とその符号、行列式の基本的な性質とその計算法、余因子展開、クラメルの公式
第5回	行列式の定義、置換とその符号、行列式の基本的な性質とその計算法、余因子展開、クラメルの公式
第6回	行列式の定義、置換とその符号、行列式の基本的な性質とその計算法、余因子展開、クラメルの公式
第7回	線形空間、線形写像、部分空間、線形結合、線形従属と線形独立、基底、次元
第8回	線形空間、線形写像、部分空間、線形結合、線形従属と線形独立、基底、次元
第9回	線形空間、線形写像、部分空間、線形結合、線形従属と線形独立、基底、次元
第10回	線形空間、線形写像、部分空間、線形結合、線形従属と線形独立、基底、次元
第11回	行列の固有値、固有多項式、固有ベクトル、行列の対角化
第12回	行列の固有値、固有多項式、固有ベクトル、行列の対角化
第13回	行列の固有値、固有多項式、固有ベクトル、行列の対角化
第14回	行列の固有値、固有多項式、固有ベクトル、行列の対角化
第15回	試験

◆ 成績評価方法 定期試験の成績を主として採点する。学期の最後にノートチェックを行い、出席の代わりとすることもある。

◆ 参考書 入門講義「線形代数」出版社裳華房 足立俊明、山岸正和著

◆ その他 【履修登録の条件等】

学習効果を高めるためにも、並行して「数理情報基礎Ⅱ 演習」を履修することが望ましい。
「数理情報基礎Ⅰ」を履修していることが望ましい。

小池 和彦, 高村 正志

◆ 授業の到達目標及びテーマ

この授業ではベクトル、行列の基本的な演算に習熟することと、連立一次方程式の解の求め方とその構造を理解することを目的とし、具体的な問題を数多く解くことにより、概念、アルゴリズム等を身につける。

◆ 講義の概要

講義科目「数理情報基礎I」に沿って、講義の内容の理解を深めるために、毎回演習問題を各自が解いて提出する形で授業を進める。授業時間内は教員が教室を巡回しているので、解らない箇所等について質問し、理解を深めるように努力すること。友人と相談してもよい。講義の目的は「数理情報基礎I」の内容を自ら、手を動かして計算することにより理解を深めることである。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	平面、空間ベクトル、内積、直線のベクトル方程式、空間のベクトル方程式、直線の方程式、空間の方程式、ベクトルの外積に関する演習
第2回	平面、空間ベクトル、内積、直線のベクトル方程式、空間のベクトル方程式、直線の方程式、空間の方程式、ベクトルの外積に関する演習
第3回	行列の定義、数ベクトル、行列の四則演算、種々の行列に関する演習
第4回	行列の定義、数ベクトル、行列の四則演算、種々の行列に関する演習
第5回	連立一次方程式の解法、消去法、左基本変形、逆行列の求め方、解の構造、行列のランクに関する演習
第6回	連立一次方程式の解法、消去法、左基本変形、逆行列の求め方、解の構造、行列のランクに関する演習
第7回	連立一次方程式の解法、消去法、左基本変形、逆行列の求め方、解の構造、行列のランクに関する演習

◆ 成績評価方法 毎回の課題に関する、時間内の提出物によって評価する。出席だけでは評価しないので注意すること。また学期末の試験は行わない。当該科目の授業時間内に不正行為(友人による代理提出等)が認められた場合には、それがいかなる種類のものであっても当該科目は合格としない。

◆ 履修前の準備 必ず、「数理情報基礎 I」の授業に出席し、そのノートを授業時間に持参すること。

◆ その他 【履修登録の条件等】
「数理情報基礎 I」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。

小池 和彦, 高村 正志

◆ 授業の到達目標及びテーマ

この授業では行列式の定義と基本的性質とその計算方法、および正方形行列の固有値、固有ベクトル、固有空間、行列の対角化について習熟することを目標とし、具体的な問題をみずから解くことにより、概念、計算法を身につける。

◆ 講義の概要

講義科目「数理情報基礎Ⅱ」に沿って、講義の内容の理解を深めるために、毎回演習問題を各自が解いて提出する形で授業を進める。授業時間内は教員が教室を巡回しているので、解らない箇所等について質問し、理解を深めるように努力すること。友人と相談してもよい。講義の目的は「数理情報基礎Ⅱ」の内容を自ら、手を動かして計算することにより理解を深めることである。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	行列式の定義、置換とその符号、行列式の基本的な性質とその計算法、余因子展開、クラメルの公式に関する演習
第2回	行列式の定義、置換とその符号、行列式の基本的な性質とその計算法、余因子展開、クラメルの公式に関する演習
第3回	線形空間、線形写像、部分空間、線形結合、線形従属と線形独立、基底、次元に関する演習
第4回	線形空間、線形写像、部分空間、線形結合、線形従属と線形独立、基底、次元に関する演習
第5回	行列の固有値、固有多項式、固有ベクトル、行列の対角化に関する演習
第6回	行列の固有値、固有多項式、固有ベクトル、行列の対角化に関する演習
第7回	行列の固有値、固有多項式、固有ベクトル、行列の対角化に関する演習

◆ 成績評価方法 毎回の課題に関する、時間内の提出物によって評価する。出席だけでは評価しないので注意すること。また学期末の試験は行わない。当該科目の授業時間内に不正行為(友人による代理提出等)が認められた場合には、それがいかなる種類のものであっても当該科目は合格としない。

◆ 履修前の準備 必ず、「数理情報基礎Ⅱ」の授業に出席し、そのノートを授業時間に持参すること。

◆ その他 【履修登録の条件等】

「数理情報基礎Ⅱ」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。

矢野 公一

◆ 授業の到達目標及びテーマ

黄金比, 円周率, ネピアの数など特定の数, あるいは数に関する問題について, 性質や歴史的な背景を理解すること, また様々な数の体系について, 数学的な構造とその成り立ちを理解することを目標とする.

◆ 講義の概要

いくつかの特定の数あるいは数の体系について, 性質や数学的な構造を歴史的な事実を交えながら講義する.

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	記数法
第2回	黄金比
第3回	フィボナッチ数列
第4回	無理数
第5回	連分数
第6回	円周率
第7回	級数による円周率計算
第8回	対数とネピアの数
第9回	小数
第10回	複素数
第11回	三次方程式
第12回	作図問題と方程式
第13回	角の三等分
第14回	序数と基数
第15回	期末試験

◆ 成績評価方法 提出物および期末試験の結果で評価する.

◆ 教科書 使用しない.

◆ 参考書 各項目ごとに適宜紹介する.

◆ 履修前の準備 解析および線形代数の基本的な知識を仮定する. 「社会数理基礎 I」「数理情報基礎 I」を履修済であることが望ましい.

伏屋 広隆

◆ 授業の到達目標及びテーマ

確率分布と確率密度関数の概念を理解した上で、正規分布をはじめとする様々な分布に関わる計算ができるようになること。また、1年次必修科目の「統計入門」では深く踏み込めなかった統計学の数理的な考え方を理解することを授業の到達目標とする。

◆ 講義の概要

確率論、数理統計の基礎を解説する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回:	確率の定義、独立
第2回:	条件付確率、離散確率変数、離散確率変数の期待値
第3回:	離散確率変数の分散、ベルヌーイ分布
第4回:	2項分布、幾何分布
第5回:	ポアソン分布、連続確率変数
第6回:	連続確率変数の期待値と分散
第7回:	復習、一様分布
第8回:	指数分布、正規分布
第9回:	推定の考え方、不偏推定量
第10回:	母平均の区間推定1
第11回:	中心極限定理、母平均の区間推定2
第12回:	χ^2 乗分布、t分布
第13回:	仮説検定1
第14回:	仮説検定2
第15回:	定期試験

◆ 成績評価方法 講義時間中に指示する課題および定期試験により評価する。

◆ 教科書 使用しない。

◆ 参考書 『穴埋め式確率統計』藤田 岳彦・高岡 浩一郎 著（講談社）

◆ 履修前の準備 一部講義中に復習するが、『基礎数学入門』の集合と順列組み合わせ、確率、『基礎数学』および『統計入門』の内容を前提とする。

稲積 宏誠

◆ 授業の到達目標及びテーマ

情報の本質を正しく理解し、活用するために、情報の量的な取扱い、質的な取扱いを通して情報量の概念を理解すること。

◆ 講義の概要

情報について専門的に学んでいくためには、単にコンピュータの操作を覚えること、コンピュータを利用すること、コンピュータの仕組みを理解することやプログラミングができることだけでもない。コンピュータを、真に「有効な情報の取扱い」を実現させるための道具としてさまざまな応用へと結び付けていくためには、多くのことを学んでいかなければならない。その基盤となる考え方として、情報を質的に扱うための理論である数理論理の基礎と、数量的に取り扱うための理論である情報理論の基礎を中心に学ぶ。これらは、必ずしも工学的な目的だけではなく、人文社会科学全般を取り扱う際に「情報」を解明するための基礎となる考え方である。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
はじめに	情報を学ぶうえで、数学的な取り組みがなぜ必要か、どのように有効かなどについて議論する。
情報の質的な取扱い(命題論理1)	われわれが扱う言葉に対応する表現として、命題論理を取り上げ、その言葉を解釈するというものを論理的にどのように捉えることができるのかについて議論する。
情報の質的な取扱い(命題論理2)	論理的な取扱いをするためにどのように抽象化すればよいのか、数理的な取扱いとの整合性をどのように考えればよいのかについて議論する。
情報の質的な取扱い(ブール代数)	論理を代数的に扱うことができる表現がブール代数である。文章表現が論理式で表現され、代数表現も可能であることを確認し、抽象表現することによってどのような応用が可能かについて議論する。
情報の質的な取扱い(真理値表と論理関数)	実際に解釈、判断を処理として実行させるための基本として、真理値表と論理関数を学ぶ。
情報の質的な取扱い(論理回路)	応用例として、代表的な組み合わせ回路について学ぶ。
情報の質的な取扱い(述語論理)	より高度な言語表現との対応を考える際に必要となる述語表現について学ぶ。このような取組が、人工知能分野の基盤となることを理解する。
情報の量的な取扱い(情報量1)	情報とは(情報の取り扱いの基本的な考え方)何かについて議論し、特に確率的な取り扱いについて整理する。情報源とは何か、どのように表現することができるのかについて学ぶ。
情報の量的な取扱い(情報量2)	自己情報量、平均情報量(エントロピー)の概念を学ぶ。
情報の量的な取扱い(情報源)	情報源をどのように表現するか、無記憶情報源と記憶のある情報源の考え方について考察する。
情報の量的な取扱い(情報源符号化1)	情報源符号化定理、情報の圧縮とその実現方法(符号化)の考え方を学ぶ。符号化の意味について学ぶ。
情報の量的な取扱い(情報源符号化2)	情報の圧縮とその実現方法(符号化)の考え方を学ぶ。具体的な符号化の考え方を学び、その実装方法についても検討する。
情報の量的な取扱い(通信路符号化1)	情報の高信頼化についての考え方を学ぶ。通信路モデルに基づき、復号誤りの検出の概念を学ぶ。
情報の量的な取扱い(通信路符号化2)	誤り検出、訂正のための基礎を学ぶ。パリティ検査行列、生成行列などを学び、誤り訂正のメカニズムを理解する。
まとめ	情報の取扱いについて、全体をまとめる。

◆ 成績評価方法 授業中に課された演習課題と期末試験により評価する。

◆ 教科書 とくに使用しない。

◆ 参考書 適宜指示する。

増永 良文

◆ 授業の到達目標及びテーマ

コンピュータおよび情報処理の基本に関わるアルゴリズムとデータ構造についての基本的考え方を学ぶ。基本となるさまざまなソート(整列)法とサーチ(検索)法のアルゴリズムを理解し、アルゴリズムの実行時間についても理解を深め、実際に簡単なアルゴリズムを必要とあればプログラミングしてみることでその基礎を習得することを目標とする。

◆ 講義の概要

アルゴリズムとデータ構造の基礎を、アルゴリズムとは何か、データ構造とは何か、プログラムの実行時間とは何か、そしてアルゴリズムとデータ構造の基本概念をソート(整列)法とサーチ(探索)法を中心にして、必要に応じてJavaによるプログラミングを交えて講義する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	受講ガイダンス
第2回	アルゴリズムとフローチャート
第3回	データ構造と配列
第4回	プログラムの実行時間(1)
第5回	プログラムの実行時間(2)
第6回	プログラムの実行時間(3)
第7回	ソート法(1)
第8回	ソート法(2)
第9回	ソート法(3)
第10回	ソート法(4)
第11回	ソート法(5)
第12回	サーチ法(1)
第13回	サーチ法(2)
第14回	まとめ
第15回	定期試験

◆ 成績評価方法 (ミニ)レポートの提出状況と内容、および定期試験の結果を総合的に判断して評価する。

◆ 教科書 柴田望洋: 明解 JAVAによるアルゴリズムとデータ構造、ソフトバンククリエイティブ。

◆ 参考書 (1)ジョン ベントリー(著), Jon Bentley(原著), 小林 健一郎(翻訳): 珠玉のプログラミング—本質を見抜いたアルゴリズムとデータ構造, ピアソン・エデュケーション.
(2)浅野哲夫: アルゴリズム・サイエンス: 入口からの超入門, 共立出版.

◆ 履修前の準備 Javaプログラミングの基礎を習得していることが望ましい。

◆ その他 特になし。

宮治 裕, 東 るみ子

◆ 授業の到達目標及びテーマ

プログラミングの基礎としての手続き型プログラミングについて学ぶ。講義と演習を通して、プログラムの考え方の基礎を身につけること・保守性の高いプログラミング能力を身につけることを目的とする。

◆ 講義の概要

プログラミングの基礎に始まり、デバッグ手法まで含めた具体的な方法までを学習する。授業中に学生個々が実際にプログラムを作成し動作確認をしながら、これらの理解を深める。なお、プログラミング言語としてjavaを利用するが、java及びオブジェクト指向プログラミングに依存した部分には重点を置かず、多くのプログラミング言語で共通に用いられる基本的な考え方を学習する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1	ガイダンス, 学習環境解説
2	データ型, 演算子, 式 および演習
3	制御構造(選択制御, 分岐)(1) および演習
4	制御構造(選択制御, 分岐)(2) および演習
5	制御構造(反復制御)(1) および演習
6	制御構造(反復制御)(2) および演習
7	中間試験
8	型, 型変換
9	配列(1) および演習
10	配列(2) および演習
11	メソッド(1) および演習
12	メソッド(2) および演習
13	演習課題
14	まとめ
15	期末試験

◆ 成績評価方法 演習課題(11回, 40%), 定期試験(2回, 60%)

◆ 教科書 第1回 講義時に指示する。

◆ 参考書 適宜, 紹介する。

◆ その他 復習および演習課題の提出を必須とする。

宮治 裕, 東 るみ子

◆ 授業の到達目標及びテーマ

「プログラミング基礎」で学んだ事項を基礎とし、より高度なプログラミングについての様々な技法についてプログラムを書きながら演習する。多くの問題を解く過程をとおして、実際にプログラミングが読める／書けるようになることを目的とする。

◆ 講義の概要

問題を解くためのプログラミング(アルゴリズム)を考えるという点に重きを置く。多くの問題を自分の力で実際に解く実習形式である。あるアルゴリズムを実現する為には、どのようなコードを書けば良いのかという点を重視し、多くのプログラムを読み／書いていく。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1	ガイダンス, 基礎事項確認
2	アルゴリズムの基礎(1) および演習
3	アルゴリズムの基礎(2) および演習
4	基本的なデータ構造(1) および演習
5	基本的なデータ構造(2) および演習
6	探索 および演習
7	中間試験
8	再帰(1) および演習
9	再帰(2) および演習
10	ソート(1) および演習
11	ソート(2) および演習
12	文字列探索(1) および演習
13	文字列探索(2) および演習
14	まとめ
15	期末試験

◆ 成績評価方法 演習課題(30%), 定期試験(2回, 70%)

◆ 教科書 第1回 講義時に指示する。

◆ 参考書 適宜, 紹介する。

◆ その他 復習および演習課題の提出を必須とする。

【履修登録の条件等】

「プログラミング基礎」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。

宮川 裕之, 石井 信明

◆ 授業の到達目標及びテーマ

情報システムの開発プロセスに関する基本的な知識、情報システムの分析・設計の狙いについて説明できるようになること、いくつかの分析・設計手法について理解すること。

◆ 講義の概要

情報システムを構築する際、利用者の活動上のニーズを的確につかんだ上で情報システムを設計していく必要がある。この講義では、情報システム開発の前段階として、「どのような情報システムを開発するか」を検討する要求定義のプロセスと方法などのシステム分析に関する基本的な知識・手法ならびに情報システムの設計に関する基本的な知識・手法について理解することを目的とする。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1.	オリエンテーション, 現代社会と情報システム
2.	システムライフサイクルとシステム開発プロセス
3.	要求分析(1)
4.	要求分析(2)
5.	モデリング(1)
6.	モデリング(2)
7.	モデリング(3)
8.	モデリングのまとめ
9.	ISの人的機構と機械的機構
10.	総合演習 現状業務のモデル化
11.	総合演習 ERP
12.	総合演習 ERPを前提とした新業務のモデル化
13.	総合演習 ERPを用いた新業務の検証
14.	総合演習 新業務の評価
15.	まとめ

◆ 成績評価方法 授業中の課題演習(40%)と期末レポート(60%)を総合して評価する。

◆ 教科書 石井信明, 宮川裕之:プロフェッショナルを目指すシステム分析入門—情報システムの企画・計画のプロセスと分析手法, コロナ社(2009)

◆ 参考書

- ・神沼靖子, 丹羽時彦:問題形成と問題解決(IS テキストシリーズ01), 共立出版(2005)
- ・神沼靖子:情報システム演習Ⅱ (IS テキストシリーズ05), 共立出版(2005)
- ・浦昭二, 細野公男, 神沼靖子, 宮川裕之, 山口高平, 石井信明, 飯島正共編著:情報システム学へのいざない改訂版, 培風館(2008)
- ・情報システムと情報技術編集委員会編:情報システムの実際1(官公庁・公共サービスシステム), 培風館(2003)
- ・情報システムと情報技術編集委員会編:情報システムの実際2(商業・小売業・病院等のシステム), 培風館(2003)
- ・情報システムと情報技術編集委員会編:情報システムの実際3(製造・建設・サービス等のシステム), 培風館(2003)
- ・情報システムと情報技術編集委員会編:情報システムの実際4(経理実務・開発管理・研究支援システム), 培風館(2003)
- ・ピーター・チェックランド, シム・スクールズ著, 妹尾堅一郎監訳:ソフトシステムズ方法論, 有斐閣(1994)

◆ その他

【履修登録の条件等】

「システム分析・設計基礎」を履修登録することにより、「システム分析・設計基礎演習」も自動的に履修登録されます。

宮川 裕之, 石井 信明

◆ 授業の到達目標及びテーマ

「システム分析・設計基礎」で学んだ分析・設計手法について、与えられた事例に対して適用できるようになること。

◆ 講義の概要

この講義では、「システム分析・設計基礎」の内容を基に、いくつかの情報システムの分析・設計手法をとりあげ、それらを実際の問題に適用する基礎的能力を身に付けることを目的とする。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1.	オリエンテーション, 現代社会と情報システム
2.	システムライフサイクルとシステム開発プロセス
3.	要求分析(1)
4.	要求分析(2)
5.	モデリング(1)
6.	モデリング(2)
7.	モデリング(3)
8.	モデリングのまとめ
9.	ISの人的機構と機械的機構
10.	総合演習 現状業務のモデル化
11.	総合演習 ERP
12.	総合演習 ERPを前提とした新業務のモデル化
13.	総合演習 ERPを用いた新業務の検証
14.	総合演習 新業務の評価
15.	まとめ

◆ 成績評価方法 授業中の演習課題(60%)と期末レポート(40%)を総合して評価する。

◆ 教科書 資料を配布する。

◆ 参考書
 ・神沼靖子, 丹羽時彦:問題形成と問題解決(IS テキストシリーズ01), 共立出版(2005)
 ・神沼靖子:情報システム演習Ⅱ(IS テキストシリーズ05), 共立出版(2005)
 ・児玉公信:UML モデリングの本質, 日経BP(2004)

◆ その他 【履修登録の条件等】

「システム分析・設計基礎」を履修登録することにより、「システム分析・設計基礎演習」も自動的に履修登録されます。

増永 良文

◆ 授業の到達目標及びテーマ

データベースの重要性は日増しに増加し、止まるところを知らない。これはさまざまな主体がデータを組織化して、データベースシステムの下に一括管理し、それを共有資源とするデータベースの考え方が広く受け入れられている証と考えられる。データベースを学ぶには大きく分けると、データベースをどのように構築するかというデータモデル的側面からの理解と、構築されたデータベースをどのように管理して問題なく利用者に提供するかというデータベース管理システム的側面からの理解が必要である。本科目では前者の目標を達成するべく、リレーショナルデータベースとは何かを学ぶ。

◆ 講義の概要

データベースとは何か、を現在最も普及しているリレーショナルデータベースに焦点をあてて講義する。

1. データベースとは何か、データモデルとは何か、などデータベースの基礎概念を講義する。
2. リレーショナルデータモデルとは何か、講義する。
3. 国際標準リレーショナルデータベース言語SQLの概要を講義する。
4. リレーショナルデータベースの設計理論を講義する。その根幹が正規化理論である。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	受講ガイダンス
第2回	データベースとは何か(1)
第3回	データベースとは何か(2)
第4回	リレーショナルデータモデル(1)
第5回	リレーショナルデータモデル(2)
第6回	リレーショナル代数(1)
第7回	リレーショナル代数(2)
第8回	リレーショナルデータベース言語SQL(1)
第9回	リレーショナルデータベース言語SQL(2)
第10回	正規化理論(1)
第11回	正規化理論(2)
第12回	正規化理論(3)
第13回	ビュー
第14回	まとめ:本講義全般を振り返り、必要なところを補う。
第15回	定期試験

◆ 成績評価方法 (ミニ)レポートの提出状況と内容、および定期試験の結果を総合的に判断して評価する。

◆ 教科書 増永良文著:リレーショナルデータベース入門[新訂版]サイエンス社、2003年1月。

◆ 参考書 増永良文著:データベース入門、Computer Science Library第14巻、サイエンス社、2006年10月。

増永良文著:リレーショナルデータベースの基礎—データモデル編—、オーム社、1990年10月。

◆ 履修前の準備 特に必要としない。

◆ その他 教科書は講義の毎回忘れないこと。

3・4年次に選択科目「データベースシステム応用」を受講しようとする場合、本科目を履修しておくことが望ましい。

宮治 裕

◆ 授業の到達目標及びテーマ

コンピュータネットワークシステムの構成とハードウェア/ソフトウェアに関する構築技術を身につけるために、プロトコルの必要性和動向、ネットワークの種類と動向について学ぶ。

◆ 講義の概要

通信プロトコルの必要性和階層化のメリットについて、OSI参照モデルとTCP/IPプロトコルにおける各階層の役割の理解、LANの基本的な構成要素と各種ネットワークサービスとそのシステム構成、WANの概要と移動体通信、セキュリティ対策についてなどを講義する。また、それぞれの回において、実際にネットワーク設定・管理に必要なコマンドおよびツールを学生自身が使用することによって、ネットワークの働きの理解を深める。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1	講義概要 ネットワークの構成要素
2	プロトコル
3	低レイヤ(1)
4	低レイヤ(2), 実習
5	小テスト IP, 実習
6	経路制御他, 実習
7	IPv6, トランスポート層
8	トランスポート層, DNS
9	小テスト ネットワークアプリケーション, 実習
10	ネットワークアプリケーション, 実習
11	セキュリティ対策
12	ネットワーク設計
13	その他の話題, 事例紹介
14	まとめ
15	期末試験

◆ 成績評価方法 実習課題(4回, 10%), 小テスト(2回, 40%), 期末試験(1回, 50%)

◆ 教科書 第1回 講義時に指示する。

◆ 参考書 適宜, 紹介する。

宮治 裕

◆ 授業の到達目標及びテーマ

インターネット基本的な仕組みと社会への影響の両面からインターネットの概要を理解することを目的とする

◆ 講義の概要

前半は、インターネットがどのように構築されているか、通信の方法などの技術的な側面について解説する。後半は、インターネットを取り巻く環境の変化や新しい技術が世の中に展開していく上での問題について講義する。また、様々なインターネット上のサービスによってもたらされる社会の変化について解説する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1	ガイダンス・講義概要
2	インターネットの歴史と構成
3	基本的なネットワークの構成
4	インターネットの技術(1)
5	インターネットの技術(2)
6	インターネットの技術(3)
7	インターネットサービス
8	中間試験 メディアとしてのインターネット(メディアの進化)
9	インターネット広告
10	マスメディアとインターネット
11	eコマース, ネットビジネス
12	知的財産とインターネット, フェアユース, クリエイティブコモンズ
13	ネットコミュニティ
14	中間試験 まとめ
15	期末試験

◆ 成績評価方法 中間試験(2回, 50%), 期末試験(1回, 50%)

◆ 教科書 第1回 講義時に指示する。

◆ 参考書 適宜, 紹介する。

石田 博之

◆ 授業の到達目標及びテーマ

世界のエネルギー情勢、各国のエネルギー・環境戦略の解説を通じて、3E(経済、エネルギー、環境)のバランスの取れた戦略の重要性や日本への影響等について理解することを目的とする。

◆ 講義の概要

近年、地球温暖化問題が顕在化する中、地政学的緊張の高まり等によるエネルギー供給不安、中国などの途上国を中心としたエネルギー需要の拡大を背景にエネルギー価格が急騰するなど、地球規模での持続可能な経済成長に対する関心が高まっている。この講義では、こうした情勢変化の背景としての、世界のエネルギー需給動向、各国のエネルギー・地球温暖化政策などを解説するとともに、3E(経済、エネルギー、環境)のバランスの取れた戦略の重要性や日本のエネルギー需給・戦略への影響と対応等について考察する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1 イントロダクション	世界のエネルギー情勢と日本
2 分析の基礎	主要統計、エネルギーバランス
3 世界のエネルギー需給	エネルギー需給構造、資源量、貿易構造
4 地球温暖化	基礎知識、国際的な取り組み、京都議定書
5 エネルギー安全保障	概念整理、内外情勢変化、リスク要因
6 国際石油情勢	特性、資源量、需給バランス、原油価格動向、変動要因、需給見通し
7 天然ガス情勢	特性、資源量、需給バランス、価格変動、主要市場動向
8 石炭・原子力	特性、資源量、石炭需給、原子力開発動向
9 再生可能エネルギー	種類、特徴、導入量、導入支援策
10 米国・欧州のエネルギー情勢	エネルギー需給と課題、エネルギー・地球温暖化政策
11 中国・インドのエネルギー情勢	エネルギー需給と課題、エネルギー・地球温暖化政策
12 中東・旧ソ連のエネルギー情勢	エネルギー需給と課題、エネルギー・地球温暖化政策
13 世界のエネルギー需給見通し	モデル構造、主要前提、シナリオ別予測結果、政策提言
14 日本のエネルギー情勢と課題	環境変化、エネルギー需給見通し、エネルギー・環境政策
15 期末テスト	

◆ 成績評価方法 出席態度、授業での課題、期末試験を総合的に評価する。

◆ 教科書 担当教員が講義で随時、指示する。

◆ 参考書 International Energy Agency, "World Energy Outlook" 各年版
IPCC(2007)「第4次評価報告書」
松井賢一(2010)「エネルギー問題」,NTT出版
経済産業省資源エネルギー庁「エネルギー白書」各年版

◆ 履修前の準備 日常からエネルギー・環境問題に高い関心を有し、世界の政治・経済情勢の基礎知識があることが望ましい。

◆ その他 授業計画はあくまで予定であり、実際の講義の進行とは異なる場合があることに注意すること。
授業の内容については担当教員が説明する。

石田 博之

◆ 授業の到達目標及びテーマ

日本のエネルギー需給動向の解説を通じて、3E(経済、エネルギー、環境)の関係やエネルギー政策の役割について理解することを目的とする。

◆ 講義の概要

各国の経済成長や所得向上に起因する世界のエネルギー消費の拡大が、CO2排出量を増大させ、深刻な地球環境問題を引き起こしている。

この講義では、身近な社会生活(空調、給湯など)や経済活動(動力、輸送など)の派生需要としてのエネルギー消費の特徴や動向とその需要を賄うためのエネルギー供給のあり方、エネルギー消費と地球環境問題の関係等を具体的な数値を用いて理解するとともに、エネルギー政策のエネルギー需給への影響や今後の日本のエネルギー需給構造のあり方等について考察する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1 イントロダクション	経済発展とエネルギー消費、地球温暖化
2 エネルギー経済分析の基礎	経済成長とエネルギー、エネルギー需要の特徴、省エネルギー
3 日本のエネルギー需給	エネルギー・バランス表、エネルギー需給構造、二酸化炭素排出量
4 産業部門エネルギー消費	業種別エネルギー消費、鉱工業生産、産業構造とエネルギー消費
5 家庭部門エネルギー消費	用途別エネルギー消費、世帯、ライフスタイルとエネルギー消費
6 業務部門エネルギー消費	用途別エネルギー消費、床面積、サービス化・IT化とエネルギー消費
7 運輸部門エネルギー消費	輸送機関別エネルギー消費、輸送量、モーダルシフトとエネルギー消費
8 石油	部門別需要、石油製品別販売量、石油精製、原油輸入、価格
9 天然ガス・石炭	部門別需要、国内供給、輸入、価格
10 電力	部門別需要、発電構成、送配電、価格
11 新・再生可能エネルギー	定義、導入量、コスト、支援策
12 日本のエネルギー政策	基本方針、エネルギー安全保障、政策効果、総合政策
13 地球温暖化	メカニズム、影響、問題の特徴、基本対策
14 日本の地球温暖化対策	概要と変遷、中期目標
15 期末試験	

◆ 成績評価方法 出席態度、授業での課題、期末試験を総合的に評価する。

◆ 教科書 日本エネルギー経済研究所計量分析ユニット編(2008)、「図解 エネルギー・経済データの読み方入門」、省エネルギーセンター

◆ 参考書 松井賢一(2009)、「データから読み解くエネルギー問題」、エネルギーフォーラム
電力中央研究所編(2010)、「基礎講座2010 エネルギーと地球環境」、エネルギーフォーラム
経済産業省資源エネルギー庁「日本のエネルギー2010」

◆ 履修前の準備 日常からエネルギー・環境問題に高い関心を有し、日本の経済・社会情勢の基礎知識があることが望ましい。

◆ その他 授業計画はあくまで予定であり、実際の講義の進行とは異なる場合があることに注意すること。
授業の内容については担当教員が説明する。

長橋 透

◆ 授業の到達目標及びテーマ

「経済学入門 I」(マクロ経済学)に則した、マクロ経済政策についての理解を深める。

◆ 講義の概要

経済政策の目的には、「経済成長と安定化」「効率的な資源配分」そして「公平な所得分配」があります。経済政策 I では、「経済成長と安定化」に関わるマクロ経済政策について講義します。

導入部で、一国経済のパイの大きさを表すGDPの概念などを復習したあと、経済成長モデルを少し詳しく説明します。その後は周知のIS-LMモデルによる財政・金融政策の有効性について説明し、さらにインフレやデフレと失業との関連についても説明します。最後は、マクロ経済の安定化政策と時間の問題を取り上げる予定です。説明の必要上、数式が出てきますが、できるだけ丁寧に講義していきたいと思えます。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	経済学と経済政策の基礎理論 I
第2回	経済学と経済政策の基礎理論 II
第3回	成長政策の理論と課題 I
第4回	成長政策の理論と課題 II
第5回	成長政策の理論と課題 III
第6回	安定化政策の基礎と財政・金融政策 I
第7回	安定化政策の基礎と財政・金融政策 II
第8回	安定化政策の基礎と財政・金融政策 III
第9回	インフレ・デフレと失業 I
第10回	インフレ・デフレと失業 II
第11回	インフレ・デフレと失業 III
第12回	安定化政策の現代的課題 I
第13回	安定化政策の現代的課題 II
第14回	安定化政策の現代的課題 III
第15回	定期試験

◆ 成績評価方法 定期試験の成績による。

◆ 教科書 岩田規久男・飯田泰之 『ゼミナール 経済政策入門』 日本経済新聞社 2006

◆ 参考書 井堀利宏 『経済政策』 新世社 2003

伊藤元重 『マクロ経済学』 日本評論社 2002

浅子・加納・倉沢 『マクロ経済学』(第2版) 新世社 2009

◆ 履修前の準備 「経済学入門 I」の復習をしておくことを勧めます。

長橋 透

◆ 授業の到達目標及びテーマ

経済学、特に企業がとる様々な行動を、数式モデルを活用しながら理解する。

◆ 講義の概要

「経済学入門Ⅱ」(ミクロ経済学)では、余剰分析を道具として政府の市場介入の是非を図(グラフ)と言葉によって学びました。本講義では、主として企業がとる様々な行動を数式モデルを活用しながら説明していきます。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	消費者理論の基礎 I
第2回	消費者理論の基礎 II
第3回	生産者理論の基礎 I
第4回	生産者理論の基礎 II
第5回	独占・寡占・競争 I
第6回	独占・寡占・競争 II
第7回	独占・寡占・競争 III
第8回	独占・寡占・競争 IV
第9回	価格差別化 I
第10回	価格差別化 II
第11回	製品差別化 I
第12回	製品差別化 II
第13回	戦略的行動 I
第14回	戦略的行動 II
第15回	定期試験

◆ 成績評価方法 定期試験の成績を重視する。課題を出すことも考えているが、その場合には課題の評価を加味する。

◆ 教科書 特に指定しません。

◆ 参考書 丸山雅祥・成生達彦 『現代のミクロ経済学-情報とゲームの応用ミクロ-』 創文社 1997

丸山雅祥 『経営の経済学』 有斐閣 2005

浅羽茂 『経営戦略の経済学』 日本評論社 2004

西島益幸 『企業の経済学』 新世社 1998

伊藤元重 『ビジネス・エコノミックス』 日本経済新聞社 2004

◆ 履修前の準備 講義では、特に偏微分、全微分、ラングランジュの未定乗数法が多用されます。これらの扱いに慣れていることが望ましいですが、わからなければ質問に来てください。また初歩的なゲーム理論についても触れる予定です。

◆ その他 「経済学入門Ⅱ」を履修済みであることが望ましいです。

開澤 栄相

◆ 授業の到達目標及びテーマ

本授業は「経済学入門Ⅰ」の続編であり、マクロ経済学の後半の講義を行なう。到達目標は、(1)経済学の用語や理論を正確に言葉で表現できるようになること、(2)理論を図で正しく表現できるようになること、(3)公務員試験等の標準的問題を解けるようになること、の三点であり、新聞記事や経済雑誌の論文が理解できる能力を養う。

◆ 講義の概要

1. 標準的なマクロ経済学の教科書のエッセンスをまとめた資料を用いて講義を行なう。
2. 経済用語を抽象的ではなく具体的に理解するために、必要に応じデータベース(Financial QUESTなど)から現実のデータを取得し、グラフや図を描くことを通じて、用語や理論に対する理解を深めると共に統計数字に対する感覚を養う。
3. 講義内容に関連した練習問題等を課す予定である。
4. 可能であれば、マクロ計量モデルを用いたシミュレーションのデモを行いたい。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	IS-LM分析の復習
第2回	AD-AS 分析(1)
第3回	AD-AS 分析(2)
第4回	AD-AS 分析(3)
第5回	インフレーションと失業(1)
第6回	インフレーションと失業(2)
第7回	経済成長(1)
第8回	経済成長(2)
第9回	経済成長(3)
第10回	景気循環
第11回	国際収支
第12回	為替レート決定理論
第13回	国際マクロ経済理論(1)
第14回	国際マクロ経済理論(2)
第15回	マクロ経済学で見た現代社会の諸問題

◆ 成績評価方法 ①課題(40%)、②試験(60%)の成績により評価する。但し、課題・試験とも授業出席が前提である。

◆ 教科書 教科書は用いず、教員が作成した講義資料を用いる。

◆ 参考書 浅子・加納・倉澤『マクロ経済学 第2版』新世社 2009年
マンキュー『入門経済学』東洋経済新報社 2008年
ステイグリッツ『マクロ経済学 第3版』東洋経済新報社 2007年
中谷巖『入門マクロ経済学 第5版』日本評論社 2007年
伊藤元重『マクロ経済学』日本評論社 2002年
他、講義中に指示する。

◆ その他 授業計画は、進捗度や理解度などにより、変更されることもありうる。
本講義は「経済学入門Ⅰ」の続編であるから「経済学入門Ⅰ」を履修していることが前提である。
「経済学入門Ⅰ」の未履修者は上記参考書等により、IS-LM分析までを自習しておくこと。

吹春 俊隆

◆ 授業の到達目標及びテーマ

政府などの公共部門の経済活動を経済学に則して理解した上で国や地方の財政の現状を理解する。

◆ 講義の概要

市場が完全ならば、自由放任にしておくだけで最も効率的な資源配分が達成できる。しかし自由放任のままでは市場が存在しなくなったり、市場に歪みが生じて問題の生じる場合が出てくる。このような場合には、政府のような公共部門による適切な介入が必要になる。例えば独占禁止法・公害規制立法が制定され、国民皆保険制度が維持されているし、景気対策・国防・治安維持などの公共サービスは政府が直接・間接に供給している。公共サービスのための財源を調達するためには所得税や消費税などの税が課されている。公共サービスの望ましい供給水準はどのようにして決まるのかや、課税のメリットやデメリットなどについて、ミクロ経済学やマクロ経済学の応用を意識しながら講義していく。また地方政府と中央政府の役割分担を考える上で、それぞれの財政の現状や問題点についても触れていきたい。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	イントロダクション
第2回	国と地方の財政の現状
第3回	厚生経済学の基礎 I
第4回	厚生経済学の基礎 II
第5回	経済規制 I
第6回	経済規制 II
第7回	経済規制 III
第8回	公共サービスの供給 I
第9回	公共サービスの供給 II
第10回	公共サービスの供給 III
第11回	不況の現状
第12回	不況対策 I
第13回	不況対策 II
第14回	まとめの授業
第15回	定期試験

◆ 成績評価方法 出席状況と定期試験の結果によって評価する。

◆ 教科書 特に指定しない。

◆ 参考書 スティグリッツ 『公共経済学(第2版)』(上) 東洋経済新報社 2003年
吹春俊隆 『コア・テキスト 経済学入門』 新世社 2004年
武隈慎一 『ミクロ経済学(増補版)』 新世社 2002年
齋藤・永谷・平山・吹春 『現代経済学』 有斐閣 1994年

◆ 履修前の準備 経済学入門 I・II の内容を復習しておくことが望ましい。

田中 孝文

◆ 授業の到達目標及びテーマ

現代社会における行政の機能、我が国の行政の仕組みについて理解し、望ましい行政を実現する「行政改革」の方向について構想する力をつけることを授業の到達目標とする。

◆ 講義の概要

我が国の行政の仕組みや機能について、具体的な事例に即して解説し、具体例から行政に係る問題の本質を抽出する。理解を深めるために、質疑を行う。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
行政学について(イントロダクション)	行政学の意義、本授業の内容、授業方針等について概説する。
現代日本の行政組織	日本の行政組織の歴史の変遷、現在の行政組織、三権分立(立法・司法・行政)のなかでの行政の位置づけ等を学習する。
市場経済と行政 — 公共経済学の視点から —	経済学の枠組みから、行政の機能を学習する。
行政の内容 — 規制と行政サービスの提供 —	(1) 私人の行為を規制すること、(2) 国民に公共サービスを提供すること、という行政の内容を学習する。
法執行と行政の裁量	法律に基づく行政の執行、その際に避けられない公務員による裁量の問題を学習する。
政策の立案、法律の制定	新しい行政の内容(政策)を作り出す政策立案過程と、その政治との相互作用について学習する。
行政と財政 — 予算・決算による管理 —	お金の面(財政から)の行政の管理・統制について学習する。
公務員制度と官僚制	行政を担う人(=公務員)の制度とその人事管理について学習する。
行政機関の組織管理	民間企業等と対比しつつ、自己増殖・肥大化防止を含む行政の組織管理について学習する。
地方自治と地方行政制度	市民に直結する行政の現場である地方行政の現状と問題を学習する。
行政改革(1) 行政手続・情報公開	行政の透明化のための改革について学習する。
行政改革(2) 規制改革・民間開放	行政が行うべき範囲、民間にゆだねてよい範囲は、どのように判断すべきか等について学習する。
行政改革(3) 政策評価	費用便益分析を含む行政評価方法とその実際について学習する。
行政改革(4) 中央省庁再編、内閣機能強化	行政分野がどのように分掌されるべきか、また、司令塔としての内閣機能はどうあるべきか等について学習する。
行政改革(5) 地方分権改革	中央政府と地方公共団体(県、市町村)は、どのように行政を分掌すべきかについて学習する。

◆ 成績評価方法 (1)出席および質疑による理解度の評価 3割

(2)期末課題レポートによる評価 7割

◆ 教科書

なし。プリント教材を配布する。

◆ 参考書

新藤宗幸 『新版行政ってなんだらう』 岩波ジュニア新書 2008年
 西尾 勝 『行政学 [新版]』 有斐閣 2001年
 笠原英彦・桑原英明 編 『日本行政の歴史と理論』 芦書房 2004年
 田中一昭 編著 『業績改革 <新版>』 ぎょうせい 2006年

福田 亘孝

◆ 授業の到達目標及びテーマ

社会学の考え方を理解し、現代の政治、経済、文化、情報について社学的視点から多面的に分析できるようになることを目標とする

◆ 講義の概要

地球温暖化、少子化、高齢化、国際化、人口減少、環境破壊など、私たちの社会は今、さまざまな問題と向き合っています。では、今、私たちが暮らしている社会とは一体、どんな社会なのか？これから私たちの生きる世界はどこへむかっていくのか？この講義では、こういった疑問について社会的に考えます。授業では、現代の社会が直面しているいくつかのトピックについて社会学の視点から講義し、これを通じて、「私たちはどんな世界に生きているのか？」、「これから社会はどうなるのか？」という間に答えを見つけるようにします。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	社会学とは何か
第2回	グローバル化と変動する社会
第3回	社会学における理論的思考
第4回	社会的相互行為と日常生活
第5回	家族と親密な関係性
第6回	社会階層と階級
第7回	グローバルな不平等
第8回	メディア
第9回	組織とネットワーク
第10回	教育
第11回	仕事と経済生活
第12回	政治、統治、テロリズム
第13回	都市
第14回	人口成長と生態系の危機
第15回	定期試験

◆ 成績評価方法 授業への貢献度、レポート、学期末試験、等を総合的に評価する。

◆ 教科書 ★アンソニー・ギディンズ(著)(2009)『社会学(第5版)』而立書房

◆ 参考書 担当教員が講義で随時、指示する

◆ 履修前の準備 ★授業には十分な予習をして出席し、講義中はマナーを守ること。

★授業の復習は必ず行うこと。

◆ その他 ★授業計画はあくまで予定であり、実際の講義の進行とは異なる場合があることに注意すること。

★授業の内容については担当教員が説明する。

福田 亘孝

◆ 授業の到達目標及びテーマ

社会調査の手順の全体像とその基本的な考え方を理解することを目標とする。

◆ 講義の概要

社会調査は、マーケティングや世論調査で使われる手法です。この講義では調査のテーマの設定から仮説の構成、調査の計画と実施、データの整理・集計を含む社会調査の一連の過程について量的調査を中心に講義をおこないます。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	「社会調査」とは何か？
第2回	調査テーマの設定
第3回	関連調査のレビュー
第4回	理論仮説と作業仮説の構成
第5回	調査対象者の選定と調査スケジュール
第6回	調査票の作成
第7回	サンプリングと調査方法
第8回	プリテストと本調査
第9回	調査票の配布と回収
第10回	回収票のチェックとコーディング
第11回	調査データのクリーニング(1)
第12回	調査データのクリーニング(2)
第13回	調査データの分析(1)
第14回	調査データの分析(2)
第15回	定期試験

◆ 成績評価方法 授業への貢献度、レポート、学期末試験を総合的に評価する。

◆ 教科書 ★盛山和夫(2004)『社会調査法入門』有斐閣

★森岡清志(2006)『ガイドブック社会調査[第2版]』日本評論社

★西平重喜(1985)『統計調査法』培風館

◆ 参考書 担当教員が講義で随時、指示する。

◆ 履修前の準備 ★授業には十分な予習をして出席し、講義中はマナーを守ること。

★授業の復習は必ず行うこと。

◆ その他 ★授業計画はあくまで予定であり、実際の講義の進行とは異なる場合があることに注意すること。

★授業の内容については担当教員が説明する。

杉山 明

◆ 授業の到達目標及びテーマ

本講義は、財務データを閲覧、加工、分析することを通じて、企業活動概要を財務面から理解することを目的とします。なお、財務会計の基礎を学習していない学生のために、財務会計の基礎を含めた講義とします。

◆ 講義の概要

第2回から第9回までの授業はテキストを中心に財務諸表の構成や考え方などを講義します。財務諸表の構成を学習することで、企業が利益を生み出す原動力を理解することができます。第10回から第12回は、企業価値の分析の手法や国際的な動きの影響を理解することが主眼です。第13回は、ケーススタディとして、実際の企業の経営分析を取り上げます。講義の中で、講義の理解を深めるための作業を実施し、その成果を提出してもらいます。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回 オリエンテーション	授業の概要や評価方法を説明します
第2回 会社の仕組みと財務諸表(1)	会社の仕組みと財務諸表(1)簡単な企業活動から貸借対照表、損益計算書の仕組み理解します
第3回 会社の仕組みと財務諸表(2)	貸借対照表と損益計算書の主要勘定科目を理解します
第4回会社の仕組みと財務諸表(4)	簡単なケースから貸借対照表と損益計算書を作成します
第5回 キャッシュフローの考え方と原価計算	キャッシュフロー計算書と貸借対照表、損益計算書のつながりを理解します
第6回 損益分岐点分析	原価計算を踏まえた簡単な損益分岐点分析を行います
第7回 財務分析	財務諸表から計算できる代表的な比率を理解します
第8回 標準原価計算	標準原価計算の方法を理解し、簡単な計算を行います
第9回 設備投資、減価償却	意思決定を伴う会計上の代表的なイベントを理解します
第10回 株式評価と財務比率	基礎的な収益指標(ROE,ROA)と株価と連動する指標(PER,PBR)などを理解します
第11回 MVAほか	企業価値の計算の基礎となるEBIT,NOPATなどの指標を理解し、MVAの計算の基礎を理解します
第12回 国際財務会計基準(IFRS)の影響	国際財務会計基準(IFRS)の導入により経営分析がどのような影響を受けるのかを考えます
第13回 ケーススタディ	実際の企業の経営分析を行います
第14回 まとめ	授業で行ってきたことの復習を行います
第15回 試験	

◆ 成績評価方法 出席(30%)、提出物(30%)、試験(40%)で評価します

◆ 教科書 山口 文紀『財務・会計のレシピ』日本能率協会マネジメントセンター(2009/4)

◆ 参考書 渡辺 茂『企業価値評価の基本』日本経済新聞社(2005/2)

西山 茂『企業分析シナリオ』(第2版)東洋経済新報社(2006/10)

杉山 明

◆ 授業の到達目標及びテーマ

本講義は、身近な問題を通じて企業活動の概要を理解するとともに、マーケティングを含めた企業戦略の根幹を理解し、第三者にその内容を説明することができることを到達目標とします。

◆ 講義の概要

講義は、レクチャー、プレゼンテーション、ワークショップの3つの形式で構成されます。また、できるだけ多くケーススタディを取り入れています。理論と実践を提示して、企業活動の現実の理解につながる資料を提供します。授業の前半ではKJ法、または、SWOT分析を使った個人作業を行い、後半ではグループによる企業分析を行いその結果を発表してもらいます。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回 オリエンテーション	授業の概要や評価方法を説明します
第2回 マーケティング戦略	PEST分析、4P、3Cなどについて講義します
第3回 マーケティング戦略	バリューチェーン、商品ライフサイクルなどについて講義します
第4回 KJ法	KJ法の手法を講義し、グループ作業を行います
第5回 SWOT分析	SWOT分析の手法を講義し、グループ作業を行います
第6回 財務戦略	企業の財務戦略のエッセンスを講義します
第7回 企業戦略	企業のポジショニング、企業と組織などを講義します
第8回 ケーススタディ	企業戦略のケーススタディをプレゼンテーションします
第9回 学生による発表	グループで発表を行います
第10回 学生による発表	グループで発表を行います
第11回 企業分析・評価	企業のファンダメンタルズ分析の基礎を講義します
第12回 学生による発表	グループで発表を行います
第13回 学生による発表	グループで発表を行います
第14回 まとめ	発表のまとめと授業の総復習を行います
第15回 予備	

◆ 成績評価方法 出席(30%)、プレゼンテーション(20%)、提出物(50%)で評価します

◆ 教科書 杉山 明『マーケティング・ノート』績文堂書店(2005/4)

◆ 参考書 野中 郁次郎ほか『失敗の本質』ダイヤモンド社(1984/5)

中野 明『バランススコアカード実践ワークブック』秀和システム(2009/12)

斉藤 嘉則『問題解決プロフェッショナル』ダイヤモンド社(1997/12)

株式会社グロービス『MBAマネジメント・ブック』ダイヤモンド社(1996/7)

チェスター・ドーソン『レクサス`完璧主義者たちがつくったプレミアムブランド』東洋経済新報社(2005/6)

高山 俊則

◆ 授業の到達目標及びテーマ

1・2年次程度の経済学、統計学、基礎的なファイナンス理論の知識のみを前提に、派生商品価格理論の基礎を講義する。代表的な派生商品の制度・仕組みを理解した上で、無裁定、リスク中立価格評価の考え方を理解する。

◆ 講義の概要

ファイナンス理論はミクロ経済学の応用分野のひとつであると共に、確率論・統計学や最適化手法、会計学等を活用した、学際的・具体的な財務意思決定理論でもある。本科目では、より複雑なキャッシュフローパターンを持つ証券である、オプションをはじめとした派生証券価格の評価理論を、主として数理的側面から講義する予定である。開講される相互関連科目『コーポレートファイナンス』、『インベストメント』、『証券市場 I・II』、『国際ファイナンス』等も並行履修することを強く勧める。特に前期開講科目『デリバティブス』とのリンケージを意識する。代表的なオープンソースソフトであるR言語を利用してもらい、具体的な数値計算を宿題として課す。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	オリエンテーション
第2回	利用する数学、経済学の復習
第3回	裁定価格理論(APT)、無裁定の考え方
第4回	デリバティブの基本1－先渡、先物、スワップ取引の実際
第5回	デリバティブの基本2－先渡、先物、スワップ取引の価格評価
第6回	オプションの基本1－オプション取引の実際
第7回	オプションの基本2－オプション取引戦略
第8回	原資産価格変動のモデルと伊藤のレンマ
第9回	オプション評価モデル1－2項1期間モデル
第10回	オプション評価モデル2－2項N期間モデル
第11回	オプション評価モデル3－ブラック・ショールズモデル
第12回	オプション評価モデル4－追加事項
第13回	金利派生証券
第14回	まとめと質疑応答
第15回	期末試験

◆ 成績評価方法 リアクションメールと宿題提出:20%

中間試験:20%

期末試験:60%

◆ 教科書

以下の文献を教科書として用いる。原書か訳書のうちのどちらかを購入されたい。また、補足となる資料を必要に応じて配布する。

《原書》David G. Luenberger (1998), Investment Science, Oxford University Press

《訳書》同著、今野・鈴木・枇々木訳 (2002), 『金融工学入門』、日本経済新聞社

◆ 参考書

藤田 岳彦 (2002), 『金融工学入門』、講談社

また、日本経済新聞等を中心に参考書として利用し、極力毎週の授業中に、ファイナンス理論の習得で重要と思われる経済・金融関連記事の解説を行う。これにより、経済・金融への関心も滋養する。

◆ 履修前の準備

数学にアレルギーがないこと。

◆ その他

学生間の公平性、メールの安全性確保のため、質問やリアクションメール、連絡のやりとりは、大学より交付されている諸君の電子メールアドレスとの間のみに限定し、フリーメールや携帯メールの利用は原則認めない。担当者の連絡先は、受講者確定後、電子メールアドレスを授業時に告げる。

石田 博之

◆ 授業の到達目標及びテーマ

統計データの収集と理論仮説の検証、モデルの構築とシミュレーション分析など簡単な実証分析に必要な基礎的能力を身につけることを目標とする。

◆ 講義の概要

計量経済学とは、経済理論の枠組みの中で、経済変数間の関係を統計的に計測したり、経済統計データを用いて理論仮説を検証する統計分析手法の一つである。また、個々の関数の因果関係を連立方程式体系にまとめたマクロ計量経済モデルを構築し、政策分析や予測を行うことが可能である。

この講義では、計量理論体系よりも、むしろ実証分析ツールとしての基礎を学ぶ事に重点を置き、計量経済学の分析手法、特に推定の基礎について概説する。また、計量分析ソフトを用いて、マクロ計量経済モデルを構築し、政策分析や経済予測を行う方法について実習する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1 オリエンテーション	計量経済学とは
2 統計学の基礎知識	平均、分散、標準偏差、相関係数
3 単一方程式による分析	推定式の推定、データ収集・加工
4 単一方程式による分析	推定式の評価
5 単一方程式による分析	分析ツールの活用
6 単一方程式による分析	推定式の改善(単純回帰) 連立方程式モデルの必要性和問題点
7 単一方程式による分析	推定式の改善(重回帰) 問題への対処
8 連立方程式モデル	モデル構造、モデルの解法と内挿テスト
9 連立方程式モデル	推定式の偏りと不一致性、識別問題
10 連立方程式モデル	将来予測、乗数分析
11 マクロ経済モデル	行動方程式の推定と評価
12 マクロ経済モデル	定義式、連立方程式体系の構築
13 シミュレーション分析	内挿テストによるモデルの評価、式の再推定
14 シミュレーション分析	予測、政策分析、感度分析、分析結果の整理
15 期末試験	

◆ 成績評価方法 出席態度、授業での課題、期末試験を総合的に評価する。

◆ 教科書 担当教員が講義で随時、指示する。

◆ 参考書 室田泰弘・伊藤浩吉・越国麻知子(2005)、「パソコンによる経済予測入門 第3版」,東洋経済新報社
白砂堤津耶(2007)、「例題で学ぶ初歩からの計量経済学」,日本評論社

◆ 履修前の準備 情報スキル I 合格と同程度のIT活用能力および数学(行列、編微分)、マクロ経済学、統計学に関する科目の履修もしくはそれと同等の知識を有することが望ましい。

◆ その他 授業時間以外に、自分でパソコンを使って実習する必要がある。

授業計画はあくまで予定であり、実際の講義の進行とは異なる場合があることに注意すること。
授業の内容については担当教員が説明する。

開澤 栄相

◆ 授業の到達目標及びテーマ

金融論は、現代の資本主義社会の中で中核となる領域である。その内容は、歴史、制度、統計、理論、現実問題といった多分野にわたっているだけでなく、各分野の奥も深い。本講義では、経済学入門で学んだ知識を前提に、金融の基礎理論を学習し、我々の日常において金融が果たしている役割を理解することを目標とする。

◆ 講義の概要

現代資本主義の下では様々な現象が留まることなく相次いで起こる。この10年ほどを見れば、ベンチャー企業に関してはライブドア問題や村上ファンド問題が耳目を集めた。最近では、航空業界、飲料業界、鉄鋼業界などの経営問題や統合問題が話題になった。そして金融業界では、銀行、証券、保険、政府系金融機関、郵便局における、統合、法律変更、民営化、金融商品の多様化、組織の透明性確保などの大きな変化が起り、今なお進行中である。そうした変革の途上で、証券会社の誤発注問題や保険会社の保険金未払い問題も発生した。不況対策として導入された日銀の量的緩和政策やゼロ金利政は2006年には解除されたが、その評価については今なお定まっていない。そして、2007年に顕在化したサブプライム・ローン問題と2008年のリーマン・ショックによる世界金融危機の中で、同様の金融政策と過大な財政政策が採られた。しかし、前者は世界的な資金余剰を生み、今後、投資家の投機的性格が強まることが懸念されている。後者は、ギリシャやPIIGSの財政危機を生み、各国財政制度の不安定性がより強まることが懸念されている。このような現実の金融現象を正確に理解するために、現代資本主義の下における金融の役割を金融制度・金融機関・金融商品といった諸側面から学ぶ。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	資本主義・市場原理・企業社会
第2回	資本市場 直接金融と間接金融
第3回	銀行の役割
第4回	中央銀行の役割
第5回	金融政策
第6回	株式
第7回	債券
第8回	外国為替
第9回	保険会社
第10回	信託銀行と証券投資信託
第11回	デリバティブ:先渡契約と先物取引
第12回	デリバティブ:オプションとスワップ
第13回	公的金融と郵便貯金
第14回	年金制度
第15回	現代金融の諸問題:バブルの発生と崩壊、サブプライム・ローン問題、ギリシャ問題

◆ 成績評価方法 ①課題(40%)、②試験(60%)の成績により評価する。但し、課題・試験とも授業出席が前提である。

◆ 教科書 教科書は用いず、教員が作成した講義資料を用いる。

◆ 参考書
 岩田規久男『金融危機の経済学』東洋経済新報社 2009年
 細野・石原・渡部『金融論』新世社 2009年
 小林・芹田『新証券投資論Ⅰ』日本経済新聞社 2009年
 伊藤・荻島・諏訪部『新証券投資論Ⅱ』日本経済新聞社 2009年
 白川方明『現代の金融政策』日本経済新聞社 2008年
 岩田規久男『金融入門』東洋経済新報社 2008年
 鹿野嘉昭『日本の金融制度 第2版』東洋経済新報社 2006年
 黒田晃生『入門 金融 第4版』東洋経済新報社 2006年
 小宮龍太郎編『金融政策論議の争点』日本経済新聞社 2002年
 他、講義中に指示する。

◆ その他 授業計画は、進捗度や理解度により、変更されることもありうる。

本講義は「経済学入門Ⅰ・Ⅱ」と密接な関連があるので「経済学入門Ⅰ・Ⅱ」を履修していることが前提である。「経済学入門Ⅰ・Ⅱ」の未履修者は本授業要覧の「経済学入門Ⅰ・Ⅱ」に掲載された参考書等により自習しておくこと。

岩井 千尋, 矢ヶ崎 隆二郎

◆ 授業の到達目標及びテーマ

証券市場に関する ①制度、②理論、③現在、過去の出来事に関する知識の修得。初歩的な「正しい証券投資」ができる知識の習得。

◆ 講義の概要

「証券」は、金融論の一部を構成するが、証券投資には「値段が変化する＝リスクがある」という意味で難しく、独立した科目になっている。

証券投資にはこのリスクがあるがゆえに、リターンは一般に大きくなる。日本が金持ちになり金融資産が増えたいま、年金運用、企業の余資運用、家計などにとって証券投資に関する知識はとても重要である。

さらに、近年の、サブプライム問題・世界金融危機問題にあったように、グローバル化した証券市場が世界経済を揺るがすような事態も出現するようになった。このことを一通り理解するだけでも、証券市場に関する相当の知識が要求される。しかも、その知識は積み重ねが要求され、細々したことが分からないと、上位のことが分からなくなる。

講義は、これらに関する事柄を、なるべく平易に、興味が持てるように講義を行う。

講師は二人とも長く信託銀行の証券投資セクションに長く在籍した経験があり、特に、矢ヶ崎講師は投資信託会社の社長、会長も務めた。その経験を生かして、株式・債券・デリバティブなどについて、生きた知識が獲得できる授業を展開する。

なお、証券投資は1950年代にリスク(リターン＝収益の不確実性)の計量化が行われるようになって、それ以降の体系を”MPT＝Modern Portfolio Theory”と呼ぶが、本講義はMPT前の伝統的な分野を対象とし、MPT以降は「証券市場Ⅱ」で取り扱う。将来、金融関係に進みたいものは「証券市場Ⅱ」も必ず習得すること。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	証券とは？証券市場とは？ 債券 1、現在価値、将来価値、収益率
第2回	債券 2：金利、単利利回り、複利利回り
第3回	株式1：資本主義と株式、株主の権利
第4回	株式2：資本修正、EPS,BPS,PER,PBR
第5回	債券3：債券の種類
第6回	債券4：債券価格の決定と金利
第7回	株式3：株価の決定、DDM
第8回	株式4：株価インデクス、株式市場
第9回	為替1：為替の決定要因
第10回	為替2：為替と株式、債券、実体経済
第11回	デリバティブ1：スワップ
第12回	デリバティブ2：先物
第13回	デリバティブ3：オプション1
第14回	デリバティブ4：オプション2、評価式
第15回	予備

◆ 成績評価方法 出席、レポート、期末試験

◆ 教科書 毎回、プリントを配付

◆ 参考書 新・証券投資論I(理論編)小林 孝雄、芹田敏夫、日本証券アナリスト協会 ¥ 4,200

清水 康司

◆ 授業の到達目標及びテーマ

【Corporate Finance】

The objective of this area of concentration is to provide the student with an understanding of the financial problems confronting the manager in the corporate organization. Issues addressed include corporate asset selection and valuation, working capital management, and the optimal financing mix. An emphasis is placed on decision-making from the view of the corporate manager who seeks to maximize shareholder wealth.

◆ 講義の概要

ファイナンスという分野は企業のお金の流れを中心に、資本市場、投資家に関わるさまざまな問題を扱います。「コーポレートファイナンス」ではこの分野全体を概観し、ファイナンスの様々な理論を学ぶために必要となる基礎知識の習得を目的とします。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第 1回	講義ガイダンス
第 2回	イントロダクション
第 3回	確実性下の評価
第 4回	不確実性下の評価
第 5回	ポートフォリオ選択
第 6回	資本資産評価モデル
第 7回	債券
第 8回	デリバティブズ
第 9回	財務諸表とキャッシュ・フロー
第10回	資本予算
第11回	資金調達と配当政策
第12回	資本構成と企業価値
第13回	エージェンシーとシグナリング
第14回	課題:解説
第15回	総括

◆ 成績評価方法 試験 60 % レポート(課題) 40 %

◆ 教科書 古川浩一、蜂谷豊彦、中里宗敬、今井潤一、『基礎からのコーポレート・ファイナンス』第3版、(2006/10)、中央経済社

◆ 参考書 井手正介、高橋文郎、『経営財務入門』第4版、(2009)、日本経済新聞社

Brealey,Myers,and Allen、Principles of Corporate Finance、McGraw Hill Higher Education

日本経済新聞

◆ 履修前の準備 毎回の予習・復習

◆ その他 連絡方法について:学生間の公平性、メールの安全性確保のため、質問、連絡のやりとりは、大学より交付されている各学生の電子メールアドレスとの間のみに限定し、フリーメールや携帯メールの利用は原則認めない。

岩井 千尋

◆ 授業の到達目標及びテーマ

現代企業におけるガバナンス問題を正しく認識し、フレームワークを身に着けること。
現実に発生するガバナンス問題に対し、主体的に発言できるようになること。

◆ 講義の概要

企業を取り巻くステークホルダー(利害関係者)、すなわち株主、債権者、労働者、顧客などの間の権利と責任の構造をコーポレート・ガバナンスというが、その形は日米で大きく異なり、現在、様々な形で注目を浴びている。

近年の日本の「失われた10年は(従業員重視の)日本のガバナンスのせい」とされたし、今回の世界金融危機は米国の(株主至上主義的な)ガバナンスと無縁ではない。ガバナンスの形はその国の資本主義の形を決定するといっても過言ではない。

本講義では、経営財務論や証券市場論の観点を中心としてこれを講義する。

講義担当者は、長年信託銀行に勤務した経歴を持ち、日本の金融機関と事業法人の関係なども照会しながら、法制度のあり方、企業価値、ガバナンス機構の再構築などを問う。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	コーポレート・ガバナンス理解に必要な予備知識
第2回	コーポレート・ガバナンス問題とは
第3回	日本のガバナンスの現実(1)
第4回	日本のガバナンスの現実(2)
第5回	米国のガバナンスの現実(1)
第6回	米国のガバナンスの現実(2)
第7回	企業効率性の問題
第8回	日本の歴史的アプローチと「組織」
第9回	米国の歴史的アプローチ
第10回	米国発の金融危機とガバナンス問題
第11回	株主の法人化問題
第12回	年金基金とガバナンス
第13回	ガバナンスとファイナンス
第14回	ガバナンスと資本主義
第15回	予備

◆ 成績評価方法 中間試験、期末試験、レポート

◆ 教科書 プリント配付

◆ 参考書 『コーポレート・ガバナンスの経営学』加護野忠男・砂川伸幸・吉村典久(有斐閣、2010年)

『株式会社はどこへ行くのか』上村達男、金児昭(日本経済新聞社、2007年)

『日本型資本主義と市場主義の衝突』ロナルド・ドーア(東洋経済新報社、2001年)

阿部 慶賀

◆ 授業の到達目標及びテーマ

認知心理学は人間の認知過程(知覚、記憶、言語、思考、学習・発達など)を、実験、観察、フィールドワーク、シミュレーションなど多様な方法を用いて解明することを目指す心理学の一領域である。この授業では認知心理学の基本的な考え方と主要な研究成果について理解することを目指す。

◆ 講義の概要

この講義では認知心理学の代表的な研究テーマや影響力の大きい諸研究について紹介、解説する。具体的には主要な研究領域(知覚、記憶、言語、思考、学習・発達)ごとに代表的な研究成果を挙げていく。また、現実の問題解決場面への応用例や、周辺領域との関連を挙げ、より広範囲での応用可能性について議論したい。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
ガイダンス	講義の目的と進め方について説明する。
認知心理学の登場と位置づけ	認知心理学が誕生した経緯と周辺領域に対する位置づけについて解説する。
知覚と環境	認知心理学における知覚の仕組みについて解説する。
知覚と行為	認知心理学における知覚と行為の研究について解説する。
記憶1	認知心理学における記憶研究についての諸現象を中心に紹介する。
記憶2	認知心理学における記憶研究についての理論やモデルを解説する。
言語	認知心理学における言語研究についての諸現象を中心に紹介する。
学習・発達1	認知心理学における学習・発達関連の諸現象を紹介する。
学習・発達2	認知心理学における学習・発達についての理論やモデルを解説する。
潜在的処理と顕在的処理	認知心理学における潜在的処理と顕在的処理の差異を扱った諸研究を紹介する。
推論・問題解決1	認知心理学における推論・問題解決についての諸現象を紹介する。
推論・問題解決2	認知心理学における推論・問題解決のモデルや理論を紹介する。
「ひらめき」と創造性	「ひらめき」や創造性を扱った認知心理学研究の紹介と解説を行う。
認知心理学の学際性	認知心理学との接点を持つ周辺分野、および現実場面への応用例を紹介する。
まとめ	講義全体のまとめと質疑を行う。

◆ 成績評価方法 期末試験での評点を基本とし、講義内での小レポートを考慮に加えた総合得点で評価を行う。

※やむを得ない事情で欠席せざるを得ない場合は、事前連絡・相談を前提として欠席にカウントしない場合もある。

- ◆ 教科書 特に指定しない。
- ◆ 参考書 授業時間内に適宜紹介する。

清成 透子

◆ 授業の到達目標及びテーマ

集団や組織の中で人々が直面する様々な問題を解決するために、社会学、社会心理学や集団意思決定論といった領域でどのようなアプローチがなされてきたかを学ぶ。最終的には、組織や集団といったマクロな過程と個人人の行動といったマイクロな過程との間で相互に規定しあうダイナミズムを理解する。

◆ 講義の概要

人間は1人では生きてはいけない。集団や組織に所属し、その中でうまく立ち回っていく必要がある。本講義では、集団状況で人々がどのように振る舞うのかについて、社会学や社会心理学などを中心にどのような議論がなされているのかを学ぶと同時に、我々人間が作り出す社会現象を如何にして分析するかという「考え方」を学ぶ。そのため、実際の組織や集団といった実践的な知見や応用研究に関しては言及しない。より抽象的なレベルにおける分析の考え方を学ぶことを通して、実践的なテーマへと応用できる基礎力を培うことを目指す。その際、心理学のみに偏った講義は行わず、社会学、行動経済学など社会科学により焦点をあてて進行する予定である。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1回目	オリエンテーション
2回目	思考方法
3回目	マイクロ・マクロ依存関係
4回目	社会的意思決定
5回目	公共財問題
6回目	社会関係のネットワーク(1)
7回目	社会関係のネットワーク(2)
8回目	集団意思決定(1)
9回目	集団意思決定(2)
10回目	集団意思決定(3)
11回目	集団協力和集団間葛藤(1)
12回目	集団内協力和集団間葛藤(2)
13回目	集団内協力和集団間葛藤(3)
14回目	規範の生成と組織文化
15回目	まとめ

◆ 成績評価方法 期末試験および授業中のリアクションペーパーに対する取り組み
詳しい基準は初回のオリエンテーションにて説明予定

◆ 教科書 特に指定しない

◆ 参考書 必要に応じて授業内で紹介

寺尾 敦

◆ 授業の到達目標及びテーマ

認知科学・認知心理学の立場から学習を理解することが目標である。社会情報学部での履修モデルのひとつに、「学習者心理・学習環境デザインに強い数学・情報教員」を育成するためのものがある。学習心理学はこの履修モデルの基盤となる科目のひとつである。どの職場にも学習は必ずあるので、教員にならなくても、人の学習というものを理解しておくことには意義がある。

◆ 講義の概要

テキストにそって講義を行う。テキストの内容は、学部3、4年生が自力で読んで理解するには少し難しい。解説を行うことで、理解の助けとする。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回:学習を科学する	認知科学を教育実践に応用する(テキスト第1章)
第2回:認知科学	課題と行動と表象を分析する(テキスト第2章)
第3回:学習の転移とメタ認知	「知的な初心者」を育てる(テキスト第3章)
第4回:学習の転移とメタ認知	「知的な初心者」を育てる(テキスト第3章)
第5回:算数・数学教育	意味を理解させる(テキスト第4章)
第6回:算数・数学教育	意味を理解させる(テキスト第4章)
第7回:理科教育	ブラックボックスの内部を探る(テキスト第5章)
第8回:理科教育	ブラックボックスの内部を探る(テキスト第5章)
第9回:読みの指導	大きな構図を見る(テキスト第6章)
第10回:読みの指導	大きな構図を見る(テキスト第6章)
第11回:作文教育	知識の陳述から知識の変換へ(テキスト第7章)
第12回:作文教育	知識の陳述から知識の変換へ(テキスト第7章)
第13回:教育評価	指導と評価を一体化する(テキスト第8章)
第14回:教育評価	指導と評価を一体化する(テキスト第8章)
第15回:教育改革	教育問題についての表象を考える(テキスト第9章)

◆ 成績評価方法 授業で課すレポートと最終試験の成績で成績評価を行う。最終評価に占める割合は50%ずつである。

レポートは4回か5回の予定である。英語文献を読んで内容をまとめるレポートがある。

試験での出題候補となる問題を前もって公開する。その中から2問を出題する。これは、テキストが扱っている内容が広く、かなり難しいための措置である。

◆ 教科書

◆ その他

J. T. ブルーアー(1997)『授業が変わる—認知心理学と教育実践が手を結ぶとき』北大路書房

出席をとるわけではないが、授業には出席すること。試験問題が公開されるとはいても、授業に出ていなければ、何を書けばよいのかまったくわからないであろう。

教育研究の意義を知ってほしい。「多くの人々が医学研究については知りたがり、その研究成果にすぐに飛びつく。これとは対照的に、教育研究はほとんど興味を持たれず、それが教育の進歩に貢献するという認識は一般の人々にはほとんどない。」(テキストp.261)

高木 光太郎, 佐伯 胖, 清成 透子, 寺尾 敦

◆ 授業の到達目標及びテーマ

心理学研究に必要な実証研究の考え方と方法、論文執筆の考え方と方法について基礎的な理解と技術を得ることが本授業の目標である。

◆ 講義の概要

授業は担当教員4名によるオムニバス形式で行われる。授業の進め方は以下のとおりである。まず心理学の領域で実証研究を行い、論文を執筆する際に必要となる基本的な考え方、取り組み方について解説する(佐伯)。次に3種類の研究方法について実習を行う(清成、寺尾、高木)。各実習パートでは、まずその研究方法を用いた代表的な実証研究論文の読解を行う。そのうえで小グループに分かれ、読解を行った実証研究をもとにした独自の研究案を作成する。各グループの研究案を全員で検討した後、グループごとに研究案に基づいた実験等を実施する。最後にその結果を報告するレポートを作成する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
ガイダンス(全担当者)	本授業の進め方、注意事項について説明する。
研究の基本的な考え方1(佐伯)	心理学の領域で実証研究を行い、論文を執筆する際に必要となる基本的な考え方、取り組み方について解説する。
研究の基本的な考え方2(佐伯)	心理学の領域で実証研究を行い、論文を執筆する際に必要となる基本的な考え方、取り組み方について解説する。
研究の基本的な考え方3(佐伯)	心理学の領域で実証研究を行い、論文を執筆する際に必要となる基本的な考え方、取り組み方について解説する。
実習1-1(清成)	経済ゲームを用いた実験論文を読解。実験案作成(宿題)
実習1-2(清成)	実験案の検討および実験マテリアルの作成(宿題)
実習1-3(清成)	実験の実施とデータ分析、およびレポート作成(宿題)
実習2-1(寺尾)	反応時間計測を行った実験論文の読解、実験案作成(宿題)
実習2-2(寺尾)	実験案の検討、実験ソフトウェアの解説、プログラム作成(宿題)
実習2-3(寺尾)	プログラムの検討、実験の実施とレポート作成(宿題)
実習3-1(高木)	談話分析を用いた実証研究論文を読解。研究案作成(宿題)
実習3-2(高木)	研究案の検討、予備データ収集・分析(宿題)
実習3-3(高木)	予備分析結果の検討、データ収集・分析とレポート作成(宿題)
プレゼンテーション1(全担当者)	優れたレポートで報告された研究についてプレゼンテーションを行い、その内容について議論する。
プレゼンテーション2(全担当者)	優れたレポートで報告された研究についてプレゼンテーションを行い、その内容について議論する。

◆ 成績評価方法 各担当者ごとに提出するレポートの合計点に、平常点(授業への取り組み方)、出席状況を加味して評価を決定する。(実習中心の授業のため欠席はやむを得ない場合のほかは原則として認めない)

◆ 教科書 特に指定しない。実習1〜3で読解する論文についてはガイダンス時にリストを配布する。

◆ 参考書 各担当者が必要に応じて指示する。

◆ 履修前の準備 実習で指示された論文は必ず読んでおくこと。また宿題として指示された作業にはグループで協力して十分な時間をかけて取り組むこと。

◆ その他 この授業は心理学の学習に専門的に取り組む意思のある学生を主な対象としている。各実習で指示される宿題に取り組むためには、データ収集や分析の実施など授業時間外にも相当量のグループワークが求められる。評価方法にあるように授業時間内外の学習活動に対する取り組み方も重要な評価項目となることに注意されたい。また欠席は原則として認めない。欠席のために実習として不可欠の作業に参加していない場合、欠席回数にかかわらず単位を認めないことがある。他の授業や活動の関係でこのような時間を確保することの出来ない者、心理学の学習に熱心かつ主体的に取り組む意欲のない者は履修を控えていただきたい。なお受講希望者が定員(40名)を上回った場合は、レポートと面接による選抜を行う。

遠藤 俊典

◆ 授業の到達目標及びテーマ

スポーツは、非常にユニークな性質を帯びた人間的営みである。近年、スポーツに対する社会的関心は増大の一途を辿り、多くの人々の興味を惹きつけている。本講義では、スポーツが持ち合わせる様々なパフォーマンス(そしてその魅力)についての概説から、それらを科学的に捉え、吟味していくことを通してスポーツに対する理解を深めていくことを目的とする。

◆ 講義の概要

スポーツは私たちの興味関心を惹きつけるが、その実体は非常に捉えづらいものとなっている。本講義では、スポーツを取り巻く様々な分野についての概説から、スポーツを科学的にとらえて吟味する視点を学習する。特に、スポーツと社会、トップアスリートの競技パフォーマンスの科学、我が国の国際競技力向上に関わる情報戦略、スポーツマーケティングなどに着目して講義を展開していく。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1. オリエンテーション	
2. スポーツと社会①	スポーツの起源と概念の歴史の変遷
3. スポーツと社会②	スポーツマンシップとは何か？
4. トップアスリートの科学①	一流競技者のパフォーマンス 心・技・体
5. トップアスリートの科学②	トレーニング計画の原理と方法 1
6. トップアスリートの科学③	トレーニング計画の原理と方法 2
7. トップアスリートの科学④	スポーツ技術の評価とそのトレーニング 1
8. トップアスリートの科学⑤	スポーツ技術の評価とそのトレーニング 2
9. スポーツ心理学	本番でパフォーマンスを発揮する心の科学
10. スポーツと情報	国際競技力向上のための情報戦略
11. スポーツマーケティング①	スポーツブランド、メガスポーツイベントの収支
12. スポーツマーケティング②	スポーツ消費者の意思決定
13. 運動と心	心と身体をつなぐ運動
14. 運動と食事	ダイエットの科学
15. まとめ	

◆ 成績評価方法 授業開講時数2/3以上の出席を成績対象の基礎条件とします。
授業内容に対する理解度を評価するためのテストおよびレポートを課します。

- ◆ 教科書 特になし
- ◆ 参考書 適時指示します
- ◆ その他 授業計画の順序は若干変更する可能性があります。

稲積 宏誠

◆ 授業の到達目標及びテーマ

情報や知識についての工学的な取扱いの基本を学び、組織や社会の抱える様々な問題への適用方法について理解する。

◆ 講義の概要

社会情報学部において、幅広く知識を活用するための基礎的な取り組みについて学ぶ。講義の前半において、情報および知識の理・工学的な側面について、情報理論、人工知能論から展開し、講義の後半において、大量データをどのように活用するかという点と、組織における情報や知識の共有のための取り組みについて展望する

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
ガイダンス	
情報の取扱い1	情報量及びその概念を学ぶ。
情報の取扱い2	情報量及びその概念を学ぶ
知識の取扱い1	人工知能の基本問題である「探索」の考え方を学ぶ。
知識の取扱い2	人工知能の基本問題である「知識表現」としての命題論理を学ぶ。
知識の取扱い3	人工知能の基本問題である「知識表現」としての述語論理を学ぶ。
知識の取扱い4	人工知能の基本問題である「推論」について学ぶ。
知識の取扱い5	論理と推論を通して学習について考える。
事例からの学習1	帰納学習の典型として、事例からいかにして知識を得るかについて学ぶ。
事例からの学習2	事例からの学習方法について、具体的な取り組みについて学ぶ。
事例からの学習3	事例からの学習方法について、具体的な取り組みについて学ぶ。
総合演習1	情報や知識の活用がどのような場面で見られるのか検討する。
総合演習2	情報や知識の活用がどのような場面で見られるのか検討する。
総合演習3	情報や知識の活用がどのような場面で見られるのか検討する。
総合演習4	情報や知識の活用がどのような場面で見られるのか検討する。

- ◆ 成績評価方法 演習時の課題(30%)と試験(70%)により評価する。
- ◆ 教科書 特に指定しない。
- ◆ 参考書 適宜紹介する。
- ◆ 履修前の準備 情報科学基礎 I および II を履修していることが望ましい。

苅宿 俊文

◆ 授業の到達目標及びテーマ

多元的共生社会という不可避で不可能な社会を構成していくことへの模索を「コミュニティ」をキーワードに考察する。

◆ 講義の概要

21世紀社会は、多元的共生社会という不可避で不可能な社会を構成していくことへの模索が始まっている。新しい社会状況への取り組みは、既成の理論にとらわれることなく、横断的な学問的アプローチを必要とされている。本講義では、既存の社会システムに対する問題認識を共有し、オルタナティブな提案を行っていくために、非営利性や公益性だけに止まらず、市民的な社会変革には、どのような基盤があり得るのかを考察する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	ガイダンス
第2回	多元的共生社会という不可避
第3回	多元的共生社会という不可能
第4回	公共性と市民的公共圏
第5回	親密圏と市民的公共圏
第6回	受講生によるポスターセッション①
第7回	ポスターセッション①のリフレクション
第8回	実践事例①
第9回	実践事例②
第10回	オルタナティブな社会システム
第11回	実践事例③
第12回	実践事例④
第13回	受講生によるポスターセッション②
第14回	ポスターセッション②のリフレクション
第15回	自己評価と他者評価

◆ 成績評価方法 毎回の出席はもちろん、課題の提出、授業中の議論への参加など、学び手としての積極的な貢献を強く求められる。

◆ 教科書 講義中に紹介する。

◆ 参考書 講義中に紹介する。

◆ 履修前の準備 指定された書籍、論文の熟読。レポートなどの準備がある。

◆ その他 本講義は、グループワークや授業中のディスカッション、自宅での自習などが不可欠としているタフな授業である。

松澤 孝紀

◆ 授業の到達目標及びテーマ

現代社会において、避けて通ることのできない「リスク」と「保険」の基本的知識を習得することが本講義の目的である。

◆ 講義の概要

個人や企業のリスクと保険について仕組みや制度などを順を追って体系的に確認する。また、リスクを引き受ける保険会社についても、その行動を確認する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	リスクとは
第2回	リスクマネジメント
第3回	保険の構造と特徴
第4回	保険契約の基礎
第5回	リスクに対処する諸制度
第6回	保険の経済分析①
第7回	保険の経済分析②
第8回	保険可能なリスクの分類と保険商品
第9回	個人を取り巻くリスクと保険
第10回	企業のリスクと保険①
第11回	企業のリスクと保険②(主にファイナンス)
第12回	保険会社の経営
第13回	社会保障制度
第14回	予備日(試験前復習)
第15回	定期試験

- ◆ 成績評価方法 主に試験により評価するが、レポートや受講態度も加味する。
- ◆ 教科書 下和田功 編『はじめて学ぶリスクと保険』改訂版 有斐閣ブックス(2007/4)
- ◆ 参考書 赤堀勝彦 著『リスクマネジメントと保険の基礎』経済法令研究会(2003/10)
甲斐良隆、加藤進弘 著『リスクファイナンス入門』金融財政事情研究会(2004/3)
保坂和夫 著『ファイナンスで学ぶ数式トレーニング』創成社(2010/5)
- ◆ 履修前の準備 期待値や標準偏差、現在割引価値やデリバティブなどの計算を行うことがあるため、√機能が搭載されている電卓を準備する。
- ◆ その他 新聞などで関連情報をこまめにチェックするよう心掛けてください。

宮川 裕之

◆ 授業の到達目標及びテーマ

この授業では、情報システム開発プロセスの最初の段階に位置する情報システムの企画・計画に関する基本的な知識・手法を理解し、ある程度条件が限定された事例において、学んだ知識・手法を適用する力を養うことを目標とする。

◆ 講義の概要

この授業では、情報システムを企画・計画するための切り口としての、経営と情報システムの視点、情報技術の視点、情報システムの評価の視点、情報システム開発管理の視点を総合的に勘案して、適切な情報システムの企画・計画を立てるための知識・手法、考え方について学習する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1.	オリエンテーション, 情報システムの概念と歴史, 情報技術史
2.	情報システムと人間活動-企業情報システム, 社会情報システム, 個人の情報システム
3.	情報システムの企画活動
4.	顧客の問題と解決
5.	経営計画・ビジネスモデルと情報システム
6.	e-コマースと情報システム
7.	情報システムのライフサイクルと開発プロセス
8.	ソフトウェア開発管理
9.	ソフトウェアの原価計算
10.	情報システムの費用対効果分析
11.	情報システムの企画・計画のドキュメント
12.	総合演習(1)
13.	総合演習(2)
14.	総合演習(3)
15.	まとめ

◆ 成績評価方法 授業中の課題(40%)と期末のレポート(60%)で評価する。

◆ 教科書 無し

◆ 参考書 石井信明, 宮川裕之:プロフェッショナルを目指すシステム分析入門-情報システムの企画・計画のプロセスと分析手法, コロナ社(2009)
 神沼靖子, 丹羽時彦:問題形成と問題解決(IS テキストシリーズ01), 共立出版(2005)
 浦昭二, 細野公男, 神沼靖子, 宮川裕之, 山口高平, 石井信明, 飯島正共編著:情報システム学へのいざない改訂版, 培風館(2008)

インターネット応用

占部 雅一

◆ 授業の到達目標及びテーマ

雑誌メディアを中心に旧来のメディアの価値とはなにか？新しいメディアは、その旧来のメディアと何が違うのか？ビジネスの根本構造が崩れつつあるいま、新しい収益構造とはなにか？なにより、これからのメディア人の持つべき資質とスキルについて、さらに未来のコンテンツバリューについて、考えていきます。

◆ 講義の概要

概要

かつて80年代～90年代は、雑誌は輝いていました。常に流行の発信源は雑誌でした。この雑誌黄金期はいつしかネット時代にシフトし、トレンド潮流は、完全にWebに移りかわっています。はたして今後の4マスは？旧メディアはどうなるのか？新しいメディアとどう融合するのか？

私自身が雑誌編集者として、社会人デビューし、その後独立。女性系コミュニティなどを手がけながら、新しいメディアのカタチを探求してきました。従来のようなメディア価値感では、理解および整理できない状況が現在を表しています。メディア変遷・意味、効果を解説しながら、新時代のメディアとはなにか？そこで活躍するためのスキルや条件とはなにか？実践的な新しい価値観を持つディレクター像を考え、メディアの未来を学んでいきます。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
メディアとはなにか？	媒体という名前が指すモノとはなにか？
雑誌メディアの変遷	どのような雑誌が時代を作ってきたか？
あなたも編集者に	企画、構成、編集、取材、コピーとは？
続きはWEBで！の意味	クロスメディアとはどういうことか？
電子書籍で巻き返せるか？	出版社は電子書籍で巻き返しができるのか？
ネット広告の種類	バナー、タイアップ、リスティング広告
リーチMAXという手法	
ADネットワーク	米国型プレミアムADネットワーク Glamメディアとは？
日経の電子新聞の挑戦	
Googleの考える未来	スマートフォンのとらえ方
ソーシャルメディアの可能性	Facebook、mixi、twitterをどうとらえるか？
トリプルメディアと企業メディア	
コンテンツはどうすればバリューが生まれるか？	
コンテンツの価値を探る指標について	
メディアとはなにか？そしてどこへいく	

◆ 成績評価方法 出席 50%

レポート50%

◆ 履修前の準備 授業に参加してもらう前提として、大学生として最低限のマーケティングの基礎知識、および少々つつきにくいですが、ネット広告の基礎知識を準備してもらうと理解が深まります。

◆ その他 インターネットビジネスを目指す人は歓迎します。全員Facebook、twitterなど、新しいツールに積極的に参加してもらって、新しいコミュニケーションの是非を学んでみてください。

飯島 泰裕

◆ 授業の到達目標及びテーマ

Web技術と社会変化

◆ 講義の概要

知の世界の再編とも呼ばれる検索エンジン「Google」。ヒット商品を狙うのではなく、普遍的ニーズに答えても成り立つ「ロングテールビジネス」。素人の情報発信がマスメディア化していく「BlogやYouTube」。そして、オープンソース減少、Wikiペディア、ソーシャルブックマークのようにマス・コラボレーションで生まれる製品などがある。これらは、現在のWeb技術、インターネット技術は、ビジネスや教育、公共のスタイルを変化させようとしている。Web技術が起こしつつある社会変化について、社会論的に解説する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	ガイダンス
第2回	情報社会の現状①
第3回	情報社会の現状②
第4回	情報社会の現状③
第5回	Web2.0
第6回	Webとビジネス①
第7回	Webとビジネス②
第8回	Webとビジネス③
第9回	Google①
第10回	Google②
第11回	デジママ
第12回	スマートフォンとWeb
第13回	電子書籍と図書館
第14回	総括
第15回	定期試験

◆ 成績評価方法 ミニツレポートとレポートおよび定期試験の結果を総合的に評価する

◆ 教科書 必要な資料は学生ポータルなどから配布する

◆ 参考書 梅田望夫『ウェブ進化論』ちくま新書、2006年
情報処理学会編『エンサイクロペディア情報処理 改訂4版』オーム社、2002年

横川 耕二

◆ 授業の到達目標及びテーマ

ウェブによって情報をやりとりするための基本的な概念と要素技術をコンテンツ作成作業を通して体験的に学び、情報デザインの視点に立ってよりよいコンテンツを考えます。

◆ 講義の概要

コンピュータとインターネットの発展によって、ウェブが人々の生活の中に広く深く浸透し、私たちの日常的なコミュニケーションや思考にまで大きな変化をもたらしています。しかし、ウェブコンテンツの作成技術はまだ発展途上であり、適切な情報を適切な方法で提供するために様々な試行錯誤が行われているのが現状です。

この演習では、CMS(Contents Management System)を使ってウェブコンテンツを自ら作成する作業を通して、ウェブの仕組みや要素技術を体験的に学びます。

さらに、人々の情報とのかかわり方を探求する新しいデザイン分野である情報デザインの視点に立って、よりよいコンテンツを作成するためにはどうすればよいかを考えます。

受講にあたりHTMLの知識は必要ありません。

ただし、ウェブコンテンツ作成に利用する道具や活動の枠組みは用意しますが、その使い方や内容を細かく指示しません。そのため受講には自主的に調べ、試し、実現する行動力と柔軟な想像力を必要とします。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1	ガイダンスと環境構築
2	ページをつくる1
3	ページをつくる2
4	ページをつくる3
5	サイトをつくる1
6	サイトをつくる2
7	情報デザインの視点
8	サイトをつくる3
9	サイトをつくる4
10	サイトをつくる5
11	サイトをつくる6
12	サイトをつくる7
13	サイトをつくる8
14	サイトをつくる9 (プレゼンテーション)
15	サイトをつくる10 (ふり返し)

◆ 成績評価方法 出席を前提として課題作成の作業状況を主に評価します。

課題の品質を加点要素とします。

◆ その他

授業外に作業が必要になることがあります。

グループワークを行うため遅刻・欠席・早退は他の受講生の迷惑となるので禁じます。

多摩美術大学情報デザイン学科の須永剛司教授による特別講義がある予定です。

齋藤 裕

◆ 授業の到達目標及びテーマ

ウェブラーニングとはどのようなものであるか、学習管理システム(LMS)とはどのようなものであるか説明できるようになる。

◆ 講義の概要

近年、Webの発達に伴うeラーニング分野への波及として、WBT(Web Based Training)形式のeラーニングが広く浸透してきた。通常の集合形式の教育と異なり、WBT形式のeラーニングでは、WebベースのLMS(Learning Management System)を用いることで、学習者は自由な時間・場所で教材を参照し学習を進めることが可能となった。

本授業ではeラーニングの概要とWBTへの変革の歴史、LMSの機能、LMSを用いることを前提とした学習教材の作成方式などについて実習を交えて学習する。

また、大学や企業における実際の取り組みを事例ベースで解説する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回 イントロダクション	イントロダクション、プレアンケートの実施
第2回 eラーニング概論、WBT活用事例	eラーニングとはどのようなものであるか。WBT(Web Based Training)とはどのようなものであるか。eラーニング、WBTの歴史。高等教育機関、企業内教育、海外事例などの紹介
第3回 LMS概論、SCORM概論	LMS(学習管理システム)とはどのようなものであるか。SCORM(Sharable Content Object Reference Model)(eラーニングコンテンツの国際標準規格)とはどのようなものであるか。
第4回 WBT教材作成概論、小テスト	WBT教材にはどのようなものがあるか。コンテンツオーサリング方法。第2回から第4回講義内容に対する小テスト
第5回 LMSを用いた授業の設計(前半)	ケーススタディを元にした、LMSを用いたWBTベース授業の設計(実習)
第6回 LMSを用いた授業の設計(後半)	ケーススタディを元にした、LMSを用いたWBTベース授業の設計(実習)
第7回 LMSを用いた授業の開発(1)	ケーススタディを元にした、WBT教材用の素材作成(実習)
第8回 LMSを用いた授業の開発(2)	ケーススタディを元にした、WBT教材用ナレーション原稿の作成(実習)
第9回 LMSを用いた授業の開発(3)	ナレーション撮り(音声または映像)(実習)
第10回 LMSを用いた授業の開発(4)	WBT教材のオーサリング(編集)(実習)
第11回 LMS運用管理(前半)	ケーススタディを元にした、WBTベース授業を行うためのLMS運用管理計画の立案(実習)
第12回 LMS運用管理(後半)	ケーススタディを元にした、WBTベース授業を行うためのLMS設定(実習)
第13回 レビュー(前半)	LMSを用いたWBTベース授業の授業設計・開発およびLMS運用管理計画に関するレビュー準備(実習)
第14回 レビュー(後半)	LMSを用いたWBTベース授業の授業設計・開発およびLMS運用管理計画に関するレビュー(実習)
第15回 まとめ	授業のまとめ、ポストアンケートの実施

◆ 成績評価方法

- 小テスト(1回) 10点(個人)
- コース設計書および作成したWBTコンテンツ 35点(グループ)
- LMS上のコース準備状況 15点(グループ)
- 最終報告レビュー 20点(グループ)
- 最終レポート 20点(個人)
- 合計100点満点で評価する。なお、期末定期試験は実施しない。

出席は成績評価の対象としないが、4回以上欠席した者は無条件で単位を認めない。また不正に出席(代理出席等)についても無条件で単位を認めない。

◆ 教科書

「eラーニング専門家のためのインストラクショナルデザイン」 東京電機大学出版局

◆ 参考書

「eラーニング導入ガイド」 東京電機大学出版局

「eラーニング活用ガイド」 東京電機大学出版局

◆ その他

本授業の実習は4人程度のグループで行う。

特に授業後半の実習では、実際にLMSを実習用システムとして利用しながらWBT教材を活用するWebベース授業の設計、開発、運用計画の立案を行う。さらにLMSの設定(授業実施準備)も併せて検討する。結果はレビューの形でプレゼンテーションを実施する。

本授業では、授業全般にわたり、教員と受講者、受講者同士の円滑なコミュニケーションを図るため学習管理システムなどのeラーニングシステムを積極的に活用する。

藤田 孝弥

◆ 授業の到達目標及びテーマ

ヒューマンインタフェース(HI)は、人間と人工物(機械やコンピュータ)、あるいは、人工物を介在する人間と人間の対話システムの設計、実現、評価、利用に関わる問題、および、これらを取り巻くあらゆる問題を扱う分野である。

本講義では、人間の特性、設計技法、評価手法ならびに、HIに関連する最近の話題や社会やビジネスとの関わりなどに関して、講義や演習を通して習得・理解を深めるとともに、我々の社会生活に密接に関連している情報通信システムや機器などが、ユーザにとって価値あるものとなるための考え方を身に付けることを目的とする。

◆ 講義の概要

HIが人間とコンピュータとの関わりを主要な対象とすることから、講義ではHIが注目されてきた歴史的背景とその進展を述べるとともに、最新の情報通信環境でのHIに関する話題などを、人間工学、認知科学、コンピュータ技術、デザインなど、多くの関連分野の知識を取り込みながら幅広く講義する。

講義に際しては、講義時間中に演習を取り入れ、実際にデザインや評価を行いながら、体験を通してユーザインタフェースに関して学ぶ。また、ヒューマンインタフェースの視点は、これからの社会生活や企業活動にとっても重要な意味を持つため、ビジネス的な観点からの議論も行なう。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回:オリエンテーション	授業内容と授業の進め方、成績基準など。HIについての受講者の意識調査など。
第2回:HIの進展	HIとは。HIを取り巻く分野・研究領域。HIの進展。HIの社会への影響。
第3回:システム操作の人間特性	身体的、生理的、認知的特性。ヒューマンエラー。
第4回:インタラクションの要素としてのコンピュータ	GUIとアイコン。ウインドウシステムとハイパーメディア。入出力インタフェース。知的インタフェース。
第5回:人間中心設計とユーザビリティ	良いインタフェースとは。使いやすさの指標。人間中心設計。ユーザビリティ。
第6回:企業活動とユーザビリティ	企業活動と顧客視点。顧客満足度とユーザビリティ。ユーザビリティのビジネス的意義。
第7回:中間テスト	理解度の確認など
第8回:ユーザビリティ評価(1)	分析的評価と実験的評価。ヒューリスティック評価。
第9回:ユーザビリティ評価(2)	チェックリストを用いた評価。認知的ウォークスルー。
第10回:ユーザビリティ評価実習	評価と討論。
第11回:ユニバーサルデザイン	ユーザビリティとアクセシビリティ。ユニバーサルデザインの7原則。Webのユニバーサルデザイン。
第12回:アクセシビリティ	Webのアクセシビリティ。アクセシビリティ評価ツール。評価実習。
第13回:インタフェースデザイン(1)	ユーザインタフェース設計の流れ。ユーザインタビュー。問題整理と要求分析。機能の整理。
第14回:インタフェースデザイン(2)	機能体系図。画面遷移。ペーパープロトタイピング。ユーザビリティテスト。
第15回:最終テスト	試験または課題レポート

◆ 成績評価方法 授業への出席点とレポート提出状況から総合的に評価

- ・出席点(70/100)
 - * 事前届出や電車遅延などは配慮
 - * 授業への積極的な参加状況(出席率:80%以下は不可)(遅刻は減点:理由を問わず15分以内)(遅刻3回で1回欠席)
- ・試験およびレポート点(30/100)

◆ 教科書 特になし

◆ 参考書 授業中に紹介

◆ 履修前の準備 特になし

◆ その他 ヒューマンインタフェースの視点を持つことは、デザイナーや設計技術者だけでなく、経営者や製品・サービスの提供者、利用者にとっても、ますます重要となっています。理論や学術的な知識を与える講義ではありません。皆さんと一緒に考え、議論するようにしたいと思います。講義内容や進め方、講義の順番などは、受講者の関心や希望、スキルなどに合わせて適宜変更する場合があります。また、コーヒープレイクでは産業界の視点・経験から学生に参考になる話もしたいと思います。

笠羽 晴夫

◆ 授業の到達目標及びテーマ

デジタルアーカイブ(Digital Archives)およびその構築(デジタルアーカイビング)の要点、著作権に関わる問題を理解し、また典型的な事例にあたることにより、今後その推進および地域振興をはじめとする活用に資する。

◆ 講義の概要

デジタルアーカイブは、ミュージアム(美術館・博物館)、図書館、公文書館をはじめとする文化資産およびさまざまな資料をデジタルデータ化、データベース化したものである。それをもとにWeb公開あるいはコンテンツ作成で、公共サービスの充実を図ること、また地域振興に役立てることが、1990年代から進められている。これは学術・文化および情報社会インフラの両面から意味がある動きで、その概要を事例紹介とともに解説する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	受講ガイダンス
第2回	デジタルアーカイブとはどんなものか・その15年
第3回	ミュージアムのデジタルアーカイブ
第4回	図書館のデジタルアーカイブ
第5回	公文書館のデジタルアーカイブ
第6回	その他(放送、出版、映画、広告など)のデジタルアーカイブ
第7回	デジタルアーカイブ構築の手法と技術(1)
第8回	デジタルアーカイブ構築の手法と技術(2)
第9回	デジタルアーカイブと地域振興(1)
第10回	デジタルアーカイブと地域振興(2)
第11回	著作権とはどんなものか
第12回	インターネット時代における著作権
第13回	デジタルアーカイブとのつきあい方とオープン・デジタル
第14回	まとめ
第15回	定期試験

◆ 成績評価方法 Web上の事例を選択しその概要、問題点に関して作成されたレポートで評価する。

◆ 教科書

笠羽晴夫『デジタルアーカイブ 基点・手法・課題』水曜社、2010年

◆ 参考書

松岡資明『日本の公文書』ポット出版、2010年

福井健策『著作権の世紀』集英社新書、2010年

野口祐子『デジタル時代の著作権』ちくま新書、2010年

宮川 裕之, 伊藤 一成, 飯島 泰裕, 稲積 宏誠, 南部 和香

◆ 授業の到達目標及びテーマ

複数のメンバーによるプロジェクト研究を行う。企業等から示された具体的な問題に対して、その問題の所在を見極め、対応策を提案するという作業を通じて、問題発見と解決能力を養う。併せて、グループで問題解決を図っていく過程を通じて、プロジェクトの進め方についての問題点を理解する。

◆ 講義の概要

企業等の抱える具体的な問題、解決すべき課題等を提示する。それに対して小グループを構成して、その課題解決に取り組む。授業は、その進捗報告を中心に行われ、課題解決に向けて必要となる知識や技術などを適宜学習する。したがって、必ずしも授業時間内で教室内での取組にとどまらず、外部への調査等を含めた授業時間外での取組も必要となる。また、全体での中間報告会、最終報告会を、授業時間外に別途設定し行う予定である。なお、進め方の詳細については、ガイダンス時に説明し、取組内容の詳細は、授業開始時に説明する予定である。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	ガイダンス、授業の進め方、テーマ詳細の説明
第2回	グループの決定、テーマ選定、問題の所在の確認、取り組み方法の検討と決定等を行う。
第3回	問題の所在の確認、取り組み方法の検討と決定等を行う
第4回	問題の所在の確認、取り組み方法の検討と決定等を行う
第5回	問題の所在の確認、取り組み方法の検討と決定等を行う
第6回	問題の所在の確認、取り組み方法の検討と決定等を行う
第7回	問題の所在の確認、取り組み方法の検討と決定等を行う
第8回	中間報告会。進捗報告と問題点の説明
第9回	具体的な問題解決、提案に向けて取り組む。
第10回	具体的な問題解決、提案に向けて取り組む
第11回	具体的な問題解決、提案に向けて取り組む
第12回	具体的な問題解決、提案に向けて取り組む
第13回	具体的な問題解決、提案に向けて取り組む
第14回	具体的な問題解決、提案に向けて取り組む
第15回	最終報告会

◆ 成績評価方法 中間報告会と最終報告会までの取組とその内容により評価する

◆ 教科書 必要な資料は適宜配布する

◆ その他 【履修登録の条件等】

「社会情報特別講義B」を履修登録することにより、「社会情報特別講義A」も自動的に履修登録されます。

宮川 裕之, 伊藤 一成, 飯島 泰裕, 稲積 宏誠, 南部 和香

◆ 授業の到達目標及びテーマ

複数のメンバーによるプロジェクト研究を行う。企業等から示された具体的な問題に対して、その問題の所在を見極め、対応策を提案するという作業を通じて、問題発見と解決能力を養う。併せて、グループで問題解決を図っていく過程を通じて、プロジェクトの進め方についての問題点を理解する。

◆ 講義の概要

企業等の抱える具体的な問題、解決すべき課題等を提示する。それに対して小グループを構成して、その課題解決に取り組む。授業は、その進捗報告を中心に行われ、課題解決に向けて必要となる知識や技術などを適宜学習する。したがって、必ずしも授業時間内で教室内での取組にとどまらず、外部への調査等を含めた授業時間外での取組も必要となる。また、全体での中間報告会、最終報告会を、授業時間外に別途設定し行う予定である。なお、進め方の詳細については、ガイダンス時に説明し、取組内容の詳細は、授業開始時に説明する予定である。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	ガイダンス、授業の進め方、テーマ詳細の説明
第2回	グループの決定、テーマ選定、問題の所在の確認、取り組み方法の検討と決定等を行う。
第3回	問題の所在の確認、取り組み方法の検討と決定等を行う。
第4回	問題の所在の確認、取り組み方法の検討と決定等を行う。
第5回	問題の所在の確認、取り組み方法の検討と決定等を行う。
第6回	問題の所在の確認、取り組み方法の検討と決定等を行う。
第7回	問題の所在の確認、取り組み方法の検討と決定等を行う。
第8回	中間報告会。進捗報告と問題点の説明
第9回	具体的な問題解決、提案に向けて取り組む。
第10回	具体的な問題解決、提案に向けて取り組む。
第11回	具体的な問題解決、提案に向けて取り組む。
第12回	具体的な問題解決、提案に向けて取り組む。
第13回	具体的な問題解決、提案に向けて取り組む。
第14回	具体的な問題解決、提案に向けて取り組む。
第15回	最終報告会

◆ 成績評価方法 中間報告会と最終報告会までの取組とその内容により評価する

◆ 教科書 必要な資料は適宜配布する

◆ その他 【履修登録の条件等】

「社会情報特別講義A」を履修登録することにより、「社会情報特別講義B」も自動的に履修登録されます。

矢野 公一

◆ 授業の到達目標及びテーマ

解析学の基礎であり、かつ出発点でもある極限の概念、および一変数関数や多変数関数の微積分の理論的背景を理解すること、数列、級数、広義積分の収束判定ができるようになること、べき級数がある程度自由に扱うことができるようになることを目標とする。

◆ 講義の概要

数列および関数値の極限の定式化から始め、数列、級数、広義積分の収束判定、連続関数の性質、べき級数の性質とその応用などを取り扱う。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	数列の収束と極限, 極限と不等式, 四則演算
第2回	上界と下界, 上限と下限, 実数の連続性公理
第3回	有界単調数列の収束
第4回	ボルツァーノ-ワイエルシュトラスの定理
第5回	数列の収束に関するコーシーの定理
第6回	関数値の極限, 関数の連続性
第7回	最大値の原理, 中間値の定理
第8回	級数, 正項級数
第9回	絶対収束と条件収束, 優級数
第10回	コーシーの判定法, ダランベールの判定法
第11回	べき級数, 収束半径
第12回	テイラー級数, オイラーの公式
第13回	項別微積分
第14回	広義積分の収束判定
第15回	期末試験

◆ 成績評価方法 期末試験の結果で評価する。

◆ 教科書 使用しない。毎回プリントを配布する予定。

◆ 参考書 講義当初に紹介する。

◆ 履修前の準備 「社会数理基礎Ⅰ」「社会数理基礎Ⅱ」の内容を前提とする。

◆ その他 【履修登録の条件等】

学習効果を高めるために「数理解析基礎演習」を同時に履修することを強く勧める。

高村 正志

◆ 授業の到達目標及びテーマ

講義科目「数理解析基礎」の内容を自ら手を動かして計算することにより、その理解を深めることを目標とする。

◆ 講義の概要

毎回問題を配布する。受講生数が少数の場合には、受講生があらかじめ問題を解き、受講生が板書で他の受講者に解説する形で授業を進める。受講生数が多数の場合には、受講生が個々にその場で答案を作成し提出する形で授業を進める。

受講生は「数理解析基礎」の講義のノートを持参し、わからない問題については、友人と相談しながら、あるいは教員に質問し、講義科目「数理解析基礎」の理解を深める。

講義の進行状況などにより内容を変更することがあるので注意すること。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	基本的な知識の確認
第2回	数列の収束と極限, 極限と不等式, 四則演算
第3回	上界と下界, 上限と下限, 実数の連続性公理
第4回	有界単調数列の収束, ボルツァーノ-ワイエルシュトラスの定理
第5回	数列の収束に関するコーシーの定理
第6回	関数値の極限, 関数の連続性
第7回	最大値の原理, 中間値の定理
第8回	級数, 正項級数
第9回	絶対収束と条件収束, 優級数
第10回	コーシーの判定法, ダランベールの判定法
第11回	べき級数, 収束半径
第12回	テイラー級数, オイラーの公式
第13回	項別微積分
第14回	広義積分の収束判定
第15回	演習内容に関する質疑応答

◆ 成績評価方法 毎回の発表, 提出物の成果を積算して評価する。また学期末の試験は行わない。当該科目の授業時間内に不正行為(友人による代理提出等)が認められた場合には、それがいかなる種類のものであっても当該科目は合格としない。

◆ 教科書 講義科目「数理解析基礎」の各自のノート。

◆ 履修前の準備 講義科目「数理解析基礎」の復習。

◆ その他 【履修登録の条件等】

「数理解析基礎」を履修登録中であるかあるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。

高村 正志

◆ 授業の到達目標及びテーマ

社会現象や自然現象における様々な問題に対して、微分方程式で記述される数学モデルを考察しつつ、そこで用いられる常微分方程式の基本的な解法を習得することを目標とする。

◆ 講義の概要

それぞれの数学モデルに対応する常微分方程式の解法を解説する。
授業計画は進行状況などによって変わることがあるので注意すること。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	微分方程式とは
第2回	変数分離型微分方程式
第3回	1階線形微分方程式
第4回	完全微分方程式
第5回	完全微分方程式:積分因子
第6回	様々な分野への応用I
第7回	連立微分方程式
第8回	連立微分方程式続
第9回	2階線形微分方程式
第10回	2階線形微分方程式:未定係数法
第11回	2階線形微分方程式:定数変化法
第12回	様々な分野への応用II
第13回	逐次近似法
第14回	存在定理
第15回	期末試験

◆ 成績評価方法 定期試験の成績により評価する。

◆ 参考書

- ・現代経済学の数学基礎[第4版], チャン/ウエインライト著, 小田正雄他訳, シーエーピー出版
- ・ダイナミック・システム(上)(新装版 経済数学教室 7), 小山 昭雄著, 岩波書店
- ・講座 数学の考え方(7) 常微分方程式論, 柳田 英二/栄 伸一郎著, 朝倉書店
- ・常微分方程式 新版, ポントリヤーギン著, 千葉 克裕訳, 岩波書店

◆ その他

講義科目「社会数理基礎 I、II」「数理情報基礎 I、II」の内容を前提とする。特に1変数の微分積分は自由に出来ることを前提とする。

学習効果を高めるために『現象の数理 I 演習』を同時に履修することを強く勧める。

高村 正志

◆ 授業の到達目標及びテーマ

「現象の数理I」の内容を自ら手を動かして計算することにより、その理解を深めることを目標とする。

◆ 講義の概要

講義科目「現象の数理I」に沿って、講義の内容を深めるために、毎回演習問題を各自が解いて提出する形で授業を進める。授業時間内は教員が教室を巡回しているので、解らない箇所等について質問し理解を深めること。

講義の進行状況などにより内容を変更することがあるので注意すること。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	微分積分の復習に関する演習
第2回	簡単な微分方程式に関する演習
第3回	変数分離型微分方程式に関する演習
第4回	1階線形微分方程式に関する演習
第5回	完全微分方程式に関する演習
第6回	完全微分方程式に関する演習
第7回	様々な分野への応用に関する演習
第8回	連立微分方程式に関する演習
第9回	連立微分方程式に関する演習
第10回	2階線形微分方程式に関する演習
第11回	未定係数法に関する演習
第12回	定数変化法に関する演習
第13回	様々な分野への応用に関する演習
第14回	逐次近似法に関する演習
第15回	演習内容に関する質疑応答

◆ 成績評価方法 毎回の課題に関する、時間内の提出物によって評価する。また学期末の試験は行わない。当該科目の授業時間内に不正行為(友人による代理提出等)が認められた場合には、それがいかなる種類のものであっても当該科目は合格としない。

◆ 教科書 講義科目「現象の数理I」の各自のノート

◆ 履修前の準備 講義科目「現象の数理I」の復習。

◆ その他 【履修登録の条件等】

「現象の数理 I」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。

小池 和彦

◆ 授業の到達目標及びテーマ

集合の基本的な概念と演算, 同値類, 写像の定義等から出発して, 順序関係, 数え上げ組合せ論の初歩を論ずる. 授業の到達目標は集合の演算の基礎と2項関係, 特に同値類の概念, 商集合の概念, および, 半順序集合の概念をきちんと理解することを目標とする. スターリング数等, 集合の元の数え上げができることも目標とする.

◆ 講義の概要

集合の基本的な概念と演算, 同値類の定義, 商集合, 写像の定義等, 現在の大学生が苦手とする概念を詳しく講義する. 講義時間の最後になるべく演習を入れ, 自分で概念操作をすることにより, 理解の向上に努める

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	導入: 講義の概要
第2回	集合: 集合, 部分集合, 集合の演算, ベン図, ド・モルガンの法則
第3回	集合続: 包除原理, 数え上げ, 直積集合
第4回	集合続: 無限集合, 濃度, 可算集合, 対角線論法
第5回	2項係数, 多項係数: 順列, 組合せ, 数え上げ
第6回	関数と写像: 関数, 写像の定義, 全射, 単射, 逆写像, 合成写像
第7回	2項関係, 同値類: 反射律, 対称律, 推移律, 同値類, 商集合
第8回	同値類続: 商集合, 同値類の例
第9回	順序関係: 半順序, 全順序, 順序集合
第10回	順序関係: ハッセ図, 順序イデアル, 束
第11回	写像の数え上げ1 - 第二種スターリング数等
第12回	写像の数え上げ1 - 第一種スターリング数等
第13回	練習問題の演習に行い, 講義の概念を復習
第14回	練習問題の演習に行い, 講義の概念を復習
第15回	期末テスト: 上記の内容に関する試験

◆ 成績評価方法 定期試験の成績とレポート等の提出物により評価する。

◆ 教科書 特に指定しない。

◆ 参考書 離散数学—コンピュータサイエンスの基礎数学 (マグロウヒル大学演習) オーム社 (1995/03)

小池 和彦

◆ 授業の到達目標及びテーマ

環や体などの代数系の基礎概念を、整数の作る環、(体上の)多項式、有限体等を例にとりながら学ぶ。現代の代数の概念がどのように育ってきたかを初等整数論、多項式環等の身近な例を通して講義する。初等整数論の話題に馴染むこと、環および体の基本的性質およびそれらの典型的な例について理解することを目標とする。講義の到達目標としては、具体的な整数の(連立)合同式の解が求められること、与えられた二つの多項式の最大公約式が求められることを目標とする。

◆ 講義の概要

まず、整数環において、剰余、最大公約数、最小公倍数、素数、因数分解の一意性、ユークリッド互除法について学び、整数の合同を定義したのち、中国剰余定理を示す。(可換)環の定義とイデアルの定義を述べた後で今までやってきたことをこの定義のもとで見直す。さらに応用として公開鍵暗号の原理を述べる。ブール代数等、環の例を幾つか与えた後、体の定義と実例(有限体)を与える。さらに体上の多項式間においてもユークリッド互除法が成立することを述べ、単項イデアル環、ユークリッド環の定義を与え、有限アーベル群の基本定理について言及する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	導入:代数の歴史と概説
第2回	整数の整除, ユークリッド互除法:約数, 素数, 公約数, 公倍数, 最大公約数の求め方
第3回	合同式, 連立合同式の解法:合同式, 連立合同式の解法
第4回	合同式, 連立合同式の解法続:合同式, 連立合同式の解法の例
第5回	オイラーの定理:オイラーの定理, 整数べきの合同式の計算
第6回	中国剰余定理:中国剰余定理とその意味
第7回	中国剰余定理の応用:整数べきの合同式の計算
第8回	RSA暗号への応用:公開鍵暗号, RSA暗号の仕組み
第9回	基本的な代数系の定義:群, 環, 体の定義と実例
第10回	環, 代数の例:ブール代数, 四元数環, 行列環, 多項式環等
第11回	多項式の整除:約多項式, 素元, 公約多項式, 公倍多項式
第12回	多項式に関するユークリッド互除法:最大公約多項式の計算
第13回	イデアルと商環:イデアル, 商環の定義, 中国剰余定理の意味
第14回	単因子論:ユークリッド環の定義, ユークリッド互除法の意味
第15回	期末テスト:上記の内容に関する試験

◆ 成績評価方法 定期試験の成績とレポート等の提出物により評価する。

◆ 教科書

特に指定しない。

◆ 参考書

「代数と数論の基礎」 共立出版 中島 匠一著 (共立講座 21世紀の数学9)

高村 正志

◆ 授業の到達目標及びテーマ

講義科目「数理解代数I」の内容を自ら手を動かして計算することにより、その理解を深めることを目標とする。

◆ 講義の概要

毎回問題を配布する。受講生数が少数の場合には、受講生があらかじめ問題を解き、受講生が板書で他の受講者に解説する形で授業を進める。受講生数が多数の場合には、受講生が個々にその場で答案を作成し提出する形で授業を進める。受講生は「数理解代数I」の講義のノートを持参し、わからない問題については、友人と相談しながら、あるいは教員に質問し、講義科目「数理解代数I」の理解を深める。

講義の進行状況などにより内容を変更することがあるので注意すること。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	整数の整除に関する問題
第2回	整数の整除に関する問題続
第3回	ユークリッド互除法に関する問題
第4回	合同式, 連立合同式の解法に関する問題
第5回	合同式, 連立合同式の解法に関する問題続
第6回	オイラーの定理の応用に関する問題
第7回	中国剰余定理の応用に関する問題
第8回	中国剰余定理の応用に関する問題続
第9回	基本的な代数系に関する問題
第10回	基本的な代数系に関する問題続
第11回	多項式環に関する問題
第12回	多項式環に関する問題続
第13回	環のイデアルに関する問題
第14回	環のイデアルに関する問題続
第15回	演習内容に関する質疑応答

◆ 成績評価方法 毎回の発表、提出物の成果を積算して評価する。また学期末の試験は行わない。当該科目の授業時間内に不正行為(友人による代理提出等)が認められた場合には、それがいかなる種類のものであっても当該科目は合格としない。

◆ 教科書 講義科目「数理解代数I」の各自のノート

◆ 履修前の準備 講義科目「数理解代数I」の復習。

◆ その他 【履修登録の条件等】

講義科目「数理解代数I」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。

増永 良文

◆ 授業の到達目標及びテーマ

現代社会はウェブ社会と称してもおかしくない。今後のウェブ社会を支える新しい学問分野がソーシャルコンピューティングである。現在、これがソーシャルコンピューティングであるという確たる知識体系が確立されているわけではないが、それはコンピューティングのプロセスに人や社会が集合知創成の観点から関わる新しいコンピューティングパラダイムを創出すると考えられている。本講義ではそのエッセンスをできるだけ体系だてて論じる。

◆ 講義の概要

まず、ソーシャルコンピューティングとは何かを論じる。それは、従来のコンピューティングを包摂する新しい学問分野であることを知る。続いて、その基礎となる、集合知、ウェブの仕組み、ウェブアプリケーション、ウェブサービスを概観した後、ソーシャルサーチ、ソーシャルメディア、ソーシャルネットワーク、wikiと開放型協調を論じ、データマイニング、ウェブマイニングを講義して、その体系を理解する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	受講ガイダンス
第2回	ソーシャルコンピューティング
第3回	集合知
第4回	ウェブ
第5回	ウェブ2.0
第6回	ウェブアプリケーション
第7回	ウェブサービス
第8回	ソーシャルサーチ
第9回	ソーシャルメディア
第10回	ソーシャルネットワーク
第11回	Wikiと開放型協調
第12回	データマイニング
第13回	ウェブマイニング
第14回	まとめ
第15回	期末試験

◆ 成績評価方法 (ミニ)レポートの提出状況と内容、および期末試験の成績を総合的に判断して評価する。

◆ 教科書 特に指定しない

◆ 履修前の準備 1年次前期必修科目「情報科学入門」で教科書指定した増永良文:コンピュータサイエンス入門—コンピュータ・ウェブ・社会—, サイエンス社の第13章ウェブ, 第14章ウェブと社会, を読んでおくこと。

八巻 直一

◆ 授業の到達目標及びテーマ

テーマは情報セキュリティとする。

到達目標は、情報セキュリティに関する基礎的知識を身につけることである。

◆ 講義の概要

ここでは、情報セキュリティに関する技術的内容よりも、いわゆるISMS(情報セキュリティマネジメント)を主とする。

ISMSはISO27001として国際規格が制定されており、自治体・企業・教育機関などで実施すべき情報セキュリティ活動を規定している。

本講義では、これらの活動の概要と実習を通じてISMSの基礎を学ぶ。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	オリエンテーション
第2回	コンピュータと情報技術の歴史
第3回	情報セキュリティ問題
第4回	ネットワーク社会と情報セキュリティ
第5回	暗号技術基礎(戦争と暗号の歴史)
第6回	暗号技術基礎(公開鍵暗号)
第7回	情報セキュリティマネジメント(ISMS)
第8回	ISO27001のあらまし
第9回	組織のマネジメントとISMS
第10回	リスクアセスメントの実際
第11回	脆弱性への対応
第12回	情報基盤設計とセキュリティ
第13回	BCP
第14回	クラウドコンピューティング
第15回	情報セキュリティと社会

◆ 成績評価方法 毎回レポートを課し、それらの評価を加算して総合で評価とする。

◆ 教科書 必要に応じて配布する。

◆ 参考書 必要に応じて紹介する。

◆ 履修前の準備 特になし。

伊藤 一成

◆ 授業の到達目標及びテーマ

テーマ「オブジェクト指向とは」

本授業ではクラス、インスタンス、カプセル化、インタフェース、多相性、継承など、オブジェクト指向の基本概念を習得することを目標とする。

◆ 講義の概要

オブジェクト指向分析・設計に基づいたオブジェクト指向開発におけるプログラミング技法に必要となる基本概念について総合的に学習する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1.	ガイダンス
2.	クラスとインスタンス1
3.	クラスとインスタンス2
4.	クラスとインスタンス3
5.	クラス変数とクラスメソッド1
6.	クラス変数とクラスメソッド2
7.	パッケージ
8.	継承1
9.	継承2
10.	多相性1
11.	多相性2
12.	抽象クラス
13.	インタフェース
14.	まとめ
15.	期末試験

◆ 成績評価方法 課題50%、定期試験50%の成績を総計して評価とする。

◆ 教科書 明解Java入門編 柴田望洋 ISBN 978-4-7973-3953-6

◆ その他 『プログラミング基礎』の内容を前提とする。

【履修登録の条件等】

『「オブジェクト指向プログラミング」を履修登録することにより、
「プログラミング応用実習」も自動的に履修登録されます』

伊藤 一成

◆ 授業の到達目標及びテーマ

テーマ「オブジェクト指向開発技法」

オブジェクト指向プログラミングの基本概念および分析、設計技法を前提とした上で、オブジェクト指向モデリングの事実上の世界標準言語である UML とオブジェクト指向プログラミング言語 Java 言語を用い、統合開発環境による実際の開発プロセスを体得することが目標である。

◆ 講義の概要

オブジェクト指向の考えに基づくソフトウェアデザインについて、プログラミング言語のデザインおよびプログラム構造のモデル化という観点から実習形式で学習する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1.	ガイダンス, Java復習
2.	クラスとインスタンス1
3.	クラスとインスタンス2
4.	クラスとインスタンス3
5.	クラス変数とクラスメソッド1
6.	クラス変数とクラスメソッド2
7.	パッケージ
8.	継承1
9.	継承2
10.	多相性1
11.	多相性2
12.	抽象クラス
13.	インタフェース
14.	総合実習1
15.	総合実習2

◆ 成績評価方法 授業毎のミニテスト(20%)および、課題(80%)の成績を総計して評価とする。

◆ 教科書 明解Java入門編 柴田望洋 ISBN 978-4-7973-3953-6

◆ その他 『プログラミング基礎』の内容を前提とする。

【履修登録の条件等】

「プログラミング応用実習」を履修登録することにより、「オブジェクト指向プログラミング」も自動的に履修登録されます。

伊藤 一成

◆ 授業の到達目標及びテーマ

テーマ「マルチメディアデータの高度な活用」

現在インターネット上に画像、音声、動画などが電子化されたデジタルメディアとして散在しており、様々な形で利用可能になっている。これらのデジタルメディアのもつ特性・データ構造・処理方式などについて総合的に学習する。さらにオープンソースソフトウェアを用いた実習を通じて、マルチメディアプログラミングに関する理解を深めるとともに新しいメディアの活用形態を自ら創作できる能力を身につけることが目標である。

◆ 講義の概要

アニメーション、コンピュータビジョン、音声合成、音声認識、映像編集システムに関する知識とそのプログラミングについて学ぶ。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1.	概論
2.	アニメーション
3.	Scratch 入門
4.	Scratchを用いたアニメーション生成技法
5.	メディア表現のためのさまざまなXMLスキーマ
6.	SVG(Scalable Vector Graphics) 入門
7.	Inkscapeを用いたベクタグラフィックス作成技法
8.	XML処理系によるメディアコンテンツ生成技法
9.	信号処理
10.	PureData 入門
11.	PureDataを用いた音声信号処理
12.	コンピュータグラフィックス
13.	Processing 入門
14.	Processing を用いた映像生成技法
15.	まとめ

◆ 成績評価方法 課題(4回)の成績を総計して評価とする。

◆ 教科書 なし。授業資料は電子媒体で提供する。

◆ 参考書 授業資料の中で適宜指定する。

◆ 履修前の準備 プログラミング専門科目の履修を前提としません。

宮川 裕之

◆ 授業の到達目標及びテーマ

この授業では情報システムの開発に関する知識・手法を事例に適用することができるようになること、情報システム分析・設計手法を事例に適用することができるようになることを目標とする。

◆ 講義の概要

「システム分析・設計基礎」および「システム分析・設計基礎演習」で学んだプロセス中心モデル(DFD)とデータ中心モデル(ERD)の知識・手法を理解していることを前提とし、そこで扱わなかったシステム分析・設計に関する知識・手法を中心に学習する。

さらに、それらのシステム分析・設計に関する知識・手法を情報システムの分析・設計に関する事例問題に適用する力を養う。講義と演習を交えて授業を進める。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1.	オリエンテーション, 情報システムの概念, システムライフサイクルと開発プロセス
2.	企業活動を支える情報システム, 情報システム開発の実際－事例を中心として
3.	モデリング手法の復習
4.	オブジェクト指向とシステム分析
5.	システムの評価手法
6.	システム分析のプロセスとアクティビティ
7.	問題解決のステップ
8.	システム分析の一般プロセスとアクティビティ
9.	評価と意思決定
10.	要件定義書の作成
11.	システム分析からシステム開発プロジェクトへのつながり
12.	総合演習(1)
13.	総合演習(2)
14.	総合演習(3)
15.	まとめ

◆ 成績評価方法 授業中の課題(40%)と期末のレポート課題(60%)によって評価する。

◆ 教科書 石井信明, 宮川裕之:プロフェッショナルを目指すシステム分析入門－情報システムの企画・計画のプロセスと分析手法, コロナ社(2009)

◆ 参考書

- ・神沼靖子, 丹羽時彦:問題形成と問題解決(IS テキストシリーズ01), 共立出版(2005)
- ・神沼靖子:情報システム演習Ⅱ(IS テキストシリーズ05), 共立出版(2005)
- ・浦昭二, 細野公男, 神沼靖子, 宮川裕之, 山口高平, 石井信明, 飯島正共編著:情報システム学へのいざない改訂版, 培風館(2008)
- ・情報システムと情報技術編集委員会編:情報システムの実際1(官公庁・公共サービスシステム), 培風館(2003)
- ・情報システムと情報技術編集委員会編:情報システムの実際2(商業・小売業・病院等のシステム), 培風館(2003)
- ・情報システムと情報技術編集委員会編:情報システムの実際3(製造・建設・サービス等のシステム), 培風館(2003)
- ・情報システムと情報技術編集委員会編:情報システムの実際4(経理実務・開発管理・研究支援システム), 培風館(2003)
- ・ピーター・チェックランド, シム・スクールズ著, 妹尾堅一郎監訳:ソフトシステムズ方法論, 有斐閣(1994)

増永 良文

◆ 授業の到達目標及びテーマ

データベースは組織体のかけがえのない共有資源であるが、そのデータベースを管理して間違いのないデータをユーザやアプリケーションプログラムに効率よく提供することを可能とするデータベース管理システム(Database Management System, DBMS)とは何かを理解することを目標およびテーマとする。

◆ 講義の概要

データベース管理システム(DBMS)について、標準アーキテクチャ、メタデータ管理、質問処理の最適化、トランザクションとは何か、障害時回復、同時実行、非ビジネスデータの効率のよい管理運用を可能とするオブジェクト指向DBMSなどの項目について講義する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	受講ガイダンス
第2回	データベース管理システム(DBMS)の標準アーキテクチャ
第3回	DBMSの3層スキーマ構造
第4回	内部スキーマ(1)
第5回	内部スキーマ(2)
第6回	メタデータ管理
第7回	質問処理とは
第8回	質問処理の最適化
第9回	トランザクションとは何か
第10回	障害時回復
第11回	同時実行制御法(1)
第12回	同時実行制御法(2)
第13回	オブジェクト指向DBMS
第14回	まとめ
第15回	期末試験

◆ 成績評価方法 (ミニ)レポートの提出状況と内容、および期末試験の成績を総合的に判断して評価する。

◆ 教科書 増永良文著:リレーショナルデータベース入門[新訂版],サイエンス社,2003年1月.

◆ 参考書 増永良文:データベース入門,Computer Science Library第14巻,サイエンス社,2006年10月.

◆ 履修前の準備 2年次後期科目「データベース基礎」では上記教科書の第1章から第5章を講義したが、本講義はそこで学習したリレーショナルデータベースの知識が前提になって、引き続き第6章から12章を講義する。したがって、本講義を受講する前に、データベース基礎を復習しておくこと。

◆ その他 2年次後期科目「データベース基礎」を履修済みであることを強く勧める。一方、データベース基礎を受講した学生には本講義を受講することを強く勧める。二つ合わせて受講することにより、データベースシステムとは何かの全貌をつかめることになる。

宮治 裕

◆ 授業の到達目標及びテーマ

これまで学習したネットワークの知識を実際に適用し、小規模なネットワーク構築を体験する。これにより、知識の深い定着をめざす。

◆ 講義の概要

「コンピュータネットワーク基礎」等で学習した知識を基に、実際に小規模なネットワークを設計し、構築する実習を行う。最初はクライアント側の設定から入り、サーバ設定、サービス設定やネットワーク機器の設定へとステップアップすることによって、ネットワークに関する総合的な感覚を養う。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1	ガイダンス クライアント設定に必要な事項の確認
2	Windows PCのネットワーク設定および実習
3	Linuxのネットワーク設定とコマンドの利用
4	インターネットの仕組みと設定(1)
5	インターネットの仕組みと設定(2)
6	IPアドレッシング(VLSM)
7	イーサネットの仕組み 各種コマンド実習
8	ルータの仕組みと基本設定
9	ルータを1台用いたエンドツーエンド通信 実習
10	ルーティングプロトコルと設定実習
11	ルータを2台用いたエンドツーエンド通信 実習
12	トラブルシューティング方法
13	遠隔操作, 設定手法
14	まとめ
15	期末試験

◆ 成績評価方法 定期試験(1回, 70%), 実習平常点(30%)

◆ 教科書 適宜資料を配布する

◆ その他 コンピュータネットワーク基礎を履修済み程度の知識を前提とする。

稲積 宏誠

◆ 授業の到達目標及びテーマ

統計学や人工知能分野の機械学習などを理論的基礎に置き、大量データからの知識発見技術であるデータマイニングの考え方、主要な手法を学び、分野にとらわれずに実問題への展開力を養うこと。

◆ 講義の概要

社会に氾濫する大量データから、有用な知識を発見するための取組を総称してデータマイニングと呼ぶ。これは、統計学や人工知能等の量的、質的なデータ解析技術を、大量データに適用することによって実現される。本講義では、その中心的な取組である「頻出パターン抽出」「クラス分類」「クラスタリング」の基本的な手法を学ぶ。また、人文社会分野への適用を意識して、その周辺領域についての展開も試みる。

また、本講義では、理論的な理解に加えて、R言語などの各種ツールを使用した演習も併せて行う。

さらに、日本語文書を対象としたテキストマイニングについても、その基本的な取組について学ぶ。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
ガイダンス	本講義で取り扱う内容を概観する。
アソシエーションルール1	大量データから同時性や関係性の強い事象の組み合わせを抽出する方法を学ぶ。
アソシエーションルール2	マーケットバスケット分などへの応用、ルールの有効性の判定方法などを学ぶ。
クラス分類1	分類問題の位置づけを理解する。
クラス分類2	大量データを用いたクラス分類方法として決定木、回帰木の手法を学ぶ。
クラス分類3	決定木、回帰木の代表的な手法として、ID3,C4.5,CARTなどの考え方を学ぶ。
クラスタリング1	大量データに対して、その類似度に基づいて分割する手法について学ぶ。
クラスタリング2	階層的クラスタリング、K-Means法、K-Medoid法など、クラスタリングについてのさまざまな考え方と具体的な手法を学ぶ。
事例演習1	R言語や他のツールを用いての演習を行う。
事例演習2	R言語や他のツールを用いての演習を行う。
テキストマイニング1	日本語文章をのものを対象として、そこから有効な情報を抽出する方法を学ぶ。
テキストマイニング2	自然言語処理の考え方を学び、それに基づく分析の仕方について学ぶ。
テキストマイニング3	R言語や他のツールを持ち手、実際に日本語文章をどのように分析するかについて学ぶ。
総合演習1	
総合演習2	

◆ 成績評価方法 演習時に出される課題(30%)と試験(70%)により評価する。

◆ 教科書 特に用いない。

◆ 参考書 適宜紹介する。

宮川 裕之

◆ 授業の到達目標及びテーマ

この授業では、iPhoneのアプリケーションソフトウェアを作成できるようになることを目指す。

◆ 講義の概要

この授業は、iPhoneアプリケーションソフトを初めて作る人を対象にする。

授業は、講義と実習を交えて集中講義形式で行う(集中講義の期間は後期授業開始前を予定している)。

使用するプログラミング言語は、iPhoneアプリ作成で用いられているObjective-C2.0。

このプログラミング言語は、社会情報学部の他の授業では扱っていないため、この授業において、基本的な言語仕様を解説し、実習を交えて学習する。言語仕様を理解したら、実際にiPhoneアプリケーションの作成実習を行い、最後に制作したアプリケーションソフトの発表会を授業の中で行う。

なお、この授業は前期科目「オブジェクト指向プログラミング」の内容を理解していることを前提として進める。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	オリエンテーション, Macの基本的な使い方, Xcode, Interface Builderの使い方
第2回	簡単なiPhoneアプリケーションソフトの作成
第3回	Objective-C2.0の基本仕様(1)
第4回	Objective-C2.0の基本仕様(2)
第5回	Objective-C2.0を使ったプログラミング実習(1)
第6回	Objective-C2.0を使ったプログラミング実習(2)
第7回	オブジェクト指向およびイベントドリブン形式のプログラミング(1)
第8回	オブジェクト指向およびイベントドリブン形式のプログラミング(2)
第9回	オブジェクト指向およびイベントドリブン形式のプログラミングの実習
第10回	総合演習(1)
第11回	総合演習(2)
第12回	総合演習(3)
第13回	総合演習(4)
第14回	発表会
第15回	まとめ

◆ 成績評価方法 制作したiPhoneアプリケーションソフトウェアを発表会において審査して評価する。

◆ 教科書 無し。
授業中に資料を配付する。

◆ 参考書 無し

◆ 履修前の準備 この授業は前期科目「オブジェクト指向プログラミング」の内容を理解していることを前提として進める。

栗原 浩之

◆ 授業の到達目標及びテーマ

社会へ出て必要な知的財産権についての最低限の知識を身につけ、社会生活に知的財産権がどのように関与しているかを学び、また、新聞、テレビなどの知的財産権に関するニュースに興味を持ち、その内容の概略が把握できるようになることを授業の到達目標とする。

◆ 講義の概要

知的財産権の概要をトピックスと関連付けながら学ぶ。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	オリエンテーション(講義の目的、内容、進め方、参考図書の紹介)
第2回	知的財産権の全体像、プロパテント
第3回	特許法概論1
第4回	特許法概論2
第5回	外国特許出願
第6回	ソフトウェア関連特許
第7回	ビジネス関連特許
第8回	職務発明
第9回	特許権と意匠、商標、著作権との関係
第10回	商標法概論
第11回	意匠法概論
第12回	著作権法概論
第13回	デジタルコンテンツの保護
第14回	知的財産権全体のまとめ、質疑応答
第15回	試験

◆ 成績評価方法 試験結果を中心に評価する。

長橋 透

◆ 授業の到達目標及びテーマ

「経済学入門Ⅱ」(ミクロ経済学)に則した、ミクロ経済政策と所得再分配政策についての理解を深める。

◆ 講義の概要

経済政策の目的には、「効率的な資源配分」「経済の安定化」そして「公平な所得配分」があります。経済政策Ⅱでは、「効率的な資源配分」を中心に講義を進めますが、「公平な所得配分」についても触れる予定です。

完全競争市場ならば市場メカニズムに任せておけば効率的な資源配分が達成されるはずですが、現実には市場が完全ではないためにいわゆる市場の失敗が起こり効率的な資源配分は達成されません。そのような場合、政府は課税・補助金政策、規制政策、公共財供給、環境政策などによって効率的な資源配分を達成しようとします。これらの政策について、余剰分析の知識を使いながら、丁寧に講義していきます。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	経済学と経済政策の基礎理論Ⅰ
第2回	経済学と経済政策の基礎理論Ⅱ
第3回	市場への政府介入Ⅰ
第4回	市場への政府介入Ⅱ
第5回	市場への政府介入Ⅲ
第6回	公益事業と競争政策Ⅰ
第7回	公益事業と競争政策Ⅱ
第8回	公益事業と競争政策Ⅲ
第9回	外部性と公共財Ⅰ
第10回	外部性と公共財Ⅱ
第11回	外部性と公共財Ⅲ
第12回	情報の経済学と経済政策
第13回	所得再分配政策Ⅰ
第14回	所得再分配政策Ⅱ
第15回	定期試験

◆ 成績評価方法 定期試験の成績による。

◆ 教科書 岩田規久男・飯田泰之『ゼミナール 経済政策入門』日本経済新聞社 2006

◆ 参考書 井堀利宏『経済政策』新世社 2003

八田達夫『ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ』東洋経済 2008・2009

◆ 履修前の準備 「経済学入門Ⅱ」の復習をしておくことを勧めます。

福田 亘孝

◆ 授業の到達目標及びテーマ

社会調査を実際に行い、調査の実施手順と分析方法を理解することを目標とする。

◆ 講義の概要

社会調査は、マーケティングや世論調査で使われる手法です。この授業では受講者がグループに分かれ、社会調査の企画と実査を行い、調査結果を発表してもらいます。調査の実査では大学生を対象にフィールド・ワークを行います。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	調査テーマと調査デザインの設定
第2回	調査企画のプレゼンテーション
第3回	調査票の作成・印刷
第4回	依頼状の作成・印刷
第5回	調査対象の選定と実査予定の設定
第6回	調査票のプレゼンテーション
第7回	フィールド・ワーク
第8回	回収票のチェックとコーディング
第9回	調査票のデータ入力
第10回	調査データのクリーニング
第11回	データの集計・分析(1)
第12回	データの集計・分析(2)
第13回	調査結果のプレゼンテーション(1)
第14回	調査結果のプレゼンテーション(2)
第15回	定期試験

◆ 成績評価方法 授業への貢献度、レポート、プレゼンテーション、学期末試験、等を総合的に評価する。

◆ 教科書 ★盛山和夫(2004)『社会調査法入門』有斐閣

★森岡清志(2006)『ガイドブック社会調査[第2版]』日本評論社

★西平重喜(1985)『統計調査法』培風館

◆ 参考書 担当教員が講義で随時、指示する。

◆ 履修前の準備 ★授業には十分な予習をして出席し、講義中はマナーを守ること。

★授業の復習は必ず行うこと。

◆ その他 ★授業計画はあくまで予定であり、実際の講義の進行とは異なる場合があることに注意すること。

★授業の内容については担当教員が説明する。

★受講者は「社会調査I」を履修していることが望ましい。

★受講者は「社会統計」あるいは「データ分析」を履修していることが望ましい。

★受講者は「社会統計演習」あるいは「データ分析演習」を履修していることが望ましい。

南部 和香

◆ 授業の到達目標及びテーマ

さまざまな経済現象や社会現象について、データを用いて分析していくのが計量経済学であり、理論と現実とを結ぶ橋渡しの役割を担っています。この授業では、計量経済学の基礎的な知識を習得してもらうのはもちろんですが、併せて実習を行うことで、自ら経済理論と現実経済との関係を分析していくことを目標としています。

◆ 講義の概要

経済分析ソフト(Excel、EViews)を用い、消費者行動や生産者行動などの経済・社会問題に関する実証分析を学んでいきます。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1 オリエンテーション	計量経済学とは
2 データの取得・加工	Excelで入力、インターネットからダウンロード
3 データの性質(1)	平均、分散、標準偏差
4 データの性質(2)	散布図、相関係数
5 回帰分析(1)	単回帰分析
6 仮説検定	検定
7回帰分析(2)	重回帰分析
8 回帰分析(3)	多重共線性
9回帰分析(4)	ダミー変数、構造変化
10 回帰分析(5)	不均一分散
11 回帰分析(6)	系列相関
12 回帰分析(7)	パネル分析
13 消費者行動分析	消費需要関数の推定、物価指数
14 生産者行動分析	生産関数の推定
15 期末試験	

◆ 成績評価方法 平常点、授業での課題、レポート、期末試験を総合的に評価します。

◆ 教科書 テキストは指定しません。講義資料を配布します。

◆ 参考書 蓑谷千風彦(2003)『計量経済学』多賀出版

滝川 好夫・前田 洋樹(2006)『EViewsで計量経済学入門』日本評論社

◆ 履修前の準備 EXCELの基礎知識(計算式の入力、作表、作図等)とインターネットの基礎知識(データ検索等)があることが望ましい。

◆ その他 授業計画は上記を予定しているが、変更されることがありうる。

開澤 栄相

◆ 授業の到達目標及びテーマ

国際ファイナンスは経済学の応用分野であり、ミクロ経済学、マクロ経済学、金融論、証券投資論、計量経済学などの知識や理論の上に構築されている。講義教室での授業を通じて、国際金融の歴史、理論、制度についての基礎知識を修得し、パソコン教室での実習を通じて、現実のデータ(5~10銘柄の株価データ)を用いた最適ポートフォリオの構築を行なう。

◆ 講義の概要

1. 講義は、四つの大きなパートからなる。一つ目は国際金融資本市場の統計的把握、二つ目は証券投資理論の理解、三つ目は外国為替理論の理解、四つ目は最適ポートフォリオの構築、である。
2. 前半では、主要理論の数学的解説を行なう。
3. 後半では、資本市場と外国為替市場の具体的な条件を前提にして、最適ポートフォリオと最適ヘッジ比率の算出までをEXCELを用いて行なう。
4. 最後に、過去と近年における国際ファイナンスのトピックスを解説する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	国際資金循環
第2回	最近の国際金融市場の動向(サブプライム・ローン問題からギリシャ問題まで)
第3回	経常収支と資本収支
第4回	国際通貨制度
第5回	為替リスク・為替ヘッジ
第6回	資産のリターン・リスク
第7回	効用関数・無差別曲線
第8回	有効フロンティア
第9回	外貨建てリターンの特性
第10回	為替ヘッジ比率
第11回	最適ポートフォリオの算出
第12回	デリバティブ、ブラック・ショールズ・モデル
第13回	国際パリティ関係
第14回	国際的M&A
第15回	国際金融危機の諸相

◆ 成績評価方法 ①課題(40%)、②試験(60%)の成績により評価する。但し、課題・試験とも授業出席が前提である。

◆ 教科書 教科書は用いず、教員が作成した講義資料を用いる。

◆ 参考書 小林・芹田『新証券投資論Ⅰ』日本経済新聞社 2009年
伊藤・荻島・諏訪部『新証券投資論Ⅱ』日本経済新聞社 2009年
高森寛『現代ファイナンスの基礎理論』東洋経済新報社 2002年
その他、講義中に指示する。

◆ その他 確率・統計、微分、行列の基礎を習得していること。
授業計画は、進捗度や理解度などにより、変更されることもありうる。

岩井 千尋

◆ 授業の到達目標及びテーマ

証券市場に関する ①制度、②理論、③現在、過去の出来事に関する知識の修得。
初歩的な「正しい証券投資」ができる知識の習得。

◆ 講義の概要

「証券」は、金融論の一部を構成するが、証券投資には「値段が変化する＝リスクがある」という意味で難しく、独立した科目になっている。

証券投資にはこのリスクがあるがゆえに、リターンは一般に大きくなる。日本が金持ちになり金融資産が増えたいま、年金運用、企業の余資運用、家計などにとって証券投資に関する知識はとても重要である。

証券市場を知ることは証券投資を知ることであり、投資家の興味は証券の価格がいかんして形成されるかということにほかならない。

当然のことながら、証券投資は、経済学や経営学、数学、統計論などの応用科目であり、しかも細々とした規則などが複雑に絡む。そして、積み重ね的な知識が積み重ならなると、上位のことがわからなくなる。

証券市場Ⅱは、証券市場Ⅰの知識があることを前提に講義を展開する。

なお、証券投資は1950年代にリスク(リターン＝収益の不確実性)の計量化が行われるようになって、それ以降の理論的体系を”MPT＝Modern Portfolio Theory”と呼ぶが、証券市場Ⅱは主としてMPT以降を扱う。金融機関を目指す人はぜひ受けて欲しい。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	調達サイドからみた証券 1 資本コスト
第2回	調達サイドからみた証券 2 財務リスク、レバレッジ
第3回	調達サイドからみた証券 3 資本構成
第4回	リターン リスクの計数化 1
第5回	リターン リスクの計数化 2
第6回	パフォーマンス評価1：時間加重、時価加重
第7回	パフォーマンス評価2：リスク込みの評価
第8回	ポートフォリオ選択理論
第9回	投資家の効用関数
第10回	CAPM(資本資産評価モデル)
第11回	金融政策と証券市場
第12回	証券バブルと金融政策
第13回	市場効率性仮説
第14回	行動ファイナンス
第15回	予備

◆ 成績評価方法 出席、レポート、期末試験

◆ 教科書 プリントを配付

◆ 参考書 新・証券投資論I(理論編)小林 孝雄、芹田敏夫、日本証券アナリスト協会 ¥ 4,200

清水 康司

◆ 授業の到達目標及びテーマ

Financial Analysis and Security Trading & Project: : WEB上に構築された仮想金融市場を使って各自が証券投資を体験する。毎回異なる投資のシチュエーションが与えられるので、それに対し投資戦略を準備し、授業内でそれを実行する。これまでに学んできたファイナンスの理論、知識を実践することがこの授業の目的である。

◆ 講義の概要

この授業では、WEB上に構築された仮想金融市場を使って各自が証券投資を体験する。毎回異なる投資のシチュエーションが与えられるので、それに対し投資戦略を準備し、授業内でそれを実行する。これまでに学んできたファイナンスの理論、知識を実践することがこの授業の目的である。基本的なファイナンスの理論の検証をテーマとしてトレーディングを行う。また、これと平行して、現実の市場データを用いたファンド運用の研究プロジェクトを行う。最終日にはプロジェクト発表会を行い、その成果を報告する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第 1回	イントロダクション
第 2回	コンピュータトレーディング練習
第 3回	債券投資: <i>Trading Case B01</i>
第 4回	<i>Case B01</i> の解説
第 5回	債券投資: <i>Trading Case B02</i> と解説
第 6回	株式投資: <i>Index Fund</i> とプロジェクト説明
第 7回	VIDEO & プロジェクト説明
第 8回	債券投資: <i>Trading Case B03 & B04</i>
第 9回	<i>Case B03 & B04</i> の解説
第10回	株式投資プロジェクト: 中間報告会
第11回	情報の効率性: <i>Trading Case RE1</i>
第12回	<i>Case RE1</i> の解説他
第13回	プロジェクト最終報告会 (1)
第14回	プロジェクト最終報告会 (2)
第15回	総括

- ◆ 成績評価方法 各ケースの戦略提出 (20%)、各トレード(金融取引)の結果 (20%)、課題・プロジェクトの発表と報告書 (60%)
- ◆ 教科書 (予定) Bodie,Kane, Marcus, Investments, McGraw Hill Higher Education; 8th Revised edition (2008/9/30)
- ◆ 参考書 小林孝雄、芹田敏夫、日本証券アナリスト協会(編)、『新・証券投資論1』、日本経済新聞出版社 (2009/6/26)
藤林、矢野、角谷、袖山、『EXCELで学ぶファイナンス(2)証券投資分析』第3版、金融財政事情研究会 (2009/04)
- ◆ 履修前の準備 ファイナンス理論の基礎知識、毎回の予習および復習、プロジェクト
- ◆ その他 履修上の注意:就職活動等による欠席は特に考慮しないので履修段階で注意してください※システムおよびコンピュータの台数に制限がある。連絡方法について:学生間の公平性、メールの安全性確保のため、質問、連絡のやりとりは、大学より交付されている各学生の電子メールアドレスとの間のみに限定し、フリーメールや携帯メールの利用は原則認めない。

清水 康司

◆ 授業の到達目標及びテーマ

Options, Futures and Other Derivatives

◆ 講義の概要

In this course students will learn to evaluate contingent claims such as options, futures, swaps and other exotic securities. The course will also cover various aspects of using derivative securities for risk management purposes.

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
#01	<i>Course Guidance</i>
#02	<i>Introduction</i>
#03	<i>Mechanics of Futures Markets</i>
#04	<i>Hedging Strategies Using Futures</i>
#05	<i>Interest Rates</i>
#06	<i>Determination of Forward and Futures Prices</i>
#07	<i>Interest Rate Futures</i>
#08	<i>Swaps</i>
#09	<i>Mechanics of Options Markets</i>
#10	<i>Properties of Stock Options</i>
#11	<i>Trading Strategies Involving Options</i>
#12	<i>Binomial Trees</i>
#13	<i>The Black-Scholes-Merton Model</i>
#14	<i>Questions and Problems</i>
#15	<i>Review</i>

◆ 成績評価方法 Max [Assignments + 2/3 Exam , Exam]

◆ 教科書 John C. HULL , Options, Futures and Other Derivatives (7th Edition) , Pearson International Edition (2009)

◆ 参考書 John C. HULL , Fundamentals of Futures and Options Markets (7th Edition) , Prentice Hall (2010/2/25)

◆ 履修前の準備 Preparation, Review, and Homework

◆ その他 Lectures will be given in Japanese.

吹春 俊隆

◆ 授業の到達目標及びテーマ

不確実性は現代社会を特徴付ける重要なキーワードである。この概念は数学では確率論として基礎付けられているが、最近では経済学においてファイナンスの理論に応用されて著しい進歩をもたらした。この分野からノーベル経済学受賞者を出すまでになってきた。ところが、恐らく確率論とは「文系の学生」が最も苦手とする分野の一つであるように見受けられる。本講義では高校におけるような「うまい解き方の練習」は行わず、計算はすべてパソコンソフトMathematicaに行わせる。すなわち、学生諸君がMathematicaに習熟しながら不確実性の経済学を理解する事を目指す。

◆ 講義の概要

授業はすべてパソコンを設置した教室における実習形式である。初めに全くパソコン・ソフトMathematicaを使ったことのない人を想定して教員の指導の下に受講者にソフト使用の練習を施す。次回は各自が授業時間外で復習した成果をチェックする目的で授業の初めに20分～30分のテストを行う。その時間内に教員はパソコンで解答を示し、受講者も自らパソコンでチェックする。残りの時間で教員は次回向けに新しい内容をパソコンを用いて説明する。各受講者は授業時間内にパソコンで一度練習した後で授業時間外で復習する。その次の回は前回の内容について各自が授業時間外で復習した成果をチェックする目的で授業の初めに20分～30分のテストを行う。その時間内にパソコンで解答を示し、受講者も自らパソコンでチェックする。残りの時間で教員は次回向けに新しい内容をパソコンを用いて説明する。各受講者は授業時間内にパソコンで一度練習した後で授業時間外で復習する。このシステムを繰り返して学生諸君がMathematicaに習熟しながら不確実性の経済学を理解する事を目指す。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	Mathematicaの基本操作練習 I
第2回	Mathematicaの基本操作練習 II
第3回	重複順列:コンピュータによる計算
第4回	確率:コンピュータによる計算
第5回	さいころ投げと硬貨投げ:コンピュータによる計算
第6回	確率分布1:コンピュータによる計算
第7回	確率分布2:コンピュータによる計算
第8回	ポートフォリオの収益率、期待値:コンピュータによる計算
第9回	ポートフォリオの収益率、分散:コンピュータによる計算
第10回	ポートフォリオの収益率、共分散:コンピュータによる計算
第11回	ポートフォリオの基本定理:コンピュータによる計算
第12回	現実の収益率の度数分布:コンピュータによる計算
第13回	マーコウィッツのポートフォリオ理論、期待効用
第14回	二項定理とコンピュータによるオプション価格の計算
第15回	ポートフォリオのリスク最小化に向けて

◆ 成績評価方法 小テストの点数を累積して評価する。

◆ 教科書 吹春俊隆 『Mathematicaによる経済数学入門』 牧野書店 2002年

◆ 参考書 小林孝雄・芹田敏夫 『新・証券投資論 理論編』 日本経済新聞出版社

◆ 履修前の準備 毎回、作業内容をプリントアウトして配布するので、毎回、授業外で、そのプリントのプログラムをMathematicaで復習しておくこと。さらに、次の週の内容を教科書に沿って予習しておくこと。

吹春 俊隆

◆ 授業の到達目標及びテーマ

不確実性は現代社会を特徴付ける重要なキーワードである。この概念は数学では確率論として基礎付けられているが、最近では経済学においてファイナンスの理論に応用されて著しい進歩をもたらした。この分野からノーベル経済学受賞者を出すまでになってきた。更に、ファイナンスの理論でも微分・積分、行列の概念が用いられるが、不確実性は現代社会を特徴付ける重要なキーワードである。本講義では高校におけるような「うまい解き方の練習」は行わず、計算はすべてパソコンソフトMathematicalに行わせることにより「数学嫌い」の払拭を目指す。すなわち、学生諸君がMathematicalに習熟しながら不確実性の経済学を理解する事を目指す。

◆ 講義の概要

授業はすべてパソコンを設置した教室における実習形式である。初めに全くパソコン・ソフトMathematicaを使ったことのない人を想定して教員の指導の下に受講者にソフト使用の練習を施す。次回は各自が授業時間外で復習した成果をチェックする目的で授業の初めに20分～30分のテストを行う。その時間内に教員はパソコンで解答を示し、受講者も自らパソコンでチェックする。残りの時間で教員は次回向けに新しい内容をパソコンを用いて説明する。各受講者は授業時間内にパソコンで一度練習した後で授業時間外で復習する。その次の回は前回の内容について各自が授業時間外で復習した成果をチェックする目的で授業の初めに20分～30分のテストを行う。その時間内にパソコンで解答を示し、受講者も自らパソコンでチェックする。残りの時間で教員は次回向けに新しい内容をパソコンを用いて説明する。各受講者は授業時間内にパソコンで一度練習した後で授業時間外で復習する。このシステムを繰り返して学生諸君がMathematicalに習熟しながら不確実性の経済学を理解する事を目指す。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	Mathematicaの基本動作練習
第2回	最適ポートフォリオ分散の最小化:コンピュータによる計算
第3回	数列と収束－高校数学の復習:コンピュータによる計算
第4回	複利(離散型)－1年複利、半年複利、1月複利:コンピュータによる計算
第5回	ネピアの数と連続複利:コンピュータによる計算
第6回	先物市場とアービトラージュ(裁定):コンピュータによる計算
第7回	フォワード価格:コンピュータによる計算
第8回	微係数と導関数:コンピュータによる計算
第9回	流通市場の債券価格と利回り－基本方程式:コンピュータによる計算
第10回	「公社債店頭売買参考統計値」:コンピュータによる計算
第11回	デュレーションと微係数:コンピュータによる計算
第12回	コンベクシティとテラー展開:コンピュータによる計算
第13回	積分と正規分布:コンピュータによる計算
第14回	将来株価の予想－幾何ブラウン運動:コンピュータによる計算
第15回	資本資産評価モデル－線形計画法:コンピュータによる計算

◆ 成績評価方法 小テストの点数を累積して評価する。

◆ 教科書 吹春俊隆『Mathematicalによる経済数学入門』牧野書店 2002年

◆ 参考書 小林孝雄・芹田敏夫『新・証券投資論 理論編』日本経済新聞出版社

◆ 履修前の準備 毎回、作業内容をプリントアウトして配布するので、毎回、授業外で、そのプリントのプログラムをMathematicaで復習しておくこと。さらに、次の週の内容を教科書に沿って予習しておくこと。

◆ その他 経済解析Ⅰも並行して履修することが望ましい。

内村 勉

◆ 授業の到達目標及びテーマ

経済学上の概念としての「市場」が、具体的企業活動においてどのように企業経営上の課題として認識され、経営の意志決定により創成・設定され、競争を繰り広げているかについて、企業にとり最大の経営資源である「人」を獲得する「労働市場（新卒・中途採用）」の現状と、企業の採用行動の背景にある思考（ニーズ）を認識すること、また、講師の携わった経営の具体的事例を通じて、企業が自己資源と外部与件である「市場」を活用して経営の意思決定を行っていることについて基礎的に理解する。

◆ 講義の概要

労働、放送通信業、アパレル業、ブランド消費財の事例を通じ、「市場」の変遷に応じた企業経営課題認識および対応の実例を学ぶ。

(1)労働市場

新卒、転職市場の現状を把握し、企業と求職者の市場行動を検討する。
また広告代理業・有料職業紹介企業・再就職支援企業・新卒採用コンサルティング等各企業およびハローワークがどのような役割を果たしているかを概観する。

(2)放送通信業

日本とアメリカのCATVの発達過程の相違と、ブロードバンドの普及の下での放送と通信の融合の進行の過程での対応事例を学ぶ。

(3)アパレル業

明治以来の日本の革靴市場と革靴製造企業の歴史を概観し、グローバル経済での課題への具体的対応事例を学ぶ。

(4)グローバルブランド消費財

世界商品であり、ブランド商品であるたばこをめぐる国際的な動きが、国内専業メーカーであったJTにどのような意思決定を求め、具体的にどのように対応してきたのかを実例により学ぶ。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	オリエンテーション(講義の目的・内容・進め方)
第2回	労働市場の構造概論
第3回	新卒市場(1)
第4回	新卒市場(2)
第5回	新卒市場(3)
第6回	中途採用市場(1)
第7回	中途採用市場(2)
第8回	中途採用市場(3)
第9回	労働市場総括
第10回	事例研究(1)放送通信業:CATV
第11回	事例研究(2)アパレル業:革靴
第12回	事例研究(3)ブランド消費財:たばこ原料・製造
第13回	事例研究(4)ブランド消費財:たばこブランドマーケティング
第14回	事例研究(5)ブランド消費財:たばこ価格
第15回	総括

◆ 成績評価方法 レポート1回

期末に提出。課題は講義中に明示する。

◆ その他

以下の基礎知識があることが望ましいが、必須ではない。

- ・経済学
- ・経営学
- ・統計学
- ・労働基準法及び労働契約法

吹春 俊隆

◆ 授業の到達目標及びテーマ

ゲーム理論は企業や組織の行動を理解するためのツールとして近年様々な分野に応用されている。企業の意思決定は外部の競争環境、特に競合企業の戦略に大きく左右されるが、ゲーム理論は相互依存関係下の各プレイヤーの行動を体系的に考察するツールを提供する。本講義では、各人が相互依存的な環境下で「戦略的に考える力」を高めることを目的とし、理論と応用を反復しながら議論を進める。

◆ 講義の概要

まず、ゲーム理論の原型とみなされるクールノー寡占の説明よりスタートする。これより(同時)ナッシュ・ゲームの説明に入る。ここでは関税賦課ゲームや公共財構築ゲームなど簡単なミクロ経済学の内容を用いたナッシュ・ゲームや、マクロ経済学の必須項目であるIS分析を用いた非関税障壁ゲーム(ナッシュ・ゲーム)などを紹介する。ゲーム理論は経済学との関連は極めて深いがそれ以外に生物学や防衛問題でも用いられている。そこでゲーム論的発想は古代ギリシャに遡り現代にまで至っていることを同時ゲームのみならず簡単な展開ゲームや繰り返しゲームを用いて紹介し、各人が相互依存的な環境下で「戦略的に考える力」を高めることを目指す。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	ゲームとは:「ビューティフル・マインド」
第2回	企業行動とナッシュ・ゲーム I
第3回	企業行動とナッシュ・ゲーム II
第4回	余剰分析と関税賦課ゲーム I
第5回	余剰分析と関税賦課ゲーム II
第6回	公共財構築ゲーム I
第7回	公共財構築ゲーム II
第8回	IS分析と非関税障壁ゲーム I
第9回	IS分析と非関税障壁ゲーム II
第10回	同時ゲームと展開ゲーム I
第11回	同時ゲームと展開ゲーム II
第12回	繰り返しゲーム I
第13回	繰り返しゲーム II
第14回	まとめ
第15回	期末テスト

◆ 成績評価方法 出席状況と期末テストをもとに評価する。

◆ 教科書 吹春俊隆『コア・テキスト 経済学入門』新世社 2004年

◆ 参考書 吹春俊隆『安全保障とゲームの理論』(未刊、ただし関連する部分は配布の予定)
武隈慎一『ミクロ経済学(増補版)』新世社 2002年

◆ 履修前の準備 経済学入門 I・II の内容を復習しておくことが望ましい。

矢ヶ崎 隆二郎, 井上 裕夫, 岩井 克文, 関 仁, 深井 吉男

◆ 授業の到達目標及びテーマ

講師陣の実社会、海外勤務等の経験を通じて理論だけではない実務の世界を学生諸子に肌で感じてもらうことを目標とする。学生諸君には理論の先には必ず実践があり、実務の裏には必ず理論と人間の心理・感情があることを実感してもらいたい。各講師の様々なジャンルの実務経験を吸収することにより、将来職業を選択する際の判断の一助となればと思うのも目標の一つ。

各講師の業務背景…井上：写真、フィルム業界、深井：自動車業界、矢ヶ崎：金融業界、岩井：金融・医薬品業界、関：航空業界

◆ 講義の概要

井上担当(第1～3回)：海外駐在といってもその内容は駐在地域、業種、担当タスクによって様々であり、100人いれば100種の違ったものがある。従って一般にはどのような仕事をするのか掴みようがない。自分自身の経験をもとに会社レベル、個人業務レベル、個人の人生設計レベル、家族レベルでの長所短所をお伝えする。

深井担当(第4～6回)：主に自動車を題材としてグローバルにビジネスを展開する場合の基本的考え方、KFS(Key Factor for Success)、これからの展望につき説明する。いずれも実務経験から得られた教訓、あるいは失敗談をベースとしており、近い将来学生諸君が広く世界で活躍するための一助としてほしい。

矢ヶ崎担当(第7～9回)：先ず外国為替の歴史とその変遷を述べ、その応用と発展に伴い何故現在の国際金融の世界になったのかを説明。最終的には講師自身の海外経営体験を通じて国際協調融資、国際投資、資金・為替・年金資産・投信の運用の実例を紹介。リスク管理のケーススタディも含む。

岩井担当(第10～12回)：「一衣帯水」と言われる中国と日本の交流は急速に拡大している。日中双方には類似点もあるが、発想・行動などに相違点も多い。ビジネス成功のためには相違点を正しく認識する必要がある。この視点から実務経験に基づく中国ビジネスのKFS(成功の必要十分な条件)を探してみたい。

関担当(第13～14回)：航空業界、旅行業界のグローバルビジネスについて自分の海外を含めた実体験を基に、現在業界が抱えている課題と将来の展望について考察してみたい。特に前者においては日本企業の生き残り策、後者においてはITとのかかわり方を触れたいと思っている。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回：海外駐在の意味(井上)	企業にとって社員を海外に駐在させる意味はどこにあるか？出張や外部委託、現地代理店による情報と駐在社員の情報の違い。
第2回：海外駐在の実例	敢えて一般論とせず、駐在の業務の実際の例を経験をもとにできるだけリアルに紹介する。
第3回：個人にとっての海外駐在の意味	できるだけ一般論となるようにその長所・短所を次のレベルで考えてみる。 1)個人の仕事、キャリア 2)個人の人生設計 3)家族
第4回：Global businessとしての自動車(深井)	自動車を題材にGlobal にBusinessを展開する場合の組織の在り方、需要と供給の考え方、地域特性のとらえ方、ブランドの意味など基本的理解を図る。
第5回：Global businessのKFS	Global businessにおけるKFS(成功のためのKey factor)は何かを考える
第6回：これからのGlobal businessの方向	21世紀における温暖化問題、地域間格差など、これからGlobal にBusinessを展開する時に避けて通れない課題につき基本を理解する。
第7回：外国為替(矢ヶ崎)	外国為替の歴史、変遷と貿易実務
第8回：国際金融	現在の国際金融体制、シンジケートローン、資金・資産運用の世界
第9回：海外支店経営	海外での支店、現地法人経営の実際と、その苦勞、喜び、リスク管理のケーススタディー。
第10回：中国現状の整理(岩井)	本講義の背景、15年の中国ビジネス経験、中国の経済・社会環境(マクロ経済データと地域経済)、政治体制
第11回：基層文化と中国人	基層文化の日中対比をベースに中国との交渉における文化相違の一端を紹介する。
第12回：体験から学んだ中国ビジネス	契約概念の相違、中国の現実的リスクと対応などビジネス環境の相違点をまとめてみる。中国ビジネス成功の為に。
第13回：航空業界の将来(関)	日本航空政策は「空の自由化」と「羽田空港の国際化」に大きく舵を切った。このような環境下本邦企業がグローバルにサバイブする方策を考察する。
第14回：観光とITのかかわり方	観光業は今や、海外からの観光客の誘致で成長を期待される基幹産業になりつつある。特にITの発達により、旅行業の将来はどうなるのかに焦点をあてて考えたい。
第15回	予備日

◆ 成績評価方法 主としてレポート(各講師毎にA-4 1～2枚)による。出欠を考慮する場合もあり。

◆ 教科書 基本的には講師の配布する資料、レジメによる。

◆ 参考書 読んで面白いのは；1. ジョン・K・ガルブレイスの「大暴落 1929」 日経BP
2. パートン・マルキールの「ウォール街のランダム・ウォーカー」 日経出版
3. アラン・グリーンズパンの「波乱の時代 上下」 日経出版
4. 藤原正彦の「国家の品格」 新潮新書

◆ 履修前の準備 特別なことは無いが、日経新聞は継続的に読むのが望ましい。

松澤 孝紀

◆ 授業の到達目標及びテーマ

金融部門の自由化の流れと、各経済主体の行動を確認することがテーマである。

◆ 講義の概要

現在、日本では景気の悪化もあり、さまざまな経済政策が採用されている。また経済の国際化・自由化にあわせ、旧来の経済システムの変更を行ってきた。

この講座では、金融部門を対象に、国際化・自由化について学んでゆくことを考えている。特に「金融ビッグバン」以降の金融機関の行動や、規制緩和、ゼロ金利政策以降の「預金から投資へ」という流れと、それに伴う、投資の「自己責任」と「投資家教育」について焦点を当てる。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	金融自由化以前
第2回	金融ビッグバンとは
第3回	諸外国の金融自由化
第4回	証券市場のしくみ
第5回	市場間競争
第6回	金融機関①
第7回	金融機関②
第8回	こんな商品扱ってます(さまざまな金融商品の特徴)
第9回	金融商品取引法
第10回	投資家の保護と投資家教育①
第11回	投資家の保護と投資家教育②
第12回	時事問題①
第13回	時事問題②
第14回	予備日(試験前復習)
第15回	定期試験

◆ 成績評価方法 レポートと試験により評価するが、受講態度も加味する。

◆ 教科書 毎回の講義ごとにノートを配布する。また、新聞、ニュースなどによる経済政策に関する報道なども用いて講義を行うため、各自経済情報に注意を払うこと。
必要であれば、適宜テキスト、参考図書を指定する。

◆ 履修前の準備 コンピュータを利用する可能性があるため、エクセルの基本的な操作方法を習得しておくこと。

◆ その他 講義の進捗度とコンピュータ教室の状況、履修者数により、コンピュータを用いてファイナンスの計算を行う可能性がある。

中川 雅貴

◆ 授業の到達目標及びテーマ

本講義は、現代の国際社会および日本における諸問題を、「人口」の視点から考察する。とりわけ、「人口学(Demography)」および「人口論(Population Studies)」と呼ばれる学問領域・体系において共有されている諸理論・分析手法を用い、「人口」と「社会」の相互関連の諸相およびその変化について具体的な事例を紹介しながら概説する。こうした講義を通じて、ますます複雑になる現代社会に関する問題を発見する能力や問題意識を持つ態度を養成するとともに、複雑な社会問題を科学的に分析したうえで論理的に表現する能力を習得することを到達目標とする。

◆ 講義の概要

「発展途上国における人口爆発」「先進国における少子高齢化」「都市化・過疎化に関連する国内の人口移動」「移民・難民を含む国際的な人口移動」といった人口現象・人口問題は、現代世界における広範な社会・経済・政治問題を構成する最も基本的要素の一つであり、その把握には、視野の広い学際的な社会科学的問題意識および分析の視点が求められる。一方で、こうした人口現象・人口問題の背景には、それぞれの国・地域の社会・経済構造およびそれらの歴史的な変化が複雑に関連しており、その科学的・体系的な理解には、社会科学の一分野である「人口学(Demography)」および「人口論(Population Studies)」と呼ばれる専門的な学問領域・体系において発展してきた種々の分析手法や諸理論・概念の習得が不可欠である。本講義では、現代の国際社会や日本における人口問題を基本的な分析手法およびデータを用いて分析し、「社会科学」的な視点から理解するアプローチについて、具体的な事例をもとに講義する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	講義計画の概説:「社会情報」としての人口統計と「社会科学」としての人口学
第2回	人口分析と人口統計の基礎
第3回	人口構造と人口増加
第4回	死亡率の分析と標準化理論Ⅰ
第5回	死亡率の分析と標準化理論Ⅱ
第6回	出生率と人口再生産の分析Ⅰ
第7回	出生率と人口再生産の分析Ⅱ
第8回	人口移動の理論と分析
第9回	現代人口ピックⅠ:発展途上国の人口転換
第10回	現代人口ピックⅡ:先進国の人口転換
第11回	現代人口ピックⅢ:人口移動と都市化・過疎化
第12回	現代人口ピックⅣ:国際的な人の移動と移民・難民問題
第13回	現代人口ピックⅤ:日本の近代化と少子・高齢化
第14回	現代人口ピックⅥ:地球人口と持続可能な開発
第15回	試験

◆ 成績評価方法

- ・評価の基準は、平常点(50%)と期末試験(50%)に配分します。
- ・平常点は、人口分析に関する「ホームワーク」を学期中に数回出題し、計50点満点を学期末試験の結果に加算したものを総合評価とします。
- ・期末試験に際しては、本人作成のホームワーク、自筆ノート、テキスト等の参考資料の持ち込みを認めます。
- ・授業中に欠席はとりません。したがって、出席点は評価に反映されません。

◆ 教科書

◆ 参考書

- とくに指定しません。講義内容に関するレジュメや資料を適時配布します。
- 講義内容に関する理解を自主的に深めたい受講生には、以下の文献を推薦します:
 - ・阿藤誠『現代人口学:少子高齢社会の基礎知識』日本評論社
 - ・河野稠果『人口学への招待』(中公新書)、中央公論新社
 - ・ピーター・ストーカー『世界の労働力移動:ILOリポート』(大石奈々/石井由香 訳)、築地書館
- その他、授業中に適時紹介します。

藤原 正仁

◆ 授業の到達目標及びテーマ

社会的存在である人間は、必ずいずれかの組織に所属して生活をしています。組織論は、ミクロ組織論とマクロ組織論に分かれます。ミクロ組織論は「組織のなかの人間行動」を対象とし、マクロ組織論は「組織全体に関わる問題」をテーマとしています。この講義では、組織のなかの個人の視点から、ミクロとマクロの両方に関連づけながら論じます。身近な組織現象を事例に取り上げて、理論が現実にとどのように活かされているか、わかりやすく解説します。

◆ 講義の概要

組織論の理論を学び、組織と個人の相互作用に注目し、組織における個人の生き方、働き方について深く考察します。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1. イントロダクション	多様な組織観と組織論の射程
2. 組織と社会	組織の社会的責任
3. 組織デザイン	組織構造と分業・ネットワーク
4. 組織文化	組織社会化のプロセス
5. 組織学習と変革	学習する組織と知識創造
6. 事例研究1	営利組織と非営利組織(ゲストスピーカーを招聘予定)
7. 組織のなかの個人	組織における人間観
8. ワーク・モチベーション	人はなぜ働くのか
9. 組織におけるリーダーシップ	リーダーとフォロワーの関係性
10. 組織とコミットメント	離脱・発言・忠誠
11. 組織と公正	働き方の多様性と人材マネジメント
12. 組織とキャリアディベロップメント	働き方の未来
13. 生涯発達の舞台としての組織	コンテンツ分野における産学官連携
14. 事例研究2	越境する組織と個人
15. 総括	

◆ 成績評価方法 平常点50点(各回における小レポート)、レポート50点

◆ 教科書 二村敏子(2004)『現代ミクロ組織論:その発展と課題』有斐閣

◆ 参考書 各講義における主要な参考文献は以下のとおりです。その他の参考文献は、必要に応じて指示します。

1. 金井壽宏(1999)『経営組織』日本経済新聞社
2. 奥村宏(2006)『株式会社に社会的責任はあるか』岩波書店
3. 沼上幹(2004)『組織デザイン』日本経済新聞社
4. Edgar H. Schein(1999) The Corporate Culture Survival Guide: Sense and Nonsense About Culture Change, Jossey-Bass. = 金井壽宏・尾川文一・片山 佳代子訳(2004)『企業文化:生き残りの指針』白桃書房
5. Peter M. Senge(1990) The Fifth Discipline: The Art & Practice of The Learning Organization, Doubleday Business. = 守部信之訳(1995)『最強組織の法則:新時代のチームワークとは何か』徳間書店
6. Edgar H. Schein(1980) Organizational Psychology, 3rd edition, Prentice-Hall, Inc. = 松井資夫訳(1981)『組織心理学 原書第3版』岩波書店
7. 田尾雅夫(1993)『モチベーション入門』日本経済新聞社
8. 金井壽宏(2005)『リーダーシップ入門』日本経済新聞社
9. Albert O. Hirschman(1970) Exit, Voice, and Loyalty: Responses to Decline in Firms, Organizations, and States, Harvard University Press. = 矢野修一訳(2005)『離脱・発言・忠誠:企業・組織・国家における衰退への反応』ミネルヴァ書房
10. 守島基博(2004)『人材マネジメント入門』日本経済新聞社
11. 金井壽宏(2002)『働くひとのためのキャリア・デザイン』PHP新書

◆ 履修前の準備 必要に応じて指示します。

◆ その他 組織論は、社会学、政治学、心理学、経営学などによる学際的な研究領域です。この講義は、主に経営学を中心に展開しますが、さまざまな組織に関心がある積極的な学生の履修を推奨します。

担当者未定

◆ 授業の到達目標及びテーマ

◆ 講義の概要

WEB版講義内容検索参照

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
-------	----------

◆ 成績評価方法

田北 康成

◆ 授業の到達目標及びテーマ

高度情報社会において、「情報」に対するリテラシーを持つとともに、倫理性を持ちかつ主体性のある参加者として情報を積極的に受・発信できる能力や意識を養成することを目標とする。

◆ 講義の概要

メディア技術の開発やコミュニケーションの高度化によって出現した高度情報化社会がもたらした人間関係や社会構造の変化を踏まえた上で、求められる「倫理」や制度とはいかなるものか、を考える。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
情報社会概論	コミュニケーションの歴史に触れ、マス・コミュニケーション、マス・メディアの発達によりいかに社会が変化してきたのかを概観する。
伝わらないコミュニケーション	コミュニケーションは伝えた内容が相手に受け止められて初めて意味をなすが、多くの情報が飛び交う現代の情報社会においても、コミュニケーションの難しさゆえに伝わらない情報がある。具体例をもとに、なぜ伝わらないかを考え、対策を考える。
メディアの情報を読み解く	コミュニケーションとメディアの関係をたどり、近代の大量伝達機構が社会に与えた影響を概観するとともに、情報読解力(メディア・リテラシー)の必要性、媒体ごとの特性、個人の情報受、発信力の増大が意味するところを認識する。
情報の中のジェンダー	男女共同参画社会といわれて久しいが、ジェンダーの観点から情報を見ると、さまざまなバイアスが存在する。ジェンダーに対する理解を深めた上で、メディアの現状にあるジェンダーのアンバランスを理解する。
子どもとメディア	高度情報化社会における情報教育はいかにあるべきか。メディアと子どもの望ましい関係は何かを考え、子どもの成長発達に応じた情報接触や提供、家族や地域社会の関係などに触れる。
言論・表現の自由(その1)	言論・表現の自由以外にも思想、信条の自由、集会、結社の自由などをあわせて精神的自由という。これらの自由がなぜ大事なのか、またこうした自由をめぐる訴訟になっているケースなどを提示しつつ、法的位置付けを考える。
言論・表現の自由(その2)	引き続き、言論・表現の自由を取り扱うが、主にマスメディアの表現活動に対する規制や訴訟などを例に考える。
表現の自由と自主規制	法的規制がなされていないにもかかわらず、表現されない、あるいは表現できない事柄があることを認識した上で、表現することの難しさを理解する。
メディア産業の現状と課題	インターネットの登場により、マス・メディア産業や市民生活に起きた具体的な変化を紹介した上で、今後の影響や課題等について考える。
情報蓄積と利用	高度情報化社会における多大な情報の蓄積と整理、利用を前提としたアーカイヴの思想、有用性、コスト、技術革新に伴う問題などに触れる。
情報管理と情報操作	あらゆる権力は情報の独占と管理によって成り立つ。近、現代における情報の管理と操作の巧妙化を概観し、個人の情報識別、分析、照合、統合能力の向上の必要性を確認する。
情報公開と説明責任	権力による情報の独占、管理に一定の抑制を加え、情報における主権在民を確保するためには情報公開と説明責任の明確化が欠かせない。「情報民主化」の歩みをたどり、情報公開と社会防衛の均衡について考える。
監視社会とプライバシーの保護	9.11以後、急速に進む監視社会の中で、安全保障と個人の通信、情報の秘密保持はいかにあるべきか。個人の尊厳の基礎であるプライバシーを守ることはなにか。個人情報保護法の意義と問題はどこにあるか。
知的財産権	『知』の価値の重要性を認識する。特許権、商標権、意匠権、著作権制度などの知的財産権について概観するとともに、知の所産への敬意のありかたを考え、「知的創造物の無償性」を打ち出すネット社会の新たな潮流についても考察する。
情報倫理まとめ	まとめ

◆ 成績評価方法 学期末試験の点数で評価します。出欠席は一切考慮しません。なお、授業の趣旨が伝わらなくなるのと静謐性保持の理由で、遅刻をした場合は入室しないこと。やむを得ない場合以外の途中退回は認めません。

◆ 教科書 ありません。講義内容をきちんとノートに各自まとめてください。

◆ 参考書 講義内容に応じて参考資料を配布します。

◆ 履修前の準備 日常的に新聞をよく読んだり、テレビ・ラジオニュースに接したり、積極的に情報に接する習慣をつけ、社会状況を把握してください。それ以外に事前の準備はほとんど必要ありませんが、講義内容をさらに理解するために、授業内で提示された書籍や雑誌、番組、映画、施設等には授業後に積極的にアクセスするようにしてください。

◆ その他 シラバスは基本的な組み立てですので、社会状況の変化により新しい素材を反映させるなど、必要がある場合には大きく変更する可能性もあります。

池田 満

◆ 授業の到達目標及びテーマ

◆ 講義の概要

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
-------	----------

◆ 成績評価方法

齋藤 正武

◆ 授業の到達目標及びテーマ

当講義では、組織の意思決定の役割と決定の思考プロセス、そして多くの科学的手法などを紹介します。受講者には、演習を通して、将来、実践的に意思決定の場で活用できる能力を養うことを目標とします。

◆ 講義の概要

社会生活や経営活動において、意思決定が重要であることは言うまでもありません。組織の意思決定による選択や判断は、組織の様々な階層、それを取り巻く環境において、その組織の情報収集力、分析力、合意形成力等が必要となります。講義内で行なう演習、グループワーク(、発表)を通して、日常や将来会社などの組織内で効果的に使える手法を体験してもらいます。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1:	イントロダクション
2:	意思決定プロセス
3:	情報と意思決定
4:	組織論的アプローチ
5:	組織論的アプローチ
6:	経営科学的アプローチ
7:	経営科学的アプローチ
8:	決定理論的アプローチ
9:	決定理論的アプローチ
10:	システム分析的アプローチ
11:	システム分析的アプローチ
12:	合意形成方法
13:	合意形成方法
14:	グループでの合意形成プロジェクト
15:	グループでの合意形成プロジェクト

◆ 成績評価方法 演習(30)、プロジェクト(20)、期末試験(50)から総合的に判断します。

◆ 教科書 初回授業で指定します。

石井 信明

◆ 授業の到達目標及びテーマ

本講義を通して受講者に以下のような知識・能力がつくことを目標とする。

- ・プロジェクトの定義を説明することができる
- ・プロジェクトマネジメントのプロセス、知識、成果物を説明することができる
- ・小規模なプロジェクトの計画を立案することができる

◆ 講義の概要

情報システム開発に限らず、現在の多くの企業では、業務をプロジェクト型に移行している。これは、定型化した仕事の繰り返しでは変化の早い現在のビジネススピードに追従できないことによる。本講義では、このプロジェクト型の業務を効率よく運営し、ビジネスの成果に結びつけるためのプロジェクトマネジメントのプロセスと知識を、講義と演習により習得する。

また、社会情報演習2、社会情報特別講義A、および、社会情報特別講義Bで行うプロジェクトを遂行する上で役立つ知識・手法について扱う。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	イントロダクション、プロジェクトとは何か
第2回	プロジェクトの特性とマネジメントの必要性、プロジェクトマネジメントの歴史
第3回	プロジェクト失敗の要因と成功のポイント、プロジェクト組織とプロジェクト・マネジャーの役割 プロジェクトマネジメントの知識体系ガイド(PMBOK)の概要
第4回	スコープ・マネジメントの概要: スコープ定義とWBS(ワーク・ブレイクダウン・ストラクチャー)
第5回	演習1: WBSの作成
第6回	タイム・マネジメントの概要: スケジュールの重要性とその作成・表現方法
第7回	演習2: プロジェクトスケジュールの作成
第8回	コスト・マネジメントの概要: コスト見積の種類、目的、技法
第9回	品質マネジメントの概要: 品質保障の重要性と品質管理、品質管理の技法
第10回	リスクマネジメントの概要: リスクの定義、リスクの特定と対処
第11回	コミュニケーション・マネジメントの概要: コミュニケーション計画、コンフリクト・マネジメントの概要
第12回	プロジェクトマネジメントとIT活用
第13回	演習3: プロジェクトマネジメント総合演習(1)
第14回	演習3: プロジェクトマネジメント総合演習(2)
第15回	まとめ

◆ 成績評価方法

- ・期末レポート、演習時のレポート
- ・授業参画への貢献度

◆ 教科書

関哲朗 編、「すぐわかるプロジェクトマネジメント」、日本規格協会(2010)。

◆ 参考書

Kathy Schwalbe、「IT業界のためのプロジェクトマネジメント教科書」、アスキー、(2004)。

その他は、授業中に指示する。

◆ 履修前の準備

特になし。

◆ その他

特になし。

田所 承己

◆ 授業の到達目標及びテーマ

テーマ:現代社会における広告およびパブリック・リレーションズの意義

到達目標(1): 広告の影響力や機能を消費者行動や企業活動といった広い視野から理解できる

到達目標(2): パブリック・リレーションズの視点を学び、現代社会におけるその意義が理解できる。

◆ 講義の概要

現代社会における広告およびパブリック・リレーションズの意義について学ぶ。広告が説得的コミュニケーションというより、より広いマーケティング・プロセスのなかで位置づけられている現状を理解する。さらにより広く、企業や政府・自治体など、さまざまな組織によるパブリック・リレーションズが注目されている現状を学ぶ。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第01回	ガイダンス
第02回	広告の影響力と機能
第03回	広告とマーケティング
第04回	消費者行動と広告
第05回	消費者行動とマーケティング
第06回	広告と組織
第07回	広告活動の方向づけ
第08回	中間試験
第09回	多様なメディアと広告
第10回	広告の問題と規制
第11回	パブリック・リレーションズとは
第12回	危機管理とパブリック・リレーションズ
第13回	企業と政府のパブリック・リレーションズ
第14回	パブリック・リレーションズと日本社会
第15回	期末試験

◆ 成績評価方法 中間試験＋期末試験の結果に、平常点(出席/授業内小レポート)を加味する。

◆ 教科書 使用しない

◆ 参考書 適宜授業中に指示する

◆ 履修前の準備 特になし

高橋 尚子

◆ 授業の到達目標及びテーマ

インターネットの普及による情報化社会の発達の理解を深める。
 情報化社会における現状の文化とその変化、相互作用、影響を理解し、論じることができる。
 情報化社会で触れられる異文化やその壁、言葉や表現、倫理や道徳などを認識し、考える。
 情報化社会で起きるあらたな文化的問題と動向について認識し、考える。

◆ 講義の概要

インターネットの普及により、本格的な情報化社会となり、情報が瞬時に世界へ伝わる時代となった。異文化のものが手に取るように分かると同時に、倫理や道徳の基準も国や文化によって大きく異なることが分かる。
 一方で、このインターネットへの情報発信の多くは米国をはじめとする先進国発であり、欧米文化の世界侵略だという意見もある。情報化による世界各国の文化や行動への影響は無視することができない。ここでは発達していく情報化社会において、現状の文化とその変化、そこで起きるあらたな問題とムーブメントについて述べる。
 なお、文化論そのものや情報文化学ではなく、インターネットの普及や情報化による社会的現象や世界的な影響、文化との相互作用を取り上げていく。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1 オリエンテーション	授業概要、授業の進め方
2 インターネットの普及と情報化社会	(他の授業と同じかもしれないが、一応復習というかまとめ)
3 情報と文化のグローバルリゼーション	どんなことが起きているのか？欧米化？
4 " (2)	情報化社会でなかったら起きなかったことは？
5 情報化社会の文化の現状と変化、相互作用	都市と地域・コミュニティ、教育など
6 " (2)	産業・金融・ビジネス・エンタメなど
7 " (3)	芸術・観光・ファッション・食など
8 " (4)	人権・法・犯罪・倫理・道徳など
9 情報化社会における言葉・表現の変化	掲示板やツイッター、携帯電話で使われる表現の特徴
10 " (2)	日本語の変化、説明方法の変化
11 情報化社会と集団行動の様式	抗議行動、消費行動、などの変化、
12 情報化社会と文化衝突	アジアの場合など
13 " (2)	イスラム圏の場合など
14 情報化社会と女性の文化	女性の生き方、社会活動などの変化
15 まとめ	

◆ 成績評価方法 小テスト(40%)、期末試験(60%)

◆ 教科書 特になし(毎回プリント配布予定)

◆ 参考書 「情報ネットワーク社会とコミュニティ」米田公則著(文化書房博文社)
 「情報化と文化変容」正村俊之著(ミネルヴァ書房)
 「ネットの高い壁」原田泉・山内康英著(エヌティティ出版)

◆ その他 履修者の人数が少ない場合は、演習形式(ディスカッション、発表)をとる場合がある。

高木 光太郎

◆ 授業の到達目標及びテーマ

この授業では(1)異文化コミュニケーションに関する実証的、理論的研究についての基礎的な理解を得ること、(2)異文化コミュニケーションにおいて生じる「違和感」を実際に体験し、それを反省的に捉え直す実習を通して異文化コミュニケーションの複雑さと面白さを実践的に理解することを目標とする。

◆ 講義の概要

講義ではまず講義形式で異文化コミュニケーションに関する諸研究について解説する。続いて「円卓シネマ」の方法を用いて「違和感」体験の実習を行う。これは映画を素材とした異文化コミュニケーションの実習プログラムである。この授業では主に中国映画と日本映画を素材として、ストーリーや登場人物の振る舞いを感じる違和感や共感についてレポートの作成、議論を行う。また実施条件が整えば、中国の大学生と同じ映画についての感想をメールあるいはSkypeなどで交換し、議論するセッションを実施する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
ガイダンス	この授業の進め方、注意事項について説明する。
異文化コミュニケーション 概論1	異文化コミュニケーションについて考えるための手がかりとなる研究について解説する。
異文化コミュニケーション 概論2	異文化コミュニケーションについて考えるための手がかりとなる研究について解説する。
異文化コミュニケーション 概論3	異文化コミュニケーションについて考えるための手がかりとなる研究について解説する。
異文化コミュニケーション 概論4	異文化コミュニケーションについて考えるための手がかりとなる研究について解説する。
「円卓シネマ」実習1-1	映画を鑑賞し、感想を交換する。
「円卓シネマ」実習1-2	映画を鑑賞し、感想を交換する。感想文を書く(宿題)。
「円卓シネマ」実習1-3	各受講者の感想文を素材にして討論を行う。※可能であれば中国の大学生と意見交換を行う。
「円卓シネマ」実習1-4	各受講者の感想文を素材にして討論を行う。※可能であれば中国の大学生と意見交換を行う。
「円卓シネマ」実習2-1	映画を鑑賞し、感想を交換する。
「円卓シネマ」実習2-2	映画を鑑賞し、感想を交換する。感想文を書く(宿題)。
「円卓シネマ」実習2-3	各受講者の感想文を素材にして討論を行う。※可能であれば中国の大学生と意見交換を行う。
「円卓シネマ」実習2-4	各受講者の感想文を素材にして討論を行う。※可能であれば中国の大学生と意見交換を行う。
実習の振り返り	これまでの実習について振り返りを行う。感想レポートの作成(宿題)
まとめ	感想レポートを紹介しながら授業全体のまとめを行う。

◆ 成績評価方法 感想レポートの得点に授業時間内での討論への参加状況を加味して評価を決定する。討論への参加状況は討論へのすぐれた貢献などがあつた場合に加点を行う。

◆ 教科書 特に指定しない。

◆ 参考書 山本登志哉・伊藤哲司(編)「アジア映画をアジアの人々と愉しむ—円卓シネマが紡ぎだす新しい対話の世界」北大路書房 2005

◆ 履修前の準備 「円卓シネマ」実習では感想をまとめることが重要な作業となるので、かならず感想文、感想レポートを作成すること。

◆ その他 中国の大学との交流については都合により実施できない場合がある。また交流スケジュールの関係でシラバスにある授業スケジュールが変更になる場合がある。「円卓シネマ」実習については、素材となる映画を鑑賞していることが必要不可欠であるので、鑑賞予定日の欠席は基本的に認めない。やむをえず欠席する場合は次の授業時間までに図書館、レンタルビデオなどを活用して必ず鑑賞しておくこと。

大谷 康晴

◆ 授業の到達目標及びテーマ

- 1)情報検索の基本的な仕組みが説明できる
- 2)情報検索の基本的なスキルを習得できる

◆ 講義の概要

情報検索は、1960年代前後から登場していたが、インターネットの普及により、一気に一般的なものとなった。特に、PageRankと呼ばれる技術を使い、的確な順位付出力を提供したGoogleの登場により、加速された。しかし、同時に近年のこれらの技術の普及により、一見すると容易に情報が手に入るような錯覚ももたらされるようになった。検索可能となっている情報はインターネット上の情報の一部(表層ウェブ)にすぎず、その検索も稚拙なことが多い。

この科目は、情報検索の仕組みを解説し、そのスキルを見ていくことで、より適切な情報を入手できることを目標とし、同時に収集してきた情報の、分析、加工についても学習していきたい。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第01回	ガイダンス
第02回	情報検索の基礎
第03回	情報検索とデータベース
第04回	検索語と論理演算
第05回	演算機能と検索結果
第06回	インターネット検索の基本
第07回	Google基礎演習
第08回	Google発展演習
第09回	NDL-OPAC 書誌検索一般 基礎演習
第10回	NDL-OPAC 書誌検索一般 発展演習
第11回	NDL-OPAC 書誌検索拡張 演習
第12回	NDL-OPAC 雑誌記事検索 演習
第13回	CiNii 演習
第14回	さまざまな検索技術
第15回	まとめ

- ◆ 成績評価方法 1)演習課題提出 80%
2)期末レポート 20%

- ◆ 教科書 大谷康晴編. 情報検索演習 新訂版(JLA図書館情報学テキストシリーズII; 6). 日本図書館協会

- ◆ その他 第1回のガイダンスで詳細について説明いたしますので、必ず出席して確認をとってください

土佐 尚子

◆ 授業の到達目標及びテーマ

◆ 講義の概要

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1回目	カルチュラル・コンピューティングの発見
	1 思考・記憶をサポートするメディア
	2 西洋の無意識から東洋の山水へ
	3 文化の型がコミュニケーション技術になる
2回目	感情をコンピューティングする
	1 メディアアートの感性
	2 音声から感情を認識・生成する《ニューロベイビー》
	3 異文化間の感情翻訳メールソフト
3回目	ストーリーをコンピューティングする
	1 連歌のように詩を詠むコンピュータ
	2 笑いを喚起するコンピュータ
	文化をコンピューティングする
4回目	1 文化の情報を取り出す
	2 コンピュータによる山水禪《ZENetic Computer》
	3 牡丹と唐獅子の《Hitch Haiku》

◆ 成績評価方法 出席率とレポート

◆ 教科書

土佐尚子 著
 発売日:2009.08.27
 定価:2,520円
 サイズ:A5判
 ISBNコード:978-4-7571-0261-3

◆ 履修前の準備 教科書を買って読んでおくこと

児玉 公信

◆ 授業の到達目標及びテーマ

情報システムは、人間活動システムを支援するシステムです。人間活動システムはソフトなシステムであり、その問題状況に対する“正しい”解決策が必ずしも存在しない対象です。ここでは、関係者間の合意形成に基づく合理的な対処が解決策となります。人間活動システムが持つ問題の認識から情報システムの“設計”まで、明確で唯一の方法論は存在しません。真の問題を探りながら解決策について合意し、実施の結果を評価することを繰り返すことになります。

本講義では、こうした真の問題を見る態度を身につけること、解決策を支援する情報システムの設計を理解することを目指します。

◆ 講義の概要

本授業では、情報システム構築の循環プロセスの意味、部分システムの機能設計方法、不断の改善活動の基礎となる考え方を導入します。具体的には、潜在的な要求から原要求を取り出すいくつかの方法論、すなわちソフトシステムズ方法論、因果ループ図などを導入し、原要求を言明する形式としての計画ランゲージ、機能要求の形式としてのユースケースとそのアンチシナリオによるデバッグ、情報システム構築計画の立案について議論します。

講義とそのテーマに基づくグループワークを交互に行います。講師へのフィードバック用に「大福帳」を用います。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	情報システムサイクル:情報システムサイクルを導入し、期待、原要求、要求、仕様、製品、効果の意味を定義します。その上で、システムの問題認識と原要求の導出について議論します。
第2回	ソフトシステムズ方法論:ソフトシステムズ方法論(SSM)を導入し、あるテーマについてリッチピクチャを書いて、基本定義を行います。
第3回	続き
第4回	続き
第5回	システムダイナミクス:ソフトシステムズ方法論を補うものとして、システムダイナミクスの考え方を導入します。MITの“ビールゲーム”をします。
第6回	続き
第7回	因果ループ図:システムダイナミクスの表現方法としての因果ループ図を導入し、これを補完的に用いることになって、リッチピクチャの内容を補強します。
第8回	続き、中間課題を出します。
第9回	「もの・こと」分析:「もの・こと」分析による仕事の設計手法を導入します。これは単なる業務改善ではなく、よりシンプルで本質的な改革を導くものです。最初に業務改革ゲームをします。
第10回	続き
第11回	要求記述:仕事の設計によって業務フローに基づき、機能設計書としてのユースケースを記述します。
第12回	パタンランゲージ:C. Alexanderのパタンランゲージのアイデアを情報システムのサイクルに導入し、応用例を紹介した上で、原要求の記述方法としての有効性について議論します。
第13回	総合演習:これまでの成果を基に、与えられた人間活動システムについて、問題認識から解決策、仕事の設計、システム要求までを連続して行います。
第14回	続き
第15回	最終課題レポート作成

◆ 成績評価方法 次の割合で評価します。

- 1.グループワークにおける成果への貢献度:40%
- 2.グループワークの成果発表:30%
- 3.中間課題および最終課題のレポート:30%

◆ 教科書

毎回レジュメを配布します。

◆ 参考書

- ・Alexander, C.著 宮本訳,「オレゴン大学の実験」, 鹿島出版, 2000
- ・児玉公信著,「UMLモデリング入門」, 日経BP, 2008

◆ 履修前の準備

ブレインストーミングやグループ討議などに慣れておくと楽なので、機会があったら体験しておいてください。

原 潔

◆ 授業の到達目標及びテーマ

こんにちの社会を支える多くの仕組みは、情報システムの進化と普及により支えられている。しかし、情報システムの不具合が原因で重要な社会の仕組みがトラブルを起こしている。こんにちの情報システムの多くの部分は、コンピュータと電子通信を活用するソフトウェアに依存している。情報システムのトラブルの理由は、さまざまであるがその理由の一つにソフトウェア開発に関する原理原則が十分に理解されていないことがある。

ソフトウェアとは、コンピュータを動かすものという意味ではプログラムであるが、より総称的には、プログラムを開発し利用・運用・管理するさまざまなものを包括的に指しており、さらにものだけではなく開発や利用の仕方も含む。

ソフトウェアなしにはけっして動かないコンピュータが社会基盤のあらゆる局面を支えている現実を踏まえ、実世界における人間や機器、社会組織やシステムの活動に関与するという意識をもってソフトウェアを議論する。

本講義では、ソフトウェアを作る立場というより、経済活動などの社会活動を行うために情報システムを準備し活用する立場の人たちがソフトウェアの開発・保守活動をどう判断しなければならないかという視点でソフトウェアの開発・保守技術を学び、情報システムを便利さだけでなく安心・安全の視点で判断できるようになることを目指す。

◆ 講義の概要

今日の社会基盤として必要不可欠な情報システムの開発プロセスの中でのソフトウェア開発・保守活動の概要を学ぶ。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	オリエンテーション:講義の目的・内容・進め方
第2回	要求獲得:何をソフトウェアとして実現するのか(経営視点)?
第3回	要求仕様:何をソフトウェアとして実現するのか(技術視点)?
第4回	アーキテクチャ:どうソフトウェアとして実現するのか(構築方式)?
第5回	設計:どうソフトウェアとして実現するのか(設計技術)?
第6回	プログラミング:プログラムを作るということ(作業)?
第7回	プログラミング管理:プログラムを作るということ(作業管理)?
第8回	品質保証:ソフトウェアの品質(品質特性)?
第9回	品質管理:ソフトウェアの品質(品質管理)?
第10回	維持・管理:ソフトウェアの維持・管理はどうするのか?
第11回	ソフトウェアプロセス:ソフトウェア開発作業の全体構造はどうなっているのか?
第12回	システムの変化対応:システムの移行と統合化
第13回	大規模システム:大規模システム(ソフトウェア)開発
第14回	SEの役割:ソフトウェアエンジニアの役割と社会的責任
第15回	試験

◆ 成績評価方法

毎回授業に出席すること。

毎時間、その日の授業についての小課題を科す。

定期試験による評価に毎回の小課題の取組み実績を考慮して総合評価する。

◆ 教科書

『ソフトウェア工学入門』鵜坂恒夫(サイエンス社)

講義内容に関する資料を毎回配布する。

◆ 参考書

『プロフェッショナルを目指すシステム分析入門』石井信明、宮川裕之(コロナ社)

『情報システム学へのいざない』浦昭二、他共編(培風館)

『ソフトウェアエンジニアリング基礎知識体系』松本吉弘 監訳(オーム社)

目黒 正武

◆ 授業の到達目標及びテーマ

自然と人間の文化の深いつながりを理解し、生態系と文化の多様性を学ぶことで「自然と人間の共生」を基本に「持続可能な社会の実現」を体系的に考える事ができるような、21世紀のリーダーたる人材を育てる事を目標にする。

◆ 講義の概要

本講座は、特定非営利活動法人 世界遺産アカデミーの寄付講座です。学部学生で21世紀を牽引していく立場で活躍したいと考えている学生に対して、①自然と人間の文化のつながり、②生態系の多様性及び文化の多様性、を理解したうえで「自然と人間の共生」を基本とした「持続可能な社会の実現」を体系的に身につけさせることを目的とします。

この講義では、自然科学、人文科学といった視点を超越し、地球的な視点に立った見方を教えること、具体的には、地球46億年の歴史の中に人類500万年の歴史を置き、自然と人間の関連性を理解する、さらには生態系と文化の多様性を踏まえた上で、生態系同士、文化同士の相互性を理解するというカリキュラムを組みます。

その上で、進歩史観的な考え方から、再生、再活用、再利用といった共存成長の考え方への転換を図り、「持続可能な社会の実現」＝「限度を踏まえた成長社会の実現」を考える人材の育成を目標とします。

また、世界遺産検定2級合格のカリキュラムを同時にカバーします。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第 1回 世界遺産の基礎知識	・世界遺産の誕生と現状、そして問題点
第 2回 特徴的な世界遺産	・ユネスコのグローバルストラテジー(世界戦略)と世界遺産(先史時代、文化的景観、産業遺産、民族の独自文化と世界遺産)
第 3回 日本の世界遺産(1)	・日本の自然遺産から見る日本の自然と人間 ・世界の自然遺産と日本の自然遺産
第 4回 日本の世界遺産(2)	・日本の歴史と文化遺産 ・日本の信仰心と文化遺産
第 5回 古代文明と世界遺産	・四大文明と世界遺産 ・アジアの歴史と世界遺産
第 6回 東西交流と世界遺産(1)	・オリエントの歴史と世界遺産 ・オリエント、ギリシャ、そしてヘレニズム文明と世界遺産
第 7回 東西交流と世界遺産(2)	・古代ローマ帝国と世界遺産 ・モンゴル帝国と世界遺産
第 8回 宗教と世界遺産(1)	・1神教と世界遺産(ユダヤ教、キリスト教、イスラム教と世界遺産)
第 9回 宗教と世界遺産(2)	・オリエント、アジアの宗教と世界遺産(ゾロアスター教、ヒンズー教、仏教と世界遺産)
第10回 ヨーロッパ中世と世界遺産	・教皇と皇帝の関係と世界遺産 ・商業の発展と世界遺産
第11回 ヨーロッパ近世と世界遺産	・ルネサンス、啓蒙主義、絶対王政と世界遺産 ・大航海時代、マヤ・インカ文明と世界遺産
第12回 近代、現代と世界遺産	・植民地政策と世界遺産 ・現代建築の流れと世界遺産
第13回 世界の自然遺産	・地球生成の歴史と世界遺産 ・生物多様性と世界遺産
第14回 世界の危機遺産	・危機遺産の現状 ・世界遺産のこれから ・日本の暫定リスト
第15回 試験	・四択60問

◆ 成績評価方法 理解を確認するために適宜実施する小テスト、レポート、期末試験の成績を総合的にまとめて判断します。

◆ 教科書 「世界遺産検定公式ガイド300」¥2,520(税込) 世界遺産アカデミー発行 毎日コミュニケーションズ発売

◆ 参考書 「はじめて学ぶ世界遺産 100」¥1,890(税込) 世界遺産アカデミー発行 毎日コミュニケーションズ発売

「世界遺産検定公式テキスト1巻～3巻」各巻¥2,625(税込) 毎日コミュニケーションズ発行

河原 清

◆ 授業の到達目標及びテーマ

地方自治体での就職を考えようとしている人向けの実践講座。自治体の現場で実際に進められている都市政策の内容とその政策形成過程を知り、自治体が解決を迫られている課題を学ぶことをとおして、課題解決型の思考力を身につけるとともに、自治体職員採用試験の論文試験、口述試験において、より具体性のある内容を展開できるようにする。地方自治体での公共政策形成に向けて具体的な発案力、提案力を有する人材の養成を授業の到達目標とする。テーマは、「自治体の都市政策形成過程とその課題」

◆ 講義の概要

金沢市がこれまで多面にわたって展開してきた特色ある都市政策を基本的な考え方も含めて体系的に知り、学び、その事例をとおして、今日の自治体が直面している課題とそれらの課題に応える必要かつ有効な都市政策のあり様、その実現方策等への理解を深める。具体的には、金沢市の都市政策への考え方とその形成過程、その背景となっている課題等を、文化政策を中心としたまちづくり政策の事例から学ぶ。さらに、ディスカッションをとおして、個性と魅力あるまちづくりについて考察する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回 金沢市の都市政策事例① 都市政策の基軸と基本方針	市役所の仕事と組織を知る 社会環境の変化について話し合い、都市政策との関わりを考える
第2回 金沢市の都市政策事例② 地域文化を形成する歴史的な文脈	金沢の都市政策を学ぶ前提として、中世都市としての寺内町形成から惣構築造に伴う近世城下町の誕生までの歴史的な文脈を知る
第3回 金沢市の都市政策事例③ 歴史文化を生かしたまちづくりⅠ	自らの生まれ育った都市の歴史的な文脈を再確認する 伝統環境の保存に向けた数多くのまちづくりの取り組みを知る
第4回 金沢市の都市政策事例④ 歴史文化を生かしたまちづくりⅡ	多様な歴史文化施設の整備、歴史遺産保全に向けた調査など歴史文化を生かした最近のまちづくり事例について学ぶ
第5回 金沢市の都市政策事例⑤ 金沢の伝統文化と保存の取り組み	伝統文化とそれらの保存、継承に向けた文化政策を学ぶ
第6回 金沢市の都市政策事例⑥ 新文化の創造に向けて	新しい文化を創り出す特色ある施策を知る
第7回 金沢市の都市政策事例⑦ 持続的発展に向けた都市戦略	北陸新幹線開業に向けた都市戦略への課題を学ぶ
第8回 地方自治体の政策形成過程①	政策立案と予算編成過程の実際を知る
第9回 地方自治体の政策形成過程②	市民参加、公私協働の取り組みの実際を知る
第10回 都市の課題Ⅰ	個性と魅力あるまちづくりに向けて、自らが育った都市の現況を話し合う
第11回 都市の課題Ⅱ	文化の保存と振興、まちづくりにおける課題を考える
第12回 都市の課題Ⅲ	コミュニティの再生に向けた課題を考える
第13回 個性と魅力あるまちづくり、地域活性化に向けた政策の考案Ⅰ	抽出された課題に応える具体的な施策を考案する
第14回 個性と魅力あるまちづくり、地域活性化に向けた政策の考案Ⅱ	抽出された課題に応える具体的な施策を考案する
第15回 レポート作成、提出	課題をふまえて考案した都市政策の案についてレポートを作成して提出する

◆ 成績評価方法 毎回の授業の発表、質疑と期末レポートを総合的に評価する。

◆ 教科書 授業の際に適宜、資料を配付する。

伏屋 広隆, 魚住 清彦, 矢野 公一

◆ 授業の到達目標及びテーマ

1年次後期必修科目「基礎数学」のためのウォーミングアップが主目標であるが、授業計画にリストアップした項目についてもある程度の計算ができることも目標とする。

◆ 講義の概要

「基礎数学」のための準備講座であり、内容は高等学校の「数学I」「数学II」「数学A」「数学B」からの抜粋および大学での学修に備えた発展である。よって、記号や言葉は大学での他の数学系講義にあわせる。基本的に「数学I」「数学II」「数学A」「数学B」履修者向けの復習講義であるが、未修者に対してはこの講義の履修を前提として補習を行う。補習の詳細に関しては、全体ガイダンスあるいは初回の講義で説明する。講義と演習を組み合わせた形で授業を行う予定だが、授業計画も含めて担当教員や進行状況などによって変わることがあるので注意すること。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回:	二次関数, 二次関数のグラフ, 二次方程式, 根の公式
第2回:	多項式, 分数式, 因数定理
第3回:	数列, 等差数列, 等比数列, 和の記号と計算公式
第4回:	集合, 順列, 組合せ, 二項定理
第5回:	事象, 試行, 確率, 独立試行, 期待値
第6回:	ラジアン, 三角関数のグラフ
第7回:	三角関数の性質, 加法定理
第8回:	指数関数, 対数関数
第9回:	点と直線, 円, 領域
第10回:	平面ベクトル, 成分表示, 内積, 直線のパラメータ表示, 空間ベクトル
第11回:	関数の極限值, 関数の極限值と四則
第12回:	導関数, 導関数の計算公式, グラフの接線
第13回:	関数の増減, 極値問題, 最大値問題総復習
第14回:	定積分, 不定積分, 面積
第15回:	定期試験

◆ 成績評価方法 毎回の成果および期末試験で評価する。

◆ 教科書 使用しない。

◆ 参考書 必要に応じて紹介する。

◆ 履修前の準備 高等学校で学んだ数学の復習。

菊地 哲也

◆ 授業の到達目標及びテーマ

行列計算の幾何学への応用ができるようになること。この考え方をういれば、数理情報基礎I,IIで学んだ基本変形などの行列計算も、抽象的な図形の問題として捉えることが可能である。

具体的には、主にベクトルの回転や射影の計算ができるようになり、その応用として2次形式の標準形を求めてグラフの概形を調べること、連立方程式の最小2乗解を求める仕組みを理解することを到達目標とする。

◆ 講義の概要

はじめに線形写像を学ぶ準備として平面ベクトルの1次変換を解説し、演習を通して行列の積、逆行列、行列式などの幾何学への応用を確認する。次に数ベクトル空間の線形写像や、その像と核といった抽象的な概念を導入する。ここで一般の行列の積や連立方程式の解法が、抽象的な図形の問題を理解する支えとなっていることを見る。

これまで数ベクトル空間には和とスカラー倍という計算のみが定義されていたが、ここで標準的な内積を定義し、2点間の距離、ベクトルの直交性、射影などの考え方を高次元のベクトル空間に対しても定義する。また、内積を保つ変換としての直交変換を定義し、特に空間ベクトルの回転を表す行列について解説する。以上が前半の内容であり、後半はこれらの事柄の応用問題を考える。

後半はまず固有値・固有ベクトルを求める問題を復習し、複素数ベクトルの内積を用いて実対称行列の対角化の定理を証明する。さらにその結果を2次形式へ応用し、2次式で与えられる曲線や曲面の分類、2変数関数の極値問題について議論する。次に射影を表す行列の応用として連立方程式の最小2乗解を求める問題を扱う。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
図形と1次変換	1次変換、合成変換、逆変換、行列式との関係
回転と射影	平面図形の回転、折り返し(鏡映)、射影
線形写像	集合と写像、線形写像と表現行列
線形写像の像と核	全射、単射、像と核、次元定理
内積と直交変換	数ベクトル空間の内積と直交変換、空間ベクトルの回転
グラム・シュミットの直交化	正規直交基底、直交補空間、グラム・シュミットの直交化
演習	ここまでの復習
実対称行列の対角化1	複素数ベクトルの内積、実対称行列の固有値・固有ベクトル
実対称行列の対角化2	行列の対角化の復習、実対称行列の直交行列による対角化
2次曲線と2次曲面	2次式で表される図形
2次形式の標準形	実対称行列の対角化の応用
最小2乗解	連立方程式の最小2乗解
回帰直線	最小2乗解の応用
演習	ここまでの復習
期末試験	

◆ 成績評価方法 期末試験(70%)、講義中に複数回行う演習とレポート(30%)

◆ 教科書 指定しない。

◆ 参考書 講義で適宜紹介する。

◆ 履修前の準備 最初の数回は高校の数学Cレベルの内容からはじめるが、数理情報基礎I,IIで学ぶ連立方程式の解法、逆行列の求め方、固有値、固有ベクトルの計算は既知とする。忘れていてもすぐに復習できるようにしておくこと。あとは行列の計算と図形を動かすことが連動しているということを、多少なりとも面白いと感じられれば頑張れるだろう。

菊地 哲也

◆ 授業の到達目標及びテーマ

数理情報基礎IIで学ぶ行列の対角化についてのより深い議論を行う。特に対角化不可能な正方行列がどのような標準形に直せるかを考察する。到達目標は、行列の対角化を線形写像と基底変換の関係により理解し、与えられた行列の対角化可能性の判定ができ、ジョルダン標準形の計算ができることとする。

◆ 講義の概要

はじめに行列の固有値問題を復習し、漸化式への応用を行う。次に固有値・固有ベクトルを求めて行列を対角化する操作を線形写像の立場から見直し、基底変換・座標変換と対角化の関係について解説する。

この講義のメインの内容は対角化できない行列の標準形(ジョルダン標準形)を求めることである。そこでまずは2次行列や3次行列に対して、対角化できない場合のジョルダン標準形への変換の計算方法を解説し、どのような行列が現れるのか整理しておく。さらにジョルダン標準形を求める問題を一般の行列に拡張するため、対角化可能性と固有空間の構造の関係をより深く調べ、広義固有空間の次元とジョルダン標準形との対応を解説する。以上が前半の内容である。さらにここまでの内容の復習も兼ねて、再び漸化式への応用問題を考える。

後半は単因子について学ぶ。前半ではジョルダン標準形を固有値計算により求めるのだが、この方法だと正しい答えが得られるまでかなりの計算が必要となる。そこで、多項式を成分とするある行列に基本変形を行えば同じ結果が得られるということを証明する。その結果、固有値や固有ベクトルを知らなくても標準形がわかり、ジョルダン標準形が一意に存在することも証明できる。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
固有値問題の応用	漸化式の解法、マルコフ連鎖
基底変換と座標変換	線形写像と座標変換、対角化との関係
対角化可能性	行列の三角化、対角化可能性の必要十分条件
ジョルダン標準形	2次、3次行列のジョルダン標準形
広義固有空間1	ジョルダン・ブロックと広義固有空間
広義固有空間2	ジョルダン標準形と広義固有空間の関係
ジョルダン標準形の応用	ジョルダン標準形のべき乗計算、漸化式への応用
演習	ここまでの復習
単因子	多項式を成分とする行列の基本変形、階数、標準形と単因子
行列式因子	行列式因子、単因子との関係
行列の相似条件	多項式行列の対等性と数行列の相似性との関係
ジョルダンブロックと単因子	単因子とジョルダン標準形との関係
最小多項式	固有多項式と最小多項式、ケーリー・ハミルトンの定理
ジョルダン標準形の存在証明	ジョルダン標準形の存在と一意性
期末試験	

◆ 成績評価方法 期末試験(70%)、講義中に複数回行う演習とレポート(30%)

◆ 教科書 指定しない。

◆ 参考書 講義内で適宜紹介する。

◆ 履修前の準備 この講義の理解に必要な計算は、本質的に数理情報基礎IIと同レベルである。ただ計算にしても証明にしても結論に至るまでの議論が長くなるので、納得するまで時間をかけて復習すること。

菊地 哲也

◆ 授業の到達目標及びテーマ

ベクトル解析の基礎として、主に2変数、3変数のベクトル場の概念を学び、空間における曲線の表示と線積分、曲面の表示と面積分について学ぶ。さらにこれら積分概念の相互関係を表すストークスの公式、ガウスの公式を理解し、その応用がある程度できるようになることを目標とする。

◆ 講義の概要

平面ベクトルや空間ベクトルと、多変数の微分積分について復習した後、平面や空間におけるベクトル場の概念を導入し、勾配ベクトル場、ベクトル場の回転、発散とそれら相互の関連について学ぶ。次に空間における曲線のパラメータ表示を確認し、与えられた関数の積分区間を曲線に拡張した線積分と、グリーン公式、ベクトル場に対する線積分を紹介する。さらに空間における曲面の表示と曲面上での関数の積分(面積分)、ベクトル場の面積分を定義し、ベクトル場の線積分と回転の面積分とを結び付けるストークスの公式、ベクトル場の領域の境界上での積分と発散の積分とを結び付けるガウスの公式を解説する。時間に余裕があれば、これらの概念の物理などへの応用について議論する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
ベクトル値関数	多変数関数の微分(復習)、ベクトル値関数の微分・積分
ベクトル場	ベクトルの外積(復習)、勾配ベクトル場
ベクトル場の微分1	ベクトル場の回転、スカラーポテンシャル
ベクトル場の微分2	ベクトル場の発散
曲線	曲線のパラメータ表示、弧長
線積分	スカラー場の線積分、ベクトル場の線積分
曲面	曲面のパラメータ表示、接平面と法線ベクトル、面積
面積分1	重積分の復習、スカラー場の面積分
面積分2	面積要素ベクトル、ベクトル場の面積分
ストークスの定理	グリーン公式の定理、ストークスの定理とその証明
ガウスの発散定理	体積分、ガウスの発散定理
微分形式1	座標空間の微分形式、外微分
微分形式2	微分形式の積分、ストークスの定理
発散定理の応用	密度関数、保存方程式
期末試験	理解の確認

◆ 成績評価方法 期末試験(70%)講義中に複数回出題するレポートと出席(30%)

◆ 教科書 指定しない。

◆ 参考書 講義において紹介する。

◆ 履修前の準備 数理情報基礎 I で学ぶ平面ベクトルや空間ベクトルと、社会数理基礎 II で学ぶ多変数関数の微分積分は、この講義全体を通して必要となるので、既に学んだことを思い出せるように整理しておくこと。特に重積分の座標変換による計算は必須。

菊地 哲也

◆ 授業の到達目標及びテーマ

講義科目「構造幾何I」とあわせて、ベクトル解析の基礎であるベクトル場の概念、線積分と面積分、グリーンの公式、ストークスの公式、ガウスの公式を理解し、その応用がある程度できるようになることを目標とする。

◆ 講義の概要

基本的に毎回の講義と同じ項目の問題演習を行う。また、講義では理論的な部分の解説に時間を使うため、具体的な例題の解説をこの時間に行うこともあり得る。内容は、平面および空間のベクトル場、勾配ベクトル場、ベクトル場の回転と発散、線積分、グリーン公式、曲面、面積分、ガウスの公式などである。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
ベクトル値関数	平面ベクトル、空間ベクトルの復習、ベクトル値関数の微分・積分
ベクトル場	偏微分、全微分の復習、勾配ベクトル場、ハミルトンベクトル場
ベクトル場の微分	ベクトル場の回転・発散
曲線	曲線のパラメータ表示、弧長、曲率
線積分	スカラー場の線積分、ベクトル場の線積分
曲面	曲面のパラメータ表示、接平面と法線ベクトル、面積
面積分1	重積分の復習、スカラー場の面積分
面積分2	面積要素ベクトル、ベクトル場の面積分
ストークスの定理	グリーン定理、ストークスの定理
ガウスの発散定理	体積分、ガウスの発散定理
発散定理の応用	保存方程式、ガウスの積分
微分形式1	微分形式と外微分
微分形式2	微分形式の積分、ストークスの定理
復習	これまでの総復習
質疑応答	

◆ 成績評価方法 毎回の提出物の成果を積算して評価する。期末試験は行わない。

◆ 教科書 指定しない。

◆ 参考書 構造幾何Iの講義ノート。その他、講義において紹介する。

◆ 履修前の準備 講義「構造幾何I」を履修し、出席すること。演習の時間を講義の復習時間として活用できるが、解けなかった問題は各自改めて復習すること。

◆ その他 【履修登録の条件等】

「構造幾何 I」を履修登録中であるかあるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。

関根 正幸

◆ 授業の到達目標及びテーマ

複素数値の関数の微積分について初歩的な講義を行う。

この講義では基本的な複素関数の性質と微積分の計算に習熟することを目標とする。

◆ 講義の概要

この講義では変数が複素数である関数の微積分について扱う。

変数を複素数の範囲に拡張して考えることに疑問を感じる人もいるかも知れないが、複素数は実数部分と虚数部分をペアにして平面(複素平面)上の点として表すことが出来るので、決して扱い難いものではないし、数直線上の関数は複素平面上の関数に拡張して扱うことで、定積分等の計算が見通しよく行える場合がある。

また、複素数を通じて三角関数と指数関数が結びつくので波の挙動を表すのに複素数が用いられることもある。

受講者は、1変数の実数値関数の関数の微積分学について知っていることはもちろん、2変数の微積分についても予備知識があることが望ましいが、受講者のレベルに合わせるので気軽に受講されたい。

授業計画は講義内で扱う予定の内容であり、毎回の授業内容とは異なることがあり、進度によって扱うトピックの多少の変更もありうる。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
複素数の計算と複素平面(1)	複素数の計算・共役複素数
複素数の計算と複素平面(2)	絶対値・偏角・ドモアブルの公式・オイラーの公式
正則関数(1)	複素関数の極限・導関数の定義
正則関数(2)	コーシー・リーマンの方程式
初等関数(1)	指数関数・三角関数
初等関数(2)	対数関数・べき関数
初等関数(3)	リーマン球・リーマン面
複素積分(1)	複素平面内での線積分
複素積分(2)	コーシーの定理
複素積分(3)	コーシーの積分公式
級数(1)	級数の復習・テーラー級数
級数(2)	ローラン級数
留数と極(1)	留数の定義・留数の求め方
留数と極(2)	実関数の定積分(1)
留数と極(3)	実関数の定積分(2)

◆ 成績評価方法 試験による。

関根 正幸

◆ 授業の到達目標及びテーマ

複素解析の講義に対する演習

◆ 講義の概要

毎回の複素解析の講義で扱った話題について関連する問題を解く。

具体的には、授業中に示した計算例の類問で、例に沿って計算すれば解ける様な問題を出題する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
-------	----------

◆ 成績評価方法 毎回の出席状況および答案の作成状況。

◆ その他 【履修登録の条件等】

「複素解析」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。

部家 直樹

◆ 授業の到達目標及びテーマ

自然界における様々な現象は、多くの場合偏微分方程式により記述される。本講義では、その中でも基本的かつ重要である二階線形偏微分方程式について解説する。数学的厳密性にはこだわらず、できるだけ多くの例に触れることで、自然現象が数学によってどのように記述されるかについて理解を深めることを目指す。

◆ 講義の概要

まず準備として、微積分の基本的な計算規則を確認し、理論上重要なデルタ関数を導入しておく。その後、代表的な三つの二階線形微分方程式(熱伝動方程式、ラプラス・ポアソン方程式、波動方程式)を紹介する。講義の後半では、特に弦の振動の問題に着目し、応用上極めて重要なフーリエ級数及びフーリエ変換、さらに固有値・固有関数の考え方を解説する。なお、授業の進行状況により、授業計画の内容を一部変更する場合がある。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
イントロダクション	偏微分方程式とは
準備	数学的準備, 微積分の復習
デルタ関数	デルタ関数の定義とその直観的意味
熱伝動方程式(1)	熱伝動方程式の導出とその解
熱伝動方程式(2)	熱伝動方程式の解の性質
ラプラス方程式・ポアソン方程式(1)	ラプラス, ポアソン方程式の物理的意味
ラプラス方程式・ポアソン方程式(2)	調和関数の性質
波動方程式(1)	波動方程式の導出とその解
波動方程式(2)	波動方程式の解の性質
フーリエ級数	フーリエ級数による関数の展開
フーリエ変換(1)	フーリエ変換の定義と性質
フーリエ変換(2)	フーリエ変換による偏微分方程式の解法
固有値と固有関数(1)	固有値と固有関数, 直交関数系による関数の展開
固有値と固有関数(2)	弦・円形膜の振動
定期試験	

◆ 成績評価方法 定期試験による。

◆ 教科書 指定しない。

◆ 参考書 講義中に紹介する。

◆ 履修前の準備 微積分と線形代数の基礎は習得していることを前提とする。

西山 享

◆ 授業の到達目標及びテーマ

群論は、ひろく数学や物理学の対称性を記述する上で基本的な言語である。この講義では、その基本的性質に習熟し、よりよく理解するために、いろいろな群の例に接することを目標とする。二つの群の関係性を記述する準同型定理、および群の作用による同値関係(対称性)を理解することが最終目標である。

◆ 講義の概要

群とは、図形や空間、あるいは方程式の変換として現れる代数系のことである。数学や物理学においては、様々な法則・現象の対称性を記述する基本的言語として群が用いられている。

この講義では、群についての基本事項を解説し、いろいろな群の例に接することで理解を深める。

おもに有限個の要素からなる群(有限群)の基本的性質を理解し、置換からなる群(対称群)や剰余系などの典型的な例に馴染むことを初期の目標とする。また二つの群の関係や、群の作用する空間についても学習し、準同型定理と軌道空間について学ぶことを最終目標とする。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	導入: 図形の対称性と群
第2回	群の定義と例
第3回	部分群
第4回	群の元の位数
第5回	対称群の定義
第6回	互換と巡回置換
第7回	置換の符号
第8回	対称群の部分群
第9回	剰余類への分解
第10回	正規部分群
第11回	剰余群
第12回	準同型定理
第13回	群の作用
第14回	軌道分解
第15回	定期試験

◆ 成績評価方法 主として期末試験の成績により評価する。講義中の演習およびレポートも加味する。

◆ 教科書 中島匠一「代数と数論の基礎」共立出版(共立出版 21世紀の数学9)

◆ 参考書 永田雅宜「群論への招待」現代数学社

谷口 健二

◆ 授業の到達目標及びテーマ

この講義では、3次元空間内の曲線と曲面を微分幾何学的に扱う。微分幾何学の基本的な概念を理解し、具体的な曲線や曲面に対してその概念を応用できるようになることを目標とする。

◆ 講義の概要

微分幾何学入門。3次元空間内の曲線と曲面を微分幾何学的に扱う。関数を扱う手法として微分法は欠かせないが、曲線や曲面など、形を扱う場合も微分法は強力な武器となる。微分法を用いて形を調べる学問である微分幾何学への入門として、曲線論および曲面論の導入の部分を講義する。

なお、学習効果を高めるために、並行して「構造幾何Ⅱ演習」を履修することを強く勧める。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
平面曲線Ⅰ	曲線の表示(関数のグラフ, 関係式, パラメータ表示), パラメータとしての弧長.
平面曲線Ⅱ	接線, 接ベクトル, 法ベクトル, フレネ標構, 曲率, 曲率円.
平面曲線Ⅲ	フレネの公式, 自然方程式.
空間曲線Ⅰ	接線, 接ベクトル, 曲率, 主法線ベクトル, 従法線ベクトル, フレネ標構, 捩率.
空間曲線Ⅱ	フレネの公式, 自然方程式.
曲面Ⅰ	曲面, 曲面の表示, 曲面の例.
曲面Ⅱ	接平面, 第一基本形式.
曲面Ⅲ	法線ベクトル, 第二基本形式.
曲面Ⅳ	二次形式.
曲面Ⅴ	主曲率, ガウス曲率, 平均曲率, 面積要素, 極小曲面.
微分形式Ⅰ	正規直交標構, 正規直交標構による曲率の表示.
微分形式Ⅱ	外微分形式(特に二変数と三変数), 概微分, 外積, ポアンカレの補題.
微分形式Ⅲ	積分の変数変換公式, 第一構造式, 第二構造式.
講義内容に関する質疑応答	本講義の内容に関する質問に答える.
期末試験	

◆ 成績評価方法 基本的に期末試験で評価する。

◆ 教科書 指定しない。

◆ 参考書 講義初回に紹介する。

◆ 履修前の準備 「社会数理基礎Ⅰ／Ⅱ」「数理情報基礎Ⅰ／Ⅱ」「数理情報基礎Ⅲ」「現象の数理Ⅰ」「構造幾何Ⅰ」の内容を仮定する。

高村 正志

◆ 授業の到達目標及びテーマ

講義科目「構造幾何Ⅱ」の内容を自ら手を動かして計算することにより、その理解を深めることを目標とする。

◆ 講義の概要

毎回問題を配布する。受講生数が少数の場合には、受講生があらかじめ問題を解き、受講生が板書で他の受講者に解説する形で授業を進める。受講生数が多数の場合には、受講生が個々にその場で答案を作成し提出する形で授業を進める。

受講生は「構造幾何Ⅱ」の講義のノートを持参し、わからない問題については、友人と相談しながら、あるいは教員に質問し、講義科目「構造幾何Ⅱ」の理解を深める。

講義の進行状況などにより内容を変更することがあるので注意すること。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	基本的な知識の確認
第2回	平面曲線I: 曲線の表示, パラメータとしての弧長に関する演習
第3回	平面曲線II: 接線, 接ベクトルに関する演習
第4回	平面曲線III: フレネの公式, 自然方程式に関する演習
第5回	空間曲線I: 接線, 接ベクトル, 法線ベクトル, 曲率, 捩率, フレネ標構に関する演習
第6回	空間曲線II: フレネの公式, 自然方程式に関する演習
第7回	曲面I: 曲面, 曲面の表示に関する演習
第8回	曲面II: 接平面, 第一基本形式に関する演習
第9回	曲面III: 法線ベクトル, 第二基本形式に関する演習
第10回	曲面IV: 二次形式に関する演習
第11回	曲面V: 主曲率, ガウス曲率, 平均曲率, 面積要素, 極小曲面に関する演習
第12回	微分形式I: 正規直交標構, 正規直交標構による曲率の表示に関する演習
第13回	微分形式II: 微分形式, 外微分, 外積代数, ポアンカレの補題に関する演習
第14回	微分形式III: 積分の変数変換公式, 第一構造方程式, 第二構造方程式に関する演習
第15回	演習内容に関する質疑応答

◆ 成績評価方法 毎回の発表, 提出物の成果を積算して評価する。また学期末の試験は行わない。当該科目の授業時間内に不正行為(友人による代理提出等)が認められた場合には, それがいかなる種類のものであっても当該科目は合格としない。

◆ 教科書 講義科目「構造幾何Ⅱ」の各自のノート

◆ 履修前の準備 講義科目「構造幾何Ⅱ」の復習。

◆ その他 【履修登録の条件等】

「構造幾何Ⅱ」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。

増田 哲

◆ 授業の到達目標及びテーマ

前半では、集合の演算や写像の操作など数学の基本的な言葉を学び、集合の基数(濃度)を理解する。後半では、距離空間に位相(開集合系)を導入し、位相による連続の概念を理解する。また、位相不変な性質の一つであるコンパクト性を理解する。

◆ 講義の概要

微分積分や線形代数からさらに進んで数学の専門書を読むには、数学特有の言葉を学ぶ必要がある。その基礎になるのが「集合と位相」である。現代数学は集合や写像の言葉で書かれているので、高度な数学を理解するためには「集合と位相」の学習が必要である。多くの新しい言葉や概念が出てくるので、特に復習に時間をかけて学んでほしい。並行して「集合と位相演習」と合わせて履修することを強く勧める。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	オリエンテーション
第2回	数学における論理(二値論理, 真理表)
第3回	集合と写像(和集合, 共通部分, 集合族)
第4回	写像(全射, 単射, 全単射)
第5回	同値関係, 同値類, 商集合
第6回	集合の濃度(可算濃度, 連続濃度, 対角線論法)
第7回	濃度の和, 積, 大小関係, ベルンシュタインの定理
第8回	距離空間と部分距離空間
第9回	距離空間の位相(開集合, 閉集合)
第10回	開核と閉包
第11回	コンパクト集合
第12回	点列の収束, 点列コンパクト集合
第13回	連続写像, 位相同形, 位相不変性
第14回	一様連続性
第15回	定期試験

◆ 成績評価方法 主として期末試験の成績により評価する。レポートも加味する。

◆ 教科書 特に指定しない。

◆ 参考書 講義中に適宜紹介する。

部家 直樹

◆ 授業の到達目標及びテーマ

講義科目「集合と位相」に沿って、自ら手を動かして証明・計算を行うことにより、講義の内容の理解を深めることを目標とする。

◆ 講義の概要

講義科目「集合と位相」に沿った演習問題を各自が解いて時間内に提出する形をとる。
授業時間中は教員が教室を巡回しているので、解らない箇所等について質問することができる。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
オリエンテーション	基本的な知識の確認
命題と論理	論理記号の意味と使い方, 命題の真偽
集合と写像	集合の表示法, 全射・単射・全単射, 合成写像, 像と逆像
同値関係と商集合	同値関係, 同値類, 商集合
集合の濃度	可算濃度と連続濃度
濃度の和, 積, 大小関係	濃度の和, 積, 大小関係, ベルンシュタインの定理
冪集合	冪集合とその濃度
距離空間	距離空間の定義と例
距離空間の位相	距離空間における開集合と閉集合
開核と閉包	距離空間における開核と閉包
コンパクト性	距離空間におけるコンパクト集合の定義
点列の収束	点列の収束, 点列コンパクト集合
連続写像	連続写像の定義と例, 同相写像
一様連続性	一様連続性の定義と例, 一様連続でない連続写像の例
講義内容に関する質疑応答	

◆ 成績評価方法 毎回の課題に関する時間内の提出物によって評価する。

◆ 教科書 講義科目「集合と位相」の各自のノート

◆ 参考書 必要に応じて紹介する。

◆ その他 【履修登録の条件等】

「集合と位相」を履修登録中であるか、あるいは単位修得済であることを履修登録の条件とする。

東 るみ子

◆ 授業の到達目標及びテーマ

システム開発系およびユーザ系システム部門の各職種で必要とされる情報戦略, 開発管理, IT基盤技術に関する基礎的知識を習得する。経済産業省が公開している共通キャリア・スキルフレームワークのレベル1を到達目標とする。

◆ 講義の概要

わが国で今後必要とされる高度IT人材の人材像と、その保有すべき能力を整理した共通の育成・評価のための枠組である共通キャリア・スキルフレームワークに準じて、現代の情報化社会で活躍するために必要な基礎的知識・技能・活用能力を身につけることを目的とする。

具体的には、以下の3分野について学んでいく。

- 1, 情報戦略, 経営戦略に関する予測・分析, 提案活動等に必要能力
- 2, システム管理, プロジェクトマネジメントなどのIT管理能力
- 3, ハードウェア, ソフトウェア, ネットワーク, セキュリティ, データベース, などのIT基盤技術

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1.	ガイダンス、概論
2.	企業と法務
3.	経営戦略, 技術戦略, ビジネスインダストリ
4.	システム戦略
5.	開発技術(システム開発技術, ソフトウェア開発管理技術)
6.	プロジェクトマネジメント
7.	サービスマネジメント, システム監査
8.	基礎理論
9.	アルゴリズムとプログラミング
10.	コンピュータシステムI(コンピュータ構成要素, システム構成要素)
11.	コンピュータシステムII(ソフトウェア, ハードウェア)
12.	技術要素I(ヒューマンインタフェース, マルチメディア)
13.	技術要素II(データベース, ネットワーク, セキュリティ)
14.	まとめ
15.	期末試験

- ◆ 成績評価方法 課題提出、期末試験により評価する。
確認テスト40%、期末試験60%

既に情報処理技術者試験の資格を保有している者は成績に加味します。最終授業日までに合格証書を持参してB527の社会情報学部受付まで申し出ること。

- ◆ 教科書 e-Learningシステムに含まれている電子教科書を利用する。

- ◆ 履修前の準備 e-Learningシステムを授業で使います。

webkit搭載のブラウザが利用できる端末を持参すること。例えばiPhone, iPodTouch, iPad,各種Android端末, webkit搭載のブラウザをインストールしてあるノートPCなどです。

◆ 授業の到達目標及びテーマ

ICTを活用した戦略的政策形成概論および演習

◆ 講義の概要

多様な行政需要へ適切に対応するために必要とされる問題について、深く考察し、新たな視点や柔軟な発想によって政策案を企画し、ICTを使ってこれを効果的に提案していく能力を身につける。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	オリエンテーション
第2回	現代の政策と政策形成①
第3回	現代の政策と政策形成②
第4回	企画に必要なスキル① 図解による問題解決
第5回	企画に必要なスキル② 創造的会議、ブレインストーミング
第6回	企画に必要なスキル③ 戦略的政策と対処的政策
第7回	企画に必要なスキル④ SWOT分析(現状分析からの発想)
第8回	企画に必要なスキル⑤ 戦略ピラミッドとドメイン分析(夢からの発想)
第9回	政策資料作成に必要なスキル① 図式化
第10回	政策資料作成に必要なスキル② 定性的データと定量的データ
第11回	プレゼンテーションに必要なスキル① 話す技術
第12回	プレゼンテーションに必要なスキル② 討論する技術
第13回	プレゼンテーションに必要なスキル③
第14回	ファイナルプレゼンテーション
第15回	最終報告書作成

◆ 成績評価方法 各回で提出してもらう成果物と、ファイナルプレゼンテーションと最終報告書を総合的に評価する。

◆ 教科書 学生ポータルおよびLMSによって、適宜、配布する。

◆ 履修前の準備 購買会にて、『青山学院大学 創造ノート』を購入し持参すること。

◆ その他 教室および機材の関係で、受講者数は30名までとする。また、ファイナルプレゼンテーションについては、地方自治体などの行政職員を交えた審査会とする予定である。

桐谷 栄希

◆ 授業の到達目標及びテーマ

システム(ソフトウェア)開発の流れ(工程や作業)について理解しシステムエンジニアとしての基礎知識を習得することを目的とする。

◆ 講義の概要

システム(ソフトウェア)開発の流れ(工程や作業)について説明するとともに、実作業で発生することが想定される各種事象の対応などもおりませた講義とする。

題材は、プラットフォーム/規模/形態に依存しない概論的なものとするが、設計やテストに関する講義時には具体例を設定し演習をおりませ授業を進める。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第 1回 講義概要説明	講義の目的と各回の講義概要説明、事前知識、また、「システム(ソフトウェア)」とはなにかについて説明する。
第 2回 開発の流れ	システム(ソフトウェア)開発の大まかな流れと各作業におけるポイントについて理解する。
第 3回 提案依頼/提案	提案依頼書の記述内容および、提案を行う上での不足情報の洗い出しについて理解する。また、提案書記載における注意についても触れる。
第 4回 要件定義/確認	具体的なシステム要件の引き出しおよび、実現のために必要なシステム構成/ハードウェア構成/ソフトウェア構成/機能についての要件確認について理解する。
第 5回 演習(1)	提案依頼～要件定義/確認のフェーズにおける作業を例題を用いて演習を行う。
第 6回 開発工程モデル	設計からの開発を行うための工程およびモデルについて理解する。
第 7回 外部設計	要件定義の確定により、システム化の為の基本/機能設計を行う上での作業項目、ポイントについて理解する。
第 8回 内部設計	外部設計の具体的な実現方法(開発)を行う上での作業項目、ポイントについて理解する。
第 9回 演習(2)	設計フェーズでの設計内容が要件を満たしているか例題を用いて演習を行う。
第10回 プログラミング/デバック/単体テスト	設計をコード化するうえでのポイントや、単体テストおよび、デバッグ作業の必要性およびテスト手法について理解する。
第11回 結合テスト/システムテスト	機能要件を満たすことを保障するためにテストのポイントおよび管理方法を理解する。
第12回 品質分析	テスト結果の分析方法について理解する。
第13回 導入/運用、保守、エンハンス	システム導入およびその後の運用、製品サイクルにおける、保守/エンハンス/リプレースについて理解する。
第14回 総括	講義総括
第15回 試験	定期試験

◆ 成績評価方法 レポートおよび定期試験結果を総合的に評価する。

◆ 教科書 必要な資料は各講義および学生ポータルなどから配布する。

稲積 宏誠

◆ 授業の到達目標及びテーマ

情報システムの専門家への期待・役割と、期待される人材像，専門家として理解しておくべき法と倫理，知的財産，個人情報保護，自己研鑽，継続学習を行うための指針などについて確認する。

◆ 講義の概要

企業や組織がどのように情報技術を活用しているかについて，企業や組織が基本的に備えておくべき経営管理機能とそれを支援する情報システムや，ネットワークを活用した戦略的な情報システムについて学習する。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1. オリエンテーション	
2. 社会と情報システム	(1)なぜコンピュータを使うのか (2)情報システムの考え方 (3)情報は第四の経営資源 (4)情報システムの動向 (5)報告課題1
3. 経営管理と情報システム	(1)企業経営と情報システム (2)会社と関係者 (3)企業の情報システムの体系
4. 情報サービス産業	(1)情報システムと情報サービス産業 (2)社会の期待とサービス概要 (3)情報サービス産業白書
5. 流通情報システムの概要	(1)POSシステム (2)データの有効活用 (3)事例研究
6. 情報の効果的な活用	(1)POSデータの活用 (2)マーチャンダイジング (3)顧客との関係
7. インターネット, 電子商取引・電子認証	(1)インターネットの世界 (2)暗号の応用 (3)認証の意味と仕組み
8. 個人情報保護	(1)個人情報(プライバシー)保護 (2)OECD理事会勧告・世界の動向 (3)個人情報保護法の制定 (4)個人情報管理への姿勢
9. 知的財産(著作権, 特許)	(1)知的財産権の体系 (2)著作権 (3)特許・ビジネス方法特許 (4)企業秘密
10. 情報システム専門家の倫理・法	(1)情報システム専門家の人材像 (2)情報システム専門家の法と倫理 (3)事例研究
11. 情報システム専門家の自己研鑽	(1)学協会での活動 (2)主要な公的資格・民間資格 (3)技術士 (4)情報処理技術者試験
12.トピックス1	
13.トピックス2	
14.トピックス3	
15.総復習	

◆ 成績評価方法 授業時の質疑状況と課題レポートにより評価する。

◆ 教科書 なし

◆ 参考書 適宜紹介する。

教職課程科目

この『講義内容』と、WEB版講義内容検索システムの内容とに相違がある場合は、WEBの内容を優先します。

講義内容では履修年次を履修可能な年次で表しています。
履修順序などで履修が制限されることがありますので、授業要覧で必ず確認し、なるべく望ましい年次での履修を心がけてください。

社会情報学部教職課程科目(情報)

科目区分	授業科目	単位	担当者名	学期	履修年次	講義内容	
教職に関する科目	教職論	2	長嶋 清	前期	2	K-1	
	教育原理A	2	酒井 豊	前期	1	K-2	
	教育心理	4	曾根 美恵	通年	1	K-3	
	教育原理B	2	酒井 豊	後期	1	K-4	
	教育課程編成法	2	桜井 恵子	後期	3	K-5	
	情報科教育法	2	小原 格	前期	3	K-6	
	情報科教育法特論	2	辰己 丈夫	後期	3	K-7	
	特別活動論	2	森 秀善	後期	3	K-8	
	教育方法の研究	2	羽山 博	前期	3	K-9	
	生徒・進路指導論	2	長嶋 清	後期	3	K-10	
	教育相談	2	曾根 美恵	後期	3	K-11	
	総合演習	※2008年度入学生のみ	2	長嶋 清	前期	3	K-12
	中等教育実習 I		1	小原 格	前期	3	K-13
	中等教育実習 II B		2	教職課程指導室	不定	4	K-15

社会情報学部教職課程科目(数学)

科目区分	授業科目	単位	担当者名	学期	履修年次	講義内容	
教職に関する科目	教職論	2	長嶋 清	前期	2	K-1	
	教育原理A	2	酒井 豊	前期	1	K-2	
	教育心理	4	曾根 美恵	通年	1	K-3	
	教育原理B	2	酒井 豊	後期	1	K-4	
	教育課程編成法	2	桜井 恵子	後期	3	K-5	
	数学科教育法	4	佐藤 和孝	前期	3	K-16	
	数学科教育法特論	4	佐藤 和孝	後期	3	K-17	
	道徳教育指導法	2	長嶋 清	後期	3	K-18	
	特別活動論	2	森 秀善	後期	3	K-8	
	教育方法の研究	2	羽山 博	前期	3	K-9	
	生徒・進路指導論	2	長嶋 清	後期	3	K-10	
	教育相談	2	曾根 美恵	後期	3	K-11	
	総合演習	※2008年度入学生のみ	2	長嶋 清	前期	3	K-12
	中等教育実習 I		1	小原 格	前期	3	K-13
	中等教育実習 II A		2	教職課程指導室	不定	4	K-14
中等教育実習 II B		2	教職課程指導室	不定	4	K-15	

長嶋 清

◆ 授業の到達目標及びテーマ

- ・テーマ「子どもたちを幸せにできる教師とは」
- ・教師としての心構え、使命感、責任感について実践力を身に付け、指導者として必要な専門性並びに児童生徒の側に立つ豊かな人間性等の資質と能力を身に付けること。
- ・生徒・保護者等の様々な要望や期待に学校教育の今日的課題に柔軟に対応できる教師を育てること。

◆ 講義の概要

教師としての心構え、使命感、豊かな人間性等について、現在の教師の実態・実践から学ぶ。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	オリエンテーション(講義の目的、内容、進め方(学生参画授業)、参考図書の紹介等) 「教職論アンケート調査」(この結果を講義内容に生かす)
第2回	「アンケート調査」結果、「期待される教師(中教審)」、現代の著名な教師の資料を基に教師像について話し合う。
第3回	教師宮沢賢治の教育観(前半)
第4回	教師宮沢賢治の教育観(後半)
第5回	教師大村はまの教育観(前半)
第6回	教師大村はまの教育観(後半)
第7回	現代の教師の教育観(孔子、君子、デューイ、斉藤喜博、金沢嘉市他)
第8回	教育法規、教員の服務
第9回	生徒指導(特に暴力)、生徒理解、体罰の禁止等
第10回	教師の仕事(一日、一学期、一年)
第11回	教員研修(初任者研修、2年次～5年次研修他)
第12回	職員会議、指導要録、開示請求
第13回	学校経営と教師の役割
第14回	教科担任としての今日的課題、学校経営と教師の役割
第15回	教職論の講義内容に関する質疑応答、まとめ

- ◆ 成績評価方法 毎回、その日の授業について意見や感想を書いて提出してもらう。
学期末に講義に関する内容をデーターにした論文を提出してもらう。
定期試験による評価
- ◆ 教科書 『学校担任だより』長嶋 清著(東洋館出版)
講義内容に関する資料と学校教育に関する情報等を毎回配付する。
- ◆ 参考書 『学習指導要領』(総則編)文部科学省
『心にひびく朝会の話』長嶋 清著(東洋館出版)

酒井 豊

◆ 授業の到達目標及びテーマ

文明史的環境の大きい転換期に差し掛かった中で、状況の変化への対応力を含め、この時代に教員に求められる状況判断力、課題解決能力、他者(教員・地域・父母等)との協働能力、資質・能力を自己開発してゆくための基盤を形成する。

◆ 講義の概要

より創造性の高い学びを通して、生徒とともに人間の理想を追求し続けることのできる教員になるためのキーワードとして、教科書の“教育におけるパラドックス”という考えを現代的に吟味・検討し、教育の営みがある意味で常に逆説的になり得ることを理解させる。本講では教育職員免許法施行規則との関係で、教育の理念、思想、歴史、教育制度・法規、学校経営等を相互の関連性に留意しつつ取扱う。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	現代の学校の状況と教職課程履修における留意事項
第2回	教科書の概要の説明
第3回	現代の人間形成環境を理解するための基本的な考え方
第4回	森有正における経験・言葉・日本語論
第5回	第1章「教育」とは何か(教育の現実的本質と理念)
第6回	学ぶことを宿命づけられた種としての人間
第7回	同「教育におけるパラドックス」
第8回	目的像指向型と過程像指向型
第9回	ジョン・デューイの『民主主義と教育』
第10回	第2章 文化と教育のかかわり(教育の歴史と思想の概観)
第11回	J. A. コメニウス、J. J. ルソー
第12回	近代化と公教育
第13回	第3章 学校式教育と人間教育(教育制度・教育行政の概観)
第14回	学校の管理・運営
第15回	現代の学校の状況と教員に求められる専門性

◆ 成績評価方法 毎月の小レポートと学期末の課題レポートによる。教員に求められる資質・能力が急激に高まった状況に照らし、教員として必要な思考・論述・表記等の能力が備わっていることを前提として、講義において提示した現代的実践的課題にどこまで主体的に応えようとしたか、応えられたか、によって行う。

◆ 教科書 沼野一男、松本憲ほか著『教育の原理 第三版』(学文社)

◆ 参考書 配布プリントのほか、適宜参考書目を提示する。

曾根 美恵

◆ 授業の到達目標及びテーマ

発達、学習並びに教育の臨床に関して、基本的な理論と実際を学び、併せて教育心理学の視点から教育に関わる現象や人間形成に関する課題について理解する。

◆ 講義の概要

乳幼児から老年までの発達の過程と様相及び、エリクソン、E. H.、ピアジェ、J. などの発達の理論をはじめ行動主義的学習、認知的学習、状況的学習等の「学習」の理論と実際、並びに教育の臨床として、不登校、いじめ、学校における児童・生徒理解と相談、「障害のある子ども」の発達・学習、パーソナリティ、教育評価について学びます。また、関連する資料配布、視聴覚教材を使用し、受講者がそれらに対し自らの考えをまとめる機会を設けますので、積極的に取り組むことを望みます。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
(前期)	1. 「教育心理学」の概要 2. 教育の臨床(適応・不適応) 不登校①(全般的実態) 3. 不登校②(個別的状況) 4. 不登校③(対応:理論と実際) 5. いじめ①(実態) 6. いじめ②(対応) 7. 学校における児童生徒理解と相談① 児童生徒理解(観察と面接) 8. 学校における児童生徒理解と相談② 面接の進め方(検査、アセスメント) 9. 学校における児童生徒理解と相談③ 面接の進め方(枠組み) 10. 学校における児童生徒理解と相談④ 面接の進め方(問題状況の把握と理解と相談) 11. 学校における児童生徒理解と相談⑤ 学校における教育相談(スクールカウンセラー・養護教員との連携) 12. 学級集団 13. 障害児・者と社会 14. 前期のまとめ 15. 試験
(後期)	1. 発達と学習の概要 2. 発達①(定義と特徴、運動機能の発達など) 3. 発達②(遺伝か環境か、ことばの発達など) 4. 発達③(発達段階、乳幼児期、児童期、思春期、青年期) 5. 発達④(成人期、老年期、発達の理論(エリクソンなど)) 6. 発達⑤(ピアジェ、こころの理論など) 7. 学習①(行動主義的学習理論) 8. 学習②(認知主義的学習理論) 9. 学習③(状況論) 10. 教育評価 11. パーソナリティ 12. 「障害のある子ども」の教育 13. 「障害のある子ども」の学習 14. 後期のまとめ 15. 試験

◆ 成績評価方法 授業への出席および課題への取り組みとレポート提出(50点)と試験(50点)により、合計100点満点で評価します。

◆ 教科書 『教育心理学エッセンシャルズ』(西村・井森編著 ナカニシヤ出版)

◆ 参考書 『発達の臨床から見た子どもの教育相談』(平山・早坂編著 ミネルヴァ書房)

『教育心理学キーワード』(森、秋田編著 有斐閣)

酒井 豊

◆ 授業の到達目標及びテーマ

文明的環境の大きい転換期に差し掛かった中で、状況の変化への対応力を含め、この時代に教員に求められる状況判断力、課題解決能力、他者(教員・地域・父母等)との協働能力、資質・能力を自己開発してゆくための基盤を形成する。

◆ 講義の概要

より創造性の高い学びを通して、生徒とともに人間の理想を追求し続けることのできる教員になるためのキーワードとして、教科書の“教育におけるパラドックス”という考えを現代的に吟味・検討し、教育の営みがある意味で常に逆説的になり得ることを理解させる。本講においても教育職員免許法施行規則との関係で、適宜、教育の理念、思想、歴史、教育制度・法規、学校経営等を取扱う。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	現代の学校の状況と教員に求められる専門性
第2回	現代を理解するために必要な歴史への形成的アプローチ
第3回	教育の現実的本質と理念(答は現実世界にあるということ)
第4回	森有正における経験・言葉・日本語論
第5回	環境・世界観の段階的発達と教育の役割の変化
第6回	「学ぶことを宿命づけられた種」としての人間の自覚
第7回	目的像指向型の合理性と過程像指向型の合理性
第8回	「教育におけるパラドックス」
第9回	人間形成における個人性と公共性
第10回	日本における文化と教育の関わり(教育の歴史と思想の概観)
第11回	近代化と人間観(J. A. コメニウス、J. J. ルソー、荻生徂徠、貝原益軒)
第12回	公教育(教育制度・教育行政の概観)
第13回	高度化社会における組織的学習と教育の管理
第14回	変化に対応できる学習主体の形成
第15回	全体の確認と総括

◆ 成績評価方法 毎月の小レポートと学期末の論述試験による。教員に求められる資質・能力が急激に高まった状況に照らし、教員として必要な思考・論述・表記等の能力が備わっていることを前提として、講義において提示した現代的実践的課題にどこまで主体的に応えようとしたか、応えられたか、によって行う。

◆ 教科書 沼野一男、松本憲ほか著『教育の原理 第三版』(学文社)

◆ 参考書 配布プリントのほか、適宜参考書目を提示する。

桜井 恵子

◆ 授業の到達目標及びテーマ

日本の教育課程の変遷を学ぶことによって、今日の教育課程のあり方を理解することを目標とする。

また、教育課程について考える際の視点(経験主義と系統主義、基礎・基本の習得と個性伸長など)についても学んでいく。

◆ 講義の概要

戦前から現在に至る日本の教育課程の変遷を学ぶ。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	オリエンテーション(講義の目的、内容、進め方の紹介)
第2回	教育課程に関する諸概念を学ぶ
第3回	戦前日本の教育課程 その1 明治前期編
第4回	戦前日本の教育課程 その2 明治後期編
第5回	戦前日本の教育課程 その3 大正新教育編
第6回	戦前日本の教育課程 その4 昭和戦前期編
第7回	戦後日本の教育課程 その1 戦後新教育編(戦後～1950年代)
第8回	戦後日本の教育課程 その2 1960年代(系統主義への転換)
第9回	戦後日本の教育課程 その3 1970年代(教育の現代化)
第10回	戦後日本の教育課程 その4 1980年代(ゆとり教育へ)
第11回	戦後日本の教育課程 その5 1990年代(新学力観)
第12回	戦後日本の教育課程 その6 2000年代(生きる力)
第13回	現在の日本の教育課程
第14回	教育課程をめぐる最新の動向(海外)
第15回	教育課程をめぐる最新の動向(日本)

◆ 成績評価方法 平常点50%(小テスト、課題提出等)、学期末レポート50%。

◆ 教科書 文部科学省『学習指導要領』他、講義に関する資料を毎回配布する。

◆ 参考書 授業中、適宜紹介する。

小原 格

◆ 授業の到達目標及びテーマ

なぜ高等学校に「情報教育」が導入されるようになったのかについて、技術の進歩や、社会環境の変化などを取り上げながら、文部省指導要領解説などを用いて説明します。また、授業実施時に工夫が必要な箇所について説明します。特に、初歩的なりテラシーの教授方法と生徒の能力を生かす授業展開については、インターネットを用いた情報検索による先験的事例の調査や、ネットワークコミュニティでの受講者相互の議論・プレゼンテーションも取り入れながら、実体験的に考えられるようにします。

◆ 講義の概要

すべての講義で「インターネットを使った情報検索による、教育行政や先験的事例、最新の動向についての調査・分析」などの実習をします。また、普通教科「情報」の科目「情報A」と、「情報C」を主な対象とします。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
学習指導要領の変遷と情報教育	教育の情報化、情報教育の導入、現行学習指導要領と新学習指導要領、指導要領解説、中学校「技術・家庭」との関係
「教育の情報化」と「情報教育の導入」	各教科の情報化、「総合的な学習の時間」と情報科の関連
普通教科「情報」の内容(前半)	現行指導要領、情報A、情報C
普通教科「情報」の内容(後半)	新学習指導要領、社会と情報
タイピングや、コンピュータスキルとその教育方法	タイピング、マウス操作
ネットワークコミュニケーションとその教育方法	ネットワークを用いたコミュニケーション
マルチメディアコンテンツの作成と情報デザインの教育方法	マルチメディア、情報デザイン
プレゼンテーションとその教育方法	プレゼンテーション
社会の情報化と教育環境の変化	情報化社会と教育、学校における教育環境
生徒に対する観点別評価の方法	観点別評価
学習指導案の作成(前半)	学習指導案の書き方、指導と評価の一体化
学習指導案の作成(後半)	学習指導案の書き方、指導と評価の一体化
模擬授業の実施	模擬授業
模擬授業の実施	模擬授業
教科「情報」の教員としての倫理	情報科教員が身につけるべき倫理観と態度

◆ 成績評価方法 すべての講義への出席、期限内課題提出を必須とする。期末のレポート、授業中における発表と態度、課題の取り組み状況を総合的に判断し、その他特に加味要素があれば考慮する。

◆ 教科書

●文部省 高等学校学習指導要領解説 一情報編一、(開隆堂)

●情報科教育法(改訂2版)久野 靖/辰己丈夫 監修 ISBN:978-4-274-20664-1(オーム社)

◆ 参考書

●久野 靖「コンピュータネットワークと情報」(共立出版)

●辰己 丈夫「情報化社会と情報倫理」(共立出版) ほか、適宜指定する。

◆ 履修前の準備 新学習指導要領中、高等学校「情報」および中学校「技術・家庭」の部分を良く読んでおくこと

辰己 丈夫

◆ 授業の到達目標及びテーマ

高等学校「情報科」の教員になるために必要な知識と能力を育成することを目標とします。

◆ 講義の概要

情報科の成立過程、学習指導案、それにしがった模擬授業、生徒評価・試験の方法、指導案の改善などについて講義と議論を行ないます。特に、初歩的なりテラシーの教授方法と生徒の能力を生かす授業展開については、インターネットを用いた情報検索による先験的事例の調査や、ネットワークコミュニティでの受講者相互の議論・プレゼンテーションも取り入れながら、実体験的に考えられるようにします。その後、情報の科学的な理解、情報社会に参画する態度を育成するために必要な授業内容について、発達段階毎の指導案を交えながら解説します。さらに、教員となったときに直面するサーバーの管理についての技量を育成するため、実機を利用した分解・組み立て・OS(FreeBSD)インストール演習を行ないます。

授業全体を通して、観点別評価などの考え方を採り入れます。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
-------	----------

- ◆ 成績評価方法 受講者によるプレゼンテーションや、その相互評価による結果などを重視します。テストは行ないません。
- ◆ 教科書
 - 文部省 高等学校学習指導要領解説 ー情報編一, (開隆堂)
 - 久野・辰己、他「情報科教育法 改訂2版」(オーム社)ISBN-13: 978-4274206641
- ◆ 参考書
 - 辰己 丈夫「情報化社会と情報倫理」(共立出版)ほか、適宜指定する。
- ◆ その他
 1. 必ず、前期の「情報科教育法」と、後期の「情報科教育法特論」の二つとも登録して下さい。
 2. 土曜日2時間目にも補講を行ないますので、受講者は2時間目も受講可能にして下さい。

森 秀善

◆ 授業の到達目標及びテーマ

テーマ「児童・生徒と共に活動し共感しあえる教師を目指して」

特別活動の目標は、自主的、実践的な集団行動を通して、児童・生徒の人間としてのあり方、生き方についての自覚を深め自己実現を図る能力を養うことにある。

本講義では、「児童・生徒の目線に立ち温かく見守り育てていくことができる教師としての力を身につける」ことを到達目標とする。

◆ 講義の概要

特別活動の内容は、2002年4月小・中学校、2003年4月高等学校以来施行されている現行学習指導要領では、下記のようにになっている。新学習指導要領においても同様であるが、その指導が特に重要視されている。

- ・小学校 学級活動、児童活動、クラブ活動、学校行事
- ・中学校 学級活動、生徒会活動、学校行事
- ・高等学校 ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事

特別活動の目標は、上記の活動、行事等において自主的、実践的な集団行動をすることで、児童・生徒の人間としてのあり方、生き方についての自覚を深め、自己実現を図る能力を養うことにある。

本講義では、小学校、中学校、高等学校の特別活動の教育的意義と指導上の留意点について解説し、これからの学校現場で如何に対応していくべきかを、縦の系列を踏まえ考察する。また、具体的な実践事例や映像資料等を通して特別活動の果たす役割を考察し、即戦力になる教師としての力を備えることを第一として進めていく。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1	○オリエンテーション 授業内容・講義の進め方・評価等 ○特別活動とその歴史 1. 特別活動とは 2. 特別活動の歴史
2	○特別活動の意義 1. 特別活動の現代的意義
3	○特別活動の目標と内容(1) 1. 小学校における目標と内容 2. 新学習指導要領の背景
4	○特別活動の目標と内容(2) 1. 中学校における目標と内容 2. 新学習指導要領の背景
5	○特別活動の目標と内容(3) 1. 高等学校における目標と内容 2. 新学習指導要領の背景 ○他教育活動との関連
6	○特別活動と教育課程(1) 1. 特別活動と教育課程 2. 学校の教育計画の中の特別活動
7	○特別活動と教育課程(2) 1. 学級指導・ホームルーム活動の計画 2. 生徒会活動の計画 3. 学校行事の計画
8	○特別活動の指導原理 1. 学校における特別活動の原理 2. 指導体制 3. 集団指導と個別指導
9	○特別活動の指導計画作成 1. 全体計画・指導計画の必要性と意義 2. 全体計画・指導計画の内容
10	○実践指導(1) 1. 小学校での実践
11	○実践指導(2) 1. 中学校での実践
12	○実践指導(3) 1. 高等学校における実践
13	○指導実践上の留意点 1. 学級活動 ホームルーム活動 2. 児童会・生徒会活動 3. クラブ活動 4. 学校行事
14	○特別活動の評価 1. 意義 2. 方法 3. 実際 4. 結果の活用
15	□特別活動の今日的課題と教師のあり方

◆ 成績評価方法 ○出席および受講態度によって評価 30%

○毎時間の感想・意見 20%

○定期試験 50%(講義の2/3以上の出席者が対象)

◆ 教科書

講義の中で指示する。

◆ 参考書

○「小学校学習指導要領解説 特別活動編」○「中学校学習指導要領解説 特別活動編」

○「高等学校学習指導要領解説 特別活動編」○「学習指導要領」○その他、講義の中で適宜紹介する。

◆ 履修前の準備

特になし

◆ その他

◎教師になると自覚をした上で受講してほしい。

羽山 博

◆ 授業の到達目標及びテーマ

◆ 講義の概要

学校教育において、「効果的な授業とは何か」を自ら考え、効果的な教育方法(授業の構築・教材開発)を実践できる基礎的な力を養うことを目的とする。そのために、前半では、教育方法に関わるさまざまな認知心理学研究の知見を検討し、さらに学校教育現場の具体的な教育方法の実践例に基づいて検討を行う。後半は、主にグループ演習を行い、児童・生徒の学習に効果的な教材を作成し、模擬授業を構成・実施することを通じて理解を深める。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1.ガイダンス	講義のガイダンス、評価方法の説明
2.理解と学習のメカニズム I	「記憶」のメカニズムと授業への応用
3.理解と学習のメカニズム II	「推論」のメカニズムと授業への応用
4.理解と学習のメカニズム III	「問題解決」のメカニズムと授業への応用
5.教育方法の実践例 I	「数学科」「理科」「情報科」「総合的学習」の実践例の調査
6.教育方法の実践例 II	視聴覚教育、遠隔教育、コンピュータを用いた教育、e-learningの動向の調査
7.小テスト・発表	小テスト・実践例の調査と分析、発表
8.教育計画の作成と授業の実践	教育計画・授業案の作成
9.演習 I	教育計画・授業案の作成(演習)
10.演習 II	教材作成(演習)
11.演習 III	模擬授業の準備
12.発表	模擬授業(演習)
13.発表(つづき)・まとめ	模擬授業(演習)・まとめ

◆ 成績評価方法 出席、小テストおよび課題(模擬授業の実践等)により評価を行う。配点は出席40%、小テスト20%、演習40%とする。

◆ 教科書 特に指定しない。パワーポイントのスライドを使う。適宜、資料を配付する。

◆ 参考書 授業時に紹介する。

◆ 履修前の準備 特になし。

◆ その他 前半はおもに講義、後半はおもにグループ演習となる。できるだけ休まないこと、遅刻しないこと。

長嶋 清

◆ 授業の到達目標及びテーマ

- ・テーマ「一人一人の生徒の側に立った指導ができる教師」
- ・中学生・高校生のよりよい生き方の育成を図るための生徒理解、生徒指導の実践的指導力を身に付ける。
- ・生徒一人一人の個に応じた進路指導の指導力を身に付ける。

◆ 講義の概要

生徒指導の目的は生徒一人一人の良さや可能性を引き出し伸ばすこと。そのための生徒指導の実践的指導力の身に付け方を学ぶ。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第 1 回	オリエンテーション(講義の目的、内容、進め方(学生参画授業)、参考図書を紹介、生徒指導の現状・課題等)
第 2 回	学校教育における生徒指導の意義、目的、位置付け 学校教育目標、生徒指導目標、道徳教育との関連
第 3 回	生徒指導と教科指導、特別活動、道徳の時間、総合的な学習の時間との関連
第 4 回	生徒指導と学校行事(社会見学、体験学習、修学旅行、体育祭、文化祭等)との関連
第 5 回	生徒指導と関連機関(PTA、警察署、小・中・高、学友会、学警連、児童相談所、保護司等)との関連
第 6 回	生徒指導の現状と課題(基本的生活習慣の乱れ)
第 7 回	いじめと自殺(特に、ネットのいじめ)、不登校生徒の実態
第 8 回	暴力行為、少年非行、薬物乱用の実態
第 9 回	生徒指導事例研究①(いじめ、インターネット問題)グループ協議
第10回	生徒指導事例研究②(校内暴力)グループ協議
第11回	生徒指導事例研究③(少年非行)グループ協議
第12回	生徒指導事例研究④(不登校)グループ協議
第13回	キャリア教育の実際
第14回	進路指導の実際
第15回	生徒指導の実際(ゲストティーチャーの講話)、まとめ

- ◆ 成績評価方法 毎回、その日の授業について意見や感想を書いて提出してもらう。
期末に、講義に関する内容をデータにした論文を提出してもらう。
定期試験による評価
- ◆ 教科書 講義内容に関する資料と必要な情報等を毎回配付する。
過去及び現在の生徒指導の事件を随時取り上げ、資料を配付する。
- ◆ 参考書 『生徒指導提要』国立教育政策研究所発行
「中学校生徒指導資料」文部省

曾根 美恵

◆ 授業の到達目標及びテーマ

児童・生徒の発達を理解し、問題や課題を抱える児童・生徒に対し、教師としてどのように関わることが望ましいのかを習得する

◆ 講義の概要

児童・生徒の知的発達、心理・社会的発達を学び、発達に障害を抱える子どもについて理解します。併せて、学校で気になる児童・生徒についてどのように理解するかを学びます。さらに、実際に問題や課題を抱える児童・生徒を、どのように支援していくか、保護者、家族への支援をどのように実践していくか、具体的な実践方法、ロールプレイングなどを交え習得します。ロールプレイングの実践については、レポート提出を課題としますので、積極的に取り組むことを望みます。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1	「学校教育相談」の意義
2	心理学と「学校教育相談」
3	発達と教育に関する心理学的知識(1)
4	発達と教育に関する心理学的知識(2)
5	発達障害について
6	気になる児童・生徒への理解(1)不登校
7	気になる児童・生徒への理解(2)いじめ
8	気になる児童・生徒への理解(3)学級崩壊
9	保護者の問題の理解
10	教育相談の実際(1)実践の理論
11	教育相談の実際(2)実践の方法
12	支援の実際(ロールプレイング)(1)
13	支援の実際(ロールプレイング)(2)
14	まとめ
15	試験

◆ 成績評価方法 授業での課題への取り組みとレポート(50点)、ならびに試験(50点)の合計点100点満点で評価します。

◆ 教科書 『教師のための教育心理学』(岡田守弘監修 ナカニシヤ出版)

◆ 参考書 『発達の臨床から見た子どもの教育相談』(平山・早坂編著 ミネルヴァ書房)

『学校教育相談』(丸藤、菅野編著 ミネルヴァ書房)

長嶋 清

◆ 授業の到達目標及びテーマ

- ・テーマ「教師として、常に広い視野に立って適切に対応できる実践的な資質、能力を身に付け、社会の変化や生徒の実態に柔軟に対応できるようにする。」
- ・研究実践例としては、コミュニケーション、人権尊重、異文化理解、環境問題、福祉問題、携帯電話問題、保護者の期待や要望、生きる力等。
- ・グループで調査研究したことを発表し、学び合う。
- ・教師としての実践的な対応力、指導力、問題解決力等の素地を培う。

◆ 講義の概要

中学校・高等学校における総合的な学習の時間の内容や学校の課題や問題の実態・原因の分析と、その対応の仕方等についての発表を通して学び合う。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	オリエンテーション(講義の目的、内容、進め方(双方向の授業)単位の取得(発表、レポート、出席)参考図書 教師になるためのライフステージについて、 アンケート調査(この結果を講義内容に生かす)
第2回	アンケートの調査結果と配付資料「学校教育の様々な課題」を基に研究課題等について話し合う。
第3回	今日的な教育課題講義(コミュニケーション、人権、異文化)
第4回	今日的な教育課題講義(環境問題、携帯電話問題、暴力、他)
第5回	グループ作りと研究課題の検討協議 作業活動、指導助言
第6回	作業活動、指導助言
第7回	作業活動、指導助言
第8回	作業活動、指導助言
第9回	グループ毎の発表、研究協議、コメント
第10回	グループ毎の発表、研究協議、コメント
第11回	グループ毎の発表、研究協議、コメント
第12回	グループ毎の発表、研究協議、コメント
第13回	グループ毎の発表、研究協議、コメント
第14回	グループの発表に関する内容の補足講義
第15回	学校教育における課題とその解決の仕方についてまとめる

- ◆ 成績評価方法 毎回、その日の授業について意見や感想を書いて提出してもらう。
学期末に講義に関する内容をデーターにした論文を提出してもらう。
定期試験による評価

◆ 教科書

『学校担任だより』長嶋 清著(東洋館出版)

講義内容に関する資料と学校教育の課題等に関する情報等を毎回配付する。

◆ 参考書

中学校・高等学校学習指導要領総則、「中教審答申」、文部省各種通達

小原 格

◆ 授業の到達目標及びテーマ

テーマ

教育実習事前指導

授業の到達目標

教育実習Ⅱ(教壇実習)に向けて教育実習Ⅰ(事前指導)は必須の科目である。本講義では、教育実習の意義を理解し、基本的な心構えや指導技能等を修得したうえで、教育実習で想定される種々の課題に主体的に取り組める態度を養うとともに、教育現場に応じた実践的な能力を身につけるものとする。

◆ 講義の概要

教育実習事前講義(但し、演習・模擬実習を含む)

教職課程履修者は一人ひとりが4年次に教育実習校で教員としての職務を実習するが、本講はその教育実習が一人ひとりの教職志望者にとって、また広く教員養成の所期の目的の達成(時代が必要とする教員の育成と任用)にとって有意義なものとなるように実施する事前講義である。

講義内容は次の二点からなる。やや詳しいことは「授業計画」欄を参照。

①教育実習の意義・目的・制度的な仕組み、実習内容、勤務・サービスのあり方、指導教諭との関係、児童生徒との接し方、教科指導実習の基本型、などについて理解すること。

②中学・高校での教育実習に実際に臨んだ際最も基本的な課題となる教科学習指導について、教科別に設定されている各授業クラスの教科に沿って、具体的な指導過程を想定した模擬的実践的演習を行うこと。

近年、児童・生徒の生活環境・家庭環境・社会環境等が大きく変わりつつあるなかで、学校教育に対する期待や要請が格段に高まるのに応じて、それに従事する教員の資質・能力に関して、教育の専門職としての高い学識・見識・指導力・人間性等が求められており、教育実習における指導教諭・管理職による指導・評価、教員採用選考における能力評価は、確実にこの時代に求められる教職像を前提としたものになりつつある。この「中等教育実習Ⅰ」の履修を通して、今年度履修する各教科の「指導法」「教材論」をはじめ、各学部・学科の学科科目・専門科目の学習効果が高められ、各自の専門性、教員としての指導力を高めるものとなることも期待される。

なお、4年次の教育実習修了後に「事後指導」を実施する〔必修〕。

(日時・場所等は教職課程課掲示板に掲示するので注意すること)

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
-------	----------

◆ 成績評価方法 評価は次の観点による。教科の特質によって重点に差異がある。

①欠席・遅刻:教員の服務規定において正当な事由と認められない理由で、欠席した場合、大幅に遅刻した場合、数回にわたって遅刻した場合、可能であるにも関わらず事前に連絡なく欠席した場合、事後処理を適切にできなかった場合、不合格。②受講態度:受講に際して、担当教員の指導助言に関わらず、教職志望者として謙虚に学ぶ姿勢を保てない場合、不合格。③課題への対応能力:担当教員が与える諸種の課題への対応に際して、教職志望者として適切に対応しなかったり、対応能力が著しく低い場合、不合格。④知識・指導技術等が著しく稚拙であるにも関わらず改善の努力をしなかったり、改善の効果が認められない場合、不合格。⑤文字の書き方が乱暴で誤字・脱字等に注意せず、板書や筆記による指導ならびに実習日誌等の公式文書を作成する任に堪えないと判断される時、不合格。

なお、本講に合格した者のみが、次年度の教育実習の予備登録ができる。

◆ 参考書

池田稔・酒井豊・野里房代・宇井治郎編『教育実習総説 第二版』学文社(参考)

担当者未定

◆ 授業の到達目標及びテーマ

テーマ

実践からの学び

到達目標

教育実習は教職課程の総仕上げであり、職務内容の理解を前提に、授業実習を通して学級経営、生徒・進路指導、教育相談、部活動等の教育活動全体を通して生徒理解を深めることや、生徒の発達段階を把握したうえで、魅力のある授業を構想できる指導案の作成など、実践的な指導力を身に付けることを目標とする。

◆ 講義の概要

実習校における2単位相当の教育実習

・中学校もしくはそれに相当する学校で教育実習をする場合:必ず4単位相当の実習内容となるので、この「中等教育実習ⅡA」(2単位)を必ず選択すること。

・高等学校もしくはそれに相当する学校で教育実習をする場合:基本的には2単位相当の実習内容になるので「中等教育実習ⅡB」のみを選択すればよいが、実習校の方針なり判断で4単位相当の実習になる場合もある。教育実習期間が3週間以上になることが判明したら、この科目(ⅡA)も選択すること。

この科目は、教職課程履修者が4年次に行う、中学・高校あるいはそれらに相当する学校(以下、中等の学校)での教育実習(実習校での教員としての職務実習)に関して、次の目的で開設するものである。

①教育職員免許法施行規則は、中学校と高等学校の教員免許状取得に要する教育実習の単位数を、中学校・5単位、高等学校・3単位と規定している。これを受けて、本学では、それぞれのうちの1単位を「中等教育実習Ⅰ」(実習の事前講義・演習ほか)に充てるとともに、それぞれの残りの単位数を、学生が4単位相当の実習(教育実習の期間が3~4週間)を行う場合、あるいは2単位相当の実習(2週間)を行う場合に的確に対応できるよう、「中等教育実習ⅡA」(2単位)と「中等教育実習ⅡB」(2単位)を開設して、4単位相当の実習をする場合は両科目の履修登録を、2単位相当の実習をする場合は後者(「中等教育実習ⅡB」)のみの履修登録をすることとしている。

その意味で、この科目は4単位相当の実習をする場合にのみ選択し履修登録する科目である。

②「中等教育実習ⅡA」「同ⅡB」とも、実質的な内容は、事前打合せから始まる実習校での教育実習であるが、免許状取得に必要な単位の認定は大学の責任で行うことになっているので、大学に置く該当科目を履修する形を取って、最終的に大学が評価を行うものである。

指定校実習の場合は大学が指定する教員が引率指導の任に当たり、引率担当学生に対し必要な指導を事前・実習中・事後にわたって行う。事前の「実習前指導」、教育実習終了後に実施される「事後指導」は指定校実習、個人校実習に関係なく適用されるので、必ず出席すること。事後指導の日時・場所・担当者・事後指導レポートの形式等については教職課程課掲示板に掲示するので、十分注意すること。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
	1. 実習前指導:教育実習の準備と実習生としての心得、実習校との連絡調整等
	2. 実習校での教育実習:観察実習・授業実習、研究授業・研究協議会等
	3. 事後指導:実習記録のまとめ、教育実習の自己評価等
	4. その他、課題レポートの作成等

◆ 成績評価方法 評価は次の資料に基づき総合的に行う。

- ・教育実習校からの「成績評価表」:実習校総合評点
- ・教育実習校からの「成績評価表」:観点別評価
- ・「教育実習録」:実習生による記載の完成度
- ・「教育実習録」:実習過程における指導教諭と実習生との指導-被指導の状況
- ・「教育実習録」:校長・指導教諭ほかの総括的な講評
- ・[指定校実習の場合]引率指導教員の総括的な評価

◆ 参考書

- 池田稔・酒井豊・野里房代ほか編『教育実習総説 第二版』学文社(参考)
- 青山学院大学教職課程指導室編『(実習生に適用される年度の)教職課程履修の手引』(参考)

担当者未定

◆ 授業の到達目標及びテーマ

◆ 講義の概要

「中等教育実習ⅡA」の講義内容を参照のこと。

なお、中学校・高等学校あるいはそれらに相当する学校で教育実習(実習校での教員としての職務実習)を実施する教職課程履修者は全員、先ずこの「中等教育実習ⅡB」を履修登録し、次に、4単位相当の教育実習をする場合は「中等教育実習ⅡA」も併せて選択し履修登録すること。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
-------	----------

◆ 成績評価方法

佐藤 和孝

◆ 授業の到達目標及びテーマ

数学科の教員となるために必要となる基本的な知識や、数学科の学習内容に関する考え方を習得する。

◆ 講義の概要

教科「数学」での教育実習を実施するための基礎という位置付けの科目である。このことを意識した上で、数学教育の目的・課題・展望、学校教育全体での位置付け、などを押さえ、数学教育の歴史と学習指導要領の変遷、数学科の指導計画や教材研究・指導法などについて学ぶ。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
1. 数学教育を取り巻く環境	数学教育の今日的課題 数学教育への要請
2. 数学教育の目的	どんな力を養うか・養うべきか
3. 数学教育の目標	国民教養と専門基礎 形式陶冶と実質陶冶 誰のための数学教育か
4. 教科「数学」の特徴	中等教育での「数学」の意義 学問としての「数学」と学校での「数学」
5. 学習指導要領の意義	学習指導要領の法律的側面 どのように使われているか
6. 学習指導要領の変遷	戦後数学教育の変遷
7. 新学習指導要領の成立と意義	次期学習指導要領を分析する 何が変わったのか。何が変わらないか
8. 教科書の意義と教科書検定	「教科書」とは何か 教科書検定制度の実際
9. 教科書の分析と授業での利用	教科書にはどのような違いがあるか 授業でどのように用いるか
10. 「良い授業」とは何か	「良い授業」の条件
11. 学習指導計画と授業	学習指導計画は、なぜ必要か 授業に、どのように関連するか
12. 教材研究のあり方・例(1)	教材研究とはどういうことか 目的・実際の例
13. 教材研究の例(2)	いろいろな教材研究
14. 学習指導法と教材・教具	さまざまな指導法 教材と教具
15. 「面白い」授業へのアプローチ	「面白い」授業を目指す

◆ 成績評価方法 出席状況と各時間の小課題、および、学期末のレポートにより評価する。学期末のレポートを提出しない場合は、単位を認定しない。

◆ 教科書 特に指定しない。

◆ 参考書 講義の中で必要に応じて指示する。

◆ 履修前の準備 特にないが、中学・高校時代の数学の授業に関して、振り返っておいてほしい。

佐藤 和孝

◆ 授業の到達目標及びテーマ

教科「数学」の教員免許取得を目指し、数学科の教員となるために必要な、実際の授業についての教材研究・指導法・指導技術などを習得する。

◆ 講義の概要

グループによる討議や、指導案作成・模擬授業の実施など、具体的な活動を中心とする。「数学科教育法」の内容を理解していることを前提とする。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
-------	----------

◆ 成績評価方法 講義時間中の活動、特に、指導案の作成・模擬授業の成果と、学期末のレポートにより評価する。
学期末レポートを提出しない場合は、単位を認定しない。

◆ 教科書 特に指定しない。

◆ 参考書 講義の中で必要に応じて指示する。

◆ 履修前の準備 「数学科教育法」の内容を理解していることを前提とする。

長嶋 清

◆ 授業の到達目標及びテーマ

- ・テーマ「道徳教育の実践的な指導力を身に付ける」
- ・学校教育の重要な指導である道徳教育について、現状を踏まえ、その基礎的な理論及び実践的な内容・方法について理解する。
- ・中学校での週1時間の「道徳の時間」の指導に主眼を置き、その指導の実践力の基礎を培う(指導案作成、模擬授業等)。

◆ 講義の概要

生徒がよりよく生きるための道徳教育の実践力を身に付ける。

◆ 授業計画

回数・題目	内容・キーワード
第1回	オリエンテーション(講義の目的、内容、進め方(学生参画授業)、参考図書の紹介) 「今日の学校教育における道徳指導の現状・課題」についてのアンケート調査と道徳指導についての自由記述
第2回	アンケート調査の結果と配付資料による道徳教育の課題についての話し合い よりよい人間関係の構築、道徳的判断力と道徳実践力の育成
第3回	道徳教育と学校教育活動(教科指導、生徒指導、学校行事)との関連
第4回	学習指導要領「道徳」の内容の理解(目標、内容、道徳教育の歴史・変遷)
第5回	道徳の時間の指導の意義、目的(学校教育目標、道徳教育目標、道徳年間指導計画)
第6回	道徳の時間の本時目標と指導資料の関連
第7回	道徳の時間の指導案の作成と教師の模擬授業①(個人に関わる内容)
第8回	道徳の時間の指導案の作成と教師の模擬授業②(他者に関わる内容)
第9回	道徳の時間の指導案の作成と教師の模擬授業③(社会集団に関わる内容)
第10回	ゲストティーチャーによる模擬授業
第11回	道徳の時間の指導案の作成と学生の模擬授業①(個人に関わる内容)
第12回	道徳の時間の指導案の作成と学生の模擬授業②(他者に関わる内容)
第13回	道徳の時間の指導案の作成と学生の模擬授業③(社会集団に関わる内容)
第14回	道徳の時間の指導の評価(授業改善)
第15回	道徳教育と学校経営、道徳教育指導法のまとめ

- ◆ 成績評価方法 毎回、その日の授業について意見や感想を書いて提出してもらう。
学期末に講義に関する内容をデータにした論文を提出してもらう。
定期試験による評価

- ◆ 教科書 『中学校学習指導要領 解説 道徳編』文部科学省(日本文教出版)
講義内容に必要な資料と道徳教育に関する情報等を毎回配付する。

- ◆ 参考書 「心にひびく朝会の話」長嶋清著(東洋館出版社)

学務担当窓口について

キャンパス	学務担当窓口	事務取扱時間	
相模原キャンパス	学務グループ (B棟1階 スチューデントセンター)	(月～金)	(土)
		9:00～11:30	9:00～11:30
		12:30～15:05 16:05～17:00	
青山キャンパス	学務部 教務課 (8号館1階)	(月～金)	(土)
		9:00～15:00	9:00～11:30
	16:00～20:00	14:00～20:00	
	学務部 教職課程課 (8号館1階)	(月・水・木)	(土)
		9:00～11:30	9:00～11:30
		12:30～16:00	
(火・金)			
9:00～11:30			
12:30～16:00 17:00～20:00			

*長期休業など、授業期間以外の事務取り扱いについては「学生ポータル」で伝達いたします。

窓口で取り扱う業務：

- 履修・成績に関すること
- 授業に関すること
- 休学・退学などの学籍に関する願出
- 教職課程(教員免許状)および各種資格(司書教諭・司書・学芸員・社会教育主事)取得に関すること
- 証明書の交付

種類	取扱窓口	手数料(1通につき)
在学証明書	証明書自動発行機 注1) 所属キャンパスの学務担当窓口	和文 200円 英文 400円
成績証明書		
卒業見込証明書		
本学が定めた様式以外の証明書 注2)	所属キャンパスの学務担当窓口	
学力に関する証明書	青山キャンパス教職課程課 相模原キャンパス教職課程担当窓口	和文 400円
免許状取得見込証明書		和文 200円
各種資格取得見込証明書		
健康診断証明書	証明書自動発行機 注1) 英文・指定用紙は保健管理センター	和文 200円 英文 400円

注1) 在学生の証明書発行は、原則として自動発行機をお使いください。

注2) 即日発行できない証明書があるので事前に取扱窓口で確認してください。

*電話など、窓口以外での受付には原則として応じません。

*提出物は期限を厳守してください。締切後の取り扱いは一切行いません。

地の塩、世の光
The Salt of the Earth, The Light of the World
青山学院スクール・モットー

学生番号

氏名